筑波古代地域史の研究

昭和54～56年度
文部省特定研究経費による調査研究概要

1 9 8 1

筑　波　大　学

「筑波古代地域史の研究」　正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	25	周埴	周湟
28	25	おいはて	おいては
33	28	調整は行な	調整は
〃	29	強く	強く行な
56	13	水田西	水田面
61	番号16の立地の項目	〃	筑波稲敷台地(以下同じ)
106	5	駿与史学	駿台史学
113	7	上端	下端
113	11	中導寺	中尊寺
〃	〃	伝安	仁安4

筑波古代地域史の研究

昭和54～56年度
文部省特定研究経費による調査研究概要

1 9 8 1

筑　波　大　学

例　　言

1．本書は昭和54年度から昭和56年度にわたる文部省特定研究経費「茨城県筑波地方における古代地域史の研究」（代表者　歴史・人類学系教授　増田精一）による調査研究報告書である。

2．本報告書には，上記研究費による調査以外に従来より筑波地域において実施されてきた関連調査も併せて収録した。

3．本報告書の遺跡は時代の古い方から順に掲載した。

4．本報告書は増田精一指示のもとに調査員が執筆を分担した。なお，責任の所在を明らかにするため各文末に執筆者名を記した。

5．本文中の挿図・表および図版写真の撮影は主として執筆者がその任にあたったが，一部は調査に参加した学生諸君らの援助を得た。

6．各調査の実施に際して下記の方々より絶大なる御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表わしたい。

地主　相沢勘市・青木繁農・荒木庄一郎・飯島茂夫・飯塚賢一・石島忠重・井上とよ子・大塚あき子・岡野祐一・栗原市郎・鴻巣源太郎・杉山勝雄・野村芳雄・長谷川正信・馬場敞一・藤島　治・前島次男・路川忠男・宮川栄一郎・山口　茂
㈱土浦ゴルフセンター・㈱歩産業・常陽興産

茨城県教育委員会　大貫幸男・西宮一男

土浦市教育委員会　岩沢　茂・小竹　収

筑波町長　堀田乾次郎

筑波町教育委員会　荒井勝也・海老沢誠之・間宮金一・吉沢幸次郎

筑波町史編纂委員会室　井坂敦実・結束光義・田村満穂

筑波町役場建設課

桜村教育委員会　市村芳男・小野徳男

桜村文化財審議委員　酒井　栄

新治村公民館　伊藤三雄

（敬称略，五十音順）

目　次

例　言

Ⅰ　前　言 …… 1

Ⅱ　調査・研究の経過 …… 2

Ⅲ　筑波地方の地形環境 …… 7

Ⅳ　筑波地方の考古学的環境 …… 13

Ⅴ　調査成果の概要 …… 18

1.　上坂田北部貝塚 …… 18
2.　桜塚古墳 …… 21
3.　観音下遺跡 …… 28
4.　土塔山古墳 …… 44
5.　甲山古墳 …… 48
6.　菅間大塚山古墳 …… 56
7.　根本古墳 …… 59
8.　横町2号墳 …… 84
9.　平沢・山口古墳群 …… 87
10.　日向廃寺 …… 107
11.　二基の五輪塔 …… 112

Ⅵ　総　括 …… 117

図　版　目　次

図版１　上坂田北部貝塚
　1.　貝塚遠景
　2.　住 居 址
図版２　桜塚古墳
　粘土槨全景（南より）
図版３　桜塚古墳
　1.　桜塚古墳全景（東より）
　2.　粘土槨断面
図版４　桜塚古墳
　1.　編物・鏡出土状況
　2.　玉類出土状況
　3.　玉・石釧出土状況
　4.　玉・短剣出土状況
図版５　桜塚古墳
　1.　変形四獣鏡（2/3）
　2.　管玉（Ⅰ）・勾玉（1/1）
図版６　桜塚古墳
　1.　石釧（1/1）
　2.　管玉（Ⅱ）（1/1）
図版７　観音下遺跡
　1.　観音下遺跡遠景（東より）
　2.　２号住居址土層断面
図版８　観音下遺跡
　1.　２号住居址北辺の遺物
　2.　２号住居址西辺の炭化材
図版９　観音下遺跡
　1.　２号住居址遺物出土状況（Ⅰ）
　2.　２号住居址遺物出土状況（Ⅱ）
図版10　観音下遺跡
　1.　1・2号住居址の切り合い関係
　2.　1・2号住居址全景（北より）
図版11　観音下遺跡
　1.　１号住居址全景（東より）
　2.　２号住居址全景（東より）
図版12　観音下遺跡
　1.　窯址全景（東より）
　2.　窯址の土層断面
図版13　観音下遺跡
　土師器（左上は1号，他は2号住居址出土）
図版14　観音下遺跡
　土師器・土製支脚（２号住居址出土）
図版15　土塔山古墳・横町２号墳
　1.　土塔山古墳遠望
　2.　横町２号墳全景
図版16　甲山古墳
　1.　甲山古墳遠望
　2.　１号棺（向う）と２号棺（手前）
図版17　甲山古墳
　1.　１号棺（北より）
　2.　２号棺（東より）
　3.　１号棺遺物出土状況（南より）
　4.　２号棺遺物出土状況（東より）
図版18　甲山古墳
　２号棺出土遺物（1.ガラス小玉，2.ガラス勾玉，3.青銅製鋲金具，4.鉄鏃，5.刀子）
図版19　甲山古墳
　直刀（１～4　2号棺，５・６　1号石棺）（約1/５）
図版20　菅間大塚山古墳
　1.　古墳全景（南より）
　2.　後円部の現況（西より）
図版21　根本古墳
　1.　根本古墳遠景
　2.　調査前の状況
図版22　根本古墳
　1.　墳丘土層断面

2. 溝状遺構（M１－１）と古墳周湟（M２－１）
図版23 根本古墳
1. 溝状遺構（M１－２）と遺物出土状況
2. 古墳周湟（M２－３）
図版24 根本古墳
1. 遺物出土状況
2. 円筒埴輪出土状況
図版25 根本古墳
1. 円筒埴輪
2. 土師器
図版26 根本古墳
1. 円筒埴輪片　口辺部（1/3）
2. 円筒埴輪片　胴部（1/3）
図版27 根本古墳
1. 円筒埴輪片　底部（1/3）
2. 形象埴輪片　（1/3）
図版28 平沢・山口古墳群
1. 平沢１号墳前門
2. 平沢１号墳玄門
図版29 平沢・山口古墳群
1. 平沢１号墳前室側壁
2. 平沢１号墳（玄室より前門を見る）
図版30 平沢・山口古墳群
1 平沢２号墳玄門
2. 平沢３号墳前門
図版31 平沢・山口古墳群
1. 平沢４号墳前門
2. 平沢４号墳玄門
図版32 平沢・山口古墳群
1. 山口１号墳（玄室より羨道を見る）
2. 山口１号墳奥壁
図版33 平沢・山口古墳群
1. 山口１号墳左側壁
2. 山口２号墳羨道入口
図版34 平沢・山口古墳群
1. 山口２号墳（玄室より羨道を見る）
2. 山口２号墳奥壁
図版35 平沢・山口古墳群
1. 山口３号墳現状
2. 山口４号墳現状
図版36 日向廃寺
遺構中央部
図版37 日向廃寺
1. 中央堂トレンチ設定状況（東から）
2. 瓦を根固めとする礎石
3. 瓦出土状況
図版38 二基の五輪塔
1. 北条所在五輪塔
2. 小田山麓所在五輪塔
3. 小田山麓所在五輪塔　格狭間

挿　図　目　次

第１図　筑波町田中付近
第２図　筑波町田中付近の地形・地質断面図
第３図　筑波地区遺跡分布図
第４図　上坂田北部貝塚付近地形図
第５図　桜塚古墳付近地形図
第６図　桜塚古墳墳丘測量図
第７図　主体部実測図
第８図　観音下遺跡付近地形図
第９図　観音下遺跡地形図
第10図　第２トレンチ土層断面図
第11図　1・2号住居址実測図
第12図　２号住居址遺物出土状況図

第13図　1・2号住居址出土土器実測図
第14図　窯址実測図
第15図　第1トレンチ出土遺物実測図
第16図　土塔山古墳・日向廃寺付近地形図
第17図　土塔山古墳墳丘測量図
第18図　甲山古墳付近地形図
第19図　甲山古墳墳丘測量図
第20図　1号棺実測図
第21図　2号棺実測図
第22図　菅間大塚山古墳墳丘測量図
第23図　菅間大塚山古墳付近地形図
第24図　根本古墳と周辺遺跡分布図
第25図　根本古墳調査区全図
第26図　溝状遺構（M1—1）および根本古墳周湟（M2—1）実測図
第27図　溝状遺構（M1—1）土層断面図
第28図　溝状遺構（M1—2）実測図
第29図　溝状遺構（M1）出土土器実測図
第30図　墳丘土層断面図
第31図　周湟（M2—1）実測図
第32図　周湟（M2—2）実測図
第33図　周湟（M2—3）実測図
第34図　周湟（M2）出土円筒埴輪実測図　1
第35図　周湟（M2）出土円筒埴輪実測図　2
第36図　周埴（M2）出土円筒埴輪拓影　1
第37図　周湟（M2）出土円筒埴輪拓影　2
第38図　周湟（M2）出土円筒埴輪拓影　3
第39図　周湟（M2）出土朝顔形埴輪拓影
第40図　周湟（M2）出土形象埴輪片実測図
第41図　周湟（M2—2）出土土器実測図
第42図　横町古墳群付近地形図
第43図　横町2号墳墳丘測量図
第44図　平沢・山口古墳群付近地形図
第45図　平沢1号墳墳丘測量図
第46図　平沢1号墳石室実測図
第47図　平沢2号墳石室実測図
第48図　平沢3号墳石室実測図
第49図　平沢4号墳石室実測図
第50図　山口1号墳墳丘測量図
第51図　山口1号墳石室実測図
第52図　山口2号墳石室実測図
第53図　山口3号墳石室実測図
第54図　山口4号墳石室実測図
第55図　日向廃寺遺構実測図
第56図　日向廃寺軒先瓦実測図
第57図　北条五輪塔実測図
第58図　北条五輪塔種子拓影
第59図　小田山麓五輪塔実測図
第60図　小田山麓五輪塔格狭間拓影

表　目　次

第1表　関東地方における五領期のベッド状遺構検出遺跡
第2表　根本古墳とその周辺遺跡

I　前　　言

昭和54年土浦市当局より，同市宍塚地区で，ゴルフ練習場建設に伴い一円墳が破壊されるので緊急調査の依頼を受けた。同古墳調査に赴いたところ，すでに大半破壊をうけ，わずかに周湟がたどれ，若干の埴輪列を確認しえたにすぎなかったが，別に五領式土師器を伴う遺構（方形周溝墓？）を検出した。また，同年，筑波町日向において町営住宅建設に伴い中世寺院址が見出された。町当局は早急に調査する必要を生じ，本学に調査を依頼してきた。急遽発掘調査を行ったところ，本文に誌すごとく平安末，鎌倉時代の寺址の規模を明らかにした。開かれた大学を目指す筑波大学新構想は，一定の仕方で地域社会にも開かれる。上記の対応はその発想にもとずく協力活動である。

また，筑波・新治地区の先史・古代文化を明らかにし，この地域の歴史を解明することも地域に開かれた大学としての一つの役割と考える。その意味で，昭和53年学内プロシェクト研究として，筑波町水守所在桜塚前方後方墳の発掘を実施し，翌昭和54年より３ケ年継続研究として文部省特定研究費の交付をうけて筑波地区古代史解明に努めた。同研究は先史学，考古学だけでなく，古代史，民俗学，地理学を含む綜合研究で専ら現地調査に重点をおいて実施してきた。

本概報は上述の文部省特別研究費ならびに，先行する学内プロジェクト，緊急調査等を含めた調査概報である。これらの調査でえた資料はいまだ研究分析の途上にあって，十分でない。追て，最終報告書を刊行する予定であるが，従来の諸調査研究の概要を記しておきたい。　（増田精一）

なお，今次特定研究の構成メンバーは下記のとおりである。

代表者	増田精一	歴史・人類学系	教授	考古学
分担者	加藤晋平	〃　〃	〃	先史学
〃	岩崎卓也	〃　〃	助教授	考古学
〃	前田潮	〃　〃	講師	〃
〃	井上辰雄	〃　〃	教授	日本史学
〃	芳賀登	〃　〃	〃	〃
〃	田沼睦	〃　〃	助教授	〃
〃	黒崎千晴	〃　〃	〃	歴史地理学
〃	宮田登	〃　〃	教授	日本民俗学
〃	長島弘三	化学系	教授	分析化学
〃	池田宏	地球科学系	講師	自然地理学

Ⅱ　調査・研究の経過

1.　はじめに

『常陸国風土記』によれば，この国にはもと新治・筑波・茨城・那賀・久慈・多珂の六国が存在したという。時代的に新らしい書ではあるが，『先代旧事本紀』に同じ名を冠した国造名が列記されていることも，周知のとおりである。

これらの六国が，のちの同名の郡と地域を同じくするだろうことは想像に難くない。しかし，後世の郡の数が国数とは一致しないことからみても，かつての国のひろがりが，およそにせよ後世の同名の郡と同一であったと考えるわけにはいかぬだろう。

このように，常陸国にさきだつ六国については，その性格はおろか，ひろがりさえも不分明なのである。これが断片的かつ伝承的な史料しか現存しないことによることは明らかである。にもかかわらず，国家成立期における東国の具体相を明らかにするということは，日本歴史を考究する上で，きわめて重要な意義を有するのである。さいわい，文献的には恵まれない東国にも，数千年来の人類遺跡が，比較的完好な状態で遺存している地域は多い。したがって，史料の欠を補うにこれらを以てし，さらに伝承資料をも加味するならば，ある程度まで地域史像を描きだすことも可能であると考えられる。

このような方法は，すでに志田淳一・佐々木虔一・井上辰雄氏らによって試みられている(1)ところだが，これらは東国全域もしくは県単位で展望しようという，比較的マクロな立場からの研究であった。私共には，広大な地域を一挙にとりあげる力量もないが，それにもまして，小地域もしくは単一の政治圏の実態を，いま少し緻密に分析することの必要性をも認めていた。そこで私共は，筑波大学の所在地に深くかかわる筑波地区をとらえて研究対象とすることを計画した。

いっぽう，別稿で述べるように，永年にわたって遺跡等が保存されてきたこの筑波地区においても，研究学園都市建設・農業構造改善事業あるいは宅地開発など，国土再開発の波により，ここ十年来その環境が急変しつつある。すなわち，遺跡等の記録化は今を措いてはない，とすらいえる情況であるのである。

上記の次第であるから，私共の筑波地区における調査・研究は，遺跡群の現状把握，必要に応じて性格把握のための最少限の発掘調査を実施することを中心に据えて計画されたのであった。これらの完成には多大の時日を要することは明らかである。したがって，私共は古代地域史研究を標傍してはいるものの，当面の力点を筑波国の時代すなわち古墳時代研究におくこととした。そのため，筑波国成立前史については，現在まで僅かに縄文時代貝塚の一つに照明をあてえたにすぎない。また，筑波国以後についても，作業は緒についたばかりである。古墳時代研究を含めて，今後に委ねられた課題の方が遙かに多いといわねばならないのである。

それはそれとして，文部省特定研究経費を得ておこなった調査・研究を中心に，現在までにおこないえた作業の経過を，考古学的方法を軸にすえて概述しておきたい。

2. 現況調査

遺跡の分布調査　筑波山麓地区の遺跡分布については，すでに数多くの調査報告が公刊されており(2)，その概略を知るのに不自由はない。しかし，緻密な悉皆調査が完成しているというわけでもない。他方さきにものべたように，昭和40年代以降の遺跡の変貌はきわめて大きい。このような現況に照らし，創設間もない筑波大学の学生サークルである考古学研究会は，昭和48年以降，筑波町史編纂委員会と協力して，遺跡群の現況調査を開始した。この調査は，地域内を隈なく歩く，という作業を前提としているため，一朝一夕に完了するという性格のものではない。したがって，最も基礎的な調査ではあるが，未だ公表できる段階まで到達してはいないとのことである。

平沢・山口古墳群　筑波町所在　調査者　考古学研究会　昭和51～53年実測

筑波町平沢には，里ケ窟あるいは佐都が岩屋の名で親しまれている方墳がある。この平沢古墳群と隣接する山口古墳群とでは，至近にあるにもかかわらず，石室構造に差異がある。すべて6世紀後半以降の築造であるが，今次の調査で本来のおもかげをとどめている古墳はすべて記録化されたことになる。

横町2号墳　桜村横町所在　調査者　考古学研究会　昭和53年実測

横町古墳群は前方後円墳1，円墳2からなるといわれている。今回実測をおこなったのは，そのうちの大型円墳1基だけである。また年代等も未確認である。その意味では，作業は未完成といわねばなるまい。

土塔山古墳　筑波町漆所所在　昭和55年3月実測

漆所の古墳群は，古来満面塚古墳の所在によって知られていた。土塔山頂の古墳も永い間，同古墳に代表される古墳群に属する無名の一円墳として扱われてきた。この古墳に疑問を抱いた，町史編纂委員井坂敦実氏の東道を得て現地を踏査した増田は，この古墳の重要さを知り，実測調査に踏み切った。結果，古式かつ大規模な前方後円墳であることが判明したのである。特定研究経費による調査の一環である。

菅間大塚山古墳　筑波町洞下所在　昭和56年12月実測

福王地から洞下にかけて連なる台地北縁，筑波山を一望する景勝の地にある単独墳で，菅間大塚の名で知られていた。台地上，古墳の東南方には，古墳時代集落遺跡も多く，とりわけ筑波山祭祀にかかわると想定されている祭祀遺跡の点在が注目される。その立地，古墳の形状に関する疑義などにより，実測調査に踏み切った。結果として，双円墳的な前方後円形を呈する古墳であることが明らかになった。正確な形状は，発掘による確認が必要と思われる。特定研究経費による調査の一環である。

五輪塔　筑波町北条・小田所在　昭和55年3月実測

筑波山麓には，古式を保つ石塔類が数多く存在し，県の指定を受けたものも多い。

後述する日向廃寺を調査したさい，至近に「多気太郎さま」の名で地元民に親しまれている五輪塔を実見した。所在する場所といい，型式といい，日向廃寺との関連なしとしないと思われた。そこで日向廃寺調査の関連作業として，本石塔の実測をおこなうことにした。それとともに，同町小田地区の三村山極楽寺跡にある巨大な五輪塔にも着目した。この寺跡は，小田城主八田知家の建立といわれるが，日向廃寺と同巧な文様を有する瓦も出土しているのである。将来の検討資料の一つとして，併せて実測をおこなった。

3. 発掘調査

桜塚古墳　筑波町水守所在　昭和54年3月調査

筑波町水守字桜塚に，前方後方墳らしいものがある，と報じてきたのは，考古学研究会の学生諸君であった。かねてから，茨城県内では，出現期の古墳が前方後方墳であるのに，筑波地区に限って前方後円墳であるらしいということに疑問を抱いていた岩崎は，直ちに現地に赴いた。古墳は東大通り開通の犠牲になった，本地域最古といわれる山木古墳に程近い北面台地の端部にあった。筑波山を眺望する立地，墳形から，古式古墳に誤まりないと判断された。筑波地区の古墳時代を明らかにするには，本古墳の性格把握が肝要と考えた増田は，これが発掘調査の必要を説き，学内プロジェクト研究費の交付を受けた。調査の結果は当初の予想どおり，この地区最古の古墳であることを裏付けた。

なお，この古墳も水守古墳群の一つとして軽く扱われるか，全く存在を無視されてきたものであった。

根本古墳　土浦市宍塚所在　昭和54年4月調査

桜川の沖積低地を見おろす台地の北端部に，いくつかの支谷を介在させながら，前方後円墳4基を含む計18基の古墳が分布している。宍塚古墳群である。この古墳群のうち，1・5・6の3古墳は，学園土浦線整備に伴い，昭和43・44年に，国学院大学の手で調査された。この古墳群に東接する根本古墳が，ゴルフ練習場造成工事により破壊されたのは，昭和54年4月であった。封土の半ば以上を失った古墳の緊急調査要請を，土浦市教育委員会から受けた増田は，現地調査をおこなった末，その緊急性を認めて4月25日から応急の調査を実施することにした。筑波隣接地区として，筑波地区を考える上で重要である，との判断もあってのことである。

宍塚古墳群は，後期古墳群であるが，これらは，埴輪を伴う相対的に古いグループと，これを欠く新期のものとがあるが，根本古墳は前者に属することが判明した。

観音下遺跡　筑波町観音下所在　昭和55年3月調査

昭和54年春，桜塚古墳を発掘調査していた折，古墳の西方，水田地帯を隔てた台地縁斜面に，焼土と埴輪片を出土する地点がある，との情報がもたらされた。岩崎ほか学生が踏査したところ，盗掘坑の一つに焼土が露呈した部分があり，小片ながら円筒埴輪片が採集できた。この地点から北お

よそ50m付近の斜面でも相当量の円筒埴輪片を採集できた。

これらの事実をふまえ，私共はここに埴輪窯跡群が存在する可能性を想定するに至った。この地域の古墳時代文化解明上，この遺跡の性格を究める必要があると考えた増田は，特定研究の一環としての発掘調査を実施することとした。この結果，埴輪窯との想定は誤まりであったことが確かめられたが，ここが5世紀初めごろの集落跡であることが明らかとなった。

日向廃寺　筑波町北条所在　筑波町教育委員会　昭和54年8月，55年7月調査

筑波町の中心地北条の町並みの北側に，城山と呼ばれる独立丘がある。平（多気）維幹が築いた山城に由来する地名である。この山の南裾を整地して，町営住宅が建てられることになった。城に関連する遺構の一部破壊を伴う危険性があることから，この工事には町史編さん関係者が大きな関心を払ってきた。果たせるかな，工事の進行とともに，溝跡などが検出され，相当量の「かわらけ」や古瓦片が出土した。これらについては，井坂敦実氏や筑波大学考古学研究会の学生らが応急の調査を繰りかえした。ところが，昭和54年の春，浄化槽をつくるべく重機が掘さくした土中から，思いがけなく礎石群が発見されるに至り，工事は中断した。

この遺跡の取扱いをめぐる紛糾が続いた。折しも特定研究に着手した増田は，この遺跡の古瓦が平安時代末頃のものであることから，これが性格究明のための確認調査を引受ける決意を固めた。この調査が昭和54年のそれであるが，これによって遺構は阿弥陀堂型式をとる寺跡であることが判明した。

この発見によって，筑波町教育委員会では翌昭和55年度に文化庁からの補助金を得て，さらに遺構調査をおこなった上，本遺跡の公園化をおこなう体制を組んだ。町の委託を受け，同年夏，増田は第2次調査を実施したのである。地籍名から，本遺跡は日向廃寺と命名された。

甲山古墳　筑波町北条所在　昭和56年3月調査

山脚を北西進する国道125号線は，小田の部落を通過すると，ほどなく北に大きく屈曲する。この屈曲点のすぐ北方に，甲山の尾根端が道路ぞいに突出している。この山頂から山脚にかけて，小和田古墳群が存在するが，近年の破壊は目をおおうものがある。

この甲山裾の国道ぞいに，ドライブ・インが建設されることになり，山脚の一部が削平された。このさい周囲を削平されて，見るにしのびない円墳状を呈する甲山古墳の周湟と思われる部分が断ち切られた。この工事に立ち会った井坂敦実氏ならびに筑波大生らは，円筒埴輪片とともに人物埴輪の頭部を発見され，またこの古墳がもと前方後円墳であった公算が大きいことに注目された。

埴輪片からして，6世紀代の古墳である。甲山古墳がもし前方後円墳であるなら，この地域の首長墓の一つに加えられる可能性が生じる。その場合6世紀代のいま一つの古墳である八幡塚との関係はどうなるであろうか。この地域の政治構造を把握するために無視できない問題が生じたわけである。加えて甲山古墳の破壊の著しさからして，いまその性格を究めねば，永遠にその機会を失ってしまう恐れも十分にあった。

こうした諸般の情勢をも考慮して，特定研究経費による調査の一環に，甲山古墳の発掘調査を加

えることにした。調査の結果では，破壊がひどいために前方後円墳であったという確証は得られなかったが，種々の新しい問題が提起されるに至った。

上坂田北部貝塚　新治村上坂田所在　昭和56年12月～57年１月

筑波地域は，古墳時代に個性的であったばかりではなく，縄文時代においても特色ある地域圏を構成し，桜川ぞいにいくつもの貝塚をのこした。

また，近年の貝塚研究は，主としてその方法に目ざましい発展をみた。そこで，筑波国前史を彩る意味以外に，小規模貝塚の全面調査を試み，自然科学的な方法をも駆使してそれらからどれほどの情報が得られるかの試みをおこなうべく，小規模貝塚として知られる上坂田北部貝塚の調査を計画するに至った。特定研究の棹尾を飾るにふさわしい，今後の貝塚調査への指針構築を狙ったものであるといえる。ここで私共は，はからずも古墳時代の方形周溝墓をも発見したのである。

4.　関係諸領域における調査・研究

このたびの特定研究は，考古学的方法を中軸とする調査・研究であった。しかし，昭和55年度以降，地理学，歴史地理学，史学，民俗学，分析化学等の領域における調査・研究が開始された。しかし，いずれも現在研究が進行中であり，十分な見とおしを得るに至っていない。

そこで本研究の基本目標をも考えあわせ，今回は考古学的調査成果を重点的にとりあげ，他領域については，考古学的研究にとくに密接に関連する地理学的調査成果の一部だけをとりまとめることに決した。

（岩崎卓也）

註

（１）　志田淳一（1972）『古代氏族の性格と伝承』雄山閣，同（1974）『常陸風土記とその社会』雄山閣，佐々木虔一（1975）「常陸における国造制の一考察」『原始古代社会研究』２　校倉書房，井上辰雄（1976）「東国と大和政権」日本歴史340　p.p.20～36など。

（２）　文化財保護委員会（1965）『全国遺跡地図―茨城県』，茨城県教育委員会（1970）『茨城県遺跡地名表』筑波町教育委員会（1975）『筑波町の遺跡と文化財』など。

Ⅲ　筑波地方の地形環境

1.　はじめに

茨城県筑波地方の地形環境のなりたちを知るために，地形発達史を調べた。われわれをとりまく自然環境は，長い地質時代を通して様々な変遷を経てきており，現在の地形環境にも過去の生いたちが反映されているからである。

とはいえ，筑波地方が筑波山地と関東堆積盆地の境界に位置しているのはなぜか――といった地勢の由来については，ここでは取り扱わない。関東平野は厚い第四系・新第三系におおわれており，新第三紀以降，大きいところでは2.5㎞も沈降しているのに対して，筑波山地は6,000万年前に地下10～15㎞ほどの深所で生じた花崗岩や斑れい岩で構成されており，新生代を通じて15㎞も隆起した。筑波地方がこのように著しい地形・地質の不連続部に位置している理由は，堆積盆地の発生機構や成長過程に関する構造地質学者の研究成果を待ちたい。

そこで以下では，台地成立期以降の地形発達を対象とする。とくに，桜川低地の概形は古鬼怒川によって形成されたこと，その後の古鬼怒川の流路変更によって，桜川低地は他地域にはみられない特異な発達史をたどったことを述べ，最後に筑波町田中付近の地形を説明する。

2.　筑波台地の成立

筑波台地の地形・地質については，多数の研究がなされてきた。その結果，台地の主体を構成している成田層とよばれる砂層・泥層は，南関東の下末吉層に対比され，13万～8万年前ごろを中心とする最終間氷期の高海水準期に，古東京湾とよばれている浅海に堆積したものとされている。堆積相の地域差は多少知られているものの，浅海底の時代の地形環境は十分明らかではない。

高海水準期の後半には，海退にともなって浅海底が海岸平野となり，鬼怒川水系の河川（以下，古鬼怒川とよぶ）がその上を流れた。台地表面の詳細な地形判読と台地の表層地質の調査によれば，旧流路は砂質堆積物で構成され，何列もの微高地をなして南北に連なり，その微高地間の湖沼や湿地にはシルト・粘土が堆積した（水谷・池田，1981）。その時代は，南関東の小原台面（8万年前）形成時に対比されると考えている。これについては，鍵層に乏しいこの地域のテフラを詳細に分析することにより，今後解明されるであろう。

最終氷期に向けての海退にともなって，海岸平野は次第に開析され，台地化した。

3.　桜川低地の形成

海岸平野を開析して桜川低地をつくりだしたのは，古鬼怒川である（池田ら，1977）。すなわち，現在の鬼怒川に相当する大河川が，下館の東で，真壁台地と筑波台地の間を，かつて南流した。両

台地間の低地を古里川低地とよぶ。古里川低地を流れたのは古鬼怒川ではなく，その東を並流する小貝川であるとの見解がある（宇都宮，1981）が，古里川低地に残っている旧河道の規模からみても，現在の鬼怒川と同等の水量をもった河川であったことは疑いえない（牧野ら，1981）。

桜川が桜川低地をつくったにしては，幅2～3㎞と不相応に広いという疑問は，古鬼怒川が桜川低地を流れたということの発見によって解けた。なお，古鬼怒川のつくった小貝川低地の幅は，ほぼ3㎞である。

古鬼怒川が桜川低地の概形をつくった時代を，池田ら（1977）は3万～2万年前と考えたが，最近，鈴木（1980）は，古里川低地の東側半分（真壁台地寄）は風成の鹿沼浮石層（KP）の分布することを認め，この地形面を宝木1面とよんだ。そして立川I面に対比した（鈴木ら，1981）。およそ3万年前には，古里川低地の東側半分は段丘化していたことになる。いいかえれば，それ以前から古鬼怒川は桜川低地のほうへ流れていたのである。

古鬼怒川が流路を変更して現在の小貝川の流路をとったのは，ほぼ2万年前であることが明らかにされた。これは，古里川低地の南東部に分布する，低地の中で最も低位の地形面上で，2.1万～2.2万年前に降下した姶良Tn火山灰（AT火山灰）層があったり，なかったりすることによる。流路変更の年代は，後述するように，今回の調査で，筑波町田中（第1図，Loc・4）において，桜川低地下の古鬼怒川が形成した河床礫層直上に堆積した花崗岩質砂礫層について得られた2.1万～2.4万年前とほぼ一致している。

最終氷期に入ってから流路変更をした2万年前までに，古鬼怒川は海岸平野を15～20ｍも下刻して桜川低地の概形をつくりだし，結果として，筑波台地をはじめとする周辺台地をうきあがらせた。河谷が山麓に接した地域では，河谷の形成にともなう侵食基準面の低下につれて，堆積したばかりの未固結な砂泥が，山地斜面を流下する流水によって侵食された状況が，山麓部の地形に残されている。神郡～館や北条東方にみられる低地は，そのようにして成田層が堆積する以前の地形が発掘されたところであろう。

この時期には，また，筑波山・加波山地の各所で，大規模な土石流が発生し，中腹から山麓にかけて山麓緩斜面が形成された（鶴見・野上，1965）。筑波山南面の広大な緩斜面をはじめとして，上大島，羽鳥，湯袋，藤本などにみられるものがそれである。

4. 古鬼怒川の流路変更後の桜川低地

古鬼怒川の流路変更の原因はよくわかっていない。古鬼怒川が，下館付近の台地と筑波台地とを結んでいた台地を南方へ側刻し続けた結果，ついには台地の開析谷のうちのひとつに接し，古鬼怒川がその開析谷へ流れ込んだのだろう。もしそうだとすれば，高度の低い開析谷底を生みだしたということで，関東造盆地運動が流路変更をひきおこした原因といえよう。

古鬼怒川の流路が突然変化したために，桜川低地の環境は，2万年前を境として大きく変わった。最大径10㎝に達する礫を流送してきた幅200ｍほどの大河川に代わって，花崗岩質の砂を流送

するだけの，幅10〜20mの桜川が，広大な谷底平野上を流れることになった。

古鬼怒川の流路変更によって，その後のこの地方の地形発達には，他地域と比較して決定的な差異が生じた。2万年前以降，最大海退時にかけて，各地の谷底平野には，そこを流れる河川によって深い谷地形がつくられ，後氷期の海進によって，そこに厚い沖積層（完新統）が生じた。

桜川しか流れなくなった桜川低地では，現在の霞ケ浦の湖心部で，高度−20〜−30mの谷底平野を段丘化して，高度−40mほどの谷がつくられたものの，土浦市街より上流の桜川低地では古鬼怒川の河床砂礫（土浦礫層）を開析した谷は形成されなかった（池田ら，1977）。そのため，後氷期の高海水準時にも，他の平野とは異なり，厚い沖積層は生じなかった。いいかえれば，2万年前以降，土浦市街地より上流の桜川低地においては，谷底平野は，ほぼ同一高度を保ち続けた。桜川低地は，今から2万年前の様子が，沖積層に埋められることなく今日まで保存されている特異な場所なのである。

桜川低地面は，水田にされている低位面と，主として畑にされている微高地面とに大別される。微高地の中には，桜村の金田以下の微高地の一部のように，後氷期の高海水準時に形成された砂州と考えられるものがある（宇都宮，1981）。鈴木ら（1981）が飯田層とよんだ6,500年前に堆積した海成の砂泥層が，その微高地と対応する。

金田より上流の桜川低地にみられる微高地は，自然堤防とみなされたり（高木，1975；宇都宮，1981），低位段丘面とされたり（国土地理院，1977）している。南関東の立川面に対比される段丘面が，他地域ならば沖積層下に埋没しているようなところに，微高地として広く分布しているために，このような混乱が生じている。このことが，他地域にみられない桜川低地の一大特色である。

5. 筑波町田中付近の地形

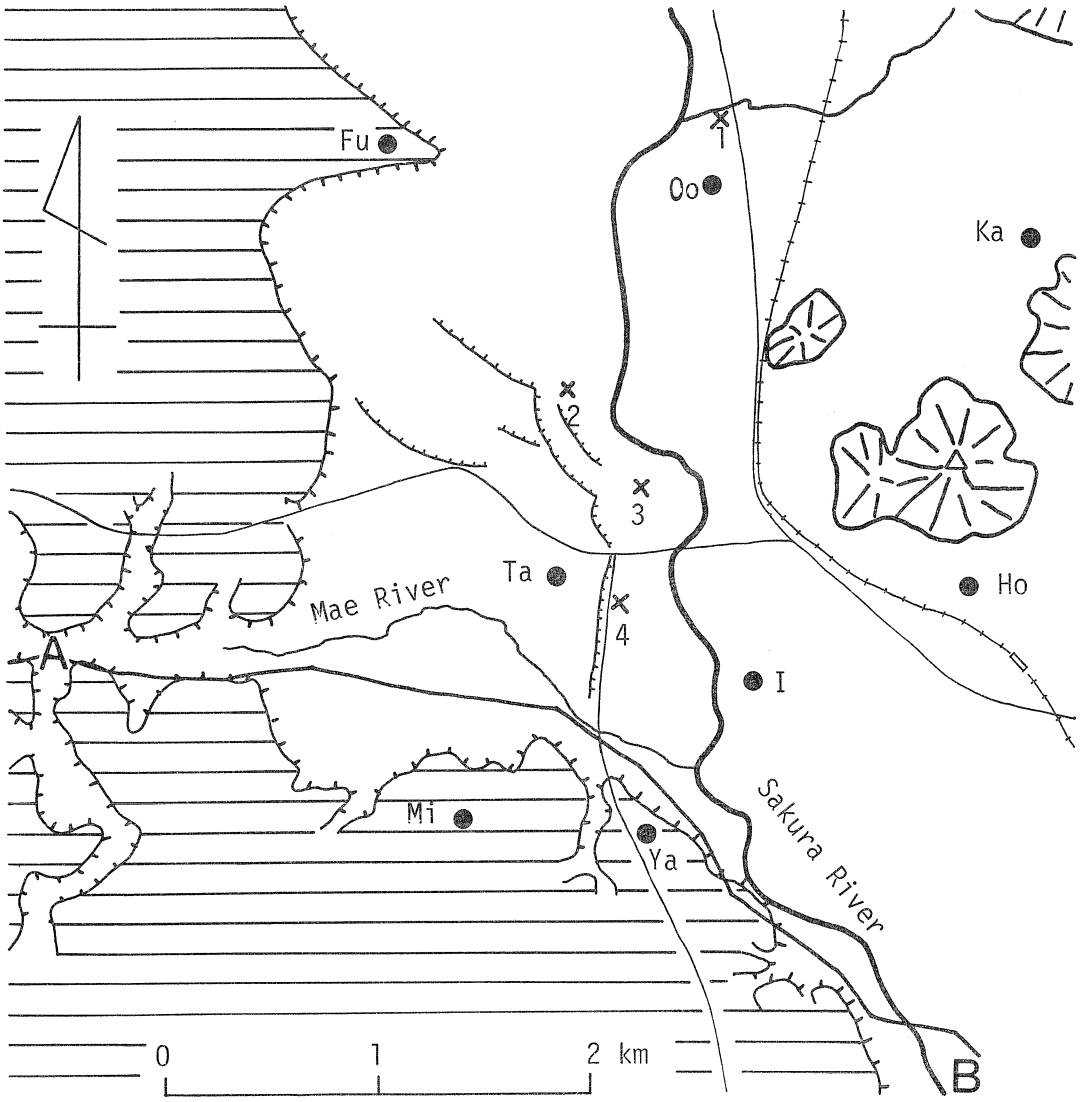
筑波町田中付近では，桜川低地は田中の集落の立地している標高15.5〜17mの微高地と，それより2m低い水田にされている低地面に大別される（第1図）。両者の境界には，明瞭な小崖がある。

田中の西方で，桜川低地は筑波台地に1kmもくい込んでいる。この桜川低地下には，古鬼怒川が堆積した厚さ5〜6mの砂礫層がある（第2図）ことから，古鬼怒川によって台地が側刻されたことは疑いえない。このくい込みによって，水守，山木の集落の立地している台地部分は，相対的に桜川低地に突出している。同様な現象は，田中北方の福王地や海老ケ島にある。河川によって側刻されにくい地層が，このような突出部をつくっている。山木の場合にはシルト・粘土が，また海老ケ島の場合には花崗岩が台地基部に露出している。

田中の集落と西方の台地の間は，台地を開析した前川やその他の台地崖からの小水流によって変形されている。田中の集落が立地している微高地は，火山灰が降下堆積した結果，形成時より数10cm高まったとはいえ，前川の位置する凹地の高度は14〜15mで，田中の微高地と比較して1.5〜2m

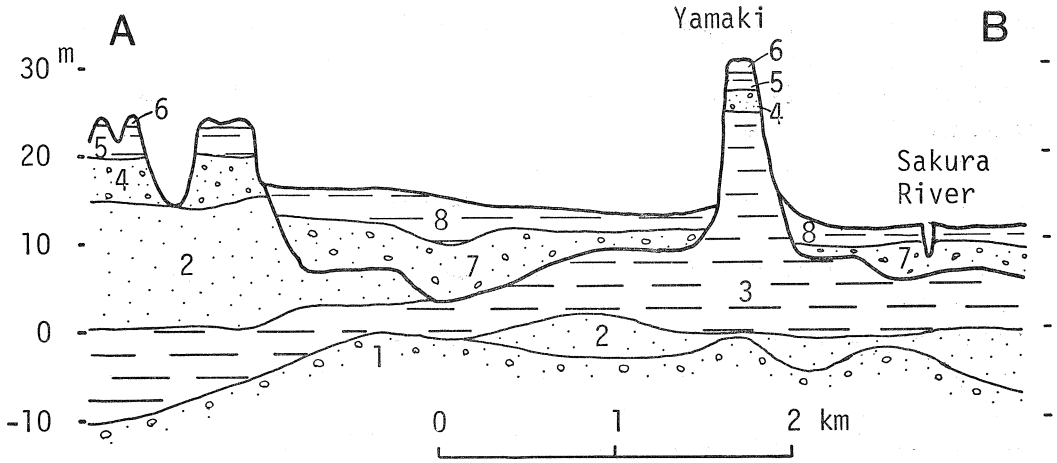
低い。この理由は，よくわからない。第2図にみられるように，砂礫層の上限高度が低いほど，その上位に厚い泥質層や泥炭層が堆積しており，この凹地が侵食されたのではなく，かえって埋められてきたとみえるからである。

田中の微高地の東側にひろがる低地下にも，古鬼怒川の砂礫層がある。この砂礫層の堆積年代は前述のとおり2万年以前で，土浦礫層とよんだものである。



第1図　筑波町田中付近

A—B：第2図の地形・地質断面位置，1～4：露頭観察地点，Fu：福王地，Ho：北条，I：泉，Ka：神郡，Mi：水守，Oo大貫，Ta：田中，Ya：山木



第２図　筑波町田中付近の地形・地質断面図

１：砂礫層（下末吉海進前の古鬼怒川の河床砂礫層）　２：砂質層（成田層），３：泥質層（成田層）
４：砂礫層（海岸平野を流れた古鬼怒川の河床砂礫層）　５：泥質層　６：関東ローム層　７：砂礫層（桜川低地を形成した古鬼怒川の河床砂礫層）　８：泥質層・泥炭層

田中の微高地下にある礫層と土浦礫層とは，ほぼ同一高度にあるが，両者が同時期のものか，田中の微高地下のものが，より古いもの――すなわち，上流でKPをのせる，３万年より古いものなのかはわかっていない。その点を知るためには，砂礫層の絶対年代を知るか，微高地上のテフラを分析することが必要である。

土浦礫層の直上には，桜川の花崗岩質砂礫層が堆積している。その厚さは，この付近では，1.5～2 mで，上部のシルト・粘土層を加えても３ mを越えることはない。花崗岩質砂礫層の年代は，第１図 Loc.1 では，地表下２ mで9,900年前，Loc.2 では，地表下２ mで2,800年前，Loc.3 では，地表下2.6 mで1.6万年前，Loc.4 では，地表下1.5 mにある，古鬼怒川の流路変更直後のものと推定されるものがほぼ2.2万前である。このことは，桜川が古鬼怒川の流路変更後，ほぼ同一高度にあって，流路変遷を続けてきたことを示している。すなわち，洪水時に河岸決壊や河畔堆積現象の生ずるような河道周辺を除いては，桜川は大規模な土砂堆積をすることなく，２万年間を経過してきたのである。

この土地で水田耕作をした人々にとって，古鬼怒川がつくった広大な低地がありながら，大洪水がなかったことは，実に幸いだったろう。もし鬼怒川が昔のまま桜川低地を流れていたとすれば，桜川低地でも，小貝川，鬼怒川や利根川低地などと同様，頻発する洪水と氾濫土砂の堆積に，人々は苦しまされたにちがいない。

（池田　宏　地球科学系）

引 用 文 献

池田　宏・小野有五・佐倉保夫・増田富士雄・松本栄次（1977）：筑波台地周辺低地の地形発達――鬼怒川の流路変更と霞ケ浦の成因――．筑波の環境研究（筑波力学），2，104～113.

宇都宮陽二朗（1981）：霞ケ浦とその周辺の低地の地形について．国立公害研究所研究報告，第20号，1～23.

国土地理院（1977）：土地条件図．土浦.

鈴木正章（1980）：茨城県協和台地の段丘地形と関東ローム．地理誌叢，第21号，34～35.

鈴木正章・高野　司・吉川昌伸・遠藤邦彦（1981）：茨城県桜川流域の立川段丘群．日本地質学会第88年学術大会講演要旨，75.

高木勇夫（1975）：関東地方における河川下流域の地形面と条理について．日本大学地理学科50周年記念論文集，91～101.

鶴見英策・野上道男（1965）：筑波山・加波山周辺の山麓緩斜面．地理評，38（8），526-530.

牧野泰彦・増田富士雄・桂　雄三（1981）：河川堆積物から推定した“古流路”の形状特性値と水理量――茨城県の第四系を例として――．茨城大学教育学部紀要（自然科学），第30号，71～86.

水谷　香・池田　宏（1981）：筑波・稲敷台地面の微起伏とその形成過程．地理予，19，2～3.

Ⅳ　筑波地方の考古学的環境

1.　はじめに

鬼怒川の旧河道が形成したという筑波地方の低地を，いまは西茨城郡鍬柄峠付近に端を発する桜川が貫流して，霞ケ浦に注いでいる。

筑波地方は，この桜川の中，下流域にあたるが，ここはかつて藤田清氏らが桜川文化の地と名づけられた(1)ことに示されるように，原始・古代遺跡のありように，一つの個性が見出せる。すなわち，霞ケ浦沿岸地帯などにくらべて，石器時代遺跡に見るべきものがほとんどないといってよいのに，古墳時代遺跡あるいは寺院跡等の古代遺跡の数は，他地域に較べて遙かに多いように思えるのである。すなわち，このあたりは，農耕段階に入り，にわかに重要度を増した地域といえそうなのである。北条や神郡など，この付近一帯の水田地区に，条里制のおもかげが残存している(2)のも，ここが肥沃な地域として着目されていた証拠といえまいか。

2.　貝塚群の分布

いま，桜川の両岸台地上には，大穂町大曾根吹上貝塚を上限とする貝塚群がみられる。すなわち右岸の上記吹上貝塚，桜村の旭台貝塚，土浦市上高津・宍戸貝塚に対し，左岸の新治村上坂田北部貝塚，同寺裏貝塚，下坂田貝塚，大畑本田貝塚などがそれである。これらの貝塚は，規模の大小による差異，主鹹貝塚か主淡貝塚かといった相異のほかに，年代による差などがあり，必ずしも共存関係にあったものではない。総じて注目されるのは，縄文時代前期に属する小貝塚が点在し，また大規模な上高津貝塚を含めて後・晩期の貝塚も多いのに，中期のそれがほとんど見当らない点であろう。それとともに，汽水性の貝をもつ貝塚が多いことも，当時の生活環境を物語るといえよう。なお，中期に属する貝塚がほとんどない，ということは，同時代遺跡が乏しいというのではない。貝塚を伴わないこの時期の遺跡は，筑波町洞下・漆所・琴平，大穂町佐・瓦塚，桜村大角豆・西坪など，むしろ他時期にくらべて数多い位なのである。

中期における上記の状況は，多かれ少なかれ各地で指摘しうるところだが，このような遺跡群が，相互にどのようなかかわりを有していたのか等々の問題は，すべて今後に課された問題というべきであろう。

3.　弥生・古墳時代のムラ

弥生時代遺跡も顕著とはいえない。しかし，宍塚古墳調査に際して多量の十王台式土器片が出土したことがあるし(3)，私共も桜塚古墳の下から同じ時期の竪穴住居址の一部を検出したことがある。観音下遺跡付近にある大池の近くにゴルフ場が建設された際にも，多くの弥生式土器片が出土した

第3図 筑波地区遺跡分布図

1. 上坂田北部貝塚　2.桜塚古墳　3.観音下遺跡　4.土塔山古墳　5.甲山古墳　6.菅間大塚山古墳　7.根本古墳　8.横町古墳群　9.平沢古墳群　10.山口古墳群　11.日向廃寺　12.北条五輪塔　13.小田五輪塔(極楽寺跡)　14.前峯古墳群　15.国松古墳群　16.沼田古墳群　17.中台古墳群　18.中台廃寺跡　19.山木古墳群　20.宮平遺跡　21小野須恵器窯址　22.原山古墳群　23.小高須恵器窯址　24.田宮古墳群　25.大畑新田遺跡　26.吹上貝塚　27.藤沢東町古墳群　28.上坂田寺裏貝塚　29.下坂田貝塚　30.上坂田古墳群　31.下坂田鹿島前貝塚　32.瓢箪塚古墳　33.松塚古墳群　34.愛宕塚古墳　35.旭台貝塚　36.西坪遺跡　37.鹿島様古墳　38.宍塚古墳群　39.宍戸貝塚　40.上高津貝塚　41.関の台古墳群

赤字は調査遺跡　●古墳時代主要遺跡　▲貝塚　■主要古代遺跡

「第3図　筑波地区遺跡分布図」　に貼付して下さい

1．上坂田北部貝塚　2．桜塚古墳　3．観音下遺跡　4．土塔山古墳　5．甲山古墳　6．菅間大塚山古墳　7．根本古墳　8．横町古墳群
9．平沢古墳群　10．山口古墳群　11．日向廃寺　12．北条五輪塔　13．小田五輪塔（極楽寺跡）　14．前峯古墳群　15．国松古墳群
16．八幡塚古墳　17．平沢遺跡　18．中台廃寺　19．山木古墳　20．小野須恵器窯址　21．小田古墳群　22．沢辺南方古墳群　23．高崎山古墳群
24．田宮古墳群　25．大畑本田貝塚　26．吹上貝塚　27．藤沢東町古墳群　28．上坂田寺裏貝塚　29．下坂田貝塚　30．上坂田古墳群
31．下坂田鹿島前貝塚　32．熊篭塚古墳　33．松塚古墳群　34．天神塚古墳　35．旭台貝塚　36．九重廃寺　37．鹿島様古墳　38．夫塚古墳群
39．宍戸貝塚　40．上高津貝塚　41．関の台古墳群

赤字は調査遺跡　●古墳時代主要遺跡　▲貝塚　■主要古代遺跡

という。いずれも後期に属するものである。すなわち，現在知られている筑波町中台，中菅間，桜村西坪，新治村上坂田など，比較的少数の弥生時代遺跡がすべてではなく，湿地性の低地を控えた場所に，その多くが未発見のまま眠っていると考えておく方がよいようである。

同様のことは，古墳時代集落等についてもいえよう。観音下遺跡，根本古墳そして上坂田北部貝塚の発掘のさい，ともに五領式期の遺構が発見されており，また水守北方の田中部落でも，開田に際して多くの土師器が出土したのである(5)。とりわけ，田中のそれは，この時代にムラが沖積平野の微高地に進出していたことを示す好個の例といえよう。したがって，これらについても，当時かなり稠密にムラが展開していたらしい，という以上，いま多くふれることは避けておきたい。

ただひとつ特記されてよいのは，筑波町中菅間から福王地・洞下にかけてひろがる，桜川右岸台地端部近くの，筑波山祭祀をとりおこなったと推定される，古墳時代中期から後期はじめにかけての祭祀遺跡が，中村盛吉・亀井正道氏らによって注目された(6)ことである。同様な性格を有すると思われる祭祀遺跡は，西宮一男氏によって，矢田部町関の台でも発見されている(7)。農耕段階における筑波山信仰の高まりが想定できないであろうか。

集落遺跡に比べ，古墳は一見してそれと判るため，これの分布についてはかなり明確に把握しうる。しかし，桜塚古墳や土塔山古墳の例にみるように，今後あらたに重要古墳が発見される可能性を十分にのこしていることを念頭におかねばなるまい。

4. 古墳の分布

冒頭に述べたように，この地域には比較的多くの古墳がみられる。これらの大多数は古墳群の形態をとっている。大規模な古墳群としては，矢田部町下河原崎古墳群の140，筑波町前峯古墳群の80基弱，矢田部町下横場古墳群の42基，同町関の台古墳群の27基などを挙げうるが，多くは10基未満であったといえよう。このような大規模古墳群は概して小円墳だけで構成される傾向があるのに，中，小規模のそれに前方後円墳が含まれる場合が多い点を注目される。全長94mとこの地域最大を誇る県指定史跡八幡塚古墳は(8)，現状では円墳1基を従えるにすぎない。また，伝えるところによれば，新治村の高崎山古墳群は，総数15基程度というのに，5基の前方後円墳を含んでいるというし，同町下坂田古墳群でも14基中4基がそれだという。桜村横町古墳群は，3基中1基が前方後円墳といった按配である。このほか1966年には宅地造成事業に先だって土浦市常名で，全長70mを上まわる前方後円墳が調査されたというが，その存在形態は明らかでない。これら群在する古墳の多くは後期に属すると思われるが，筑波町山木古墳群のように，主墳は全長48mの前方後円墳だが，5世紀初頭頃に築造された古式古墳(9)で，他と時を同じしくたとは，とうてい考えられないものもある。

また，土浦市宍塚古墳群は4基の前方後円墳を含む，18基からなる古墳群だが，主墳と目された全長56mの大日山古墳は，埴輪廃絶以後の，おそらく7世紀代に下降するものであった(10)。他の多くの埴輪を有する古墳より，明らかに後出である。

ところで，この宍塚古墳群では，大日山古墳や，6号前方後円墳などの埋葬施設がくびれ部の裾などにあり，墳頂部には存在しなかった。茨城県南部から千葉県北部にかけて分布する，いわゆる変則的古墳である。矢田部町関の台9号墳や，谷ひとつへだてて存在する面野井5号墳の埋葬施設もまた，主体部をなす箱式石棺が中心を離れて存在した(11)。

しかるに，筑波町小田古墳群のうち，明治年間に和田千吉氏によって調査された円墳(12)では，箱式石棺が墳頂部にあったという。同様に，新治村下坂田古墳群中の塚山古墳でも墳丘中央部に箱式石棺が存在したという(13)。同じ後期古墳でも差異がみられるのである。

いっぽう，筑波町平沢・山口古墳群では，石室構造に若干の差異を見せながら，横穴式石室を有する点が注目される。総じて筑波山西南麓地方は，いわゆる変則的古墳を認めがたい地域といえそうである。

さて，矢田部町は，かつて河内郡に属していたから，古代における筑波郡はずい分と狭かった時期がある。ところで『倭名類聚鈔』によればこの筑波郡には，平安時代の頃，大貫・筑波・三村・水守・清水・栗原・方穂の諸郷が存在したという。すなわち，山木古墳や桜塚古墳が後の水守郷の地にあるのに対し，甲山古墳はおそらく三村郷，八幡塚古墳は筑波郷に重なりそうである。平安時代のムラの分布と古墳時代のそれとを同一視することはできないが，少なくとも筑波地方の前方後円墳のすべてが単一の集団に属するものはでなかった，とはいえそうである。

つぎに，これまでに知られる出土品の若干に言及しておこう。

筑波町国松の一古墳から，大正8年に鏡・三鈴式鈴杏葉，刀，埴輪などが出土した。いま東京国立博物館に収蔵されているが，明らかに6世紀前半期の所産である。これに対し，同町前峯の一古墳から80余りの切子玉，30を上まわる勾玉，金環5個などが出土し(14)，同町漆所の初酉神社にある満面塚古墳からも，直刀・銅環・管玉・勾玉等が出土したという(15)が，ともに後期後半のものといえる。なお，さきの新治村塚山古墳では東枕をとる5体の人骨，小田の一古墳でも2体の合葬がみられたという。

5. 歴史時代の遺跡

古墳時代以降の遺跡が多いことも著名である。筑波町平沢遺跡では，昭和50～52年の間に，11棟の掘立柱建物跡が発見され，筑波郡衙跡に擬されるに至った(16)。この遺跡の西方台地上至近には，奈良時代古瓦を出土する中台廃寺があるし，桜村九重廃寺も，ほぼ同じ頃の寺跡である。近年，筑波町から九重廃寺と同巧の瓦を出土する遺跡の存在が確認されたと仄聞している。注目すべきことである。やや降って，三村山極楽寺跡は多い。

極楽寺跡付近で，同寺の瓦を焼いた瓦窯跡が発見され(17)，新治村小野では，明治年間に平安時代頃の須恵器生産用の登り窯が発見され(18)，その後も高井悌三郎氏によって調査されている(19)。同村の小高窯跡，矢田部町高山窯跡などのほか，今後相当数の窯業遺跡が発見されるであろう。

砂鉄が豊富といわれる桜川筋の製鉄関係遺跡も，近年にわかに着目されてきた。新治村寄江金・

筑波町小和田などにそれの存在が指摘されているが，平安時代ごろのものと想定されている。

私どもは，このような先人の業績ならびに歴史的環境を踏まえた上で，地域史理解のための調査を進めねばならないのである。（岩崎卓也）

註

(1) 藤田清・中村盛吉（1972）『常総古文化研究』

(2) 条里遺構に言及したものは多いが，次の2点をあげておきたい。
三友国五郎（1959）「関東地方の条里」埼玉大学紀要　社会科学編（歴史学，地理学）8，菊池利夫（1978）「常陸国河内郡金田・花室の条里的地割遺構の研究」筑波大学紀要　歴史人類5

(3) 酒詰仲男（1959）『日本貝塚地名表』土曜会，斎藤弘道（1978・79）『県内貝塚における動物遺存体の研究』1.2，茨城県歴史館；T.Akazawa(1972) "Report of the Investigation of the kamitakatsu Shell-Midden Site."No.4, Bulletin of The University Museum, The University of Tokyo. などがある。

(4) 宍塚調査団（1971）『常陸宍塚』土浦市教育委員会

(5) 五領式土器のほかに，和泉式土器も出土している。

(6) 亀井正道（1960）「筑波山麓の祭祀遺跡」上代文化30

(7) 西宮一男（1974）「関の台祭祀遺跡」『茨城県史料　考古資料編，古墳時代』

(8) 茂木雅博他（1979）『常陸八幡塚古墳整備報告書』八幡塚古墳調査団

(9) 茨城考古学会（1972）『茨城県筑波町山木古墳』

(10) 註4に同じ。

(11) 西宮一男（1960）「古墳総覧附関の台9号墳・面の井5号墳石棺調査報告」矢田部町文化財調査報告』Ⅰ

(12) 和田千吉（1906）「常陸国小田村古墳調査」考古界6-1

(13) 樋口清之・山田実（1967）「茨城県新治郡新治村塚山古墳発掘調査報告」上代文化37

(14) 註1に同じ。

(15) 註1に同じ。

(16) 茨城県住宅供給公社（1979）『平沢遺跡』

(17) 高井悌三郎（1954）「筑波郡三村山瓦窯址」『日本考古学年報』4

(18) 島田増次郎（1902）「常陸国新治郡小野製陶所遺跡」東京人類学会雑誌199

(19) 高井悌三郎（1955）「新治郡小野窯跡」日本考古学年報5

Ⅴ 調査成果の概要

1. 上坂田北部貝塚

a, 貝塚の調査

本遺跡は，新治郡新治村上坂田字塚原に所在する。貝塚のある地点は，桜川左岸の標高31ｍの台地上の，北側から小谷が入り込んだ谷頭附近に位置する（第4図）。現状は桑畑となっており，地表に径約3ｍの範囲でハイガイ等の貝殻の散布が認められ，縄文時代前期の地点貝塚の特徴を示していた。ただ，この貝殻散布地点以外に現在のところ貝殻散布の地点は確認されていない。伝聞によれば，この地点の西側の台地縁部に近い山林中に，かつてハイガイの堆積する貝層が発見されたという。これを考慮に入れならば，本遺跡は，全体として調査地点の西側にひろがりを有すると推定される。一方，南側には，字名が示すように，かつて古墳群が存したと伝えられ，その片鱗と考えられる残丘が調査地点の南方100ｍの地点に認められる。また，附近一帯の畑中では土師器の小片が採集できた。

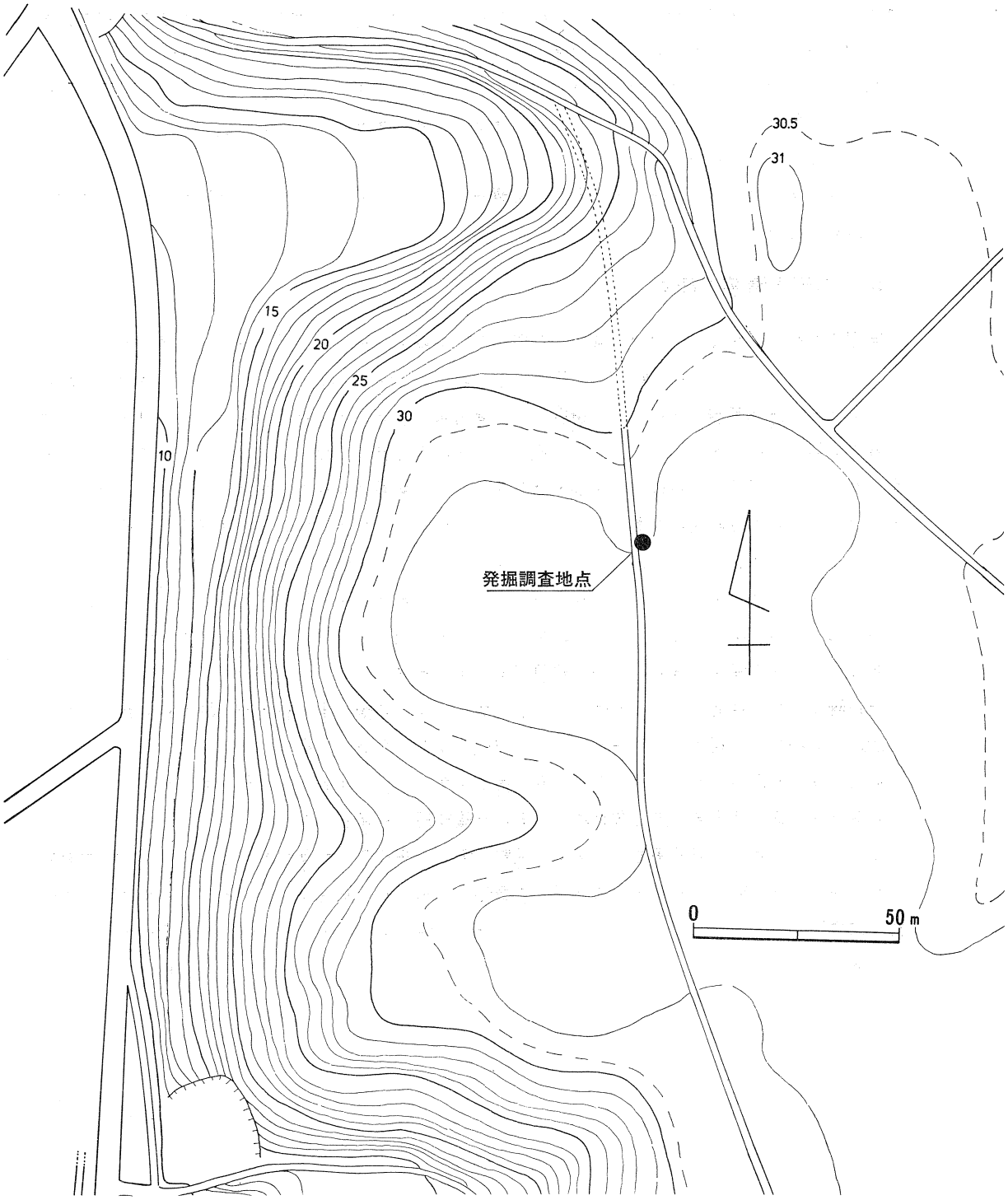
発掘調査は，貝殻散布範囲のほぼ中央で交叉する東西，南北のセクション土手を設定し，これによって区画された四区を北東区から順に反時計廻りにⅠ～Ⅳ区として，各区をさらに1ｍ×1ｍのグリッドを設けて行なった。

Ⅰ～Ⅳ区を表土から同時に併行して掘り下げ，貝塚の上面を露出させ，堆積の範囲を明確にする作業から始めた。次いで東西，南北のセクション土手に沿って小トレンチを設けて掘り下げ，貝層の堆積状況，竪穴住居址の有無等の確認を行なった。この結果，表土層は厚さ15～20㎝で，この下に貝層上面が露出した。貝層は，上層20㎝ほどは混土貝層で保存状態はあまり良くなかった。下層約10㎝は純貝層の状態で残存し，その下面は竪穴住居床面に密接していることが判明した。上下の貝層の間は部分的に貝の少ない土層が介在した。貝塚の範囲は，東西約3ｍ，南北約2.5ｍの規模であった。貝はハイガイを主体とし，ヤマトシジミがこれに次ぎ，一部ではこれがブロック状に堆積する箇所も認められた。ほかに少量のマガキ・オキシジミ等が混在した。獣魚骨類は，発掘の時点では確認できなかった。

調査は，貝層のサンプリングの後，下層の竪穴住居址の検出に全力を注いだ。この間，貝層周縁部の埋土層中から，関山期後半の土器の大破片が数点出土した。

竪穴住居は完掘の結果以下のような事実を得た。

プランは，後世の攪乱によって壁の大部分を失っていたため明確にし得なかった。発掘区のほぼ中央に炉址と考えられる楕円形の焼土の堆積が検出され，その数十㎝離れた箇所にも径30㎝ほどの焼土が認められた。



第4図　上坂田北部貝塚付近地形図

床面は，ローム層を掘り込んでつくられ，堅牢であるが，後世の攪乱によって失われた部分が多く，特に西側，南側は後述の方形周溝墓によって削り取られていた。

柱穴は，全部で46穴検出できたが，炉址を中心に長軸に関して左右対称に並ぶものが認められた。柱穴の配列状況，炉址の軸方向から本住居址は，南北を長軸とする台形乃至楕円形のプランを有するものと推定される。

出土人工遺物は少なく，関山式土器片，黒耀石，チャートのフレーク類，土師器，弥生式土器小片各数点を得るのみだった。

b. 方形周溝墓の調査

発掘の進行にともなって発掘区南部〜西部にかけて幅2m程の溝が検出され，Ⅳ区（東南区）では，地表より1.5mの深さに達した。Ⅲ区の溝のコーナーから古墳時代初期の底部，胴部に穿孔を有する土器一個体が発見され，この遺構が方形周溝墓であることを認定し得た。この遺構は，桑畑の真中で発見されたものだったので，全掘することは不可能だったが，1辺およそ13mの方台部を有するらしい。周溝は，各辺の中央部付近が幅をまし，東溝では4mにも達していた。溝底に平坦面を有するいわゆる箱堀状であることも注意してよかろう。また，東溝底の南寄りに土壙状の掘りこみが検出された点も注目に値するが，その性格を究めるには至らなかった。

方台部中央付近も探査したが，埋葬施設らしいものは発見できなかった。だが，土壙が必らずしも中心部にあるとは限らないから，これをもって，旧地表面に掘りこみがなかったと断ずることもできない。封土の程度を含めて，検討課題とすべきであろう。

土師器のうち，東南コーナー付近から出土したものは，口縁外面に粘土帯が貼りめぐる，いわゆる折返し口縁を有し胴下部に，円形に並ぶ焼成後穿孔の小孔が5つ穿たれていた。

東溝中央部付近から出土したものは，直口縁小形壺で，胴下半部に最大径を有する。

両者とも，底部は大きく打ち欠かれている。五領式期の所産としてよい。

なお，この上坂田北部貝塚付近からは，深耕に際して多くの古代遺物が出土している。地元農家の採集品は，弥生時代後期十王台式土器，古墳時代五領式期〜鬼高式期，さらには平安時代の土師器・須恵器に及んでいる。このような状況下で方形周溝墓は，五領式期の村落の一隅に営まれたものである。

（前田　潮）

2. 桜塚古墳

a. 立地と墳丘

筑波山を東に臨みながら流れる桜川右岸に，標高30m前後の南北に長く延びる筑波台地が存在し，その北東縁部には北に舌状に突き出るいくつかの小台地縁が認められる。本古墳はこれらの1つを構成する舌状台地先端部の標高約25m，平野部との比高約10mの地点に位置する。行政区画の上では，筑波町水守字桜塚に属する。また，本墳から東方に500m程隔たる，いま一つの台地縁部には，当地域の古式古墳の1つである山木古墳が存在していた。（第5図）

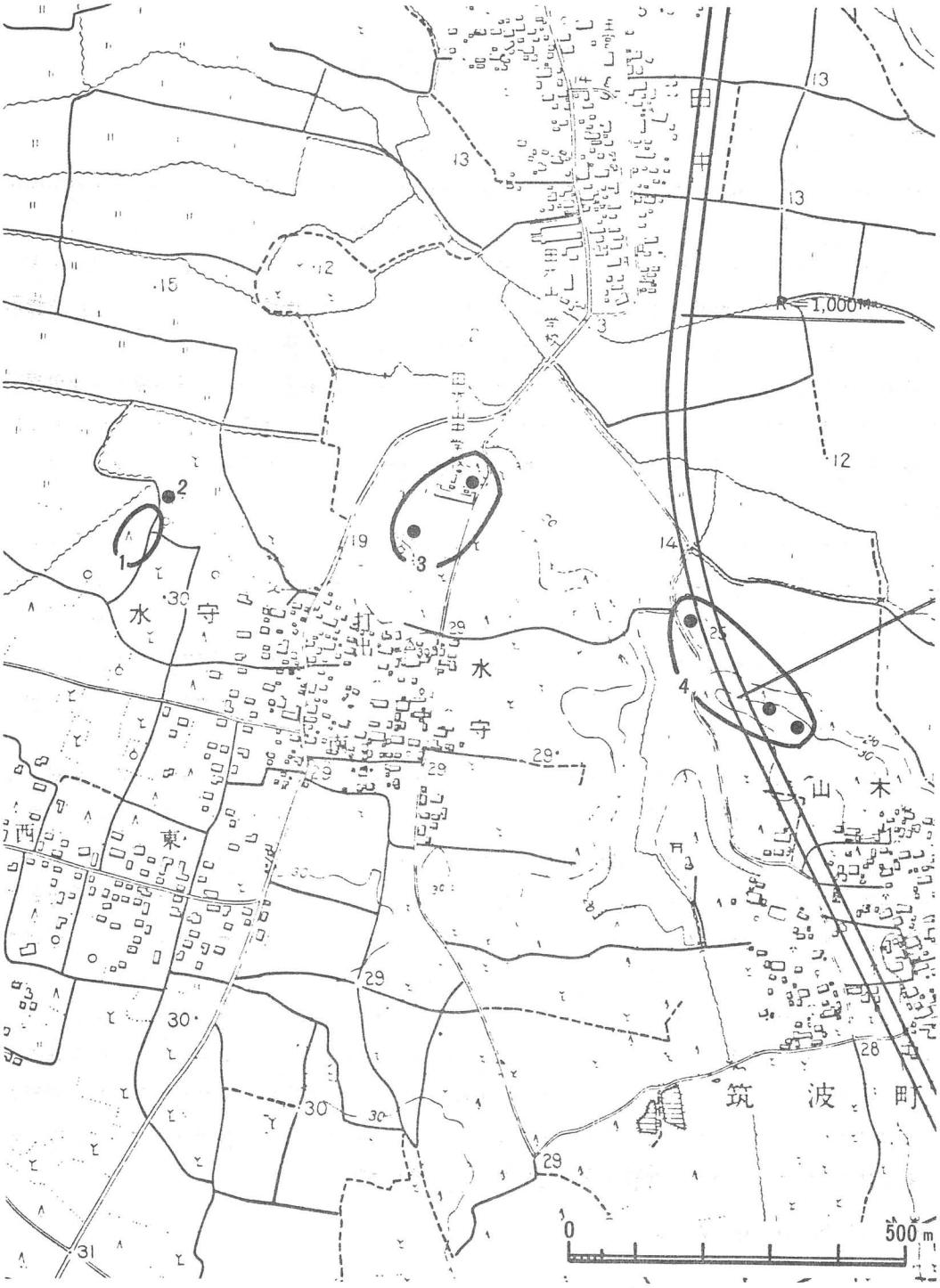
発掘調査に先立って行なった墳丘測量の結果，本古墳の墳丘は標高26.0mの等高線がほぼ現裾部を巡る事が確認された（第6図）。その墳形は一見して主軸をほぼ北方にとる全長50m程の前方後円墳を想定させるものであるが，前方部にあたる部分は墓地によって削平され，その墳形を著しく変じていた。

さて，今回の発掘調査においては，その墳形および構築状況を確認するため，大小14本のトレンチを設けた。その結果，墳丘の構築状況については，かなり明確に把握することができた。すなわち，後方部の比高は現在約6mを測るが，下から3m程の位置で地山削り出しによって整形し，上の3m程を盛土して墳丘を構築している事が確認された。盛土は基本的に黄褐色土と黒褐色土の互層として認められ，この2者を版築状に盛っているが，A・Cトレンチでは擂鉢状に外側から盛っていることが観察された。

その墳丘の範囲は標高29.0m程の位置で墳丘を巡る事が確認された地山整形面が一応の目安になると思われる。この高さから盛土が開始されるのであるが，この整形面の直上に薄く旧表土と思われる黒褐色土が認められ，地山整形の際，この黒褐色土を切っている事が観察された。この切られた旧表土の先端のラインは各トレンチ内の破線によって示している。このラインを見ると後方部と想定された墳形とほぼ一致しており，これからその規模を考えるならば，後方部は1辺20m前後ということになる。前方部については前述のように墓地が存在していたため，調査の手を加える事は困難であった。現在前方部前縁の如く認められる部分に2箇所トレンチを設け調査を行なったが，この部分においては墳丘と直接関連するような事実は認められなかった。しかし，後方部で認められた地山整形面が，全て標高29m前後で巡る事を鑑みるならば，前方部の範囲もまたこれを援用する事が許されよう。これらの事から低平な前方部の存在が想定され，その規模は全長30m前後の前方後方墳とされよう。なお，埴輪および葺石等は全く検出されなかった。

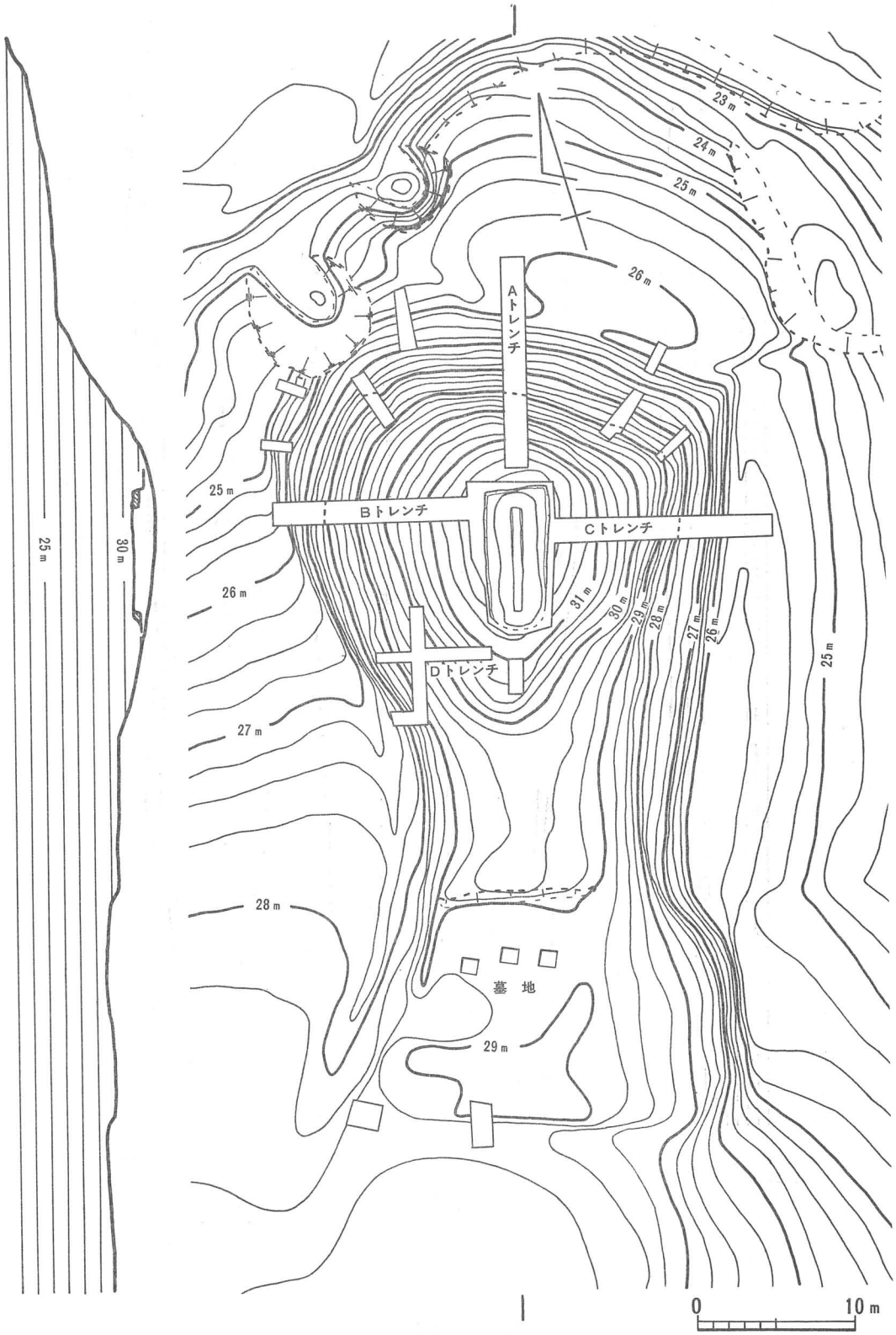
b. 内部主体（第7図）

本古墳の内部主体は，長大な割竹形木棺を内蔵する粘土槨である。これは後方部の中央，墳頂下約1.0mに存し，その主軸は墳丘主軸方向と一致する。

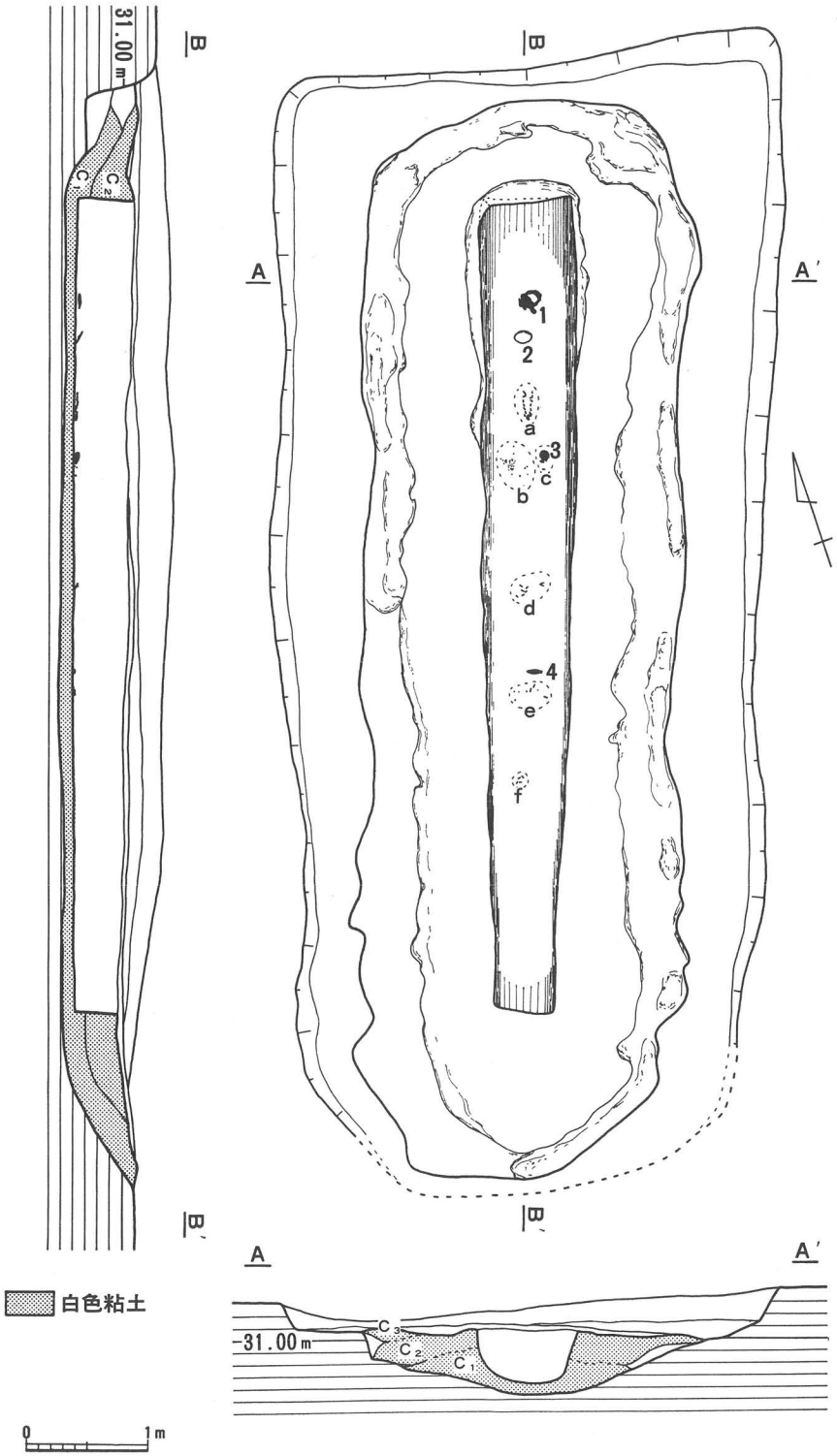


第5図 桜塚古墳付近地形図

1.散布地(縄文・土師) 2.桜塚古墳 3.水守古墳群 4.山木古墳群



第6図 桜塚古墳墳丘測量図



第7図 主体部実測図

粘土槨を構築するにあたっては，まず現墳頂下0.6m程の所まで盛土によって墳丘を構築し，平坦に整形した後，長さ9.5m，幅4.2m，深さ0.2〜0.3mの浅い第1次墓壙を掘り込んでいる。その平面形は，ほぼ隅丸長方形であるが，南側では前方部に移行するため，掘込み面自体が低くなって，墓壙壁はやや回り込むような形で自然に切れている。この第1次墓壙の中央に，粘土槨を構築するための第2次墓壙を穿っている。これの上端ラインは，ほぼ粘土槨末端のラインに一致し，上端で長さ9.0m，幅2.8〜3.2m，深さは0.5m程で，横断面は大きく開いたU字形を呈している。

つぎに第2次墓壙の底に平均20cm程の厚さで白色粘土を敷き，その中央を浅く掘り窪めて棺床としている(C_1)。棺床部での粘土の厚さは9cm前後である。C_1の末端はセクションA—A′を除いて，第2次墓壙の上端まで及んでいる。この段階で，木棺の身を棺床に据えつけ，さらに15〜20cm程白色粘土を盛って（C_2・C_3）棺身をしっかり固定していたのであろう。C_2の上面は，棺身の上面に近いものであったと思われる。C_2およびC_3の上には，拳大の白色粘土ブロックと褐色土の混じったものが，蒲鉾状に盛り上っている。これが被覆粘土に相当するもので，厚い所では30cmに達する。この被覆粘土層が木棺を完全に覆っていたことは，粘土槨内部の埋土状況からわかる。すなわち，棺床より8〜15cmの明褐色粘質土の間層をはさんで，この被覆粘土層がほぼ全面にわたって，厚さ5cm程の均質な堆積を示していた。したがって，木棺上の被覆も，この程度の薄いものであったと思われる。

木棺は腐触して遺存しないので，粘土槨内部の法量と形態より推察する他ない。粘土槨内法は全長6.74m，幅0.50〜0.80m，深さ約0.40mを測る。幅は北端が広く，南へ行くにしたがって狭くなっている。床面は北端部が最も高く（＋6cm），北端より2m以南はほぼ水平となっている。排水施設は特に設けられていない。

棺床部は全体にU字形の断面を示し，いわゆる割竹形木棺であったことがわかる。ただ，南へ行くにしたがって床面の湾曲が少なくなり，南端より1.7m以内の部分は，ほとんど箱形に近い断面を示す。その変化は極めて漸移的であり，割竹形木棺の末端近くを，箱形に加工したものとも考えられる。

一方，粘土槨の北端より0.5mの範囲には，白色粘土塊が詰められていた。粘土塊と棺床との間には，厚さ1〜2cmの明褐色粘質土が認められたが，粘土塊と粘土槨北壁とは密着していた。おそらくC_1上に棺身を置き，C_2によって固定するまでの間木棺のグラつきを防ぐために詰められたものと思われる。したがって，木棺の北側木口板は棺北端より少なくとも0.5m南に入った所にあったものと思われる。通常このような粘土塊は木棺の両端に認められるが，南端に認められないことからすれば，この部分の箱形の造作も，あるいは棺身の安定を図るものかもしれない。南木口板の位置については不明であるが，後述する遺物の出土状況から見れば，南端より1.8m以内の所にあったことはまちがいないと思われる。

c. 遺物出土状況（図版2・4）

本古墳に伴う遺物は墳丘から出土した若干の土師器と，棺内の副葬品類に大きく分けられる。

Dトレンチの盛土中より壺の底部が1個体分出土した他は，土師器はすべて墳頂部グリッドから出土した。墳頂部グリッドからは，20点程の土師器小片が出土したが，その多くは第1次墓壙内からの出土である。いづれも小片で散在し，互いに接合しない点が注目される。

棺内の副葬品は幸いにして後世の攪乱を一切受けておらず，棺床上にほぼ原位置を保って出土した。北から順に見ていくと，まず棺の北端より1.3mの主軸上に，漆黒色を呈する平面円形の編物がやや盛り上って検出され，その下に潜り込むような形で刀子状の鉄器片がある。さらに30cm程南に下った主軸上に，変形四獣鏡一面が鏡面を上にしてある。鏡は南端部で棺床に接し，北端部で最も高く浮き上がる。その傾斜は水平面に対して31.5度である。鏡の下からは，明褐色の堆積土に混じって若干の木片が検出された。木棺ないしは鏡筐の一部と思われるが，鏡の出土状況から見れば後者の可能性がより強いように思われる。鏡面には平絹と思われる布痕が認められ，これに包まれたのち鏡筐に納められていたものかもしれない。

鏡よりさらに40cm南に下ると，勾玉1個と管玉17個よりなる玉a群がある。その配列にはほとんど乱れがなく，本群が一連の首飾りであることは明らかである。この玉a群の北部を中心に長径25cm，短径20cm程の範囲には赤色顔料の散布が認められる。長島弘三教授による分析の結果，水銀朱であることが確かめられた。

玉a群より南へ30cm下がると，主軸をはさんで西に玉b群，東に玉c群と石釧がある。両者の間隔は集中地点間で約22cmを測る。玉b群が太形のもの1個を含む6個の管玉と27個のガラス小玉からなるのに対し，c群は管玉のみ13個からなる点対照的である。石釧は刻みのない底面を上にして，鏡とは逆に北側で棺床に接し，南側は玉c群に被さる形で，やや浮いていた。

これより0.6m程南に下って，管玉8個より成る玉d群がある。さらに0.7m程南下すると，短剣1口と，これに南接して玉e群がある。短剣は主軸と直交し，西に鋒先を向ける。玉e群は管玉3個，ガラス小玉3個，琥珀丸玉2個よりなるが，比較的散在している。玉f群は管玉4個より成り，玉e群から約0.7m南に位置する。

以上の出土状況を総観すれば，首飾り（玉a群）の位置等より被葬者は木棺北端より約1.8mの所に頭頂部を置き，頭位を北北東に向けて埋葬されたものと思われる。その場合，玉b群が右手首，玉c群と石釧が左手首，玉d群が両足首の位置にくる。それぞれ手玉・足玉を構成していたものであろう。石釧についても左手首への着装が考えられる。

d. 出 土 遺 物

本古墳出土の遺物は，棺内から鏡1，勾玉1，管玉50（破片を含む），ガラス製小玉29，琥珀製丸玉2，石釧1，短剣1，同破片1，編物1，棺外から土器片若干が出土している。以下，そのお

のおのについて略述する。

変形四獣鏡（図版５－１）　面径13.5㎝，鈕高1.05㎝，鈕径1.85㎝，縁厚0.4㎝を測り，鏡面に0.5㎝の反りが認められる。鏡縁はやや肥厚し，半三角縁状を呈する。全体は白銅質で，特に鏡面には鏡を包んでいたと思われる織物の痕跡が認められた。鏡背の文様構成を外区から見ると，幅0.65㎝の鏡縁の内側に鋸歯文帯，鋸歯文帯，櫛歯文帯と続く。次いで，無文帯を挟んで内区には４個の乳で区割された間に４個の獣形を配している。鋳上りはあまり良好でなく，内区の獣形の半ば近くはほとんど鋳出されていない。おそらく，湯冷えによるものであろう。

勾玉（図版５－２）　瑪瑙製で，長さ2.9㎝，幅0.7㎝，厚さ1.7㎝を測る。頭部の紐孔は片面から穿孔したもので，全体の形状はコの字形に近い。

管玉（図版５－２，６－２）　輝緑凝灰岩製で，穿孔は両面からのものと片面からのものの２種がある。その大きさは径1.11㎝，長さ4.42㎝の大形のものから径0.37㎝，長さ0.8㎝の小形のものまで認められるが，数量的には小形のものが多い。

ガラス製小玉　淡青色のガラスを材料とした小玉で，形は不揃いであるが多くは小球形を呈する。大きさは径0.43㎝，高さ0.34㎝程度のものである。

琥珀製丸玉　濃い赤褐色の小球形を呈し，径0.66㎝，高さ0.73㎝程度を測る。

石釧（図版６－１）　輝緑凝灰岩製で，外径7.6㎝，内径5.6㎝，環体の幅1.0㎝，高さ1.65㎝を測る。その形状は環体の上半部の斜面にも下半部の垂直面にも共に細線を彫刻したものである。上半部と下半部は一条の横線によって区割されているが，斜面と垂直面との区別は明瞭ではなく，緩やかなカーヴを描く。

短剣　鉄製で，長さ10.3㎝，幅2.35㎝，厚さ0.23㎝を測る。保存状態は比較的良好で，剣身の片面には木質の痕跡が認められる。

編物　詳細については調査中であり，明確な記述はできないが，朱漆と黒漆をそれぞれ塗布した皮革もしくは繊維によって製作されている。

土器片　縄文土器・弥生土器・土師器の破片若干の出土を見た。とくに土師器については器形の判るものは少ないが，小形丸底土器等の破片が認められる。

e.　ま　と　め

以上の説明でわかるように，桜塚古墳は全長30ｍ前後の小型前方後方墳である可能性が強い。長大な粘土槨などは，本古墳の年代をそれほど溯らせる要素たりえないが，副葬品の組成などを勘案して，いちおう４世紀末を前後する時期の築造と考えておきたい。

（蒲原宏行・松尾昌彦）

3. 観音下遺跡

a. 位置と環境

観音下遺跡は筑波町荒神下に所在する。

当遺跡の位置する桜川右岸の標高30m程の筑波台地は，筑波鉄道常陸北条駅の西方約4kmの地点で大きく西方に入り込み，その最も奥に「大池」と呼ばれる池が存在する。当遺跡はこの「大池」の南方約400mの台地斜面の標高約27m，水田面との比高約9mの地点に位置する。また遺跡の立地する斜面の麓には湧水が認められる。

筑波町には数多くの遺跡が存在するが，いま知れるだけでも50箇所以上を数える。当遺跡に近接する遺跡としては，西方200m程の位置に存在したと伝えられる弥生期の遺跡が挙げられる。この遺跡は現在ゴルフ場によって壊滅しているが，当遺跡との関連上重要な位置を占めるものと思われる。さらに，東方900m程の地点には，昭和54年3月に本学で調査を行なった桜塚古墳が臨まれ，南方1.2km程の所には作谷古墳群が存在する。加えて，当遺跡付近において発掘調査と並行して踏査を行なった際，国分期の土器片が採集された。時代がかけ離れているため明確には断じ難いが，これらの事は当遺跡が存在した筑波台地上では，古代においてかなり長期間生活が営まれていたことを窺わせるものであり，今後さらに調査を進めることによって，その実態がより明確に把握されよう。

b. 調査の経過と土層状況

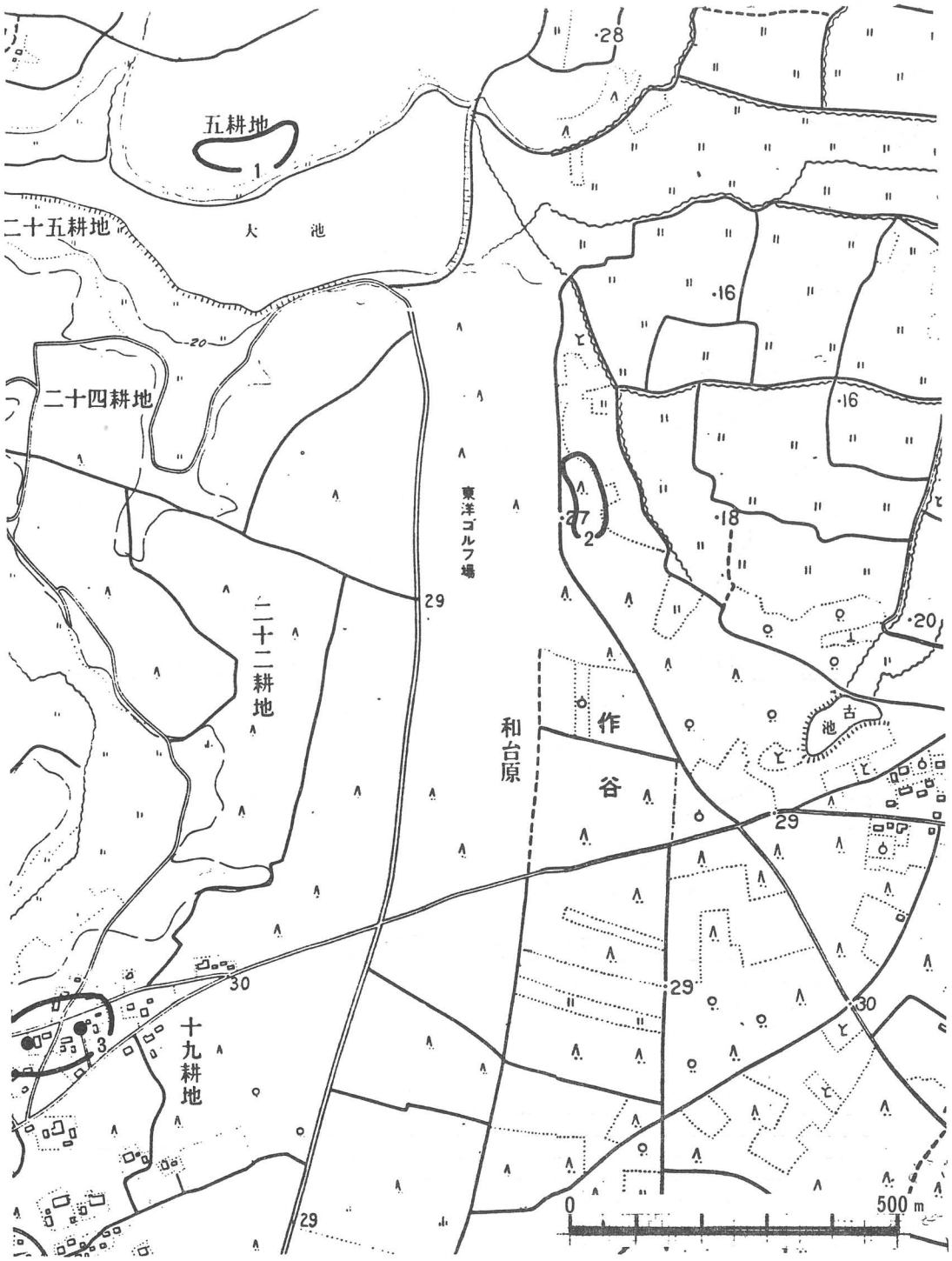
今回の調査は昭和55年2月15日より開始，約1カ月後の同年3月14日に終了した。発掘調査は台地斜面の2500㎡をその対象とし，幅1mと2mの6本のトレンチを設けることによって，遺構を確認するという方法を採った（第9図）。

まず，調査区域の雑草を除去した後，当初焼土が認められ窯址の存在が想定された場所を起点に第1・4トレンチを設けた。この結果，第1トレンチにおいて，黄褐色土層（ソフトローム層）の地山の上に，暗褐色土層を挟んで表土の砂質茶褐色土層が認められ，地山上の土層は基本的には2層存在することが観察された。

2月18日には第3・5・6トレンチを設け，さらに調査区域を広げた。この間，第1トレンチにおいはて窯址が確認され，第4トレンチでは五領期の土器が多数出土し，住居址の存在が想定された。

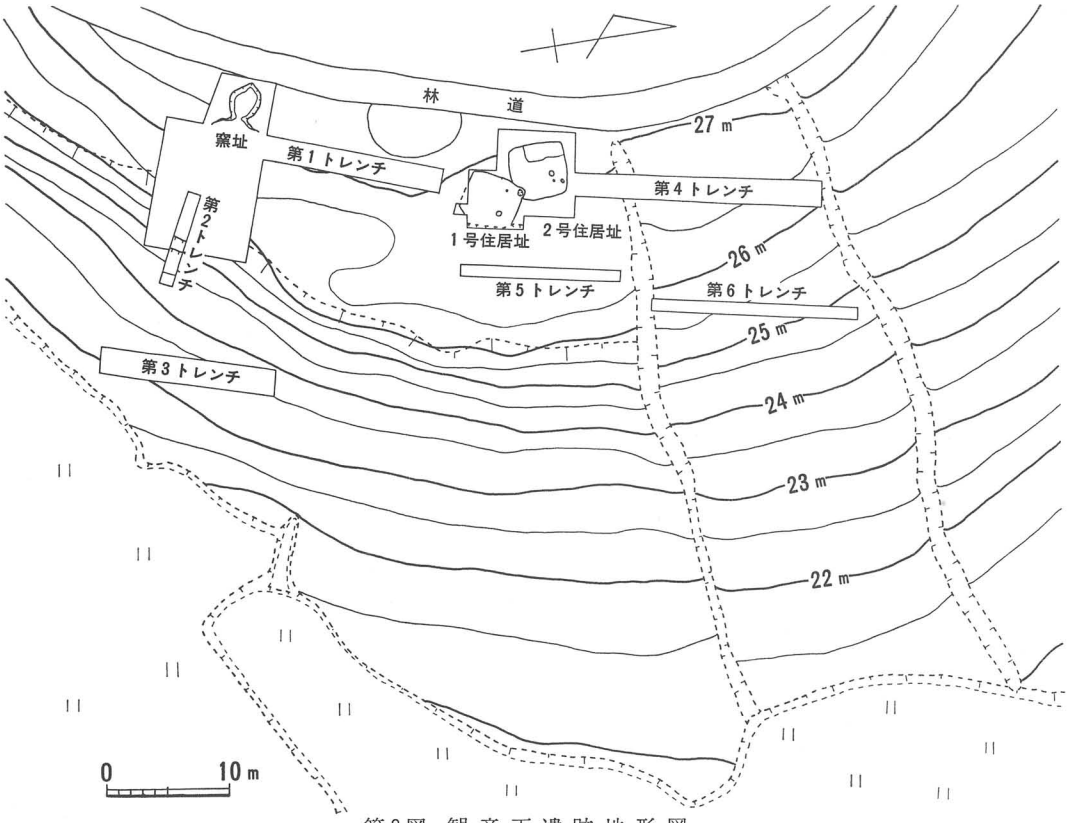
2月27日より第1・4トレンチを拡張し，それぞれの遺構の検出に努めた。この結果，窯址内からは多量の炭化物が認められ，また住居址は2軒存在していることが確認された。この過程において，標高26.5m付近から地山が急傾斜で落ち込むことが認められたが，これは第3・5トレンチにおいても確認された。

3月1日からは，この地山の落ち込みを確認するため第2トレンチを設け，その土層状況を観察

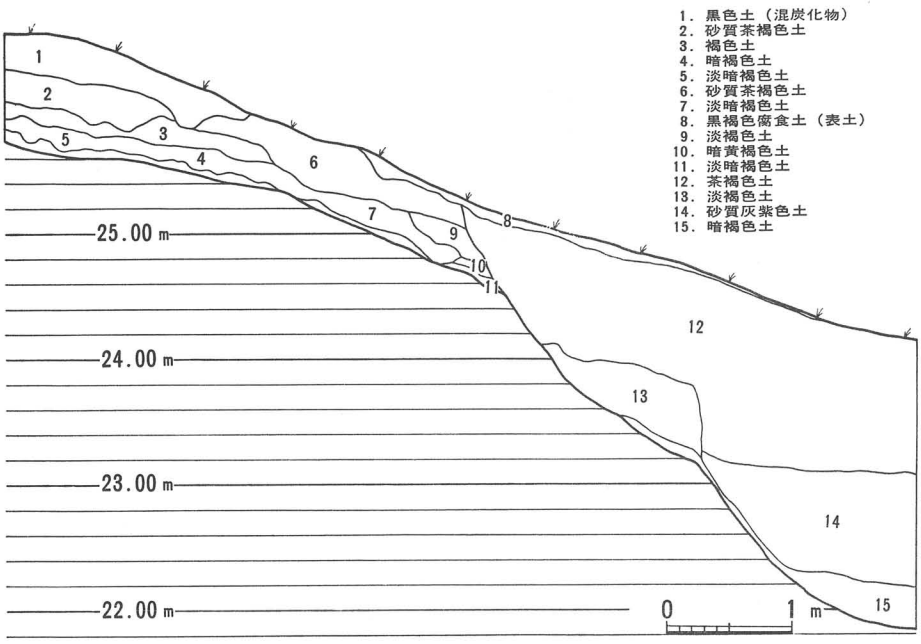


第8図　観音下遺跡付近地形図

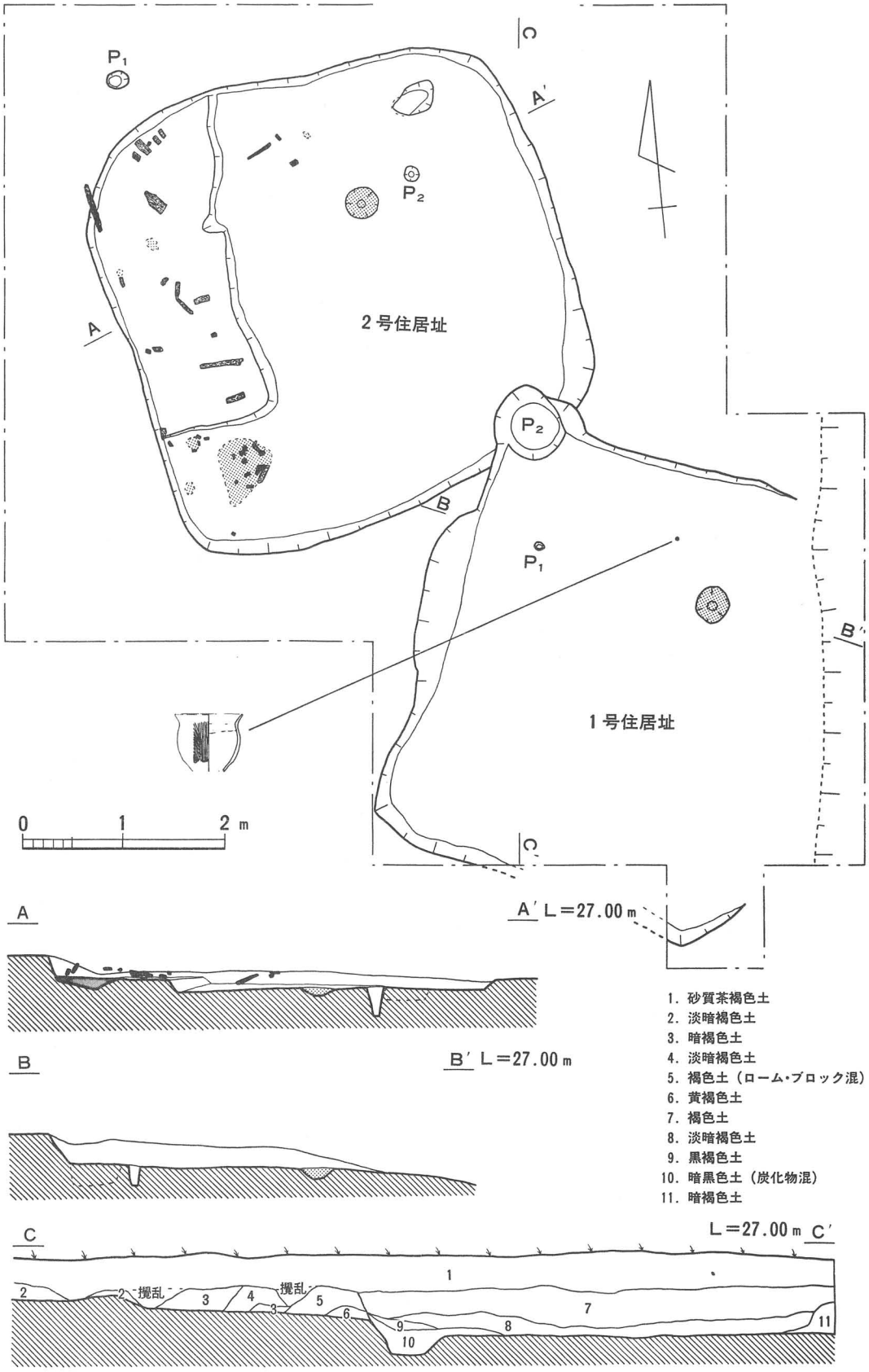
1.散布地(弥生)　2.観音下遺跡　3.作谷古墳群



第9図　観音下遺跡地形図



第10図　第2トレンチ土層断面図



第11図　第1・2号住居址実測図

した。この結果，第2トレンチでは標高24.5m付近で地山が大きく落ち込み，加えて，表土層の直下から切られていることから，比較的最近削られたという疑いが生じた（第10図）。これらのことから，標高25m以下では遺構がすでに存在しないと予想されたので，これまでに確認された窯址および住居址の完掘を目指すこととした。

3月8日には両遺構をほぼ完掘した。第1トレンチの窯址は全長3.2m，幅2m程の小規模な平窯の形態を呈することが確認された。また，第4トレンチの2軒の住居址は切り合っており，特に，1軒にはベッド状遺構が付設されていることが確認された。この集落は，さらに西方に広がると想定されたが，今回は調査区域を林道までに止めることとした。

3月10日より，各遺構の写真撮影および実測を開始し，窯址においては，掘り方等を確認するためのトレンチを縦横に設けた。また，第4トレンチの住居址では，2軒とも柱穴が明確でなかったため，実測後さらに床面を10cm程下げたが，新たに柱穴を確認することはできなかった。

c. 遺構と出土遺物

前述のように，今回の調査においては住居址2軒，窯址1基を確認した。以下，各々について遺構と出土遺物をあわせて記述する。なお，遺構は全て黄褐色土層の地山面に掘り込まれていた。

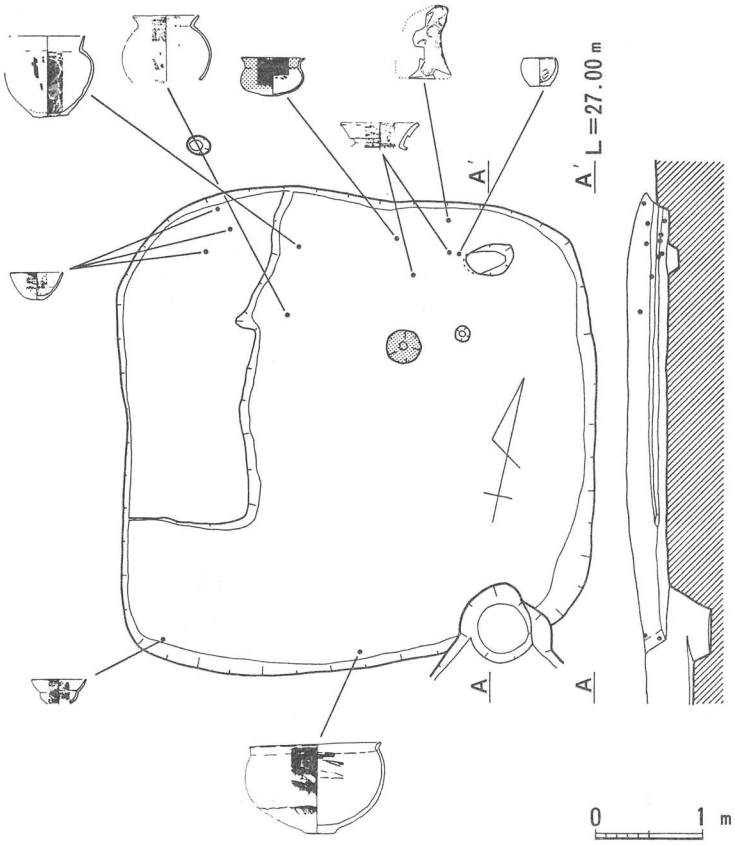
1号住居址

遺構（第11図，図版8・9）　第4トレンチの南半より検出されたもので，北西隅において2号住居址と重複している。南東辺は地山の落ち込みのため検出されず，壁高も東側に行くほど浅い。形状は約4.5×3.4mの隅丸長方形で，面積規模は推定16㎡程と思われる。主軸はN28°Wとされよう。壁高は西壁が最も深く，35cmを測り，北壁・南壁は15cm前後であった。覆土は褐色土・淡褐色土が中央部に厚く入っており，2号住居址を切っていることが確認された。床面は比較的平坦で，よく踏み固められているが，東側にわずかに傾斜している。ピットは2つ認められたが，P_1・P_2とも主柱穴にはし難い。とくに，P_2は径70cm，深さ17cmを測り，内部に多量の炭化物が認められた。貯蔵穴としての機能が考えられるものかも知れない。なお，柱穴については，完掘後さらに床面を10cm程下げて検出に努めたが，新たに確認することはできなかった。炉は中央よりやや北東に偏しており，40×34cm，深さ10cmで，よく焼けていた。

出土遺物は少なく，覆土中より縄文土器・弥生土器・土師器等の破片若干が出土したが，床面から出土したものは甕形土器片（第13図1，図版13—左上）のみであった。これは胴部の大破片で，約½が残存する。器形はくの字状に外反する口縁を有し，口縁端部には面取りを施す。調整は行なロ縁部外面および内面にヨコナデ，胴部外面に刷毛目整形を施す。とくに外面の刷毛目整形は強くわれたもので，粘土を下方に押し下げている。また，外面にはススの付着が認められる。胎土には若干の砂粒を含み，焼成良好で，明褐色を呈する。口径13.5cmを測る。

2号住居址

遺構（第11・12図，図版8—12）　第4トレンチの西半より検出されたもので，1号住居址に比し

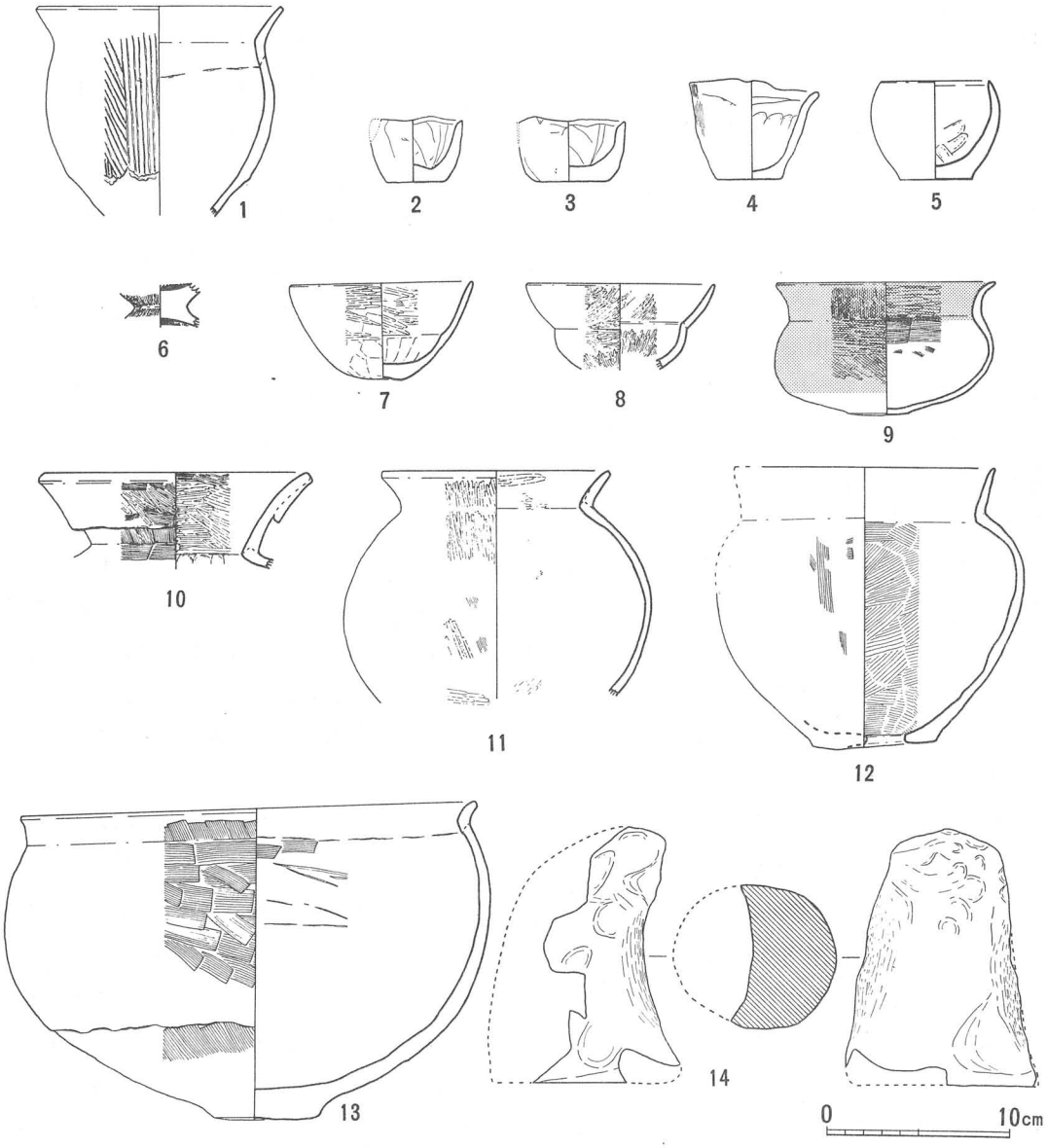


第12図　2号住居址遺物出土状況図

て遺存状態は良好であった。形状は4.5×4.4mの隅丸方形で，面積は18.1㎡を測り，主軸はN13°Eであった。壁高は10～20cmで，北側が浅く，北東隅は10cmを測るのみであった。覆土は暗褐色土・褐色土が認められ，床面は平坦で踏み固められていた。ピットは屋内に2つ，屋外に1つ認められたが，主柱穴と考えられるのはP_2のみであった。屋外のP_1については当住居址に伴うものと断定し難いが，住居址に向って傾斜しており，屋外柱穴と考える事もできよう。なお，柱穴については，完掘後さらに掘り下げてみたが，新たには確認されなかった。炉は中央よりやや北東に偏しており，径32cm，深さ8cmで，よく焼けていた。また，西辺には長さ3.1m，幅1.3mのベッド状遺構が付設されており，床面との比高は5cm前後を測る不整長方形を呈する。このベッド状遺構はその周囲の地山を削り残した後，壁側に褐色土を貼って構築している事が観察された。その表面は平坦で，床面に比してさほど踏み固められていない。さらに，当住居址床面には多くの炭化材および焼土が認められ，火災を被ったことを窺わせる（図版8－2）。とくに炭化材は径5cm程の丸材と厚さ2cm程の平材が認められ，丸材は住居址の中心に向って放射状に倒れ込んだ形で出土している。この丸材の出土状態は垂木としての使用が想定されるものであろう。

出土遺物は１号住居址に比してかなり多く，とくに炉の周囲の北辺に集中して出土している（第12図）。土師器の多くは床面上から出土しており，当住居址が火災を被っていることを鑑みるならば，ほぼ原位置を保っているものと言えよう。なお，覆土中より縄文土器・弥生土器・土師器の破片若干が出土している。

遺物（第13図２～14，図版13・14）　２～５は手づくね土器である。２～４は覆土中より出土したもので，２・３はほぼ直立する口縁，４はやや外反しつつ開く口縁を有する。調整は２・３が共に



第13図　１・２号住居址出土土器実測図

ナデ調整で，口縁端部に面取りを施し，4は外面に刷毛目整形後ヨコナデ，内面にかるいヨコナデを施し，指頭圧痕が認められる。5は床面から出土したもので，他に比して丁寧な作りで，口縁部は内湾する。調整は外面にヨコナデ，内面にナデ調整を施す。胎土はすべて若干の砂粒を含み，焼成は良好で淡褐色を呈する。法量は2が口径5.1㎝，器高3.7㎝，3が口径5.9㎝，器高3.7㎝，4が口径7.0㎝，器高5.5㎝，5が口径6.0㎝，器高5.4㎝を測る。

6は高坏脚部破片で，覆土中より出土している。調整は外面および坏部内面にヘラミガキ，脚部内面に横位の刷毛目整形を施す。坏部内面は，赤彩されている。胎土は若干の砂粒を含み，焼成は良好で，淡暗褐色を呈する。

7は小型坩形土器の完形品で，ベッド状遺構上より出土している。外形は埦に近いが，内面には稜が認められ，小型坩形土器の特徴を残している。底部はやや上げ底を呈する。調整は外面にヘラケズリを施し，上半部にはさらにヘラミガキを施す。内面も上半部にヘラミガキ，下半部にヘラケズリを施す。胎土は若干の砂粒を含み，茶褐色を呈する。法量は口径10.0㎝，器高5.3㎝を測る。

8も小型坩形土器の破片で，⅓程が残存し，住居址南西隅より出土している。内外面とも丁寧にヘラミガキを施している。胎土は若干の砂粒を含み，内外面とも色調は淡褐色部分と黒色部分とが2分している。口径10.3㎝を測る。

9は埦形土器の完形品で，炉の北方1㎡の位置から出土している。緩やかに外反する口縁を有し，底部は丸底に近い平底を呈する。外面および口縁部内面にヘラミガキを施し，頸部内面に刷毛目を残す。なお内外面ともに赤彩が施されている。焼成は良好で，器壁はかなり薄い。口径12.0㎝器高7.3㎝を測る。

10は壺形土器の口縁部で，炉の北方60㎝の位置から出土している。口縁部は外反ぎみに開く複合口縁で，頸部に刷毛目整形を施した後に粘土を付加している。外面の調整は刷毛目整形の後，一部にヘラミガキを施し，内面はヘラミガキを施すが，口縁端部に刷毛目，頸部内面に指頭圧痕を残す。なお，これは二次焼成を受けており，頸部の割れ口にもその痕跡が認められた。あるいは，壺の口縁部を器台として転用したものかも知れない。胎土は若干の砂粒を含み，焼成は良好で暗褐色を呈する。口径14.8㎝，現存部高7.3㎝を測る。

11は甕形土器の破片で，¾が残存する。出土位置は炉の西方90㎝の所であった。器形は球胴で，くの字状に屈曲する短い口縁を有し，口縁端部にかるく面取りを施す。内外面ともヘラミガキを施すが，外面の一部には刷毛目が残る。胎土に若干の砂粒を含み，色調は暗褐色を呈する。法量は口径12.5㎝，胴部最大径16.8㎝を測る。

12も甕形土器の完形品で，ベッド状遺構の北東に近接して出土している。ほぼ直立する口縁を有し，胴部はやや肩が張る。底部は平底で，焼成後の穿孔が認められる。調整は内外面とも刷毛目整形を施すが，外面は明瞭ではない。胎土は若干の砂粒を含み，色調は茶褐色を呈する。法量は口径約14.2㎝，胴部最大径16.9㎝，底径6.7㎝，器高15.5㎝を測る。

13は甕形土器の完形品で，住居址南辺の中央に正位の状態で出土した，器形は短く外反する口縁

を有し，底部は小さい平底を呈する。外面が刷毛目整形，内面はヘラケズリの後ヨコナデを施している。とくに外面の胴部下半は刷毛目整形の後，さらに粘土を付加していることが観察された。また，外面全体にはススの付着が認められた。胎土に若干の砂粒を含み，色調は淡褐色を呈する。口径25.0㎝，胴部最大径26.5㎝，底径5.7㎝，器高17.5㎝を測る。

14は支脚形土製品で，炉の北方1ｍ程の位置から出土している。全体は角形を呈し，断面形はほぼ円形で，底部は平坦である。調整はほとんど施されず，指頭圧痕が全面に残る。焼成は極めて悪く，2次焼成の痕跡も認められるが，内部はほとんど焼成を受けていない。胎土は砂粒を含み，色調は淡褐色を呈する。底径10.5㎝，器高14.1㎝を測る。

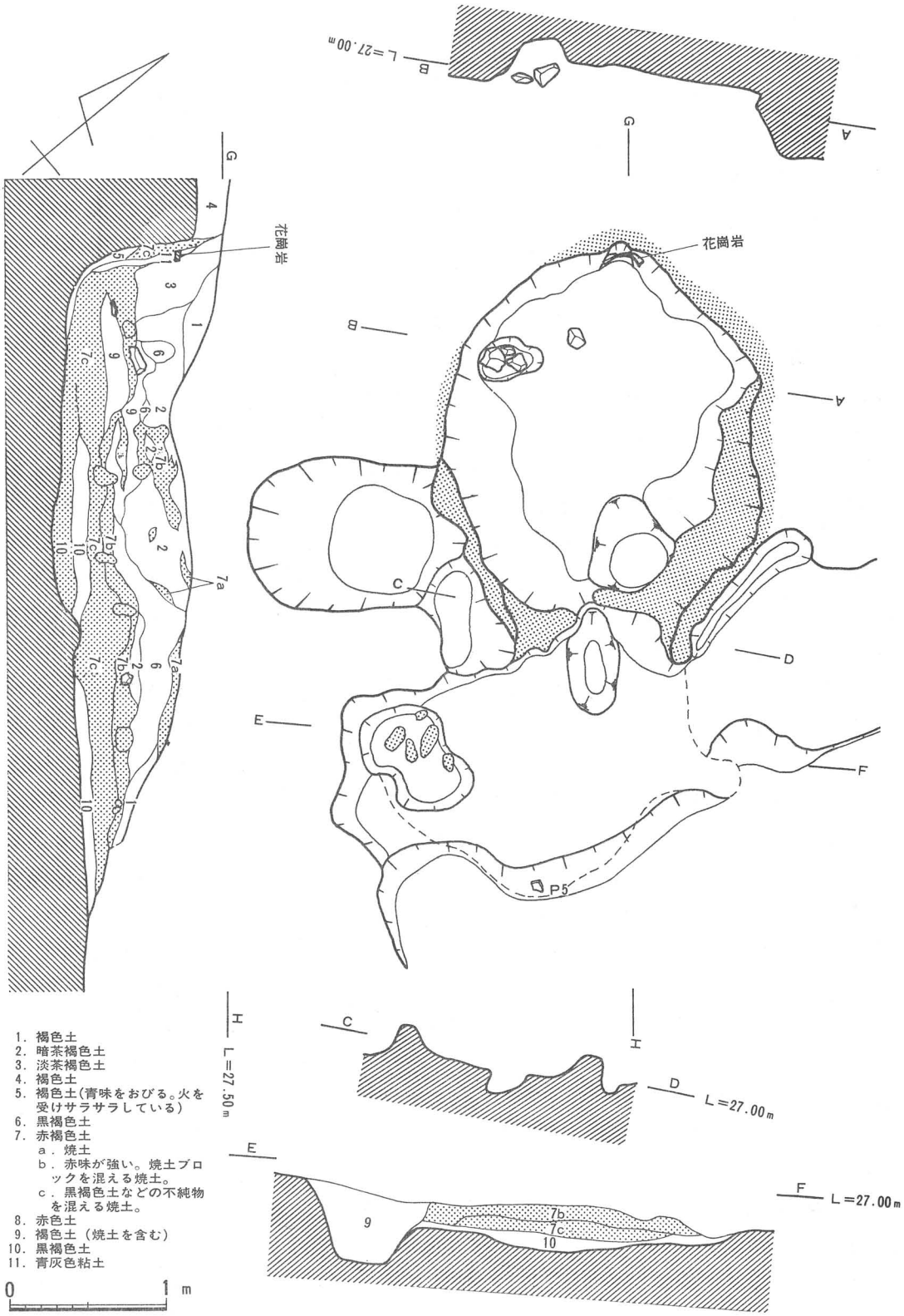
窯　址

遺構（第14図，図版12）　第1トレンチにおいて検出された窯址は主軸を約N45°Wにとり，楕円形の焼成部を有する。焼成部の長軸は約2ｍ30㎝，短軸は約2ｍを測り，底面に礫を含んだピットが存在する。沖積面に向かって設けられた焚き口は地山整形によりしぼられている（図版12）。前庭部は第14図において破線で示した範囲であり，この部分にも焼土が堆積しており，その外側には炭化物の散布が認められた。前庭部の焚き口付近，および前庭部西隅にピットが認められ，後者には焼土の塊りが数個体包含されていた。おそらくこれは，前庭部にかき出された焼土の塊を廃棄したピットと考えられる。煙道は奥壁を掘り込んで設けられており，奥壁からやや突出している点を特徴としている。上部に偏平に打ち欠いた花崗岩をはめ込んでいる。

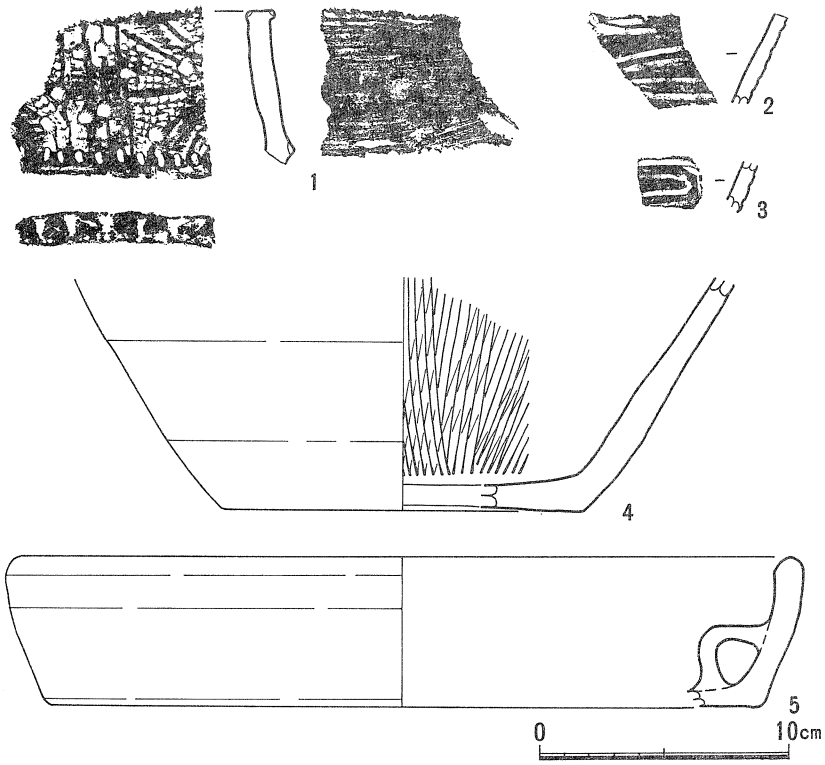
本窯址は地山の上に堆積する第4層の褐色土を掘り込んで構築されており，焼成部の底面はほぼ水平で，地表面からの深度は約90㎝を測る。基本的な層序は下半が赤色，赤褐色の焼土層，上半が焼土層を部分的に含んだ暗褐色土層，黒褐色土層である。第8層は鮮やかな赤色をおびた堅い焼土層であり，第10層の黒色土を介在して，その上に7c層，7b層が堆積する。7c層も焼土層であるが，黒褐色土などの不純物をまじえ，前庭部にも堆積する焼土は，かき出されたものかもしれない。7b層もほぼ純粋な焼土層である。これより上層に認められる焼土は天井部の落下などによるものだろう。前庭部の焼土中からは炭化材が出土している。煙道部は周囲に粘土を貼って補強している。第5層などは青味がかり，火を受けてサラサラしている。このように焼成部の土層堆積状況をみると，焼土が黒色土をはさんで2～3層にわたって認められ，それぞれの土層が互いにやや異なる内容を有することが窺えた。したがって，本窯は少くとも2回の使用を経ていることが考えられるのである。

遺物（第15図）　窯址および第1トレンチ内より出土した遺物は第15図に示したものがおもなものである。1～4はトレンチ内出土であり，5は第14図にも示したように前庭部の西南端において7c層より出土した。

1は鵜ケ島台式土器，2・3は大洞A′式土器である。断片的なものではあるが，参考のために図示しておいた。4は窯址付近の焼土まじりの褐色土層中より出土した擂鉢であり，櫛歯の単位は10本である。胎土，底部の調整が5と非常に近似している。そのほか，第1トレンチ内からは縄文


花崗岩
P5
L=27.00m
L=27.50m
1. 褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 淡茶褐色土
4. 褐色土
5. 褐色土(青味をおびる。火を受けサラサラしている)
6. 黒褐色土
7. 赤褐色土
a. 焼土
b. 赤味が強い。焼土ブロックを混える焼土。
c. 黒褐色土などの不純物を混える焼土。
8. 赤色土
9. 褐色土(焼土を含む)
10. 黒褐色土
11. 青灰色粘土
0
1 m

第14図 窯 址 実 測 図



第15図　第１トレンチ出土遺物実測図

土器，弥生後期土器，埴輪，須恵器の破片などが数10片出土しているが，図示するに足りないものばかりである。

直接窯址に伴った遺物は５の内耳土鍋にとどまるが，これは７c 層出土であり，本窯址の時期決定の一助となり得る遺物である。φ３～５㎜大の白色砂礫をやや多く含み，淡灰色の焼色を呈し，焼成はあまい。復原口径約32㎝，器高約６㎝を測り，径に比して器高が低いのが特徴といえる。内耳の数は不明だが，口縁より下った底面付近に貼付されている。内外ヨコナデ，底面はヘラケズリにより水平に調整されている。

d. ま と め

観音下遺跡がある筑波地方には，かなりの数の集落遺跡が存在しているが，調査の手が及んだものはほとんどない。その意味で，今回は小調査であったにもかかわらず，その果たした意味には大きいものがある。

さて，前述したように今回の調査によって古墳時代前期にあたる五領期の住居址２軒と窯址が確認された。発掘面積が小さく，遺物も少ないため，かなりの制約があるが，以下，当遺跡をめぐる問題点の若干にふれておこう。

住居址について

五領期の住居址2軒が検出されたのみであり，これをもって集落の全貌を窺うことはできない。しかし，2号住居址においてベッド状遺構が認められたことは1つの成果であった。そこで以下に，このベッド状遺構をめぐる2・3の問題を提起したい。

ベッド状遺構の研究は，昭和29年道灌山遺跡の1軒の住居址にこれが確認されたことから始まった(1)。その後，昭和34年の千葉県我孫子中学校校庭遺跡の発掘報告において，吉田章一郎・田村晃一両氏はベッド状遺構が他の床面に比して「しまり」がなく，その上から炭化物が出土したこと等から，この遺構に寝所としての機能を想定された(2)。この見解に従って，昭和41年和島誠一・田中義昭両氏および木下忠氏は居住人数算出の1つの手懸りとしてベッド状遺構に注目された(3)。

これに対して，和島誠一・金井塚良一両氏は昭和41年，ベッド状遺構が同じ竪穴に住む人々の間に序列が固定化される動きを示すものとする新しい見解を発表された(4)。さらに，昭和42年沢田大多郎氏はベッド状遺構を有する住居に居住した人々が，方形周溝墓に埋葬されたのではないかとする意見を出された(5)。この沢田氏の見解を踏襲し，熊野正也氏および河野真知郎氏は，ベッド状遺構を有する住居に居住した人々は司祭者的な性格を併せもつものであったとされている(6)。

近年では，縄文時代のベッド状遺構についてであるが，川崎純徳氏によって作業場としての使用が想定されている(7)。

以上のように，現在弥生時代以降のこの種の遺構については単に寝所とするものと，階級差に求めようとするものの2つの見解がある。現今では，どちらかというとこの後者の見解を採るものが多いように思われ，方形周溝墓と関連させる論議が盛んである。

しかしながら，仮りにベッド状遺構を有する住居に居住した人びとが方形周溝墓に埋葬されたものとしても，関東において方形周溝墓は1遺跡に複数検出されるのに対し，ベッド状遺構を有する

第1表　関東地方における五領期のベッド状遺構検出遺跡

No.	遺跡名	ベッド状遺構を有する住居址	文献
1	千葉県・我孫子中学校校庭遺跡	8軒中2軒	我孫子町教育委員会(1974)『我孫子古墳群』
2	〃・宮崎第1遺跡	6軒中1軒	千葉県都市公社(1973)『京葉』
3	〃・諏訪原遺跡	23軒中1軒	松戸市教育委員会(1974)『諏訪原遺跡』
4	埼玉県・下加南遺跡	7軒中1軒	『大宮市史』(1968)第1巻
5	〃・五領遺跡B区	22軒中1軒	『台地研究』(1963) 13
6	〃・上組遺跡	2軒中1軒	埼玉県教育委員会(1974)『南大塚・中組・上組・鶴ケ丘・花影』
7	〃・附川遺跡	5軒中1軒	〃 (1974)『田木山・弁天山・舞台・指ケ谷戸・附川』
8	〃・白幡本宿遺跡	4軒中1軒	〃 (1980)『白幡本宿遺跡』
9	茨城県・観音下遺跡	2軒中1軒	今回調査
10	〃・木滝台遺跡	25軒中1軒	鹿島町教育委員会(1978)『木滝台遺跡・桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』

住居址はすべての集落に認められるものでもなく，また，認められる場合でも1遺跡に1軒程度が一般である。このような状況を鑑みる時，数多く認められる方形周溝墓のいずれにベッド状遺構を有する住居に居住した人びとが葬られたものかという疑問が生じる。むしろ，方形周溝墓間の隔差といった問題を論じた後に考えられるべき事柄であろう。

また，熊野正也氏は，ベッド状遺構を有する住居址は集落内において中心的位置を占め，手づくね土器・土製丸玉等の祭祀用の遺物を出土する例が多いとされている。このことに関して，管見にのぼった五領期の10例の遺跡（第1表）において検討してみたい。

まず，熊野氏が祭祀用とされた手づくね土器・異形土器・土製丸玉の出土例をみると，僅かに千葉県我孫中学校校庭遺跡2・5号住居周から土製丸玉が，当観音下遺跡2号住居址から手づくね土器が出土しているに止まり，一般的なものとすることはできない。また，集落内に占める位置についても，必ずしも中心的な存在とは言い切れないようであり，例外が多い(8)。もちろん，ベッド状遺構は弥生時代から認められるものであり，五領期の例のみで検討を加えることには批判があろう。しかし，弥生時代においてベッド状遺構を有する住居に格差が認められるのであれば，古墳時代には，その格差がよりいっそう明確になるべきであろう。五領期の遺跡においてそのような事例がさほど認められないことは注目され，熊野氏が提唱されるような祭祀者の住居説にはやや疑問が残るとしなければなるまい。

ところで，田村晃一氏は昭和44年にベッド状遺構はまず住居の内部構造の変化という点に注目すべきであるとされ，安易に階級差と結びつけることに批判的な立場をとられている(9)。筆者は階級差と結びつけることを全く否定するものではないが，ベッド状遺構が屋内利用区分の一端を担っていたことは想像に難くなく，田村氏の言われるような観点もなおざりにしてはならないと思う。この点に関しては，ベッド状遺構を有する住居址と他の住居址との遺物出土状態を詳細に検討することが1つの手段と思われる。当遺跡の調査において土器の出土状態を記録したのもそのような問題意識においてであった。2号住居址においてはベッド状遺構上からはさほど土器は出土せず，炉の周囲に集中していた。いずれにしても，今後の資料の増加に待ちたい。

さらに，ベッド状遺構の設置方法に関しても若干の問題がある。ベッド状遺構の設置方法には，すでに北九州において「貼リ付ケ」と「削リ出シ」の2者があることが確認されている(10)。当遺跡2号住居址例はこの両者の中間的なものであるが，「貼リ付ケ部」は「削リ出シ部」に比して「しまり」がなかった。また，ベッド状遺構一般についても「貼リ付ケ」は「削リ出シ」に比して「しまり」がないようである。このことは，田村氏がベッド状遺構を寝所とした際，「しまり」のなさを1つの証左としたことを想起するなら，重要な意味を有しているように思われる。今後，とくに「削リ出シ」のベッド状遺構と床面の硬度の比較といった点が問題となろう。

住居址出土土器について

前述のように住居址内より出土した土器は少量であるが，2号住居址出土の土器は一応の組成を

示している。そこで，以下に2号住居址出土の土器の編年的位置づけを行なってみたい。

さて，2号住居址の土器には壺・甕・小型坩・坩・手づくね土器，それに支脚形土製品等があり，数量的には甕が多い。形態上「折り返し手法」の複合口縁の壺の存在，甕の多くが平底であること，小型坩の1つに退化傾向が窺えること等が特徴とされる。器種の組成においては小型器台が認められず，代って支脚形土製品が出土していることが注目される。調整は刷毛目整形が顕著であるが，全体的にかるく施し，ヘラミガキが認められるものも多い。

以上のような特徴の内で注目されるのは小型器台が認められない点であろう。この小型器台が五領期の新しい段階に至って消滅することは南関東において指摘されている(11)。もちろん，1軒の住居址例のみで断定するわけにはいかないが，「折り返し手法」の複合口縁の壺や甕の平底化等の特徴はかなり新しい傾向を示していると考えられ，やはり，小型器台が消滅する時期のものとすることができよう。

また，脚支形土製品の類例は，千葉県我孫子中学校校庭遺跡(12) 1号住居址例等が挙げられる。我孫子中学校校庭遺跡1号住居址からは支脚形土製品の外，「折り返し手法」の複合口縁の壺・平底の甕・高坏・小型坩・埦・手づくね土器等が出土しており，これらの土器群には当遺跡例とほぼ同一型式に属すると思われる特徴が認められる。この我孫子中学校校庭遺跡1号住居址出土の土器群の編年的位置は松浦宥一郎氏(13)，滝沢亮氏(14)らによって五領Ⅲ式に属するとされている。

以上のような事柄を総合するなら，当遺跡出土土器群の編年的位置を，五領Ⅲ式に比定することに，さしたる躊躇はいるまい。近接する桜塚古墳の墳頂から出土した小型坩形土器は，当遺跡例に僅かに先行するものではあるが，当遺跡に居住した人々が桜塚古墳の被葬者のもとにあった地域集団の一部を成していたと考えることは許されるであろう。

窯址について

第1トレンチにおいては本窯址のほかに窯址と考えられる遺構は検出されず，単独で存在した可能性が高い。したがって本窯址は専業集団が周辺に設けられた住居，工房に起居して生産にあたった性格のものではなかろう。

本窯址は規模の小さい楕円形の焼成部を有するほかに，いくつかの特徴を指摘できる。まず焚き口がしぼられ，むし焼きに適する構造をとること，前庭部に炭化物の出土をみること，そして煙道が窯体より外側に突出させて設けられ，青灰色粘土で補強されていることなどである。

こうした属性は東京都・栗木Ⅱ遺跡で検出された第2号窯址(15) にもよく認められるところであり，おそらく炭焼窯として機能したものと考えられる。

そしてその時期は，下部焼土層から出土した内耳土鍋がひとつの手がかりとなろう。これは内耳土鍋といっても体部に屈曲がなく，浅い「ほうろく」である。中村倉司氏はほうろくの変遷を5段階に区分し，第Ⅳ段階をほうろくが定型化する段階と考え，Ⅳ→Ⅴ段階への変化は「内耳の下端が直接底部に付くようになり，器高も極端に低くなる」としており(16)，5はこの第Ⅴ段階に位置付

けられるものである。そしてその年代は，適確におさえることができず，とりあえずの目安としながらも，第Ⅴ段階を17世紀以降としている。したがって，本遺跡の窯址自体，近世―江戸時代以降にまで時期の下るものであるといえよう。　（松尾昌彦・設楽博己）

註

(1) 早稲田大学考古学研究室（1955）『道灌山遺跡』荒川区役所
(2) 吉田章一部・田村晃一（1962）「千葉県我孫子町中学校校庭遺跡の調査」『考古学雑誌』47―1
(3) 和島誠一・田中義昭（1966）「住居と集落」『日本の考古学Ⅲ』
木下　忠（1966）「弥生時代における農業生産集落の構造」『歴史教育』14―3
(4) 和島誠一・金井塚良一（1966）「集落と共同体」『日本の考古学Ⅴ』
(5) 沢田大多郎（1967）「古墳発生前における社会」『考古学研究』14―1
(6) 熊野正也（1974）「弥生時代集落構造の一考察―ベッド状遺構をもつ住居址を中心として―」『史館』2
河野真知郎（1975）「初期農耕集落の解明―ベッド状遺構の再検討―」"Circum Pacific" 1
(7) 川崎純徳（1981）「いわゆる「ベッド状遺構」の諸問題」『常総台地』12
(8) 埼玉県下加南遺跡・上組遺跡・附川遺跡等がそれであり，ベッド状遺構を有する住居址の立地に特異な点は認められない
(9) 田村晃一（1974）「我孫子中学校校庭遺跡」『我孫子古墳群』我孫子町教育委員会
(10) 関晴彦（1977）「住居跡の構造」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告―XIX―』福岡県教育委員会
(11) 肥留間博他（1969）『船田Ⅰ』八王子市教育委員会
上野純司（1966）「南関東における古式土師式土器編年試論」『史館』9
国平健三・滝沢亮（1981）「神奈川県」『日本考古学協会昭和56年度大会・大会資料』
(12) 註9に同じ
(13) 松浦宥一郎（1972）「土師器」『外原』船橋市教育委員会，昭和47年
(14) 滝沢亮（1981）「南関東における古式土師器の様相―主に太平洋沿岸地域について―」『物質文化』36，なお，氏は我孫子中学校校庭遺跡1号住居址例を五領Ⅲ期の新段階に位置づけられている
(15) 岩崎卓也（1977）「栗木Ⅰ・Ⅱ遺跡」『多摩』多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘調査委員会
(16) 中村倉司（1979）「内耳土器の編年とその問題」土曜考古　創刊号

4. 土塔山古墳

a. 古墳の立地と環境

土塔山古墳は，桜川左岸の独立丘頂，行政区画では筑波町漆所字大塚に所在する。この丘陵が「土塔山」と呼ばれているところから，これまで無名であった本古墳[1]の名を，このように命名したのである。もっとも土塔山は独立丘とはいえ，実は日向廃寺を南裾に持つ城山と，標高30mほどの鞍部で結ばれているから，城山の一支丘とぶ方がよいのかもしれない。測量の結果，墳頂部の標高は59.95mを数えたから，脚下北方にひろがる水田（「神郡条里跡」と[2]の比高は，およそ40mとなる。

本古墳は，この小さな土塔山頂の北端に位置するが，この丘頂の南部には径10mほどの円墳が一基，またそこから東南方，斜面を少し降ったところには箱式石棺が露呈している。さらに土塔山の東麓，東京キャビネット工場前には，全長30～40mの前方後円墳状の古墳があるが，付近の人の話によれば，丘陵南裾からここまでの間に，さらに2，3基の円墳があったという。「朝日さし夕日輝く…」の伝承で知られる満面塚古墳もその一つであろう。漆所のこれら古墳群を一括して大塚古墳群と呼ぶのである。（第16図）

b. 墳　　丘

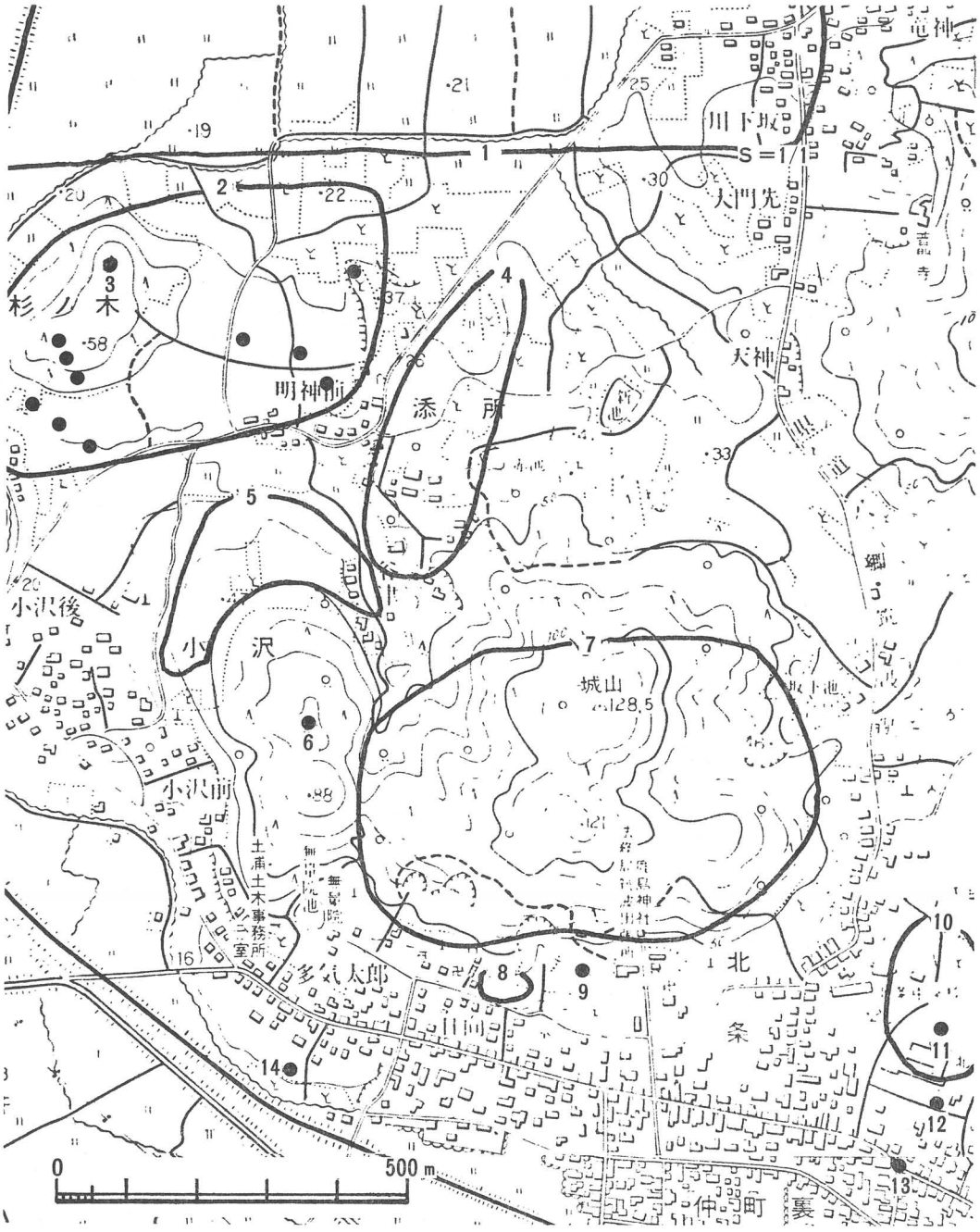
いま，土塔山古墳は赤松を主体とする雑木林に覆われ，前方部前面は桑畑となっている。その桑畑によって，前方部の一部が削りとられているほかは，よく原型を保っている。

つぎに，実測図（第17図）を参照しながら墳丘の形状をたどってみよう。

図を一見してわかるように，本古墳は主軸を N13°E にとり，南面する前方部を有する前方後円墳である。前方部は，その前端が比較的平坦な尾根に続くばかりでなく，その側面もまた傾斜変換線が明瞭であるため，裾線をたどりやすい。それによれば，その南端すなわち前方部前面は桑畑によって一部削られてはいるが，コーナーの部分はともかく，中軸線付近の前縁は，削平部にみる崖下端線付近とみて大過なさそうである。

西側は，標高56.25mと56.00mの等高線の間隔が最も広く，56.00m以下は急斜面となっている。まわりこみを示す56.25mの等高線付近を墳裾とみてよいだろう。東側縁は，標高57.00mと56.00mの間の等高線が密であり，それ以下が緩傾斜となる。いま傾斜変換線を探ると，前端部コーナー付近で56.00m，中ほどが56.50m，くびれ部よりで56.25mとなっている。当初この部分は後世の変形によるものと考えたが，それを全く否定するわけにはいかないにしても，この傾斜変換線をもって古墳の裾線と見ることも可能なように思える。

くびれ部には，軸線と直交する崖線がみられるが，これを後世の作為とする意見は，一応斥けておく。そうすれば，西側では標高56.00mから57.00mにいたる等高線が，その上下と比べて密で，



第16図　土塔山古墳・日向廃寺付近地形図

1.神郡条里跡　2.大塚古墳群　3.土塔山古墳　4.添所姫の宮遺跡(土師・須恵)，漆所遺跡(縄文)　5.散布地(縄文・弥生・土師)
6.無名古墳　7.多気城跡　8.日向廃寺　9.御陣屋遺跡(土師)　10.北条城跡　11.北条小学校遺跡(縄文・土師・古墳)
12.久保山稲荷古墳　13.北条遺跡　14.北条五輪塔

第17図　土塔山古墳墳丘測量図

墳丘斜面を思わせる。よって標高56.00mの等高線を墳裾としよう。東側には，明瞭な傾斜変換線がみられないから，肉眼観察による裾部の決定は難かしい。

後円部は，そのまま降って自然の丘腹につらなっているため，古墳の裾線をたどることは難かしい。そこで，前方部の裾がほぼ水平につくられているらしいことを念頭におき，標高56.25mの等高線のあたりを裾線としておこう。こうすると，後円部の平面形も左右対称となるのも妥当性を裏づけるかのようである。

こうして定めた裾線をもとに，古墳の全容を復原すると，全長61.3m，後円部の南北径30m，東西径27.7m，高さ3.7m，前方部長31.3m，幅27.8m，高さ2.13m，後円部との比高1.57mの規模ということになる。

墳丘をもう少し詳しく見ると，まず前方部平面形の異様さに気づく。すなわち，前方部幅が最も狭くなるのはくびれ部ではなく，やや南に下がった所である。そこから前方部端に向かって開くため，その平面の形状は撥形を呈する。この傾向は東裾でとくに著しい。

くびれ部の裾線は，前方部のそれとほぼ直角に交わる（とくに西側標高57.00m付近の等高線で顕著である）が，稜をつくらないまま後円部に続いている。

後円部は主軸方向に長い楕円形で，墳頂に近づくにつれ角ばって長方形に近い平面形となる。そのため，古墳の形態を前方後円墳とも前方後方墳とも判断しがたくさえなるのである。後円部頂やや南に寄って，盗掘坑かと思われる痕跡がある。

この墳形の特質は，立地上の制約によるものと思われる。換言すれば自然地形の利用によると考えられるのである。発掘を経てないので，どのような構築法をとったか判らないが，後円部は自然地形そのままに近く，前方部もまた東裾部を除けば，自然地形とよく合致している。自然地形を大幅に利用した古墳といえるだろう。

墳丘には葺石・埴輪等は見当らなかったが，後円部頂には人頭大ほどの礫の上面が露出している。それらは間隔こそ疎であるが，墳形にあわせて長方形状を呈していることは興味深い。

本古墳の年代を決める手がかりは乏しい。前方部の平面形が撥形に近いこと，また前方後方墳である疑いを残している点を強調すれば，この古墳の年代を古く考えることもできよう。しかし，前方部の長さが後円部径と一致する点は，むしろ6：3：3の「仁徳陵」古墳のそれに近い。いまは後者の特色を重視して，5世紀後半の築造と考えておきたい。　（北内三喜男）

註

(1) 茨城県『茨城県遺跡地名表』(1977) の遺跡番号2145「大塚山古墳」が本古墳にあたると思われるが.茨城県教育庁社会教育課『茨城県古墳総覧』（1959）では，大塚山古墳は「円墳・径33m，高5m」とあり，前方部の付く土塔山古墳とは相違する。後円（方）部のみをみれば，ほぼ同大であるから，円墳と誤認されてきたのであろう。

(2) 註1文献に同じ。

5. 甲 山 古 墳

a. 立地と墳丘

甲山古墳は筑波町北条2309ほかに所在し，井上とよ子・野村芳雄両氏の所有地内にある。

本墳は小田山（標高461m）から西方にのびる支稜線の先端部に位置する。筑波山を北方にのぞみ，西方は桜川が貫流する田園地帯を見渡す展望のきく地形である。この支稜線を中心に付近一帯を小和田古墳群と称される小古墳群が存在し，本墳もそのうちの1基である。かつては10基を上まわったと推測される古墳群であるが，現在では背後の山林中に3基の小塚を確認するにとどまる。

なお，本古墳が立地する一帯は，古墳時代前期五領式期ならびに，平安時代のムラ跡でもある。

本墳の墳丘は耕作や開発工事等により著しく変じ，墳裾部西半分は直下に約7mほど削断されている。東半分は平坦な畑地であるため地表面起伏から本墳を巡る周湟の有無は観察されなかった。しかし，西側の削断された露出土層面には埴輪小片を含む黒褐色土層からなるU字形の掘込み断面が認められた。

発掘調査にさきだち，昭和56年3月3日より5日にかけて墳丘測量と周辺の地形測量が実施された。その結果，墳丘部は標高約30mに形成されており，現地表面より約2.8m高い小山である。墳頂部はほぼ平坦で約8.2×8.5mであり，墳裾部は約17×14mを測った。ひきつづき同月6日より28日にかけて発掘調査が行なわれた。調査は削断面露出土層で観察された掘込みを周湟断面と想定して，墳頂部より幅2mのトレンチを4本，同時に墳頂部では2m方眼のグリッドを設定し主体部の確認につとめた。

周湟は墳丘部を中心にめぐり，削断面に露出する掘込みにつながる。周湟底より墳頂までの現高は第1トレンチで4mを測り，肩幅約6m，底部幅約3.5mの規模をもつ断面U字形の周湟であることが判明した。周湟内埋土からは若干の埴輪小片，須恵器片，そして須恵器片と共伴して鉄滓，羽口等たたらと関連する遺物の出土をみた。

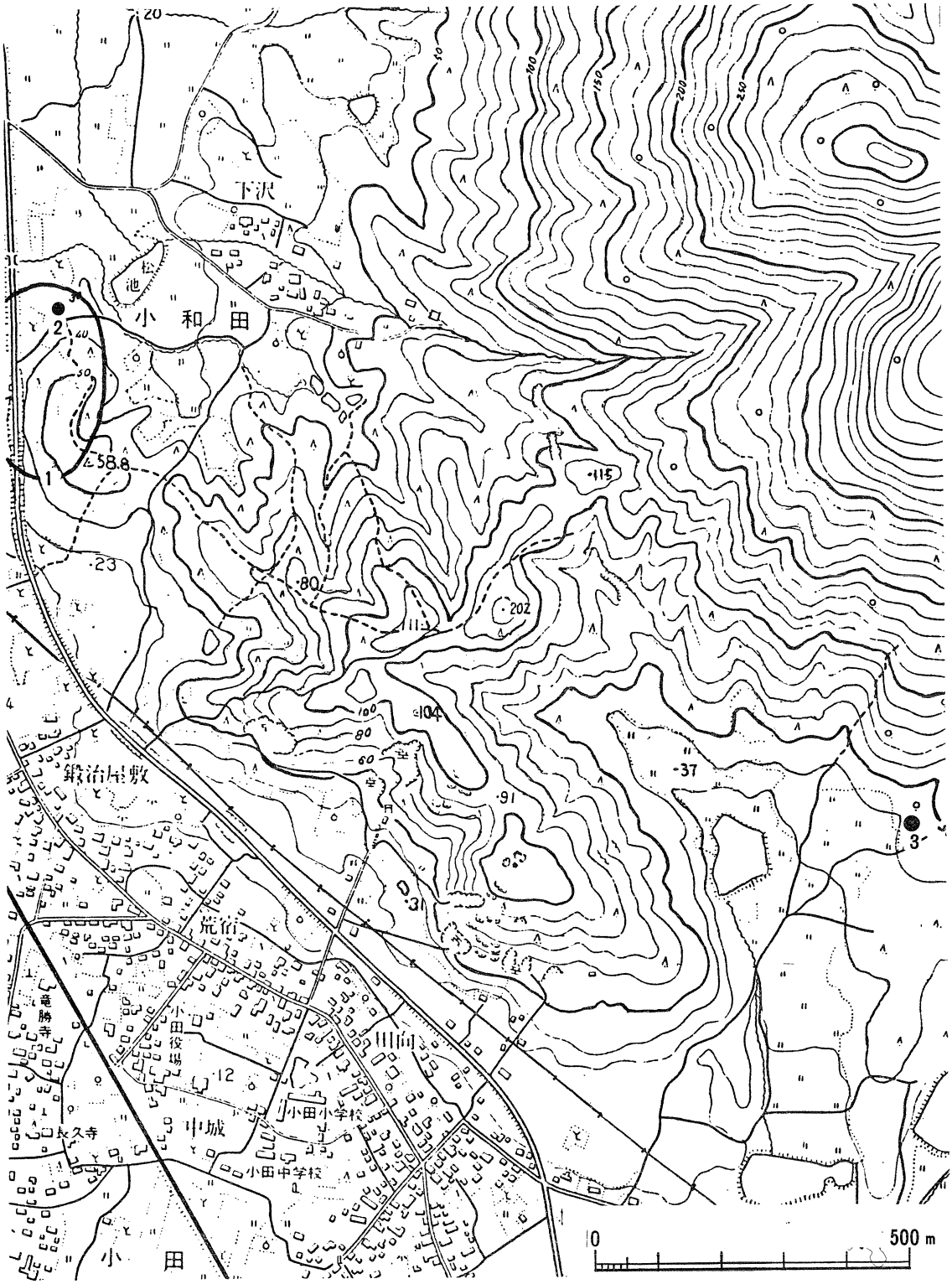
墳丘は暗褐色土層を最下層として，その上に粘土混りの褐色土を主体とした盛土が複雑な層序をなしていることから，本墳は旧地表面上に築造されたと考えられる。

b. 主 体 部

墳頂部において現地表面下約50cmの同一レベル面から2基の箱式石棺が検出された。石棺がL字形に配列されていることと，2号棺では出土人骨が頭位を違えて埋葬された3体合葬であることが特記すべき点である。

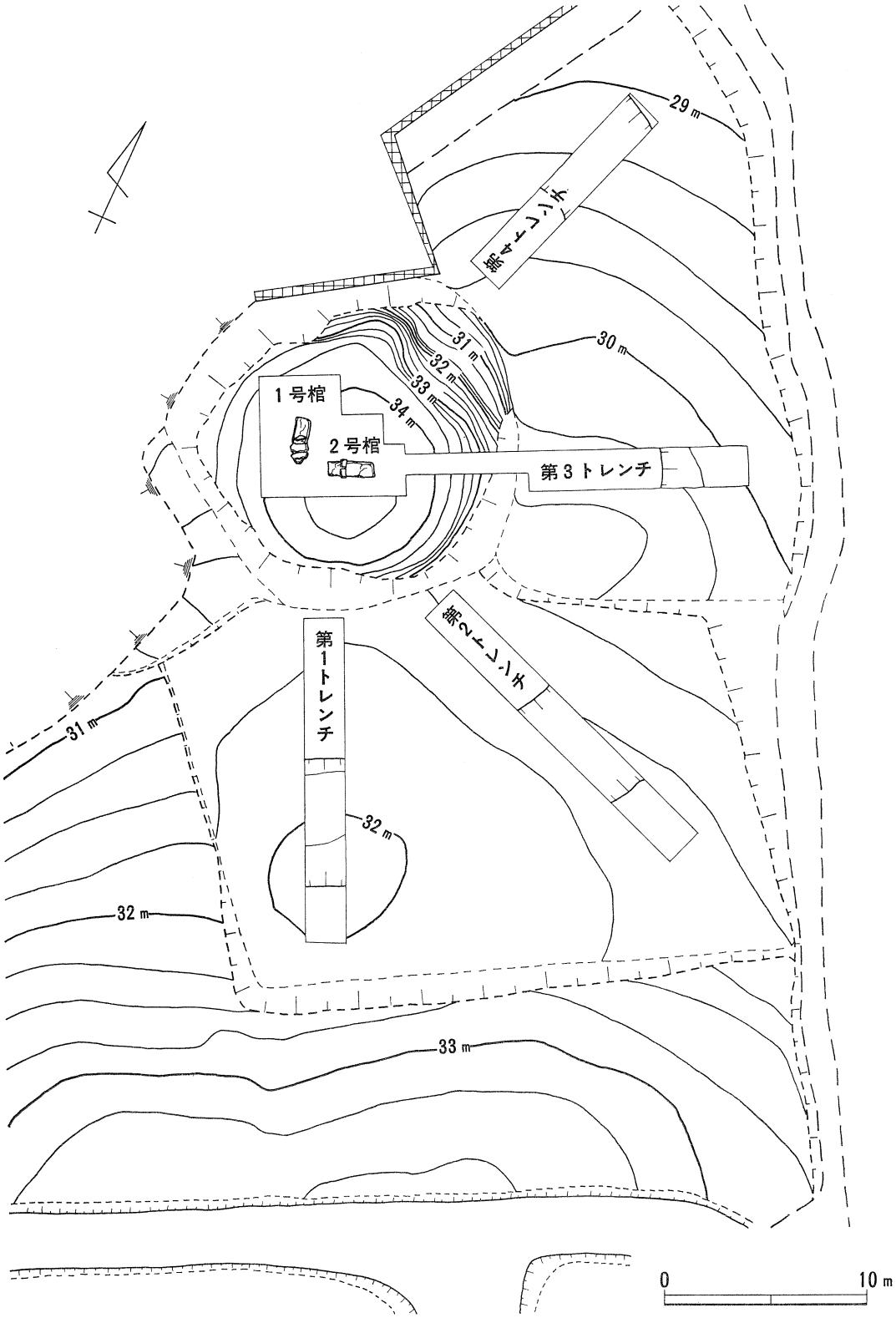
1号棺（第20図，図版17）

主軸方位はN16°Wである。石棺をかろうじて収納できる小規模な墓壙を有し，長軸約2.35m，短軸約1.1mを測る。石棺内法は全長1.95m，頭部幅0.53m，脚部幅0.43mである。石棺構造はま

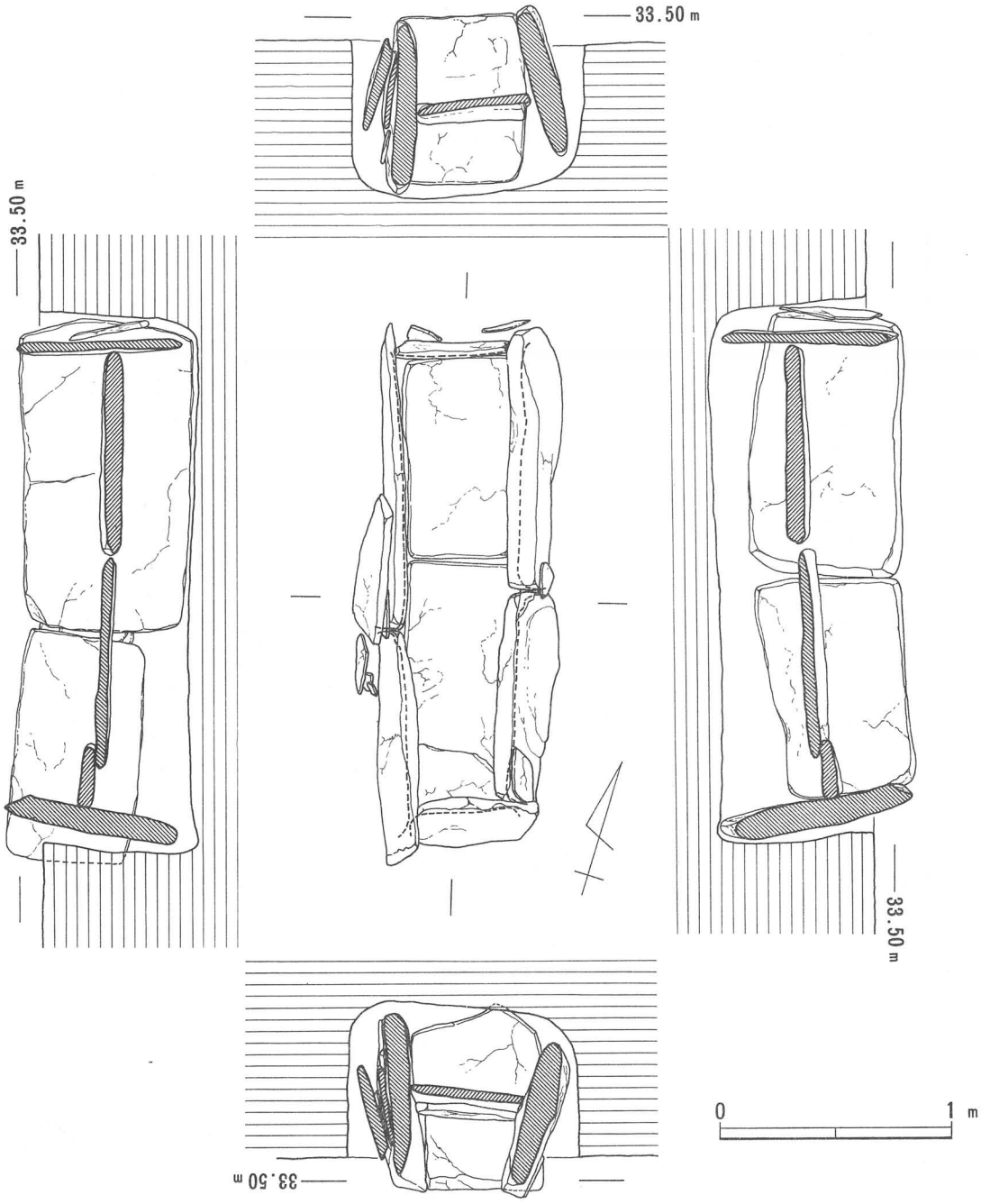


第18図　甲山古墳付近地形図

1.小和田古墳群　2.甲山古墳　3.小田山麓所在五輪塔

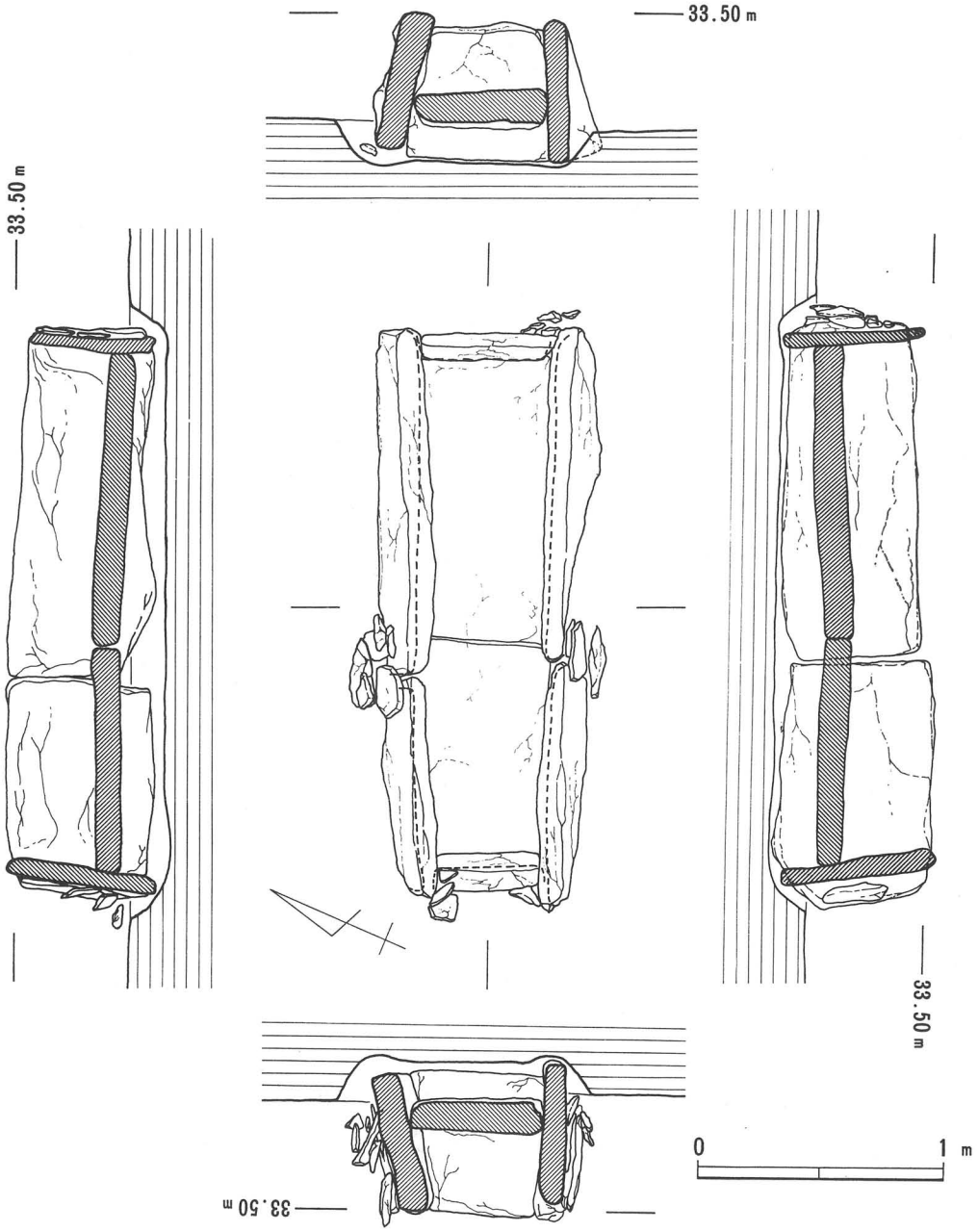


第19図　甲山古墳墳丘測量図



第20図　1 号 棺 実 測 図

ず蓋石が５枚，両側石が各２枚，頭部および脚部小口板が１枚ずつ，そして底石は３枚からなっている。なお石棺内面は赤彩されており，鋒を南に向けた直刀と頭蓋骨の一部など若干の人骨片が残存していた。北枕埋葬である。



第21図　　2 号 棺 実 測 図

2号棺（第21図，図版17）

主軸方位はN67°Eである。墓拡は大型楕円形で長軸約3.8m，短軸約3.5mを測る。石棺内法は全長2.1m，頭部幅0.52m，脚部幅0.42mである。3枚の蓋石をもち両側石は各2枚，頭部および

脚部小口板は1枚ずつであって底石は2枚よりなる。石棺内面には1号棺と同様，赤彩が施されていた。本棺内の埋葬人骨はそれぞれ東側と西側に頭位方向を示した状態で3体分確認された。そのうち1体は頭蓋骨と下顎骨の一部，脊椎骨等骨片であり，他1体では頭蓋骨の一部が残存していたが詳細は鑑定結果をまたねばならない。

c. 出 土 遺 物

1号棺内遺物（図版19—5・6）

鉄製直刀2本が棺西側石がわに並置した状態で検出された。両者とも平造りの直刀である。6は全長109㎝，身幅3.5㎝，棟幅0.9㎝。関は刃部側にあり，幅1.2㎝のコ字型抉入をもつ。茎長21㎝で，径0.4㎝の目釘穴が2個あく。5は全長103㎝，身幅4㎝，棟幅1㎝であり，刀身部分には鞘木の木質が残る。刃部側片関をもつ。茎は長さ18.5㎝を測り，全体に銹着がひどく，そのため目釘穴等は肉眼では観察できない。

2号棺内遺物（図版18，19—1～4）

本棺は3体合葬棺であるため，出土遺物をどちらの埋葬に帰属すべきかは重要な問題であるが，目下整理中でもあり断定はさけたい。まず直刀は，南側石がわに2本ずつ鋒を向き合せにした状態で，合計4本が床石上より検出された。鉄鏃は東枕頭骨の左横に1束，中央部に1束，そして西枕頭骨の右横に1束，合計3束を床石上より検出した。前2者は鏃頭を東にとり，後者は西側に向けている。なお，中央部から平根鏃が1本出土した。また西枕頭骨左側に刀子1本が検出された。装身具としてガラス小玉，ガラス勾玉，滑石製臼玉が出土したが，臼玉を除けばすべて東枕頭骨周辺部からの出土である。その他青銅製鋲金具が，東枕頭骨と小口板との中間部から出土した。

直刀（図版19—1～4）　4本とも平造りである。1は全長52.3㎝，身幅2.8㎝，棟幅0.8㎝，茎長11㎝，茎幅2.0㎝，茎厚0.8㎝。他3本に比べ小ぶりである。刃部側片関であり径0.4㎝の目釘穴を2個もつ。2は全長91.8㎝，身幅3.3㎝，棟幅0.8㎝，茎長約18.5㎝，茎幅2.1㎝，茎厚0.8㎝。茎尻は欠損しているが尖茎尻である。刃部側に関がついており内側に径0.3㎝の刀関孔があく。また径0.3㎝の目釘穴が2個あくが他一穴は銹着のため確認できない。3は全長100㎝，身幅3.5㎝，棟幅0.8㎝，茎長19.5㎝，茎幅0.7㎝である。関は刃部側にあり，径0.4㎝の刃関孔があく。また2個の目釘穴が確認できるが，銹着のため貫通してはいない。4は全長101㎝，身幅3.4㎝，棟幅0.9㎝，茎長17.8㎝，茎幅2.3㎝，茎厚0.8㎝。刃部側片関を有し，茎には径0.4㎝を測る目釘穴3個があく。なお，いずれの直刀にも鞘尻金具，鞘口金具，鍔等の装具は検出されなかった。

鉄鏃（図版18—4）　完全に銹着するものが多数あるが，概数120本をかぞえ，大きく尖根鏃と平根鏃に分けられる。尖根鏃には鏃身が柳葉形のものと，片刃のもの，そして逆刺のついたものが主体であり，いずれも篦被をもつ長頸鏃である。もっとも長い鏃身で3.5㎝，短いもので2.5㎝を計測するが銹着がひどく鏃身断面を明瞭に提示しえるものは少ない。篦被の断面はすべて方形で，茎は円形を呈するものがほとんどである。

平根鏃は数量的には極少である。まず，無茎で逆刺のある平根鏃が２種ある。ひとつは鏃身が大きく，身の長さ約6.1㎝，身幅約3.6㎝，厚さ0.3㎝であり，他は身の長さ4.2㎝，身幅1.9㎝，厚さ0.3㎝を測る。有茎の平根鏃が３本検出された。うち２本は外反する逆刺をもち，長さ4.2.㎝，身幅1.5㎝を測る。他１本は，身半分が欠損しているが内反する逆刺をもち推定鏃身長約3.7㎝，身幅1.5㎝である。

刀子（図版18―5）　全長14.7㎝，刃部長9.1㎝，関部幅1.7㎝，棟幅0.4㎝を測る鹿角装刀子である。刃部は研ぎ減りがみられるため判然としないが，柄ごしらえから推測して両関造りと思われる。

ガラス小玉（図版18―1）　２個分の残欠片を含めて45個が検出された。大別して２種類があげられる。１は濃紺色を呈し，平均径0.33㎝，平均厚0.22㎝の小玉を主とする。２は青緑色を呈し５個を数える。大きさは平均径0.37㎝，平均厚0.22㎝を測り，１と比較してひとまわり大きい。成形は１よりも丁寧であり，光沢をもつ小玉である。

ガラス勾玉（図版18―2）　濃紺色を呈するものが８個，薄緑色を呈するものが１個で，合計９個検出された。両者とも長さ1.2㎝から1.6㎝，幅0.7㎝から0.9㎝までのもので小形勾玉の部類に入ろう。脚部を欠損するものが１個あるが保存状態は概して良好である。前者は風化度が少ないうえ，透明度が良いため微小ではあるが表面および内部に気泡が観察される。穿孔は直であるため穿孔方向は不明。後者は長さ1.2㎝，幅0.8㎝，厚さ0.4㎝を測る不透明な勾玉である。前者よりも小形であり，成形，穿孔は非常に丁寧である。

滑石製臼玉　灰白色を呈する滑石製臼玉２個を検出した。１は径0.6㎝，厚さ0.3㎝，孔径0.2㎝である。２は径0.6㎝，厚さ0.4㎝，孔径0.2㎝を測る。

青銅製鋲金具（図版18―3）　針部が欠損した状態で合計６本を検出した。頭部は丸味をもった円形で径0.7㎝，針部は径0.15㎝を測るため，すべて同一規格と思われる。なお，針部はどれも根元近くから曲っており，恐らく何かに具したものであろう。

d. ま と め

本墳が小和田古墳群の主墳格的存在であったことは想像にかたくない。しかし十分に原形をとどめていないため本墳がはたして前方後円墳か，円墳なのかを判断するには現時点では資料不足といわざるを得ない。しかし，本調査によって下記の興味深い事実が判明した。

1. 本古墳は直径30ｍの円丘をもつ。
2. 主体部箱式石棺がＬ字形に２基配列されている。
3. ２号棺の被葬者は同一石棺内に頭部方位を相違えて埋葬されている２体と，幼児を含む３体合葬である。
4. 同墳内埋土からは小片をのぞいて，埴輪が出土しない。
5. まとまった数の小形ガラス勾玉が検出された。

現在，整理の途上にあるため，本墳の築造年代を速断するのはさけたいが，主体部石棺がＬ字形

に配置された代表的な例として埼玉県荷稲山古墳，兵庫県周遍寺古墳などがあり，本墳との比較考察する必要があろう。また，遺物で留意しなければならないのは，小形ガラス勾玉である。どこまでを小形と規定するのか，その尺度はないが，一応ここでは2㎝以内とするならば，関東地方で同類勾玉が出土した例はあまりなく，今のところ神奈川県日吉矢上古墳，群馬県恵下古墳，そして埼玉県冑塚古墳などがあげられるにすぎない。なかでも日吉矢上古墳からは長さ1.19㎝から1.45㎝のものが5個出土し，透明度も良好とされている。また恵下古墳では大形のもの1個をまじえ，実測値1.29㎝から1.61㎝を測る勾玉が14個出土している。色調統一がなされていないため両者の色調差は判断できないが，いずれも紺紫系統である。

上記指摘要件を入念に検討を加えなければならないが，そうした経過をふまえることによって今後，甲山古墳のみならず，筑波地域の歴史的様相が次第に明らかになるであろう。

なお，出土人骨については，目下聖マリアンナ医科大学森本岩太郎教授のもとで調査進行中で，公表できる段階には到達していない。このたびは同教授の御配慮により，とくに性別・年令の概略だけを収録させていただくことにした。それによれば，1号棺被葬者は熟年女性，2号棺のそれは熟年男性，壮年女性，幼児であろうとのことである。（小瀬康行）

参照文献

斎藤　忠・柳田敏司ほか（1980）『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
西岡秀雄・清水潤三（1943）『日吉矢上古墳』三田史学会
小野山節・本村豪章（1980）「上毛野・伊勢崎市恵下古墳出土のガラス玉と須恵器と馬具」『ミューゼアム』357
金井塚良一（1964）『冑塚古墳』東松山市文化財調査報告　第3集　東松山市教育委員会

6. 菅間大塚山古墳

a. 古墳の立地と環境

菅間大塚山古墳は，筑波町洞下117番に所在し，茨城県第57番に登録されている前方後円墳である。桜川は岩瀬町に源を発し，筑波山西麓をう廻し霞ケ浦に流入する河川であるが，本墳はその右岸に形成された海抜約30mの台地縁辺上に築造されている。筑波山麓から南下する桜川右岸には，およそ1.5kmの幅で水田地帯が広がるため，本墳からの見晴しはよく，筑波山全容を東北位に仰見することができる。なお，この微高地の南方延長線上に本報告書所収の観音下遺跡，桜塚古墳が存在するのである。

b. 墳　丘

本墳周辺をはじめとして，微高地周縁部では造林が行われているが，その内側は一面に芝畑地として利用されている。また，前方部より北西へ9.5mのところから下降傾斜がはじまり，そのまま比高10mで水田に至る。後円部の南部には舗装農道が洞下の部落からのびており，本墳の傍らで分岐する。一方は周縁部に沿い，他方は水田西に下る道である。この農道によって，後円部の裾が若干削取されてはいるが，現状からみて，それ以外に後世の人為的な作用によって本墳の原形が大きく損なわれたと思われる形跡は見出せない。

後円部墳頂部は非常に狭小で，わずか1×1mほどのの平坦面を有するにすぎない。便宜上，この平坦面と前方部中心点を結んだ線を主軸とするならば，その方位はN74°Eを示す。墳丘の南側面は，等高線の間隔が北側面にくらべて不均一であり，しかも粗であることから何らかの理由で原形を損ったと思われる。

北側面では，31.00mの等高線を境界にして平坦面に移行することを考えれば，本古墳の裾線をこの標高とみなしてまず差支えない。したがって，31.00mの等高線をとらえて主軸長を計測するならば，本墳全長は30.00mである。後円部墳頂での標高は34.59mを測るため平坦面からの比高は3.60mである。さらに，後円部がほぼ同心円状のプランを呈することを加味するならば，主軸に直交した径は，16.4mを測りうる。

前方部は等高線から判断しても変形を蒙むっていないと思われるのだが，実測結果によれば楕円形を示すと言わざるをえない。稜線はまったく認められず，その上前縁部は大きく弧を描く。そのため明確な前方部前縁幅は計測できないが，31.00mの墳裾における楕円長軸を測るならば13.50mである。

主軸上の前方部墳頂での標高は32.36m，鞍部では31.71mを測る。したがって，鞍部と前方部との比高が0.65m，後円部との比高が2.88mと計測され，前方部は後円部よりおよそ2.23m低く，高低差は大きい。

第22図　菅間大塚山古墳墳丘測量図

第23図　菅間大塚山古墳付近地形図

1.菅間大塚山古墳　2.福王地西方A・B遺跡

c. まとめ

林中にあったこともあり，菅間大塚山古墳の正確な墳形が把握されていなかったが，今回の調査によって得られた事実は少なくない。従来より，本墳は前方後円墳とみなされているが，このたびの調査の結果をふまえたうえで，多少検討し直す必要があるかもしれない。なお，本墳周辺からは何ら遺物は採集されなかった。　（小瀬康行）

7. 根 本 古 墳

a　発掘調査の経緯

発掘調査は1979年４月25日から５月13日までの19日間にわたって実施されたが，実質の調査期間は16日間であった。

発掘調査にあたってはグリッド方式を採用し，４ｍ×４ｍを１グリッドとして東西を１，２，３……，南北をＡ，Ｂ，Ｃ……と呼称することとした（第25図）。

４月25日，発掘用具，測量機材を搬入。グリッド設定作業を行い，地形測量を開始した。３区以東は重機により削平され，地山面が露出している部分が大半であり，Ｅ３区，Ｆ２区のカッティングには明らかに古墳の周溝と考えられる落ち込みが確認されていたため，Ｅ，Ｆ区を中心に清掃を行い，周溝の検出作業を行った。

５月１日，ほぼこの頃までにＡ３・Ｂ４区，Ｆ２区，Ｅ５区を中心にそれぞれ周溝が検出され，また地形測量，墳丘カッティングの土層断面実測も終了した。

５月６日にはＦ５区において周溝を追求した際に，それとは別個に，時期のさかのぼる溝状遺構が確認された。そしてＥ３区のカッティングに認められた黒色土の落ち込みもこの溝状遺構に連続する疑いがもたれ，発掘の結果，ほぼそのことは確かめられ，発掘区範囲境界線の付近で，古墳の周溝との切り合い関係も把握することができた。

５日13日までにこれら古墳周溝および溝状遺構の発掘と写真撮影・図面作成をすべて完了し，機材の撤収を行って発掘調査を終了したのである。

b.　遺 跡 の 概 観

遺跡の位置と自然環境

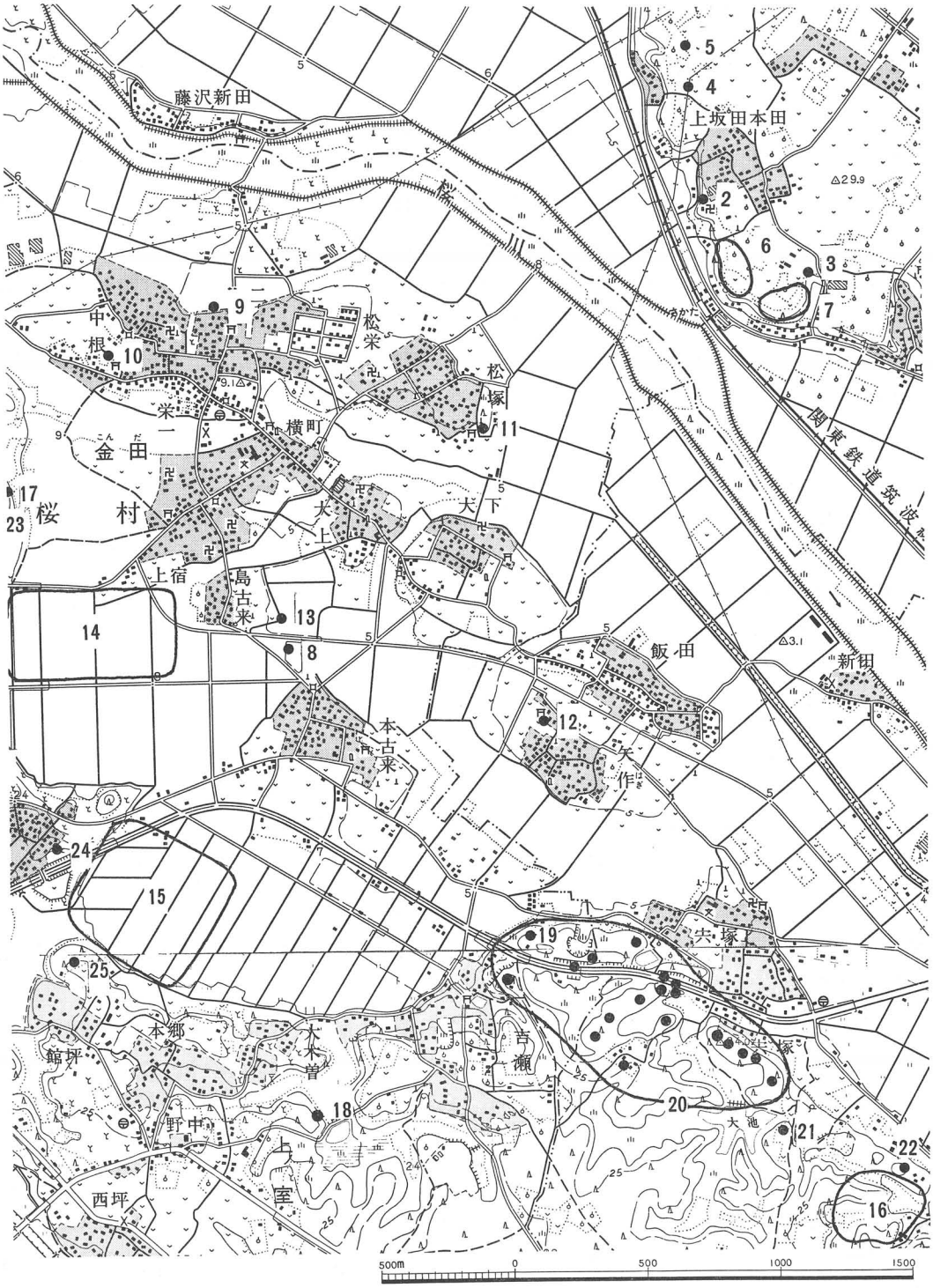
根本古墳は，土浦市宍塚町向山に所在する。

土浦市は地形的に大きく三つに区分することができる。筑波山の東方に延びる北部の台地は新治台地と呼称され，南部の台地は筑波稲敷台地と呼ばれている。そして，この二つの台地は桜川による沖積低地によって区分されているのである。

新治台地は海抜25ないし27ｍ，筑波稲敷台地は24～25ｍを測る。桜川は鬼怒川の支流であり，西茨城郡岩瀬町の鏡池に源を発し，筑波山を南に迂回し，霞ケ浦に注ぎ込む。中流部で自然堤防を形成し，筑波町などの下流域では蛇行流路となり，約３㎞の幅をもつ低地帯は水田として利用されている。デルタを形成する河口付近は土浦市街地となっている。

花室川低地によって，南北に二分された筑波稲敷台地の縁辺部は，新治台地とは対照的に溺れ谷による入り組んだきわめて複雑な地形を呈しており，いくつかの独立小丘が形成されている。

根本古墳は桜川低地に舌状に張り出した筑波稲敷台地の突端部に立地し，背後には溜池である大



第24図　根本古墳と周辺遺跡分布図

第2表　根本遺跡とその周辺遺跡

番号	名　称	所　在　地	立　地	時　代	種別	備　考
1	上坂田北部貝塚	新治郡新治村上坂田権現山	新治台地	縄文	貝塚	前期
2	上坂田寺裏貝塚	〃　〃　上坂田峯	〃	〃	〃	〃
3	下坂田貝塚	〃　〃　下坂田中内	〃	〃	〃	加曽利B～安行3a式
4	上坂田遺跡	〃　〃　上坂田塚原	〃	弥生・古墳	散布地	
5	塚原古墳	〃　〃　上坂田塚原	〃	〃	墳墓	
6	上坂田古墳群	〃　〃　上坂田峯	〃	〃	〃	円墳5，埴輪
7	下坂田古墳群	〃　〃　下坂田塙台	〃	〃	〃	
8	古来遺跡	〃　桜村古来寺山	自然堤防上	〃	散布地	土師器，須恵器
9	土器屋遺跡	〃　〃　栄土器屋	〃	古墳	〃	〃
10	とりおい塚古墳	〃　〃　中根宮の前	〃	〃	墳墓	円墳，箱式石棺，直刀，鉄鏃
11	松塚古墳群	〃　〃　松塚	〃	〃	〃	前方後円墳1，円墳1
12	矢作稲荷神社古墳	土浦市矢作町	〃	〃	〃	
13	古来館址	新治郡桜村古来館山	〃	歴史	城館址	
14	本田遺跡	〃　〃　西坪本田	沖積地	〃	条里	
15	上ノ室遺跡	〃　〃　上ノ室池ノ下	〃	〃	〃	
16	上高津貝塚	土浦市上高津町貝塚	〃	縄文	貝塚	阿玉台～安行3a式国指定史跡
17	金田古墳	新治郡桜村金田天神下	〃	古墳	墳墓	前方後円墳
18	大日塚古墳	〃　〃　上ノ室	〃	〃	〃	円墳(？)，土師器(五領式)
19	鹿島様古墳	〃　〃　吉瀬	〃	〃	〃	前方後円墳
20	宍塚古墳群	土浦市宍塚町上郷	〃	〃	〃	前方後円墳4，円墳14，箱式石棺，金銅製耳環，円筒埴輪，形象埴輪
21	根本古墳	〃　〃　向山	〃	〃	〃	円墳，円筒埴輪，形象埴輪，土師器(五領式)
22	幕下女騎古墳	〃　上高津町幕下女騎	〃	〃	〃	前方後円墳，円筒埴輪
23	金田城址	新治郡桜村金田館山	〃	歴史	城館址	
24	花室城址	〃　〃　花室御	〃	〃	〃	
25	上ノ室城址	〃　〃　上ノ室館坪	〃	〃	〃	

池をひかえ，そして前面には桜川低地帯を見下ろしている。標高は約23.50m，沖積面との比高は約20mを測る。

遺跡の歴史的環境

第24図は根本古墳（21）周辺の遺跡分布を示したものである[1]。

先土器時代の遺跡は検出されていない。

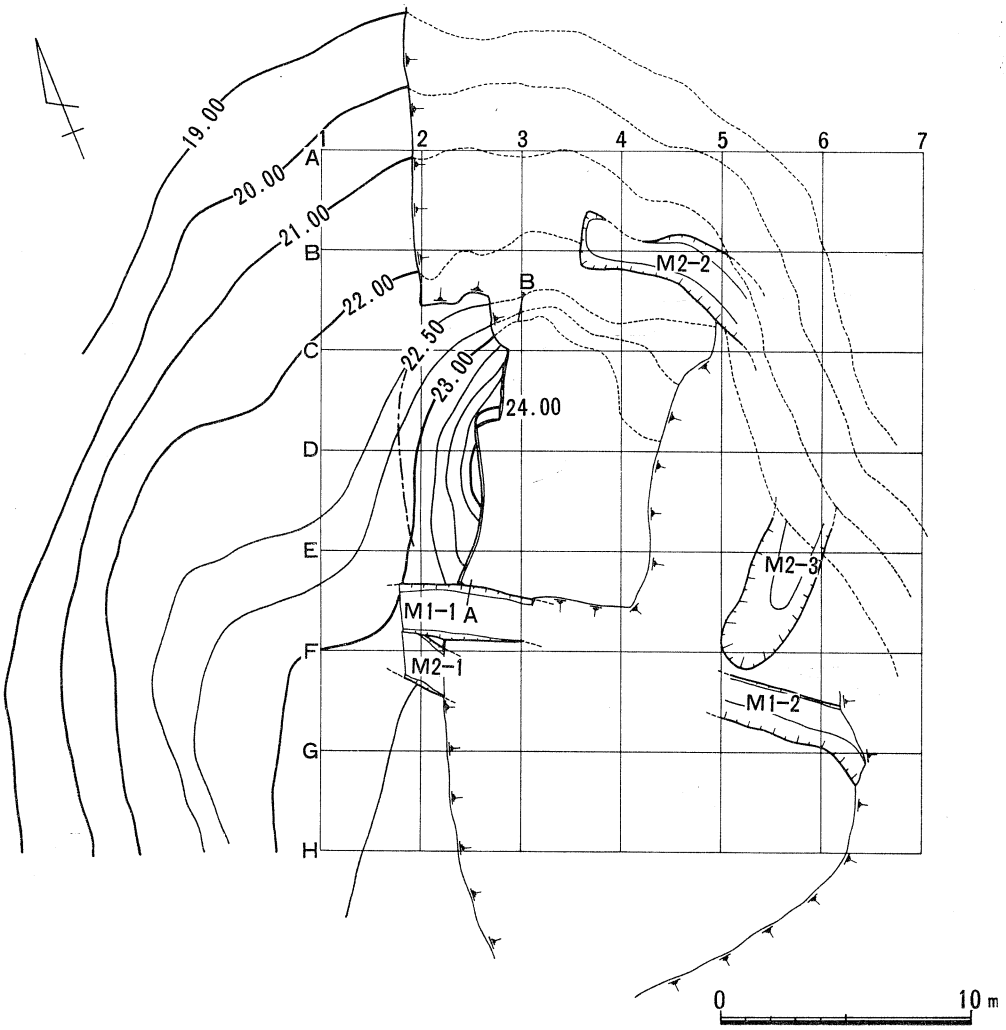
縄文時代の遺跡は貝塚が顕著であり，前期の地点貝塚である下坂田貝塚（3），後・晩期の馬蹄形貝塚で，国指定史跡である上高津貝塚（16）などが著名である。図示し得なかったが，花室遺跡も発掘調査が行われている[2]。

弥生時代の遺跡では宍塚第1号墳の墳丘下に10基の弥生後期の竪穴が検出されており，集落址と考えられる。

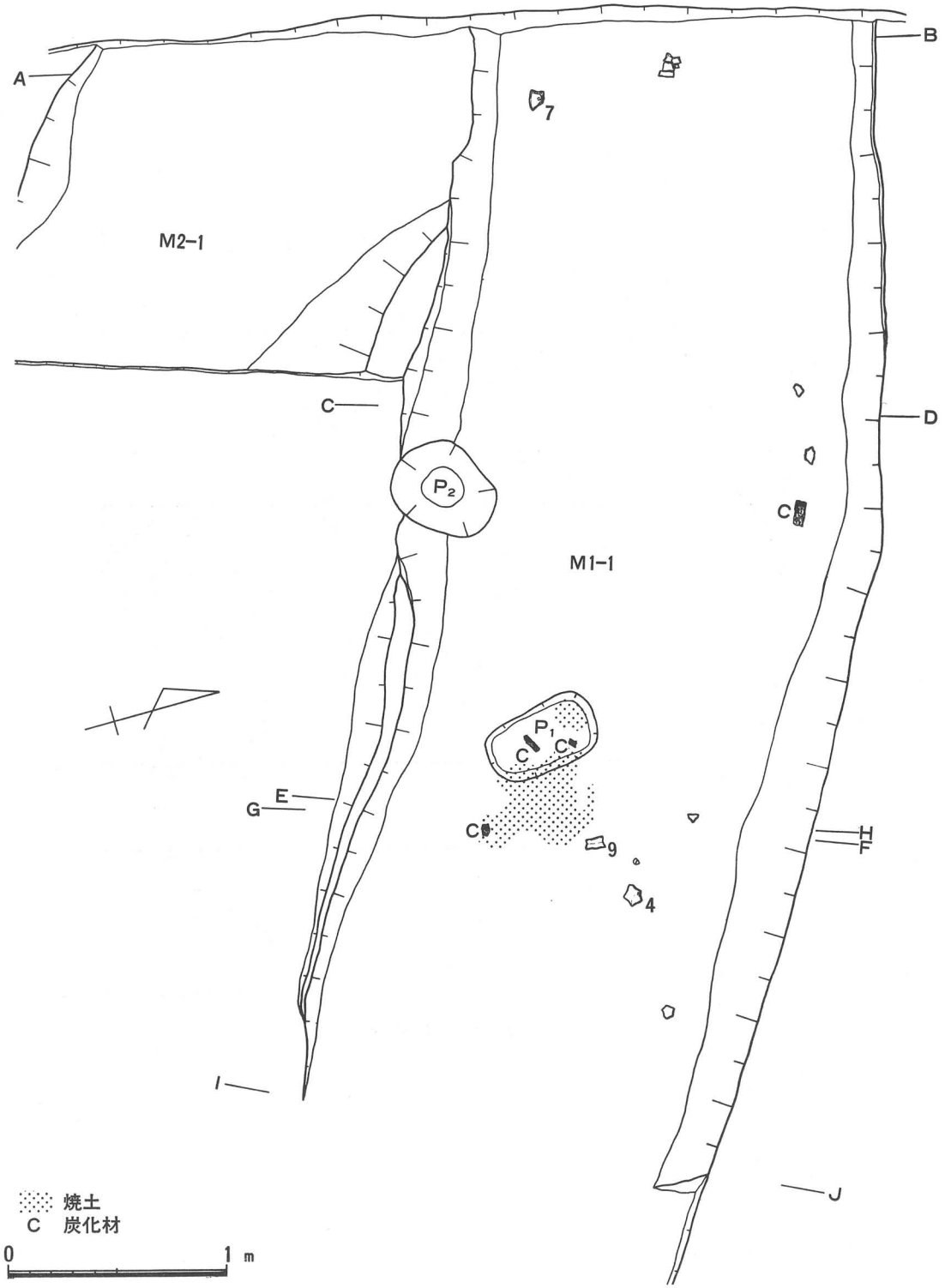
古墳はその多くが新治台地および筑波稲敷台地の縁辺部に，いくつかが桜川右岸の自然堤防上に存在している。単独のものや，2～3基が群集するものが多いが，宍塚古墳群（20）は4基の前方後円墳と18基の円墳，上坂田古墳群（6）は5基の円墳からなる。調査のなされていないものがほとんどであり，埴輪の出土が確認されていたり，たとえばとりおい塚古墳（10）が直刀，鉄鏃を副葬した箱式石棺をもつということが知られている程度である。

このようななかにあって，宍塚古墳群は1968年と69年の2度にわたる調査がなされ，いくつかの知見がもたらされた。発掘調査がなされたのは第1号，6号の前方後円墳と第5号の円墳であるがこれらはいずれも周溝をもち，主体部が墳頂部になく，第1号墳ではくびれ部と前方部斜面に，第6号墳ではくびれ部に近い後円部裾において検出されている。第5，6号墳は一重に埴輪をめぐらせており，円筒，形象埴輪がみられる。第1号墳は埴輪は全く検出されていないが，封土中より古墳時代後期に比定される土師器と，須恵器破片が検出された。第6号墳は調査前は円墳と考えられていたが，周溝の形態により前方後円墳であることが確認されたものであり，前方部周溝の両角がとぎれ，橋状を呈している点は注意すべきであろう。第1号墳の第1主体部は盗掘を受けているが箱式石棺と考えられており，内部から金銅製耳環が検出された。この他にも第11，13号墳などが，箱式石棺を主体部にもつことが確認されている。

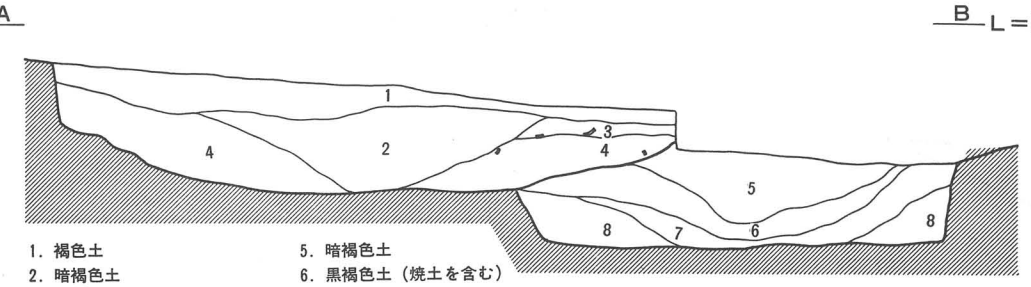
歴史時代の遺跡としては，自然堤防を有する古来地区や上ノ室地区などに条里遺跡（14・15）が展開しており，城館址（13・23・24・25）の存在もこの地域にいくつか知られている。



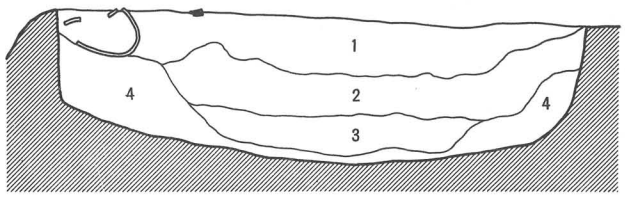
第25図　根本古墳調査区全図



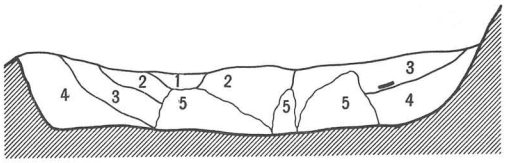
第26図　溝状遺構（M１－１）および根本古墳周湟（M２－１）実測図



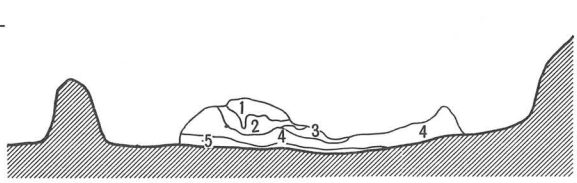
1. 褐色土
2. 暗褐色土
3. 黒褐色土（埴輪破片を多く含む）
4. 黒褐色土
5. 暗褐色土
6. 黒褐色土（焼土を含む）
7. 暗褐色土
8. 黄褐色土（ローム粒を含む）



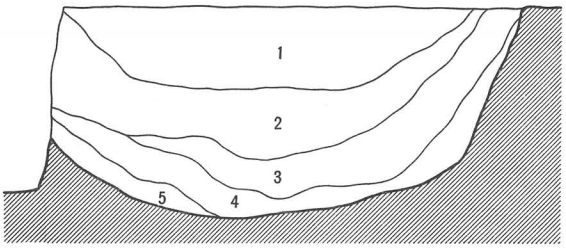
1. 黒色土
2. 黒褐色土
3. 暗褐色土（焼土を含む）
4. 黄褐色土（ロームを含む）



1. 赤色土（焼土）
2. 暗褐色土（焼土を含む）
3. 茶褐色土
4. 明茶褐色土
5. 赤色土（焼土塊）



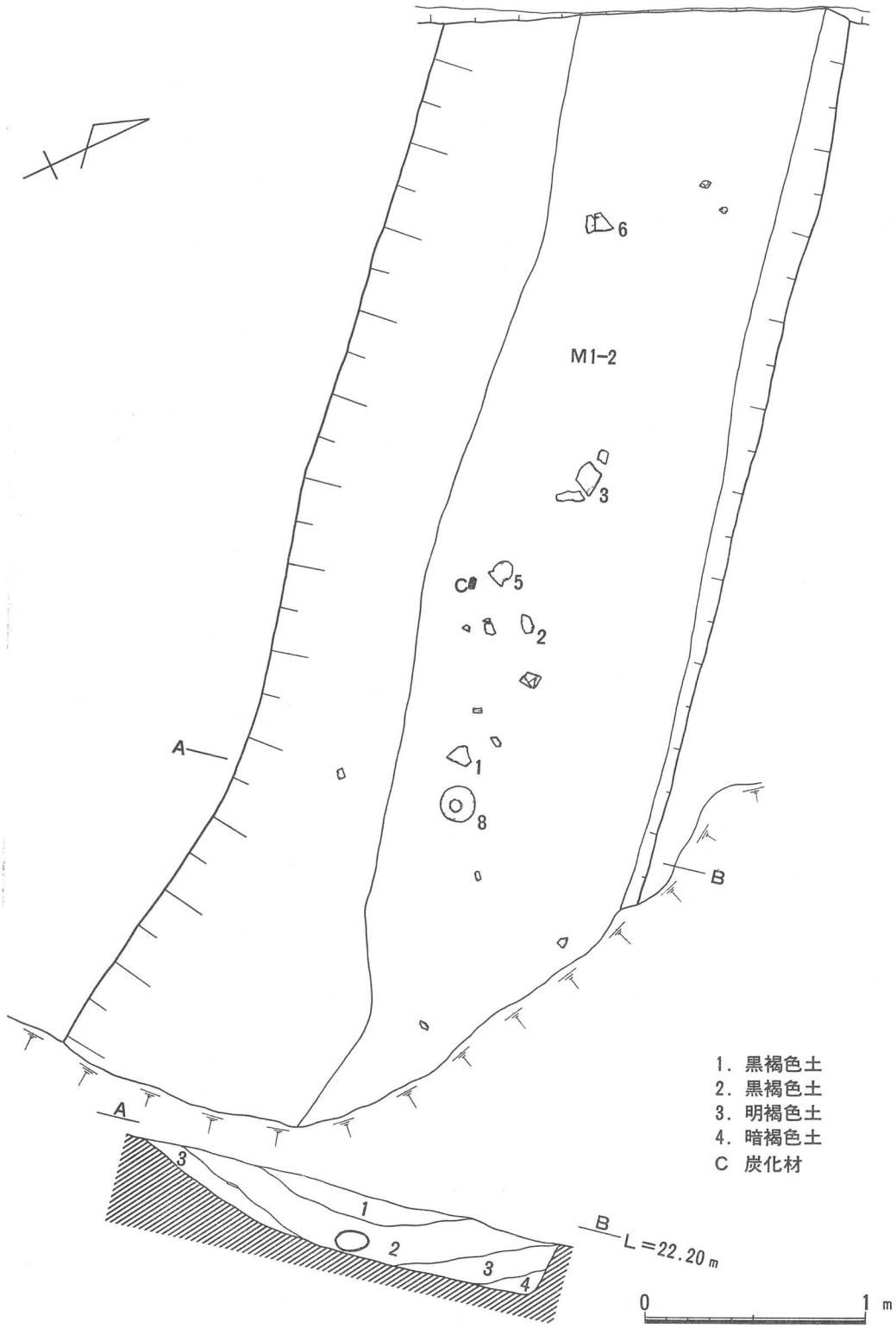
1. 赤色土（焼土）
2. 黒褐色土（炭化物・焼土を含む）
3. 暗赤褐色土（焼土）
4. 暗褐色土
5. 暗黄褐色土（ローム粒を含む）



1. 褐色土（炭化物を含む）
2. 暗褐色土（炭化物を含む）
3. 黒褐色土（炭化物を含む）
4. 暗褐色土（炭化物・ローム粒を含む）
5. 黄褐色土（ローム粒を含む）

0　1 m

第27図　溝状遺構（M1－1）土層断面図



第28図 溝 状 遺 構（M1－2）実 測 図

c. 遺構と遺物

溝状遺構と出土遺物

遺　構　溝状遺構はE1・E2区，F5・F6区において検出された。便宜上前者をM1—1，後者をM1—2として説明を行う。なおE3区においてM1—1は重機により地山面まで削られており，M1—2も4区以西を削り取られ，この二者の間は地山面が露出し，溝状遺構の存在は確認し得ず，したがってM1—1とM1—2とは連続したものとしてとらえられなかったが，覆土の状態および出土遺物から，この二者が本来同一の溝であった蓋然性は高いと考える。

M1—1（第26・27図）　約2mのほぼ均一な幅をもち，北西～南東に向ってのびる。底面をほぼ平坦に整形し，部分的にゆるやかにやや凹む。壁の立ち上がりは特に北壁の傾斜がきつい。掘り込み面は判然としない。溝底面の絶対高は1区で約22.40m，3区で約22.44mを測り，ほぼ水平といえる。

覆土の基本的層序は，1層—褐色土，2層—暗褐色土，黒褐色土，3層—焼土を含み黄味がかった暗褐色土，4層—ローム粒子を含む黄褐色土よりなる。また西側においてはこれらの層の上に黒褐色土が堆積するが，これは埴輪破片を含む古墳周溝の覆土が連続して堆積したものである。第27図からも明らかなとおり，古墳周溝はM1—1の覆土である第1層を切って穿たれている。

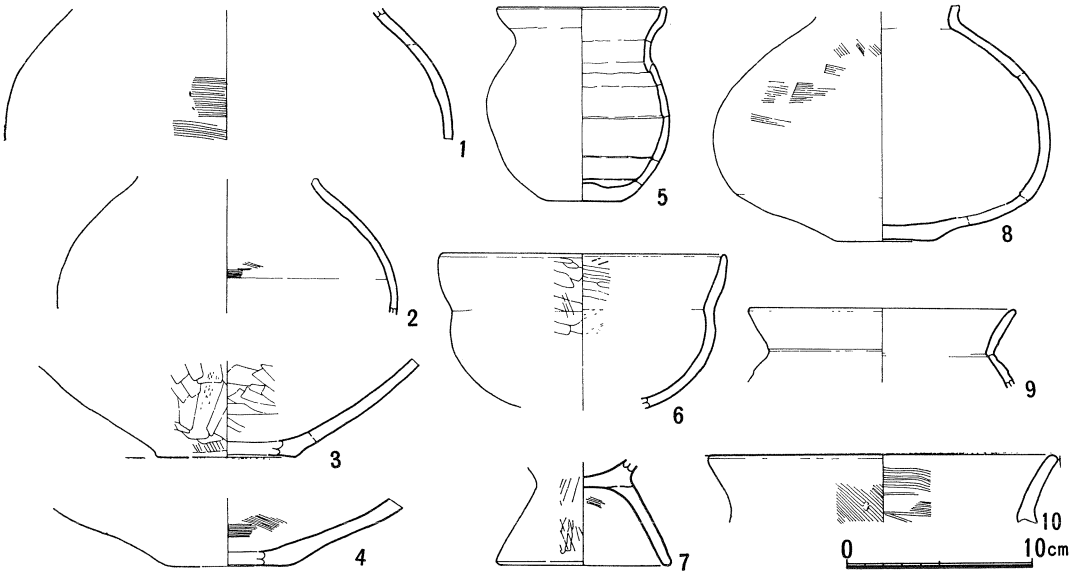
ほぼ中央東寄りには焼土や焼土塊，炭化材が底面より約10cmほど浮いた状態で集中していた。第3層が焼土を含み，また溝中に炭化材が点在しているのもこれに原因があるものと思われるが，焼土などは特別な遺構に伴うものではなく，その性格を明らかにすることはできなかった。土器は溝底および，第3，4層中から多く検出されている。

M1—2（第28図）　M1—1と同様，約2mの幅をもって北西～南東にのびる。F6区において南に向って回り込みを示しているが，以下は重機により削り取られ判然としない。溝底面もやはりM1—1と同様ほぼ平坦で，北壁の立ち上がりは垂直に近い部分もある。掘り込み面は上部を削平されているため不明である。溝底面の絶対高は，西端で約21.95cm，東端で約21.75cmを測り，M1—1との間に約40cm～50cmの比高差をもち，東に低くゆるやかに傾斜している。

3層からなる層序はほぼM1—1の2，3，4層と対応し，3層中にどれもほぼ溝底面に接する状態で土器や炭化材が包含されていた。

出土遺物

出土遺物は炭化材および，第1層上層の黒色土出土の埴輪破片を除き，すべて土師器であり，それもいわゆる古式土師器の範疇でとらえられるものである。特にM1—2出土土器はそのすべてが溝底出土であり，一括遺物といえる。第29図に示したもののうち1・2・3・5・6・8がM1—2出土である。4・9はM1—1出土であるが，やはり溝底面から検出された。7・10はM1—1の覆土第3層からの出土である。



第29図　溝状遺構（M1）出土土器実測図

壺形土器（1～4・8）　器形全体を知りうるものはなく，口縁部は検出し得なかった。8は口縁部が欠失するが，胴部～底部は完形を呈する。おそらく，やや開きぎみの長い単純口縁を有するものだろう。他の土器にも共通することであるが，白色の小砂粒を含み，淡黄褐色～淡赤褐色を呈し，器面は風化のため磨滅が著しい。頸部はしぼられる。胴部は強く張り，最大径はほぼ胴部中央にあるが，しもぶくれで無花果をつぶしたような偏平な形態をとり，胴下部にわずかな稜を持ち屈曲することとともに大きな特徴といえる。底部は小さい。1・2・4もほぼ同じ形態を有するものと考えられ，調整はいずれもハケメを施したのち，ヘラミガキを行っている。胴部はハケメが大むね水平方向になされる。2・4は内面もハケメ調整されている。3は淡赤褐色を呈し，たち上がりの傾斜が他のものにくらべてややきつく，外面はハケメ調整ののちにヘラケズリがなされている。内面は板材によるナデである。

小形壺形土器（5）　完形である。淡黄褐色を呈す。短い単純口縁を有するが，口縁はつまんでなでられるため，やや内彎している部分もある。胴部はややいびつであり，中央からやや胴上部に最大径をもつ。底部は小さな平底だが，作り出されてはいない。成形は丁寧でなく，器面の磨滅が激しいが，調整はハケメののちにヘラナデされたものだろう。口縁部は内面にヨコナデの痕跡が残る。胴部内面は巾1～2㎝の輪積み痕が顕著に残っている。

坩形土器（6）　底部を欠失する。暗黄褐色を呈す。推定口径約15㎝を測るやや大形の坩であり，口縁の開きは大きくなく，身もやや深めであるといえる。器面調整は磨滅が激しいが，内外ともほぼ水平方向のヘラミガキがなされている。

甕形土器（9・10）　両者とも淡黄褐色を呈し，単純口縁を呈するが，9は口縁が直線的に開

き，ヨコナデされ，胴部はヘラケズリによる調整であるが，10はやや彎曲して外反し，外面斜方向のハケメ，内面ヨコハケによる調整がなされる。

台付甕形土器（7）　脚台部を残すのみである。暗黄褐色を呈す。S字口縁ではなく，単純口縁を有するものと考えられる。外面にはハケメがわずかに残るが，ケズリもしくはナデによりほとんど消されている。内面はナデ調整されている。

古墳と出土遺物

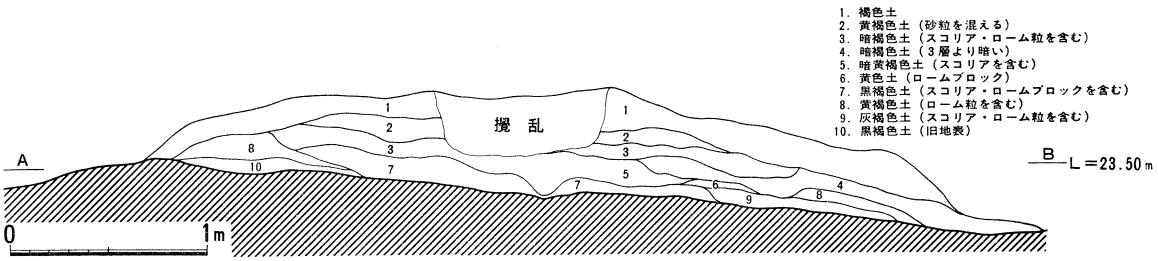
墳丘（第25・30図）　墳丘は前述のとおり，その半分以上が削り取られ，残存部分は24.30mを墳頂とし，地山面から約0.51mを測る。一点破線で示した部分が墳裾と考えられるが，地山が北へ向って約5°の傾斜で下降しているため，南端と北端では裾部の比高が約60cmの差を有している。残存部最大幅（カッティング面）は約8.20cmを測る。土浦市史によれば，本墳は本来，高さが2m，直径約20mの円墳であった(3)。

カッティングされた断面および削平されて地山が露出している部分には主体部と思われる遺構，石棺の石材などの遺物は見出されず，発掘調査においてもこの点は不明のままであった。

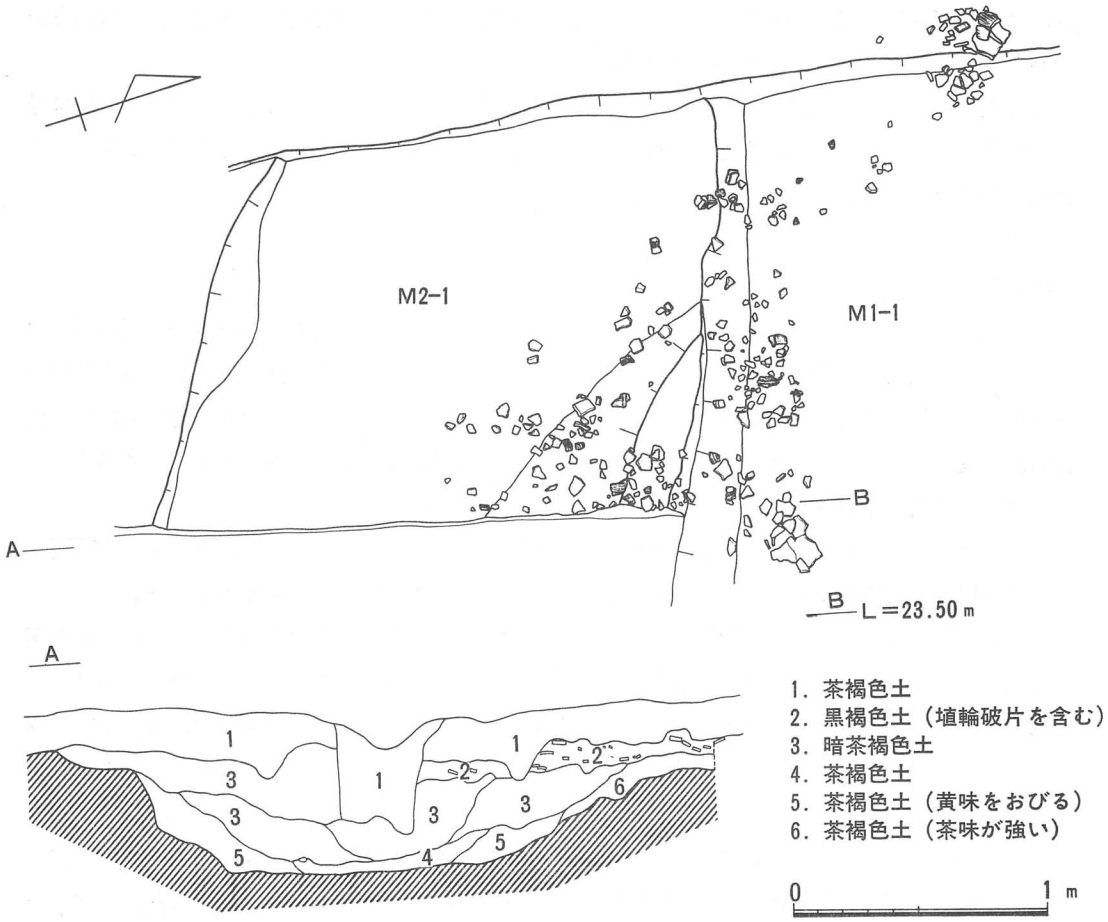
墳丘の築造工程について多少触れておきたい。10層は黒褐色土層で旧地表面と考えられる。南側に約30cm程の厚さにローム質の黄褐色土を三角状に盛り土し，全面に黒褐色土を積む。そののち，北側にも南側に盛ったと同様の黄褐色ローム質土をマウンド状に盛土し，20～30cmの厚さで暗黄褐色土，暗褐色土を盛り，ほぼ水平に整えたのち，約20cmの厚さで暗褐色土，黄褐色土を積み上げて墳丘を構築している。

周溝はE・F—1・2区，A・B—3・4区，E5区を中心に3ケ所に認められ，便宜的にM2—1，M2—2，M2—3と呼称した。周溝は総体的に幅2m～2m50cmを測り，底面は凸レンズ状を呈す。M2—2，M2—3はいずれも上部が削られているため掘り込み面などは判然としないが，M2—1の所見によれば地山の粘土質土層上の漸移層を掘り込んで作り，底面までの深度は約50cmを測る。

覆土の基本的層序は1層—黒褐色土，2層—茶褐色土，3層—ローム粒を含み黄味をおびた茶褐色土よりなり，それぞれレンズ状に堆積している。2層は埴輪破片を多く含む。



第30図　墳丘土層断面図

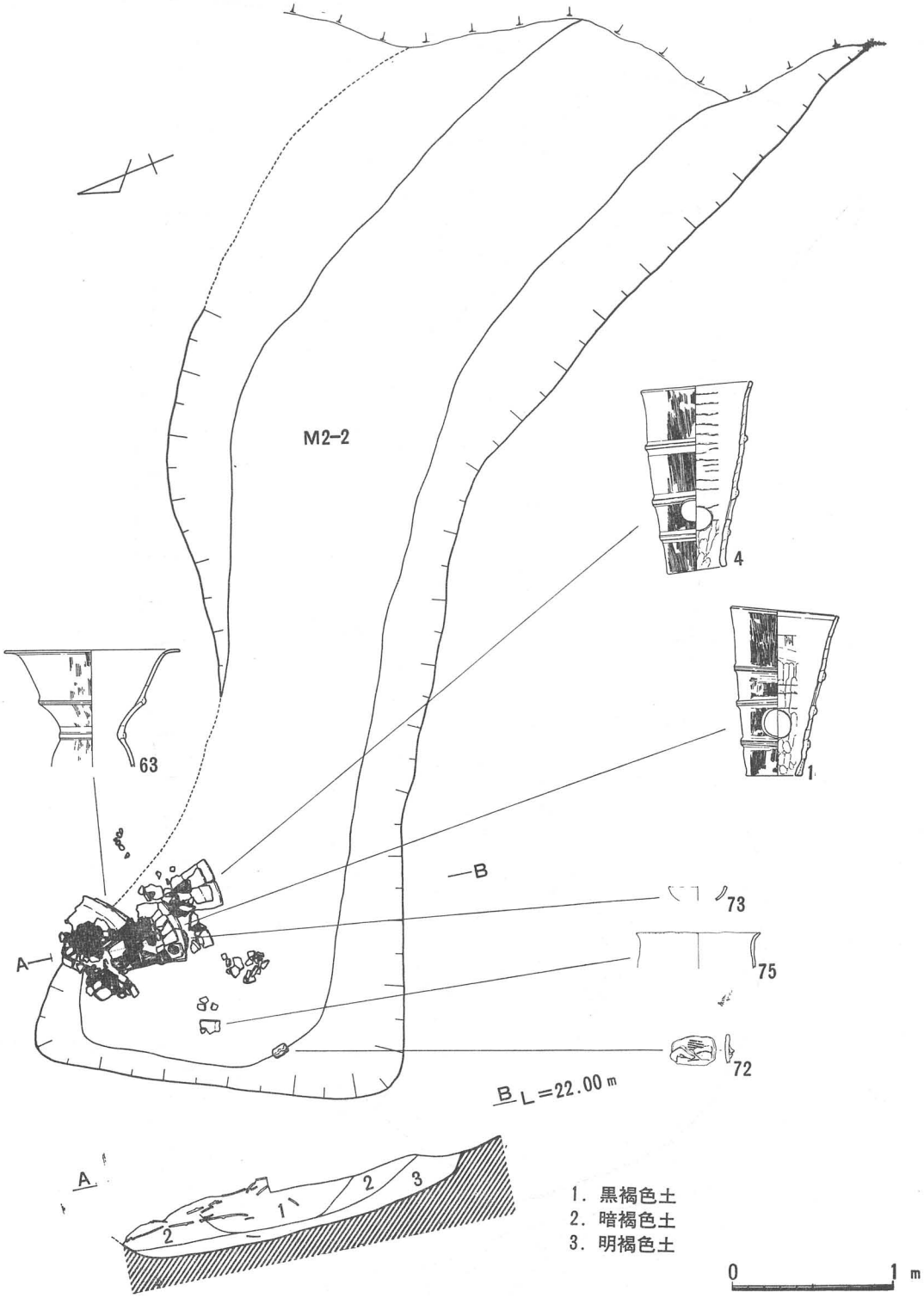


第31図　周 湟（M２—１）実 測 図

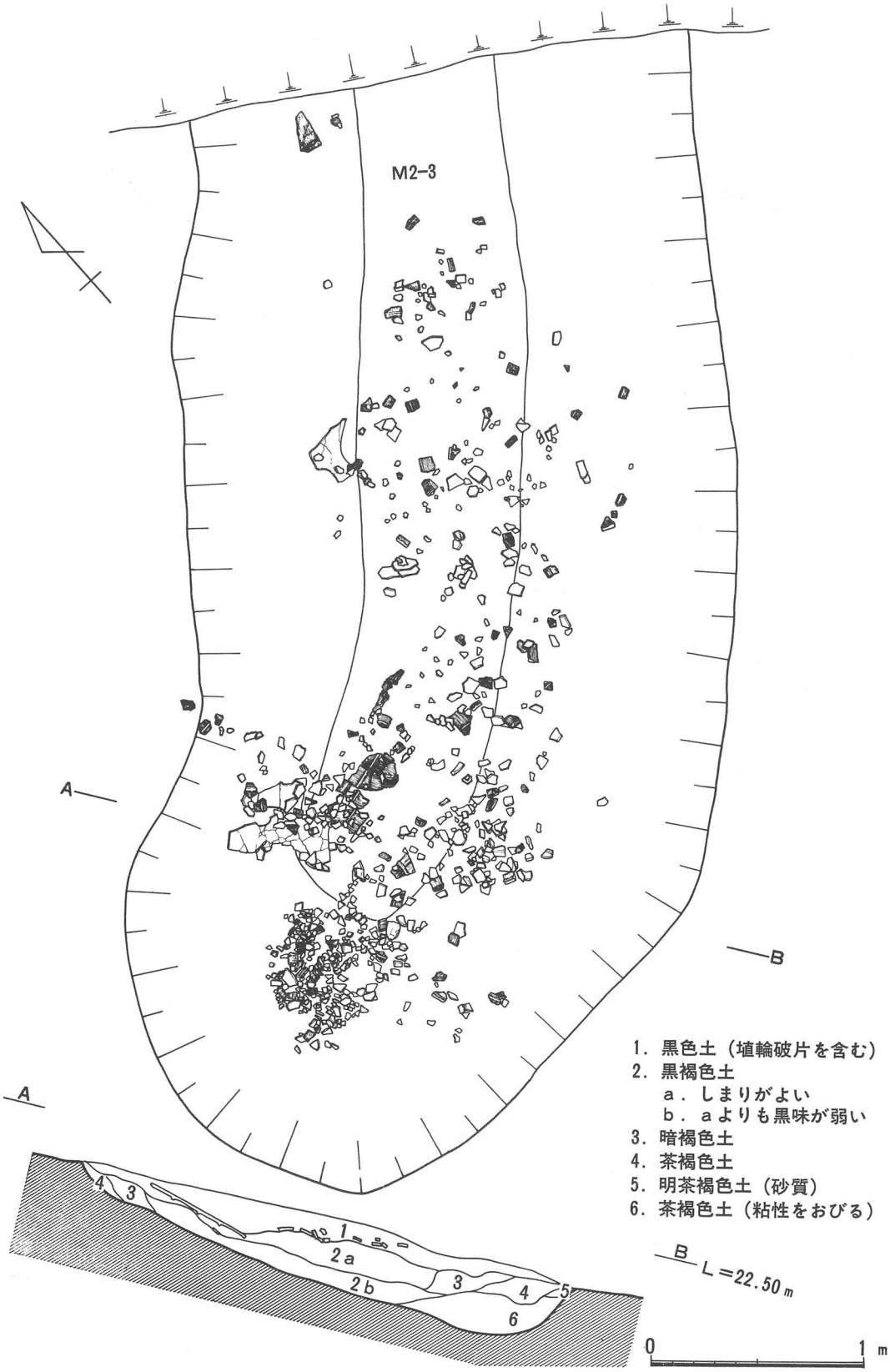
M2—１はM1—１を切って構築され，２層の墳丘側に多量の埴輪破片が散乱状態で包含されており（第31図），明らかに墳丘よりの転落を思わせる。西は調査区域境界線で，東は削平でその溝のつながりは不明な部分が多い。

M2—２のM2—３とのつながりは削平により不明だが，西側はＡ３区においてかなり急激な立ち上がりを有し，明らかに周溝は断絶している。Ａ３区において円筒埴輪が３個体，朝顔形埴輪が１個体，土師器破片とともに重なり合って横転状態で検出された。しかしこれらの出土状態は他の周溝とは異なるあり方を示す。また，これらの一括遺物以外には，本周溝からは埴輪破片の出土はみられない。

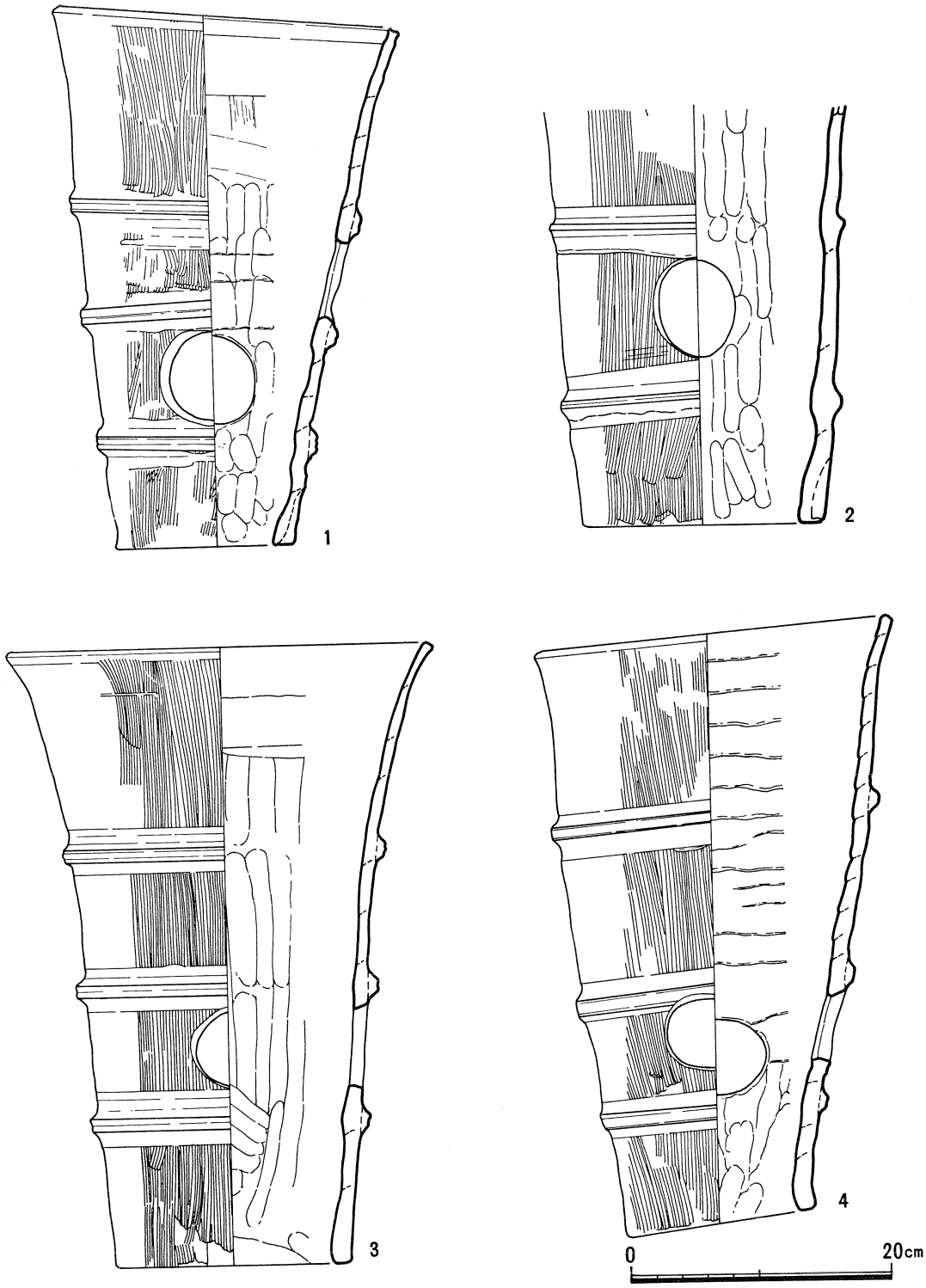
M2—３もM2—２と同様，その南端においてとぎれている。第33図からも明らかなとおり，埴輪破片を多量に包含するが，周溝外の南側にまで散布は及ばず，周溝が断絶していた可能性は大きい。埴輪は墳丘から周溝内に転倒した状態を示す。



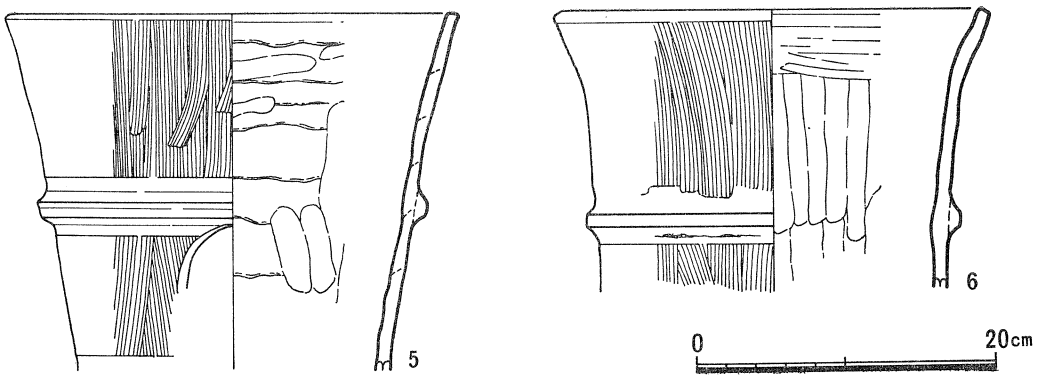
第32図　周 湟（M2—2）実 測 図



第33図　周 湟（M2−3）実 測 図



第34図　周湟（Ｍ２）出土円筒埴輪実測図１



第35図　周湟（M２）出土円筒埴輪実測図２

出土遺物

出土遺物は埴輪および若干の土師器であり，それらはほとんどが周溝内から出土している。埴輪は円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪および形象埴輪であるが，朝顔形円筒埴輪と形象埴輪は僅少である。

円筒埴輪　M2—１～３ の各地点ごとにきわだった相違はみられないため，総合して口縁部，胴部，底部の順にその特徴を説明したのち，M2—２における完形品を含んだ一括資料の説明を行うこととする。

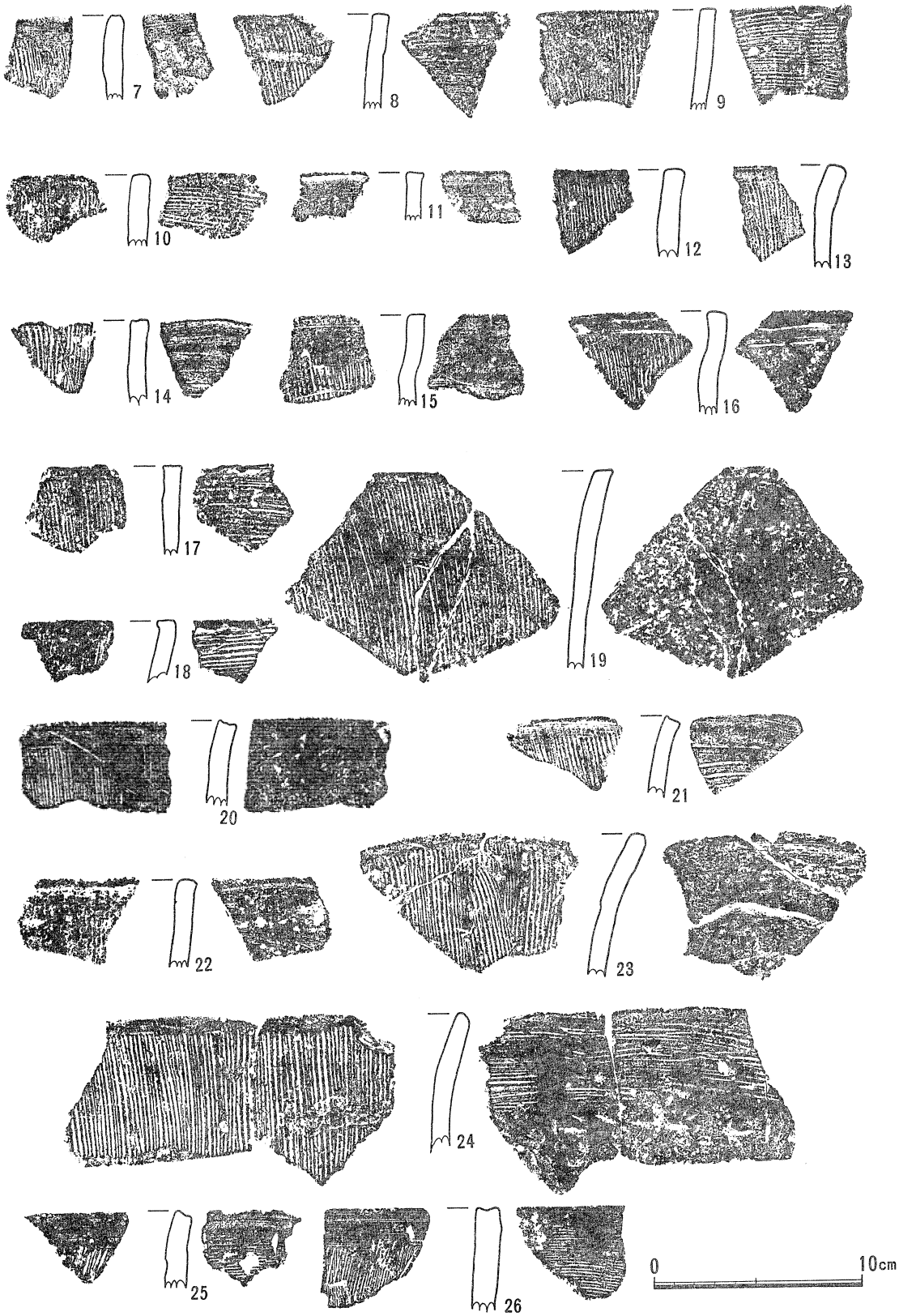
口縁部（第36図）　口縁はゆるく外反するものが多い。かるく彎曲するものもみられる（15・16）が量的には少ない。口縁端部は７・23のように丸くおさめられるものよりも，平坦にされるものが圧倒的であり，中には20・21のように凹まされるものも少なからず存在する。また18のように内側，あるいは外側に口唇部が突出するものも多くみられるが，これは調整技法と関る形態といえる。24のように口唇部を斜めにヘラケズリしたものも存在するが，多くはない。

外面調整の基本は一次調整のタテハケであり，二次調整，ヨコハケはみられない。口縁部では，端部から幅約１㎝ほどのヨコナデの施されるものがタテハケのみのものを圧倒している。この部分にヨコハケの調整がなされるものもあるが，少ない。口縁端部が平坦なものが多いのは外面のヨコナデと一体化した調整手法の結果であろう。

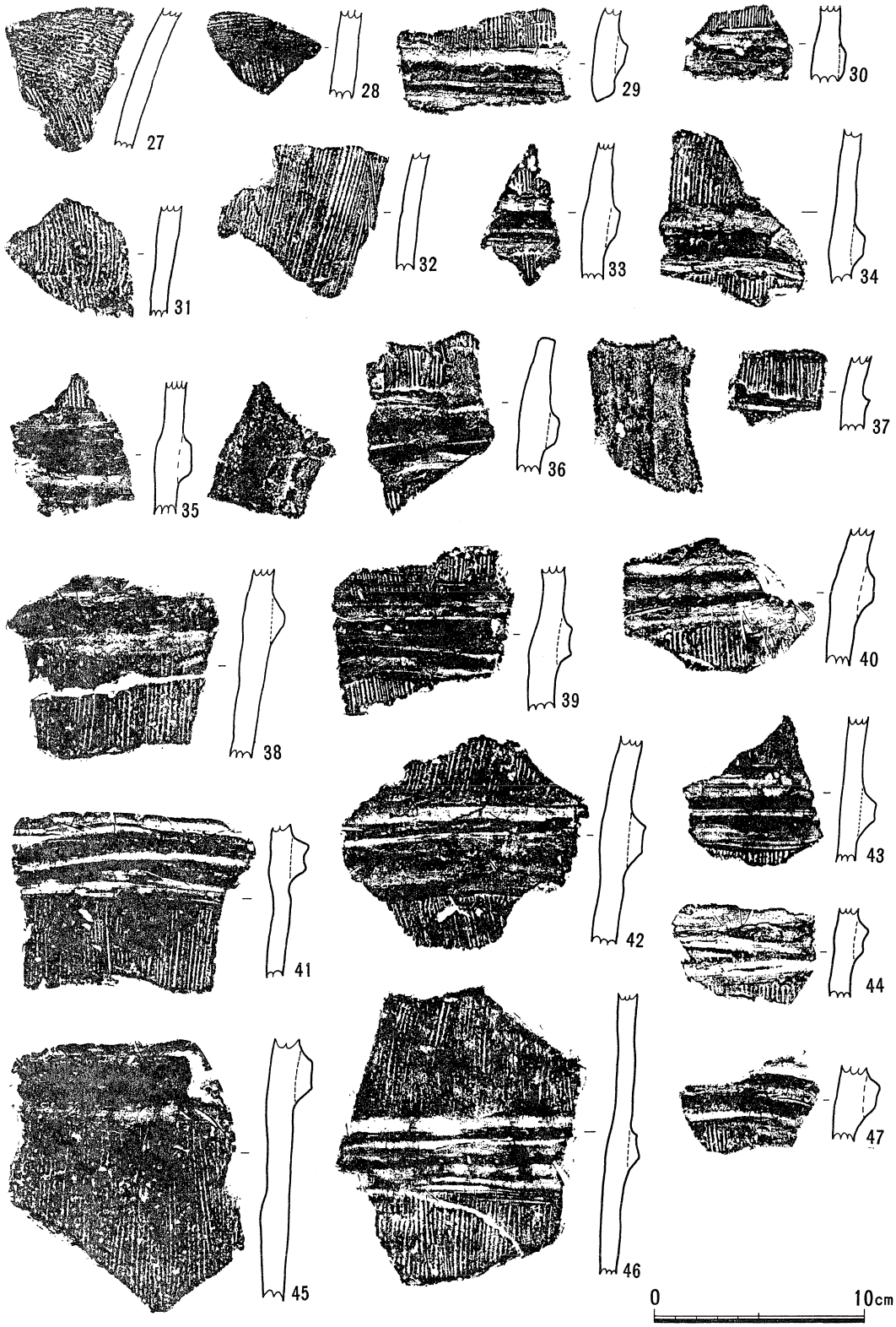
口縁内面は逆に幅１～７㎝のヨコハケがヨコナデを圧倒している。接合帯を残したままのものや，指オサエによる調整もあるが，目にふれやすい部分はほとんど調整されているといってよい。18の口縁部は内面に強くヨコハケが施されたため，突出したものである。

25・26は表面採集資料であるが，ハケメの調子も他と異なり細かく，丁寧で，焼成も他のいずれよりも堅緻で，やはり表採品である朝顔形円筒埴輪の66と共通する特徴をもつ。器厚はいずれも８㎜前後だが26はやや厚い。

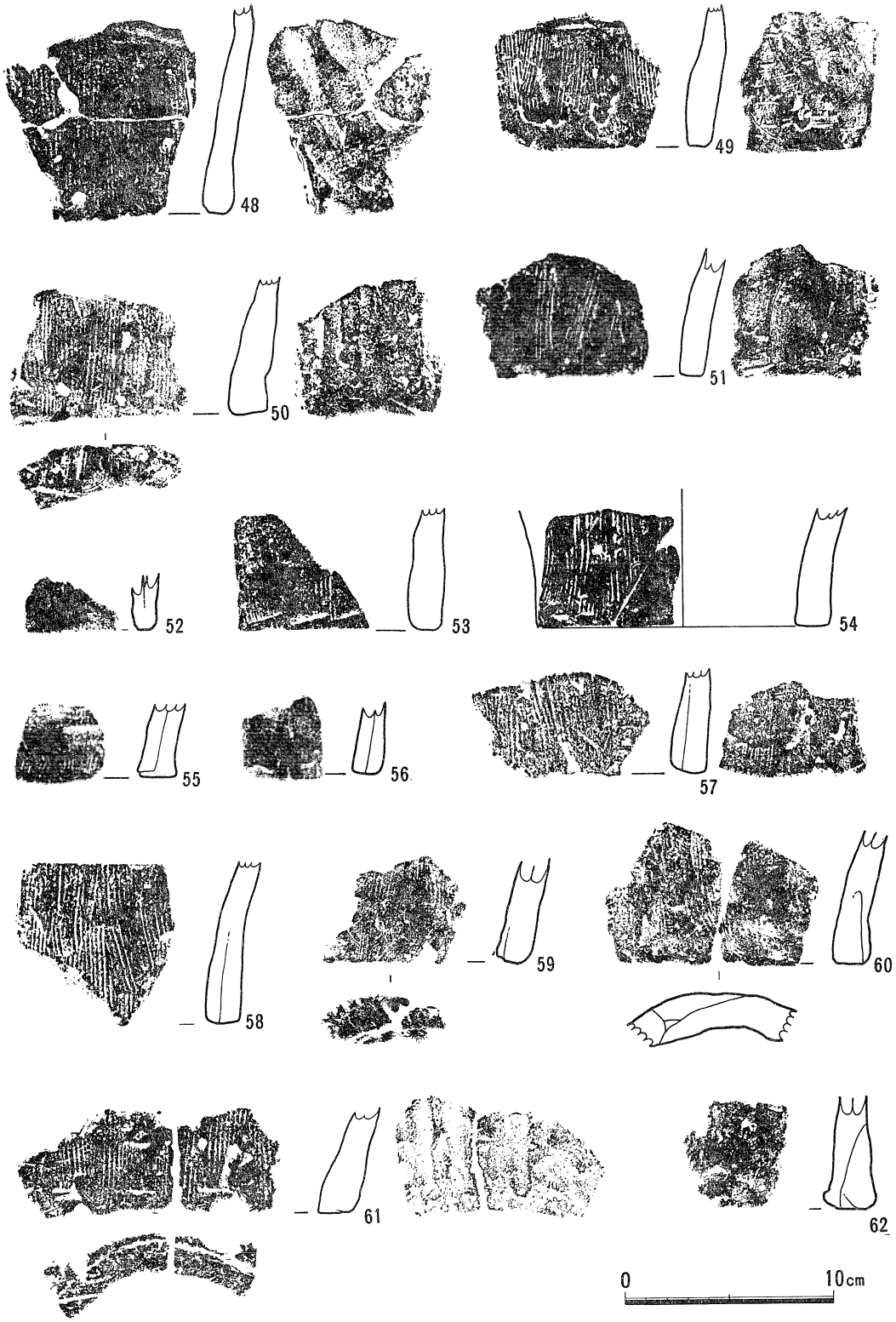
胴部（第37図）　突帯は台形のもの（35）と，３本の指を使って突帯を貼付する際に強く力を加えたために，突帯が凹むもの（41）とが大半を占め，三角形（38）やカマボコ形を呈するものが



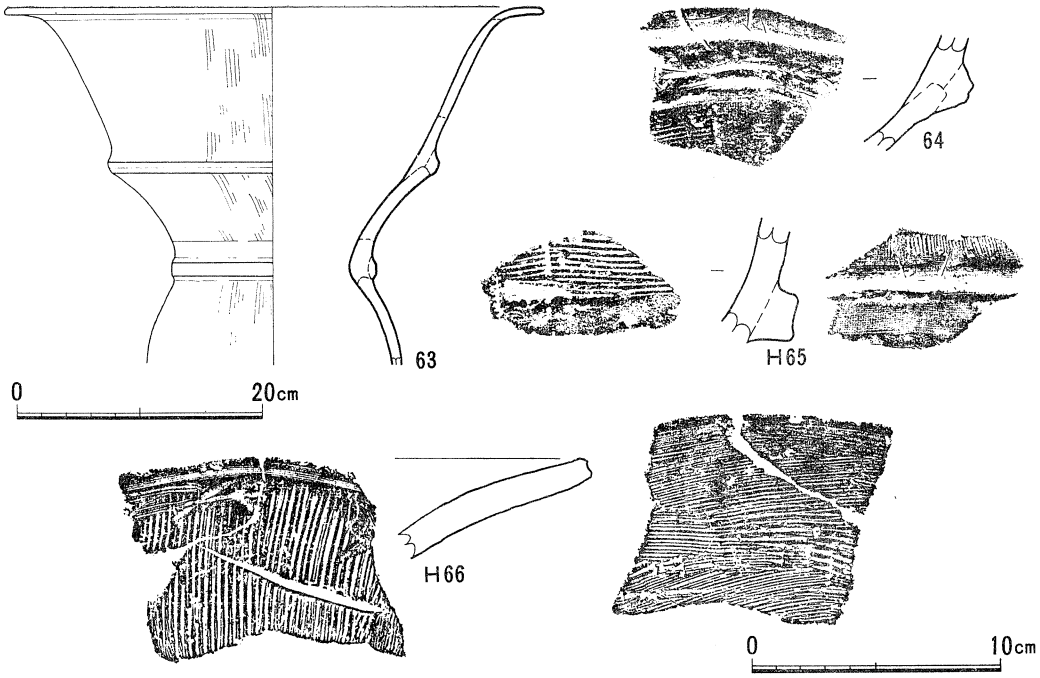
第36図　周湟（M２）出土円筒埴輪拓影１



第37図　周湟（Ｍ２）出土円筒埴輪拓影２



第38図　周湟（M２）出土円筒埴輪拓影３



第39図　周湟（M２）出土朝顔形円筒埴輪拓影

わずかに存在する。突帯の幅は９～13㎜，高さ3～7㎜程度で，上下の稜は比較的明瞭なものが多い。

突帯貼付に先立ち，１次調整のタテハケが行われるが（37），突帯の施される部分でハケメをかきつぎ，方向を変えているもの（42）もみられる。また板材でヨコナデし，あらかじめ突帯貼付の位置を定めている（39）。

内面はユビケズリ，ユビオサエによる調整である。

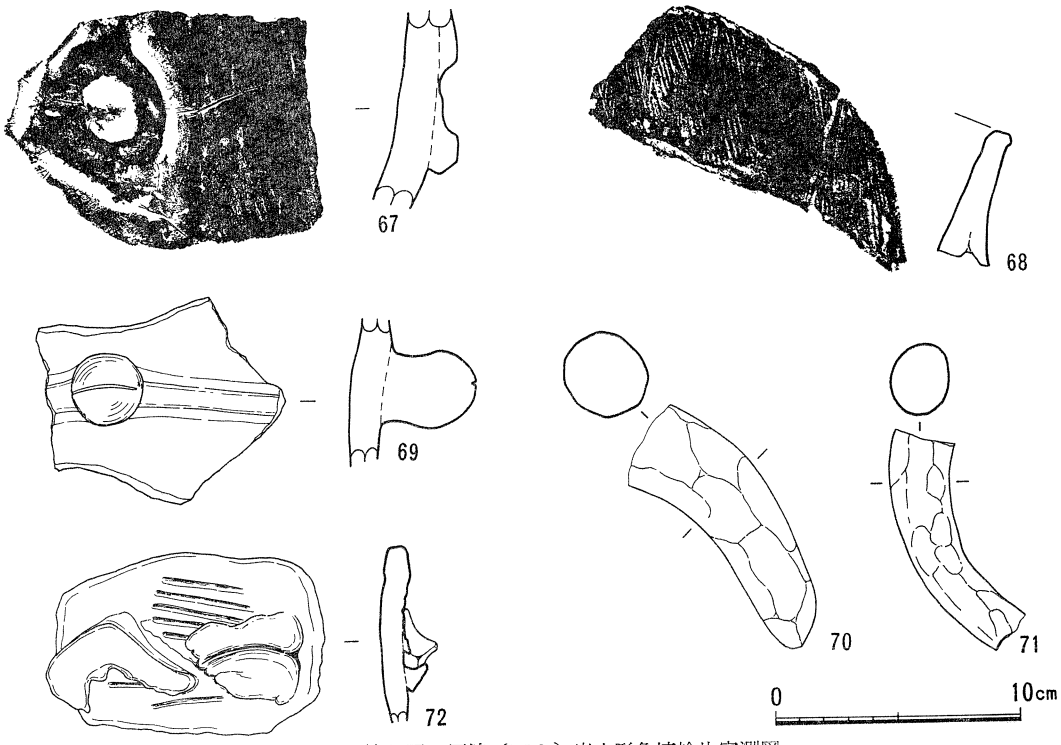
底部（第38図）　底部は厚く作るために粘土板を２枚貼り合わせているもの（55～58・61・62）が特徴的に認められる。観察したところ，55・61に典型的にみられるように，これは基部を巻いた際の接合部（59・60）とは区別されるようだ。８は倒立させ，底面で粘土を内側に折り返しており，外側に折り返すものも２にみうけられる。底面にはワラ茎状の圧痕や征目状の圧痕（60），接合痕が残る。基部の巻きには右巻きのもの（59・60）と左巻きのものの存在が確認されている。

外面調整は大むね１次タテハケ調整だが，基底部にヨコハケを施したのち，タテハケのなされるものもある（51）。

内面はあらいユビケズリである。

底面の器厚はほぼ12～18㎜を測る。

５・６は口縁を，１～４はほぼ全形に近い形に復元し得たものである。１・３・４は器高40～48



第40図　周湟（M２）出土形象埴輪片実測図

cm，口径28～33cm，底径15～19cmで成形は雑でいびつなものが多い。

各部位は破片で説明したのと同様な特徴を示すが，第２～４段に比し，第１段(4)が長い。透し孔はすべて丸形で，それ以外の形態は破片中にもみられない。

外面はすべて１次調整のタテハケである。

内面は１～３・６はタテ方向のユビケズリ，ユビオサエを施しているが，大むね突帯間を一工程としているようである。特に突帯に対応する部分の下部がつよくおさえられ，突帯の部分は肥厚している。口縁内面には幅広のヨコナデがなされる。４は第１～３段の内面に接合帯を残したままで，第４段の内面にユビケズリが施される。

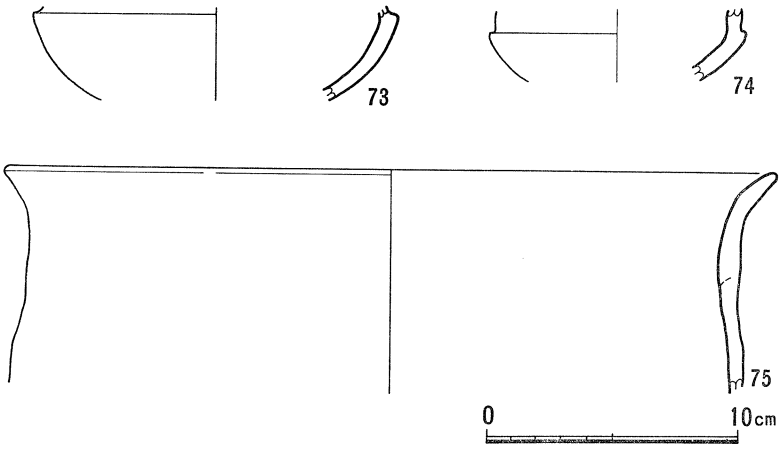
朝顔形円筒埴輪（第39図）　63は１・４などとともに一括出土したもので，器面の磨滅が著しく，調整などに不明瞭な点が多い。花状部は擬口縁をつくり，突帯と口縁部を分離して接合している。

調整はタテハケのようである。

64には花状部にヨコハケが認められる。

65・66は表面採集資料だが，65はしっかりとした突帯を有し，ともに内面ヨコハケで，目が細かく丁寧で，焼成も良好である。

形象埴輪（第40図）　67は輪鐙・障泥であると思われるが，轡の可能性もある。68は馬のたてが



第41図　周湟（M２―２）出土土器実測図

みと考えられる。69は鈴が付着し，おそらく胸繋であろう。70は馬の尻尾である。71は人物の腕と思われるが確証を欠く。72は島田髷の後髪部分であり，眉状に突出しているのは頭との装着部分である。

以上の埴輪は，一部の表面採集資料を除いて雲母粒，多少の長石，石英を含み，砂質で焼成はややあまく，くすんだ茶褐色を呈すという特徴を有するといえる。石英，長石粒を多量に含むものや，きわめて焼成のあまいものなども見受けられるが，須恵質埴輪は一片も検出されていない。

土師器（第41図）　73・75は１・４などの埴輪と一括出土したもので，73・74は杯，75は甕である。ともに器面の風化が著しく，調整などは不明である。

d.　ま　と　め

今回の調査は根本古墳を対象として行われたものであるが，それに付随して古墳時代前期に遡る溝状遺構が検出された。

溝状遺構の性格に対しては，M1―２の東南でカーブを描き，回り込みを示しているため方形周溝墓の可能性も考えられたが，壺形土器に底部穿孔がみられない点や，これに連結する溝M1―１はさらに調査区域外にも伸び，両者の長さが20ｍを超えてしまうものであるため方形周溝墓であるとは断定できない。

溝底面からはいわゆる古式土師器が出土している。これらの編年的位置付けに少々ふれておこう。

前野町式土器の取り扱い，それと五領式土器との関連のしかたに関しては以前から問題点が指摘されていた。前野町式土器という型式が設定された前野町遺跡出土土器(5)は住居址床面などにおける一括遺物にもとずいたものでなく，その型式も繰り返して確認される共存関係を内包するものでないということに混乱の大きな原因があると考えられる。金井塚良一氏や小出義治氏は，この前野町遺跡の前野町式土器には問題が多いとしながらも，その段階の存在は認めている(6)。しかし，いわゆる前野町式土器が弥生時代終末に相当するものなのか，古墳時代に偏入されるのかといった点に関しては見解の相違が認められ，それが五領式土器の細分にも混乱をもたらしている。

関東地方の諸遺跡において新たな調査事例の増加とともに，在地の土器の発展におけるいわゆる

外来系の土器のかかわりあいの意義が認識されるようになってきた。千葉県神門4号墳[7]では墳墓の主体部上より庄内式といわれる有段口縁の壺や，タタキ目をもつ甕が，小田部古墳[8]では墳丘より欠山式に並行すると考えられている高杯が検出され，群馬県元島名将軍塚古墳[9]では周溝内から東海系の櫛描文を有する有段口縁の壺が出土している。集落址においても，パレスースタイルの流れをくむ壺の出土例が増えつつある。

この外来系土器のもつ重要性は以前から示唆されてはいたが，それを具体的に操作し，関東地方における土師器の成立の分析にまで深化させたのはそう古いことではない。岩崎卓也氏は土師器の成立の意味を斉一性において捉え，そのメルクマールとなるものを櫛描文，器台形土器，S字状口縁の土器，手焙り形土器などに求め[10]，斉一性の有する意義，特に小形精製土器群の成立の背景を畿内における祭祀形態の波及として捉え[11]，湯川悦夫，加納俊介氏は関東地方における古式土師器の成立に東海西部地方の土器が大きく関与していることを示唆した[12]。

こうした指摘をへて，近年の関東地方における古式土師器編年は外来系土器群の消化過程を捉えて行われている[13]。

本遺跡出土の土師器に目を移した場合，高杯やS字状口縁台付甕，有段口縁の壺など編年の基軸になるものの出土をみない。しかし，土器に無文化が徹底していること，下ぶくれの壺の存在，台付甕が溝底面上層から出土していること，埦形を呈した坩の存在などを指摘することができ，東海系そのままの土器はまったく認めることはできない。また今回合わせて報告された観音下遺跡2号住居址床面一括遺物には頸部の巾広の折り返し複合口縁の壺が存在し，台付甕が減少するかわりに土製支脚が存在する。そして小形手捏ね土器が数個体検出されている。これらの土器にはハケメ調整が極端に少なくなっている点を指摘できる。これらの事実から同じ五領式期に比定されるが，根本古墳M1→観音下遺跡2号住居址という編年は許されよう。

他遺跡との対比は行えなかったが，このような確実な一括遺物は，今後の当地域の土師器編年に資するところが大きいと思われる。そしてまた，たしかな共伴例の積み重ねにより，外来系土器とセットをなす在地の土器の編年的位置付けを確認してゆく作業が必要であると考える。

根本古墳においては周溝が三ケ所から検出されたが，M2—2・3においては，その溝に断絶している部分のあることが確認された。宍塚第6号墳も調査以前には円墳であると考えられていたが，発掘の結果，前方部の短い前方後円墳であることが判明した[14]。したがって，本墳もM2—2の形状から前方後円墳であった可能性もあるが，削平のため全くそれを確かめることは不可能であった。

埴輪は大半が周溝から検出され，樹立の状態を示すものはみられなかったが，M2—1・3においては周溝がある程度埋没したのち，墳丘から転倒，転落したものであることが明らかである。しかしM2—2で一括出土した円筒埴輪および朝顔形円筒埴輪は墳丘と反対側の周溝の肩に樹立されていたのだろう。比較的狭い範囲にこれら円筒埴輪や形象埴輪，土師器が包含されており，M2—2の他の部分に一片も埴輪がみられないのは，祭式のあり方として注意できよう。

これらの埴輪のうち，表採されたもののいくつかに，他の大部分の埴輪と焼成，調整技法を異にするものが認められたが，系統の異なるものであり，例数が少なく，表面採集のもののみである点から，他の古墳の埴輪が混入したものとみてよいのかもしれない。それらを除いた円筒埴輪は，胎土，焼成，色調のほか，以下の一貫性で結ばれたものである。

形態的には口径と底径の比が約２：１で，口縁部はゆるく外反するが，常陸太田市元太田山埴輪窯址[15]や行方郡潮来町大生西第一号墳[16]，新治郡八郷町丸山第四号墳[17]などにみられる，口縁が上部において強く屈曲する例はみられない。突帯数は３本を基本とするようで，透し孔はすべて丸形で，第２段と第３段に２孔一対に施される。調整は外面１次調整のみのタテハケを施したのち，口縁端部と口縁部をヨコナデする。内面は大むねタテ方向のユビケズリを施したのち，口縁部を水平にハケメ調整している。底部調整のなされたものや，黒斑をもつものは認められない。

こうした本墳の円筒埴輪は宍塚第６号墳や千葉県香取郡下総町西大須賀古墳出土例[18]に近いものであり，第１段が他段に比して長いという形態は，特に後者に近似する。そしてこのような諸特徴を備えた円筒埴輪と須恵器との共伴関係をみると，東茨城郡内原町杉崎コロニー古墳群第87号墳[19]や丸山四号墳でTK—10の杯と，久慈郡東海村舟塚第一号墳[20]，西茨城郡友部町高寺２号墳[21]でTK—43の提瓶と，そして大生西第一号墳でTK209～217に比定される短頸壺，杯と共伴している。陶邑窯における編年[22]によれば，これは第Ⅱ型式第３段階から第Ⅲ型式にわたるもので，６世紀中葉～７世紀前半代の年代が与えられよう。

さらに周溝内で共伴した土師器のうち，杯は身が深く，稜が明瞭であり，鬼高式でも古い段階に比定されよう。しかし甕は頸部の屈曲がなく，鬼高式Ⅱ類土器の甕[23]に形態的には近い。

宍塚古墳群は複雑に入り組んだ小丘上に２～４基ずつ群在してグループをなし，それぞれが100～200ｍの距離をへだてて存在する。根本古墳も宍塚古墳群中，最も東に位置する第18号墳と隣接する小丘上に約200ｍの距離をへだてて位置し，これも含めてこれらの古墳はきわめて狭い範囲に密集した状態を示す。第１号墳出土の土師器，第５・６号墳出土の円筒埴輪から，根本古墳とこれらは相前後して造営されたもので，その占地のしかたからも，これらの古墳の間には密接な関係が存在していたことは想像に難くない。

そしてこの古墳群の立地する台地上には他に顕著な群集墳をみることができないし，桜川対岸の台地に占地する古墳群との格差が大きいことから，宍塚古墳群を築造した共同体が周辺地域のなかでも相対的に優位にたつものだったのであろう。それは良好な生産の場を掌握した農業共同体の発展に支えられたものと考えられる。この古墳群の北西に展開する自然堤防を有した沖積地に条里遺跡の存在が知られ，格好の耕地としてはやくから開発されていたことが，そのひとつの傍証となろう。

宍塚古墳群を構成する各グループ間にも，盟主的な２基の前方後円墳と３基の円墳よりなるものや，４基の円墳からなるもの，あるいは独立した１基の円墳からなるものなどの構成内容の相違がみられるし，また円墳相互間にも直径数ｍから30ｍと隔差のあることを指摘でき，共同体内部の複

雑な諸関係を反映していることが予想され，根本古墳の被葬者もそのような共同体内で複雑化したヒエラルヒーに系列化された成員であったと考えられる。

こうした群集墳の展開過程などを地域史のなかで捉えてゆくには，まずひとつひとつの古墳の確かな年代をおさえてゆく基礎作業が先決となることはいうまでもなく，それには埴輪がはなはだ有効であることは川西宏幸氏らにより指摘，実践されている(24)。しかるに，本墳の時期を決定する中心資料となるものが埴輪であるにもかかわらず，逆に土師器や他の古墳出土の須恵器の編年を援用して古墳の編年を行う結果となってしまった。これは近畿地方(25)や身近なところでは，千葉県(26)，栃木県(27)，群馬県(28)などで市民権を獲得しつつある円筒埴輪の編年が本県においてたち遅れをみせているからにほかならない。埴輪編年の意義を知り，畿内の研究者の編年観にすがるだけでなく，その方法論を学び，地域に根ざした研究を行うことがいまこそ必要であることを，内省をこめてささやかに主張したい。

（設楽博己）

註

(1) 遺跡分布はおもに文化庁文化財保護部編集『全国遺跡地図8茨城県』(1980に）よった。
(2) 茨城県教育委員会 (1971)『茨城県桜村土浦学園線花室城跡発掘調査概報』
(3) 土浦市 (1975)『土浦市史』
(4) 突帯により画された部分を口縁部より順に第1段，第2段…と呼称する。
(5) 杉原荘介 (1940)「武蔵前野町遺跡調査概報」考古学11—1
(6) 台地研究会 (1971)「シンポジューム五領式土器について」台地研究19
(7) 田中新史 (1977)「市原市神門4号墳の出現とその系譜」古代63
(8) 杉山晋作他 (1972)『古墳時代研究Ⅰ』
(9) 高崎市教育委員会 (1981)『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告書 第22集
(10) 註6に同じ。
(11) 岩崎卓也 (1963)「古式土師器考」考古学雑誌48—3
(12) 湯川悦夫・加納俊介 (1972)「南関東出土の東海系土器とその問題」小田原考古学研究会会報5
(13) 沼沢 豊 (1977)『東寺山石神遺跡』，滝沢 亮 (1981)「南関東における古式土師器の様相」物質文化36など。
(14) 国学院大学宍塚調査団 (1971)『常陸宍塚』
(15) 茨城県教育委員会 (1962)『太田山埴輪窯址調査概報』
(16) 潮来町教育委員会 (1971)『常陸大生古墳群』
(17) 後藤守一・大塚初重 (1957)『常陸丸山古墳』
(18) 轟俊二郎 (1973)『埴輪研究第1冊』
(19) 茨城県生活福祉部 (1980)『茨城県立コロニーあすなろ地内古墳群発掘調査報告書』
(20) 村松村教育委員会 (1956)『常陸国村松村の古代遺跡』
(21) 西茨城郡友部町高寺2号墳調査団 (1976)『高寺2号墳』
(22) 大阪府教育委員会 (1978)『陶邑Ⅲ』
(23) 八王子市中田遺跡調査会 (1968)『八王子中田遺跡 資料篇Ⅲ』
(24) 川西宏幸 (1977)「淡輪の首長と埴輪生産」大阪文化誌2—4，1978「円筒埴輪総論」考古学雑誌64—2など。
(25) 註24に同じ。
(26) 註18に同じ。
(27) 岩崎卓也・森田久男 (1978)「小山市域の円筒埴輪」小山市史研究第1号
(28) 橋本博文 (1979)「上野東部における首長墓の変遷」考古学研究26—2

8. 横 町 2 号 墳

a. 古墳の位置と環境

横町古墳群第2号墳の測量調査は，昭和54年に筑波大学考古学研究会が新入生トレイニングの一環として行ったものである。

本古墳は新治郡桜村横町に所在する。桜川右岸の標高約25ｍの台地縁辺に位置するこの古墳は，1号墳[1]（円墳，径20ｍ，高2ｍ）とともに横町古墳群を構成する[2]。また本古墳の東南方約250ｍ，小谷を隔てて前方後円墳である金田古墳[3]（全長75ｍ）がある。その南には金田城跡が位置する。

b. 墳　　丘

本古墳の墳頂は標高32.77ｍで，付近の水田面（東南方は条里遺構の本田遺跡[4]である。）との比高は約25ｍである。また，本古墳は北東部を除き，すべてが赤松林である。その他の雑木・雑草は良く刈り取られ，その姿をはっきりと見ることができる。

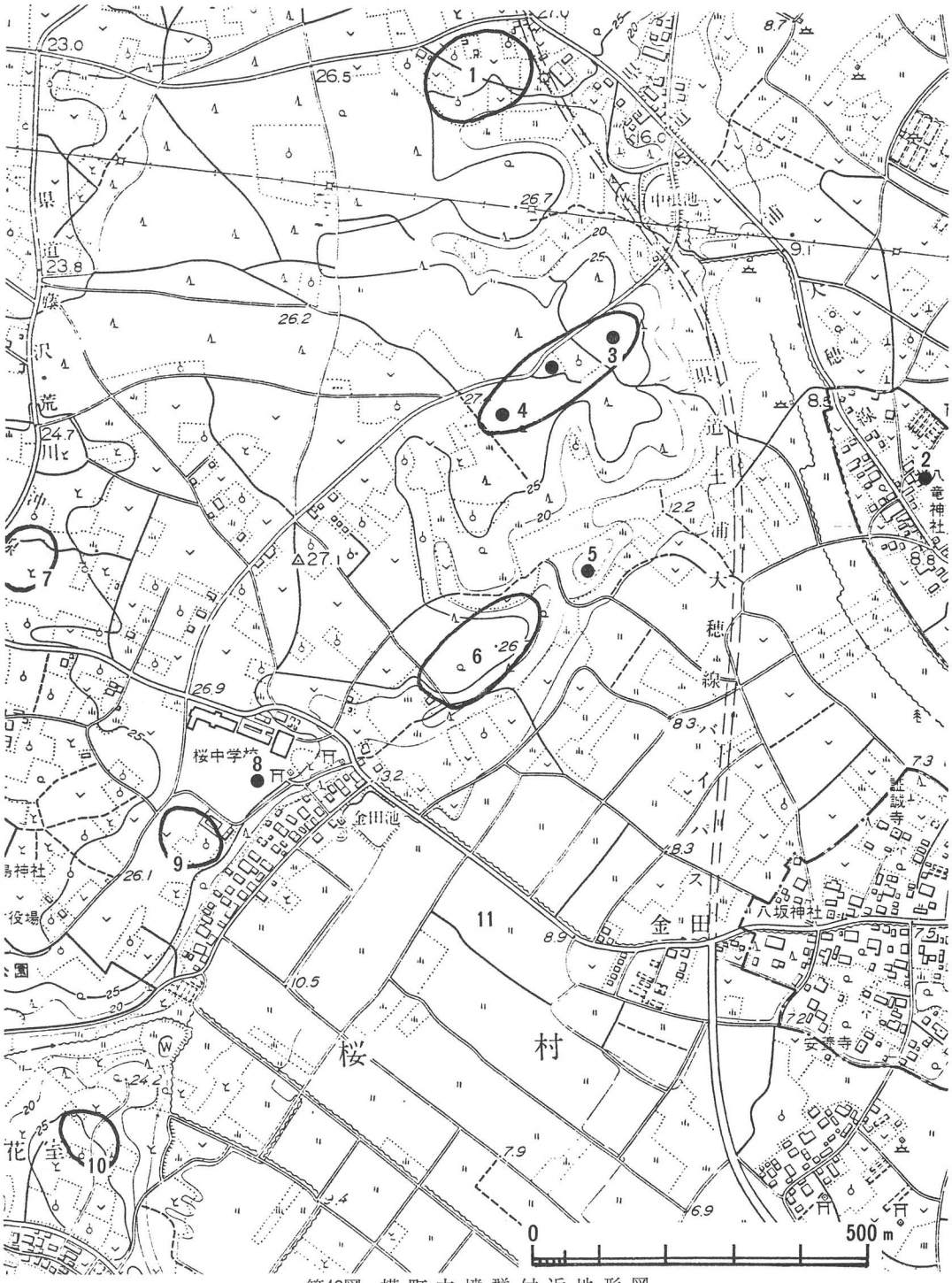
測量図（第43図）の北東部にある崖線は，本墳が載っている台地が，金田古墳との間の小谷へと落ちる部分を示している。古墳の南側は砂利道を隔てて宅地・畑となり，北側には200ｍを隔てて1号墳がある。西側は50ｍ程で，南方桜中学校に至る舗装道路となる。

測量図で明らかなように墳形は円墳で，北東部と南西部の2か所に造り出し状のものが見られる。だが，南西部の張り出しは，ここに見られる大きな穴を掘った際に形成されたものと思われる。地主の言によれば，この穴は第二次大戦中に墳丘に掘った防空壕の痕跡かもしれないという。その点，北東部の張り出しは造り出し状の施設として認められそうだが，この部分だけに杉が植えられている点気懸りである。杉の植林のためにここが削平されたとも考えられるからである。ともかく，この部分が造り出し状の施設として認められるなら，本古墳は帆立貝式古墳ということになろう。しかし，張り出しがやや弱い感もある。

墳丘の西南部から南面にかけては明瞭に標高28.00ｍの等高線が傾斜変換線となる。東部では標高28.50ｍから傾斜が徐々に緩やかになり，標高28.00ｍの等高線の外はほとんど平らとなる。墳丘北東部では標高28.00ｍの等高線の張り出しが明瞭で，その下の等高線も同様な形状を示している。北西から西面にかけては標高28.75ｍから徐々に傾斜が緩やかになり，標高28.25ｍからは一段と緩くなる。西面では標高28.00ｍの等高線が回らない。

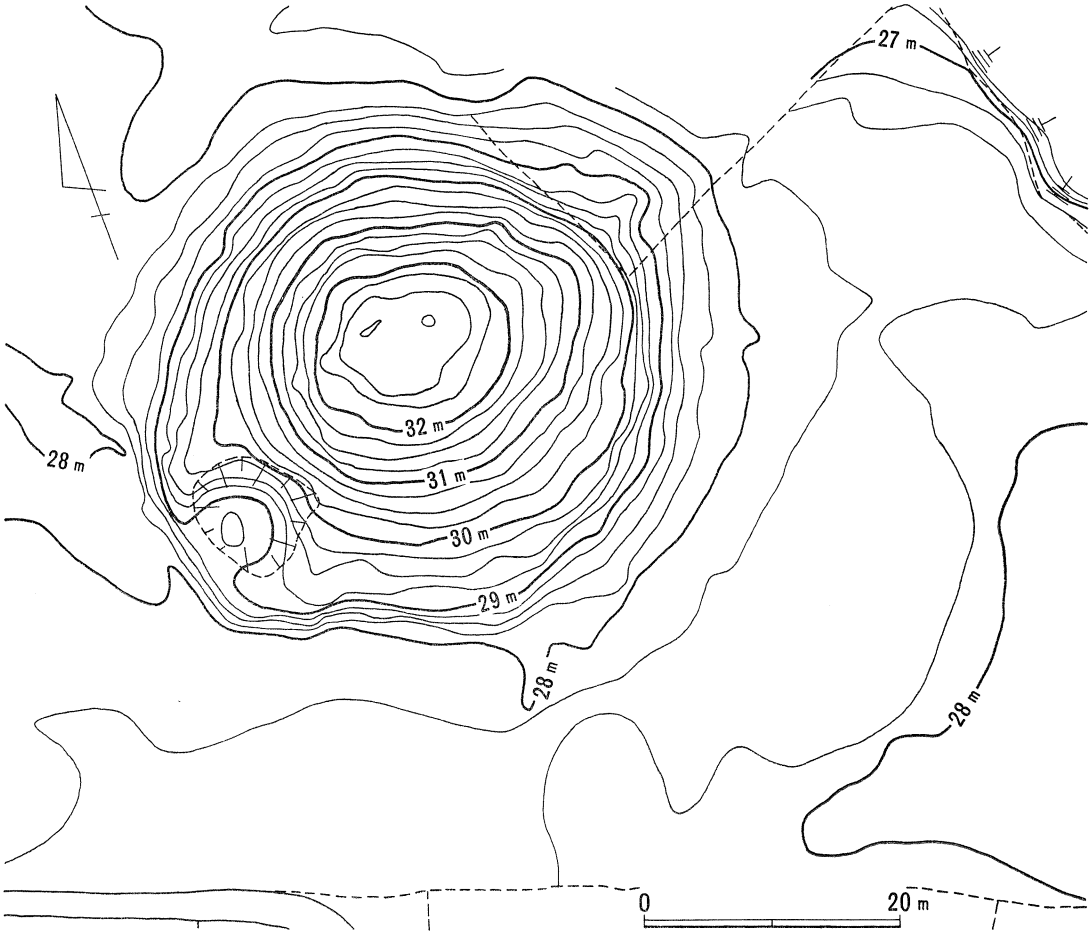
いま墳丘西部は標高28.25ｍの等高線，その他は28.00ｍの等高線を古墳の裾部と認めるなら，その径は張り出し部で50ｍ，短部で46.5ｍとなる。高さは4.64ｍである。

周溝と思われるものが墳丘の東から南部にかけて認められる。標高27.75ｍの等高線が墳頂を中心としてまわっており，さらにその外側に標高28.00ｍの等高線が平行して走っている。2本の標高27.75ｍの等高線の間隔は約17ｍである。外側の標高28.00ｍの等高線を周湟の外壁とすると，墳



第42図　横町古墳群付近地形図

1.旭台貝塚　2.とりおい塚古墳　3.横町古墳群　4.横町2号墳　5.金田古墳　6.金田城跡　7.九重廃寺
8.西坪遺跡(弥生・古墳時代)　9.西坪B遺跡(縄文時代)　10.花室遺跡(縄文・弥生時代)　11.条里遺構



第43図　横町2号墳墳丘測量図

丘中心からここまでの距離は52.5mとなる。この周湟は他の部分では認められない。とくに墳丘北東部の張り出しの前面は谷が入り込み，ここに周湟を設けることは不可能である。南側は道によってさえぎられ，西側は道に向かって徐々に高くなっていくが，周湟となるような等高線の動きはみられなかった。墳丘に葺石・埴輪(5)等はみられなかった。　（北内三喜男）

註

(1) 茨城県教育庁社会教育課（1959）『茨城県古墳総覧』では第2号墳ともども無名墳となっているが，桜村教育委員会の使用例に倣ってこう呼ぶ。

(2) 茨城県教育委員会（1977）『茨城県遺跡地名表』によれば，「横町古墳群」は「前方後円墳1，円墳2」から成り立つとある。この前方後円墳は1号墳と2号墳の間にあるものを指すと思われるが，墳丘が判然としないのでこれが古墳と認めうるか否か問題である。

(3) 註1文献に同じ。

(4) 茨城県教育庁社会教育課（1977）『茨城県遺跡地名表』

(5) 桜中学校の生徒によって採集された埴輪があると聞くが，詳細は不明である。

9. 平沢・山口古墳群

a. 平沢・山口古墳群の立地と環境

関東平野にその優美な姿を誇る筑波山の西を流れる桜川は，西茨城郡北那珂村東辺の鍬柄峠一鏡ケ池に源を発し，雨引・加波・筑波の諸峰から流れ落ちる渓水をあつめつつ，土浦において霞ケ浦にそそいでいる。その左岸地帯は，筑波山系に続く一連の山並みを形成する。その山裾をめぐるようにして，点々と古墳群が続いており，平沢・山口古墳群もその中に位置する。両古墳群の北東側には，椎尾・前峰・国松古墳群，八幡塚古墳，土塔山古墳，満面塚古墳等があり，南側には，小田・小和田古墳群(1)がある。

平沢・山口古墳群（第44図）は，筑波町平沢・山口に所在する。ここは筑波山の南側にのびる支脈の山裾に位置し，桜川の支流の八幡川がつくる谷を境として，相互に隣接している。

両古墳群から望む中台の台地には，多くの遺跡が確認されている。土師器・須恵器の分布地であるハザマ遺跡・山下遺跡・平沢西遺跡，縄文土器から須恵器まで各時代の土器が分布する中台遺跡(2)などがそれであり，各時代にわたって集落が営まれていた様子を物語っている。また，この台地上には，中台廃寺跡・平沢遺跡(3)があり，とくに平沢遺跡は近年の調査で郡衙跡と推測され，付近に大型の石室が露出する中台古墳群もあることから，官衙・寺院・古墳群の関連が注目をあびている。

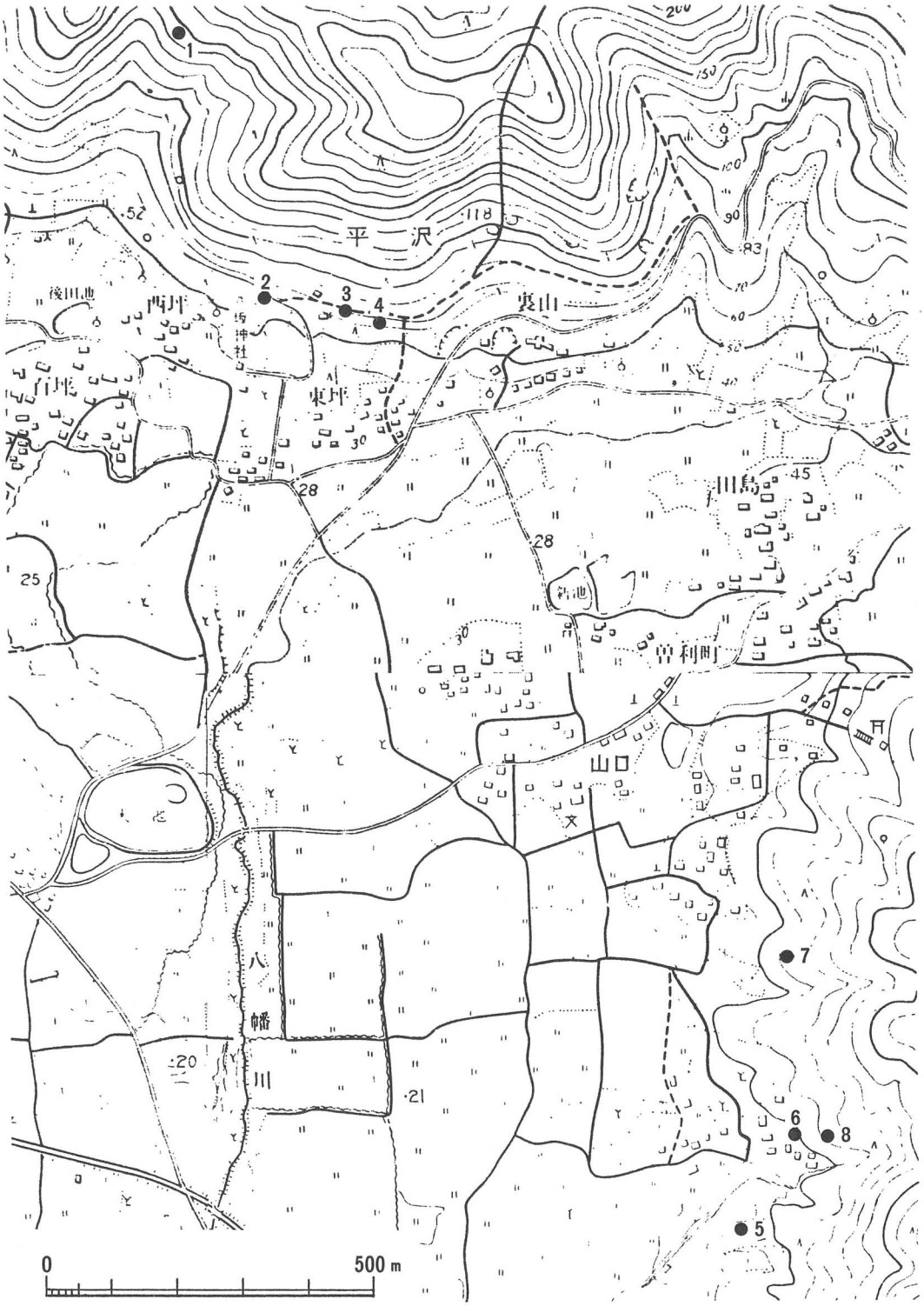
この台地を中心とした地域は，『常陸国風土記』にも触れられている筑波郡に比定されるところで，付近の水田地帯には条里制の遺構も残っており，筑波郡の政治・文化の中心地であったことが窺える。

大学創設後二年目にして結成された考古学研究会は，活動テーマとして地域の考古学調査を掲げた。昭和51年に平沢遺跡の調査を知るに及び，当地区への関心を強め，対象を筑波町周辺に求めた。具体的には平沢・山口両地区の古墳群調査を計画したのである。

調査は同年より3年間にわたり行われたが，交通手段等の条件に阻まれ，必ずしも順調ではなかった。したがってまだ不完全なものでしかないが，旧会員の卒業等による資料散逸を防ぐために，ここに報告するに至ったのである。

b. 平沢古墳群

平沢古墳群は，『茨城県遺跡地名表』No.2150の古墳群である。分布調査の結果，既知の佐都ケ岩屋・開山岩屋の2基と，その他5～6基の古墳の存在を確認することができた。この古墳群は，方墳1基（佐都ケ岩屋古墳）と，6～7基の小型の円墳で構成されていたと考えられる。このうち，方墳の墳丘測量と，すでに開口し，実測可能な4基の石室の実測調査を行った。



第44図　平沢・山口古墳群付近地形図

1.平沢1号墳　2.平沢2号墳　3.平沢3号墳　4.平沢4号墳　5.山口1号墳　6.山口2号墳　7.山口3号墳　8.山口4号墳

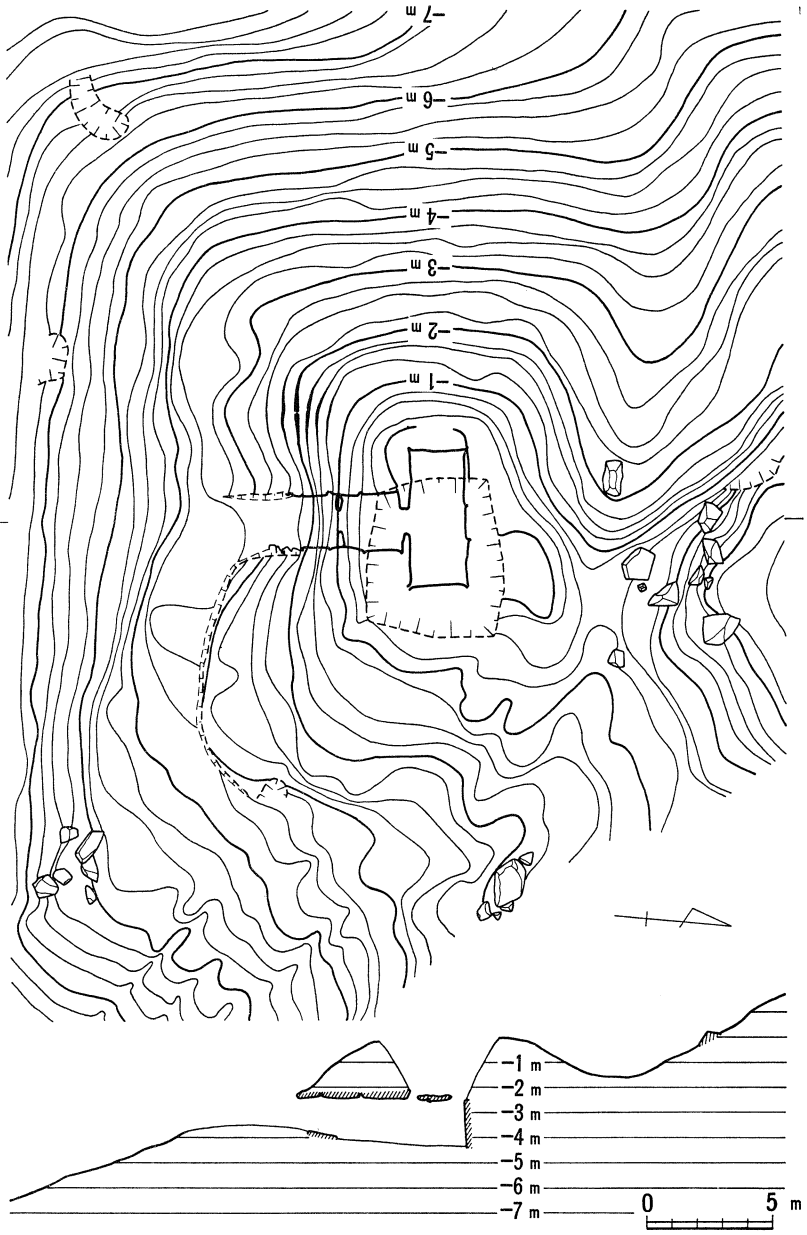
平沢１号墳（佐都ヶ岩屋古墳）（第44図１）　町指定史跡　指定年月日 昭和48年12月12日　所在地 筑波町北条永瀬645　所有者　共同

墳　丘（第45図）

本古墳は，平沢古墳群が位置する筑波山支脈の頂上部に近い南斜面に立地する。標高145*m*と，他の古墳に比較して１基だけ高い位置にあり，眼下に筑波町の水田地帯を見渡すことができる。ゴルフ場造成のための道路によって墳形の一部が破壊されている。また，主体部の石室の天井石が，墳頂の穴から持ち去られており，墳頂の様子を窺うことも困難である。しかし，墳丘の西側・南側は，築造当初の様子を留めている。墳丘測量の結果南辺20*m*，西辺16*m*の長方墳と判明した。

石　室（第46図）

本石室は，S6°Eとほぼ南に開口し，後室・前室・羨道からなる複室構造の横穴式石室である。平面形は，後室が主軸に直交して横長の長方形プランを呈し，これに後室に後室の長さとほぼ

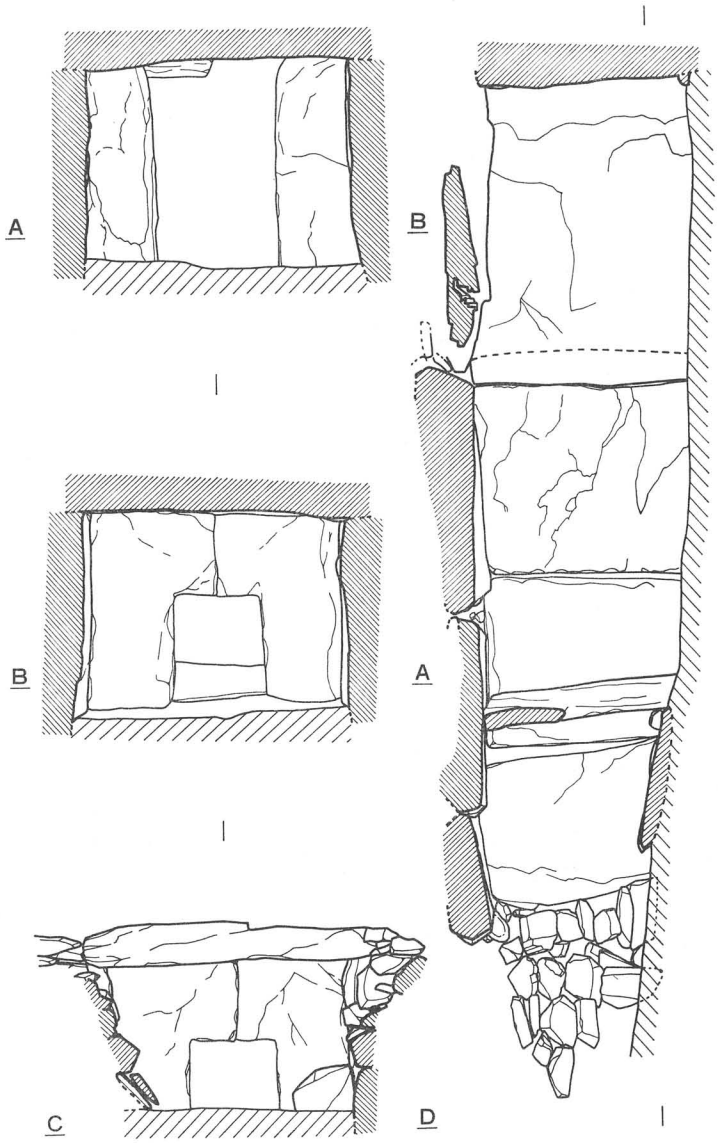


第45図　平沢１号墳墳丘測量図

同じ幅の前室・羨道が続き，「T」字形をなすという特異なものである。石材は，付近で産出し，通称「平沢石」と呼ばれている雲母片岩の大形の石板が使用されている。その板石を床に垂直に立てて壁体を構築している。板石は，表面が平坦に加工され，石と石との接合部もみな直線的ですき間なく，天井石も水平に架構され，石室全体が長方体を二つ「T」字形に組み合わせたようになっている。石室の規模は，全長7.65m，後室の長さ2.15m，幅5.45m，前室の長さ2.50m，幅2.10m，羨道の長さ3.00m，幅2.00mで，現高1.70mを測る。

後室は，3枚の奥壁を左右1枚ずつの側壁からなり，これも左右1枚ずつの袖石で前室と区画している。天井石は右半分が欠失しているが，2枚の大石が架構されていたと思われる。後室内には，右側壁から約2.0mの位置に，側壁に平行して仕切り石（長さ2.25m，幅0.20m，高さ0.30m）が置かれている。

前室と羨道は，左右3枚



第46図　平沢１号墳石室実測図

ずつの板石と入口付近の小型の積み石を側壁とし，ぼ中央に前門をおいて区画している。前門は，側壁・天井石の中に組み込まれず，分離して，接する形で置かれている。したがって前室は，羨道と側壁，天井石の一部を共有している。

玄門は，２枚の大型の板石を袖石としている。一方，前門は逆「Ｌ」字状の２枚の板石をちょうど中央で合わせて，あたかも１枚の板石の下中央に四角の出入口をくり抜いたような形をしている。この前門のつくりは，平沢古墳群の他の石室にも見られ，一つの特徴でもある。また，前門の前には，１枚の板石（1.0m×1.2m）が横になっており，閉塞石と推定され，前門で閉塞されていたことがわかる。

石室に使われている石材すべてが大型の板石で，丁寧に加工されており，また，石室の形態も板石すべてが整然と配置され，整っったプランを示している。本石室が精密な企画性をもって構築された様子が窺え，石室構築技術もかなり高度なものと言えよう。

平沢２号墳（開山岩屋古墳）（第44図２）　所在地　筑波町平沢584

所有者　共同

墳　丘

共同墓地内に立地しているため，この古墳も，墓の造成による破壊と山道によって墳丘はほとんどその姿を留めていない。わずかな墳頂部の様子より，小規模な円墳であったと推定される。

石　室（第47図）

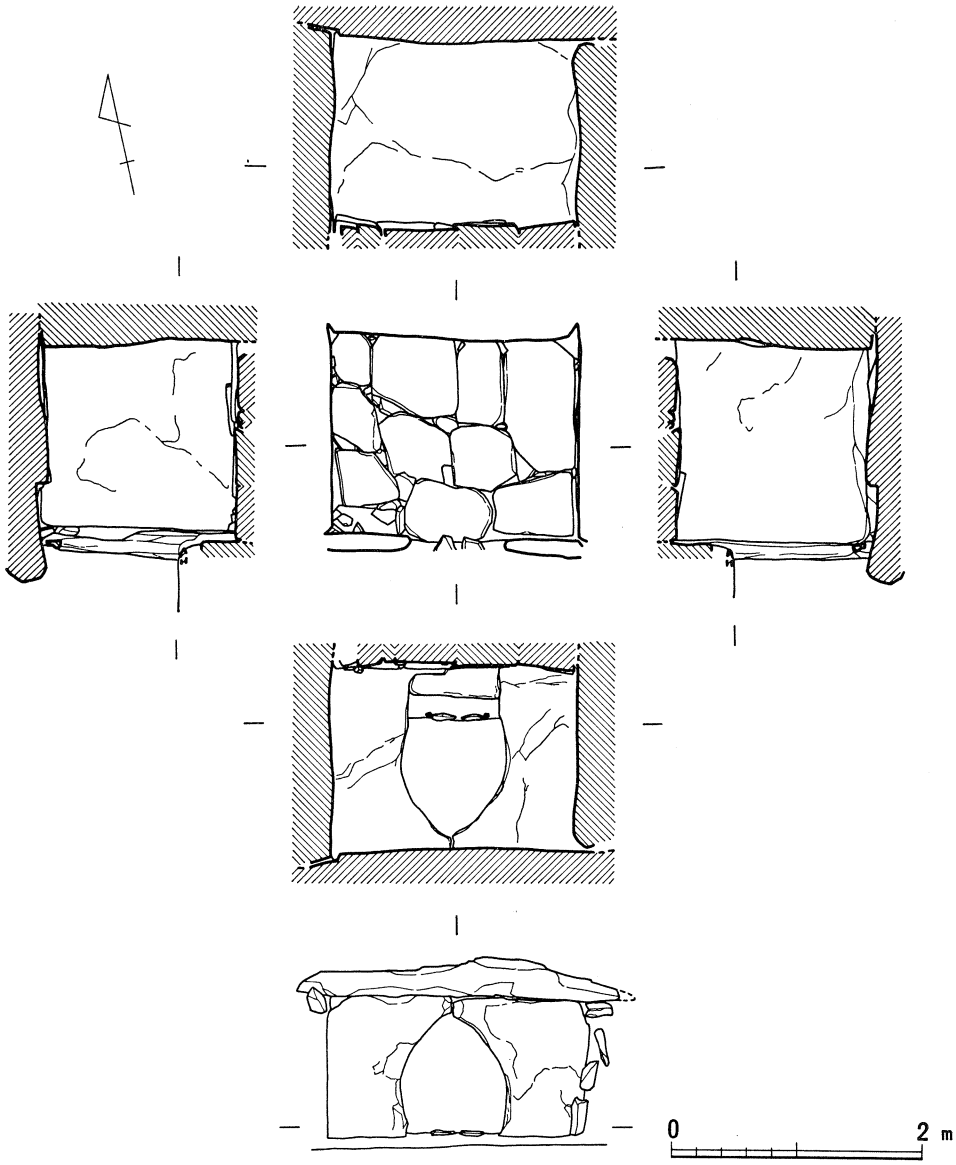
本石室は，Ｓ13°Ｗとほぼ南に開口する。墳丘同様石室も，残っているのは玄室のみで，その他の施設は不明である。

石室の平面形は，正方形に近い横長の長方形で，規模は長さ1.58m，幅1.95m，高さ1.60mを測る。石材は１号墳同様，雲母片岩の板石を使用している。奥壁，側壁，天井石ともすべて１枚の板石で構築している。壁体すべてがほぼ垂直に立てられ，接合面もすき間なく，小型ながらも整った形態をしている。

玄門は，１号墳前門同様に２枚の逆「Ｌ」字形の板石を中央で合わせるつくりである。ただ入口の形状が四角形ではなく合掌形になっており，板石の間には，床面上で0.25mの高さの板石がかみ合わせてあるところが異なる。

床面には一面に敷石が確認された。石材は壁体と同質のもので，約0.5×0.7m位の大きさの板石を10枚ほど敷きつめ，すき間には小石を充填して平坦な床面をつくっている。床面のレベルは，現状ではまわりの土地よりも0.5m程低くなっているが，築造当初からのものかは定かではない。

なお，この石室から，以前に「一字一石経」が出土したそうで，石室開口後，経塚として二次利用された形跡がある。その際に石室形態に手が加えられた可能性もあり，玄門の合掌形もこの時に穿たれたものかもしれない。



第47図　平沢2号墳石室実測図

平沢3号墳　所在地　筑波町平沢裏山609

所有者　前島　次男

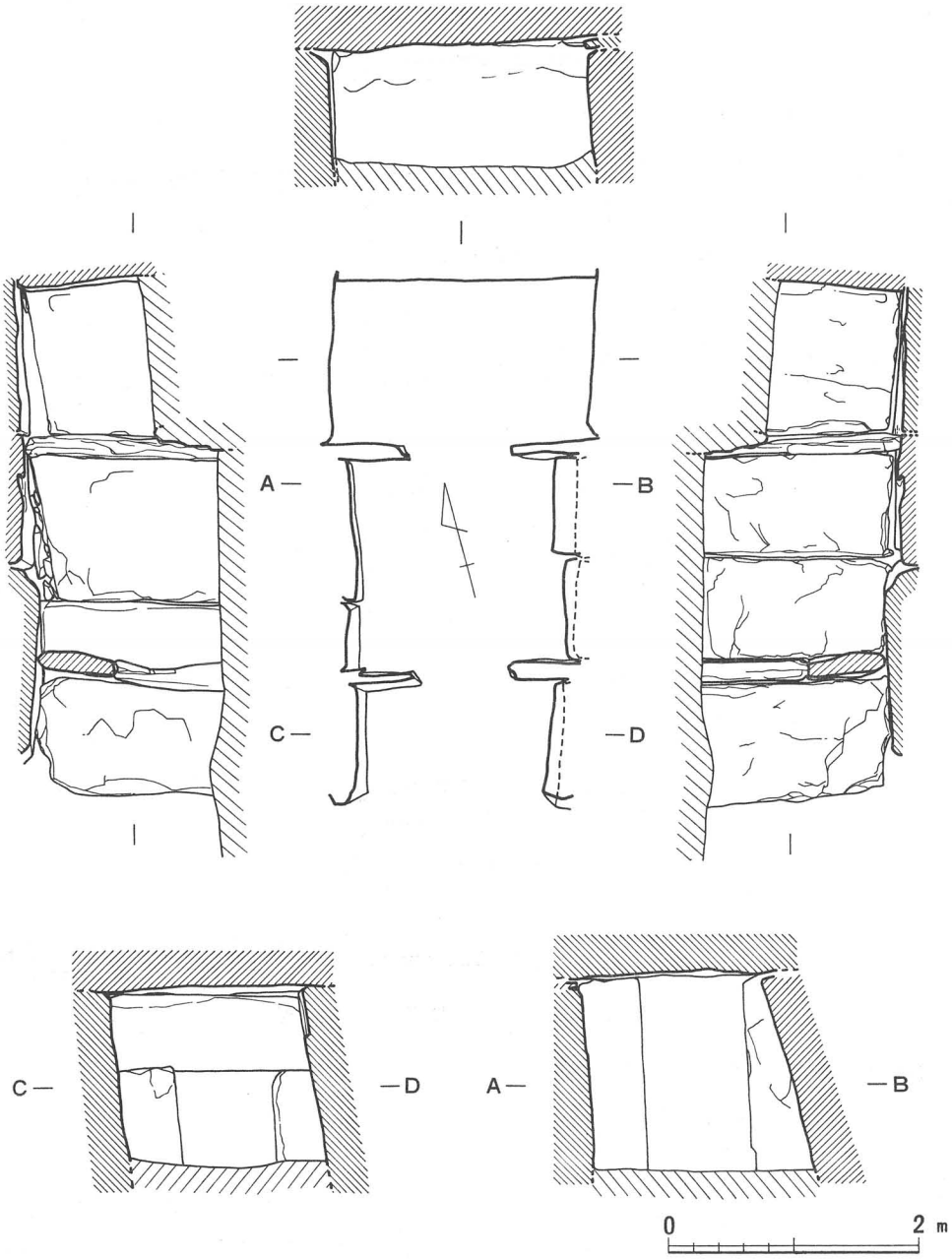
墳　丘

墳丘は，山中の林道から下方に，その丸くこんもりとした様子がながめられるような，傾斜地にある。墳丘の横を林道に抜ける道が通っており，また，玄室に地蔵が安置されていることから，古くより開口し，二次利用されていたらしい。墳丘の保存状況は，良くないが，現在の形状から推定

して，直径14〜15ｍの円墳であったと思われる。

石　室（第48図）

本石室は，S15w°とほぼ南に開口し，後室・前室・羨道からなる複室構造の横穴式石室である。後室は，床面に玉砂利が敷かれ一段高くなっており，その上に地蔵仏が安置されているので実測不



第48図　平沢３号墳石室実測図

可能であった。ほかは，前室・羨道の右側壁がやや内側に傾いているが，原形を保っていると言えよう。

石室の平面形は，後室がやや横長の長方形プランを示し，続く前室・羨道は同じ幅（後室より0.3m狭い）で，前門によって区画され，前室は，ほぼ正方形で後室より規模が大きい。後室より羨道まで，幅に大きな違いがなく直線的で，タテ長の長方形に門を二つ置いて3室に区画したような形態ともとれる。

規模は，全長4.15m，後室の長さ1.30m，幅2.06m，前室の長さ1.65m，幅1.76m，羨道の長さ1.24m，幅1.60mを測る。高さは1.60mで，後室から羨道まで変化はない。石材は，1，2号墳同様雲母片岩の板石を使用している。後室は，奥壁，側壁，天井に1枚ずつ，前室は，側壁に2枚ずつ，羨道は側壁に1枚ずつで，前室・羨道に2枚の天井石（前室は1枚を羨道と共有）が架構されている。

玄門は2枚の袖石よりなり，前門は0.7mの高さの袖石とその上に楣石を横に渡している。玄門・前門ともに，側壁の構築に組み込まれている。

この石室は，平沢古墳群の中で他の石室と前門のつくりが異なり，また同じ石材ではあるが前門の楣石などは，のみ痕のような加工痕が見られ，きれいに平坦に仕上げてある。

以上のような点で特徴があると言えよう。

閉塞・床面の状況は不明である。

平沢4号墳　所在地　筑波町平沢裏山618

所有者　相沢勘市

墳　丘

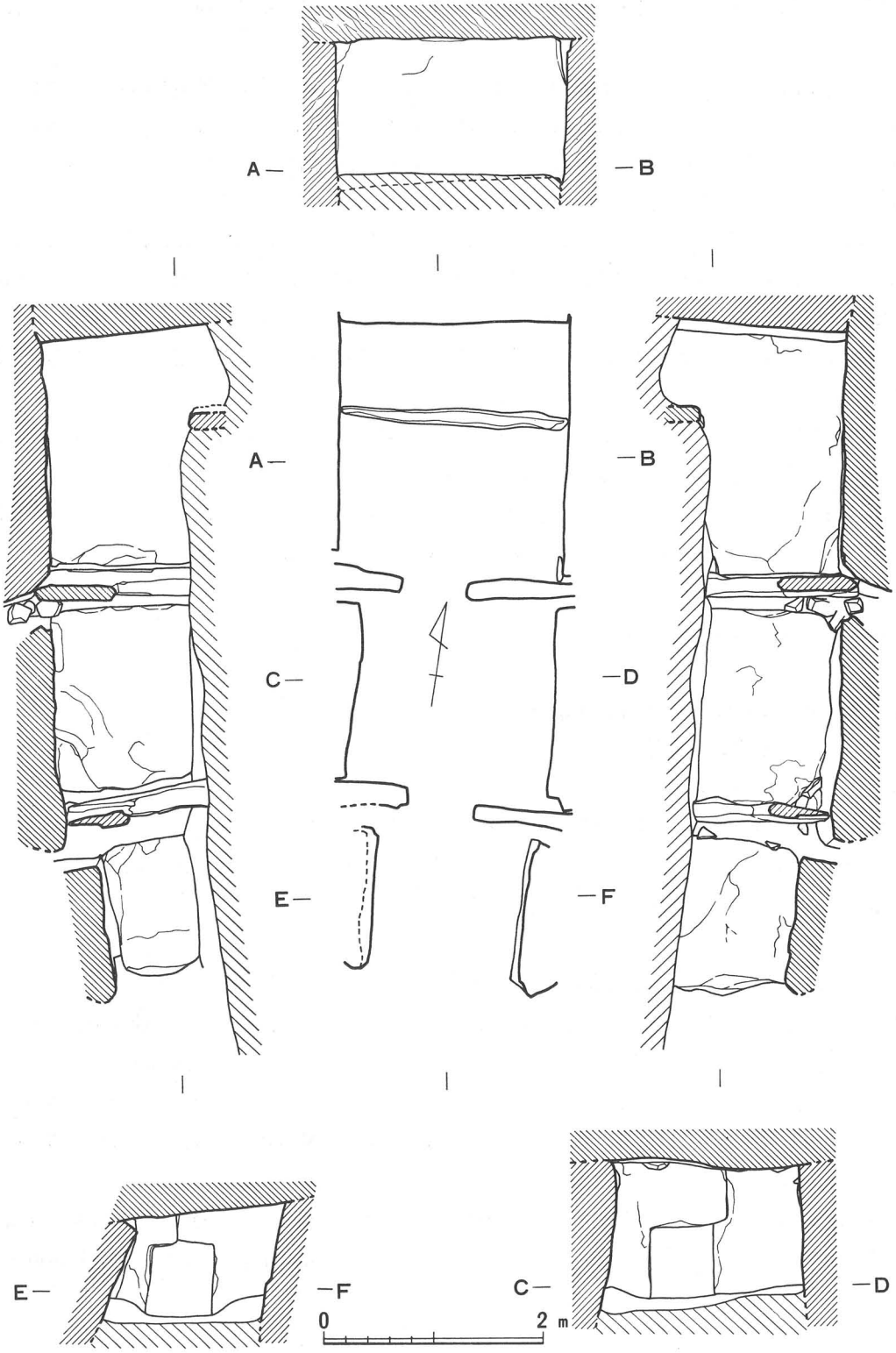
墳丘は傾斜地にその土盛りを残しているが，そばに山中へ通じる通り道があり，まわりが畑になっているため，かなり削られている。しかし，現在の形状により，直径16～18mの円墳であることが推定できる。

石　室（第49図）

本石室は，S9°Eとほぼ南に開口し，後室・前室・羨道からなる複室構造の横穴式石室である。現状は，羨道の両側壁が大きく右に傾き，それにつれて前門もやや傾いている。後室を除くと保存状況にも問題があり，天井石の間隔が開いてしまい，土砂や粘土状のものが露出している。

石室の平面形は，後室・前室ともに，正方形に近いややタテ長の長方形を呈し，後室・前室・羨道の順で少しずつ幅がせばまり，多少ではあるが規模の違いも見られる。石材は，雲母片岩の板石を使用し，構築方法は，平沢古墳群の他の石室とほとんど変化がないと言える。

石室規模は，全長6.15m，後室の長さ2.30m，幅2.10m，前室の長さ2.00m，幅1.85m，羨道の長さ1.70m，幅1.45mを測り，高さは後室で1.60mを測る。天井は水平で，石室の高さは羨道まで同じ高さであったと考えられる。

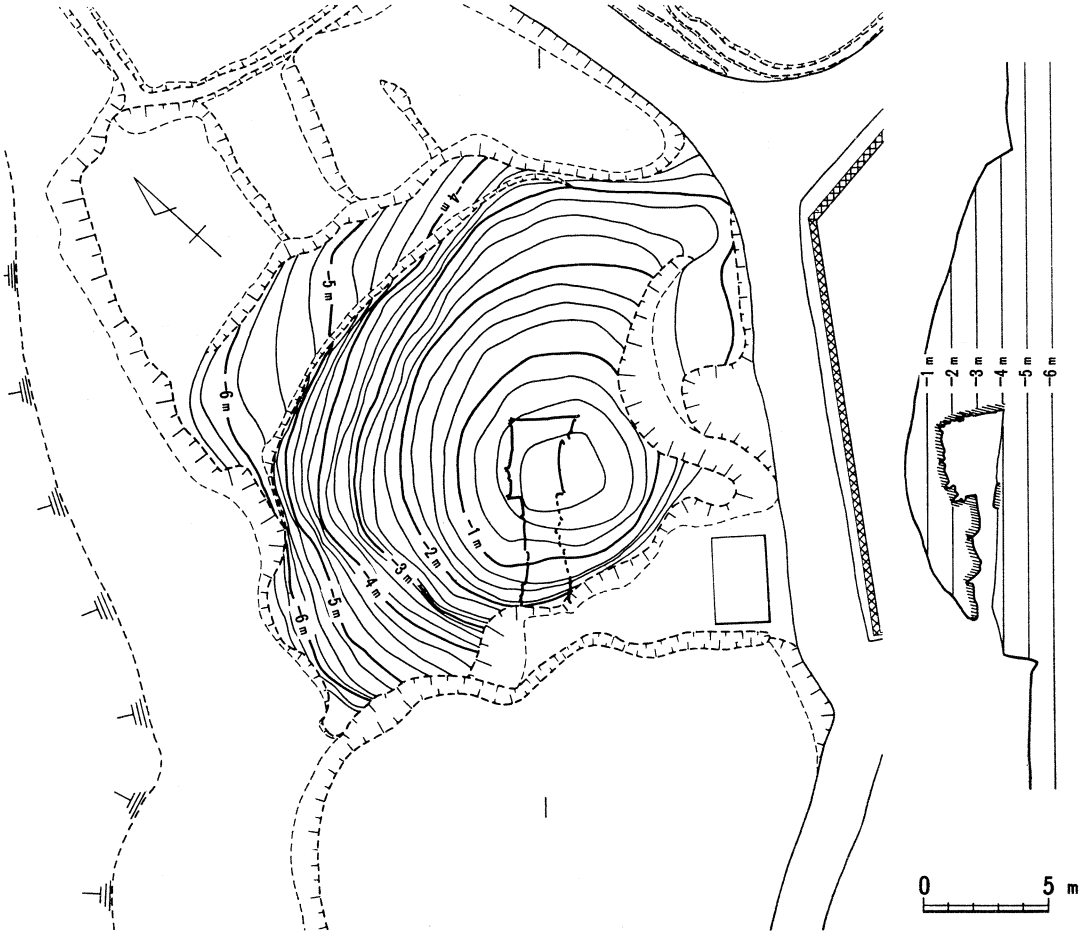


第49図　平沢4号墳石室実測図

後室は，奥壁・側壁・天井石ともに一枚石よりなり，特にどの板石も稜もないくらいに表面が平らに加工され，奥壁と側壁の接合面もすき間が見えない程の精緻なつくりを見せている。前室・羨道も，側壁・天井石はすべて一枚石で構築されている。

玄門と前門は，ともに平沢1号墳に見られるような形状である。逆「L」字状の板石を2枚合わせて四角形の入口をつくっている。入口の大きさは，0.60m×0.56mと同じ大きさで同一の企画で設計されたものであろう。ただし，玄門においては，同形の2枚の板石を中央で合わせるのではなく，一方の板石の上部を長く張り出し，それをもう一方の板石に「L」字状の切り込みを入れて支える，という切り組み積みの構造をとり入れて，前門よりも強度の点で工夫されている。

後室の床面には奥壁から0.7mのところに奥壁と平行して仕切り石（長さ2.06m，幅0.15m）が置かれている。かなりの土砂がはいっているので，現在では床面から0.15mの高さだが，0.4〜0.5m程の高さがあったと推定される。付近に敷石のような小型の板石も残っていることから，石棺状

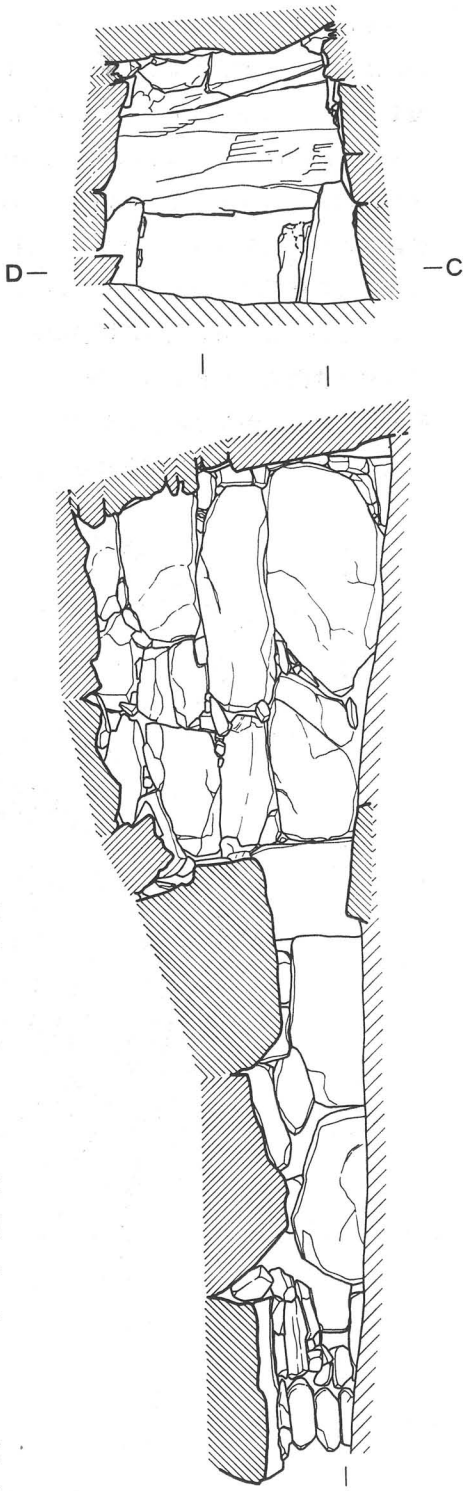


第50図　山口1号墳墳丘測量図

の施設があった可能性もある。この仕切り石は，石室内をちょうど2：1に分ける位置にある。

平沢古墳群の3基の複室石室の中で，この石室のみが玄門・前門が同じ形につくられ，天井石も後室・前室・羨道に1枚ずつと，平面・立面（側壁・天井石）ともに区画がはっきりとしている。

敷石・閉塞の状況は不明である。



c. 山口古墳群

山口古墳群は，『茨城県遺跡地名表』No.2982の古墳群である。山中の傾斜地に分布しており，約10基くらいの古墳で構成されていると考えられる。いずれも墳丘の破壊の度が激しく，墳形の確認は困難であった。このうち，実測可能な石室を持つ4基を調査した。

山口1号墳　所在地　筑波町山口新寺326
　　所有者　宮川栄一郎

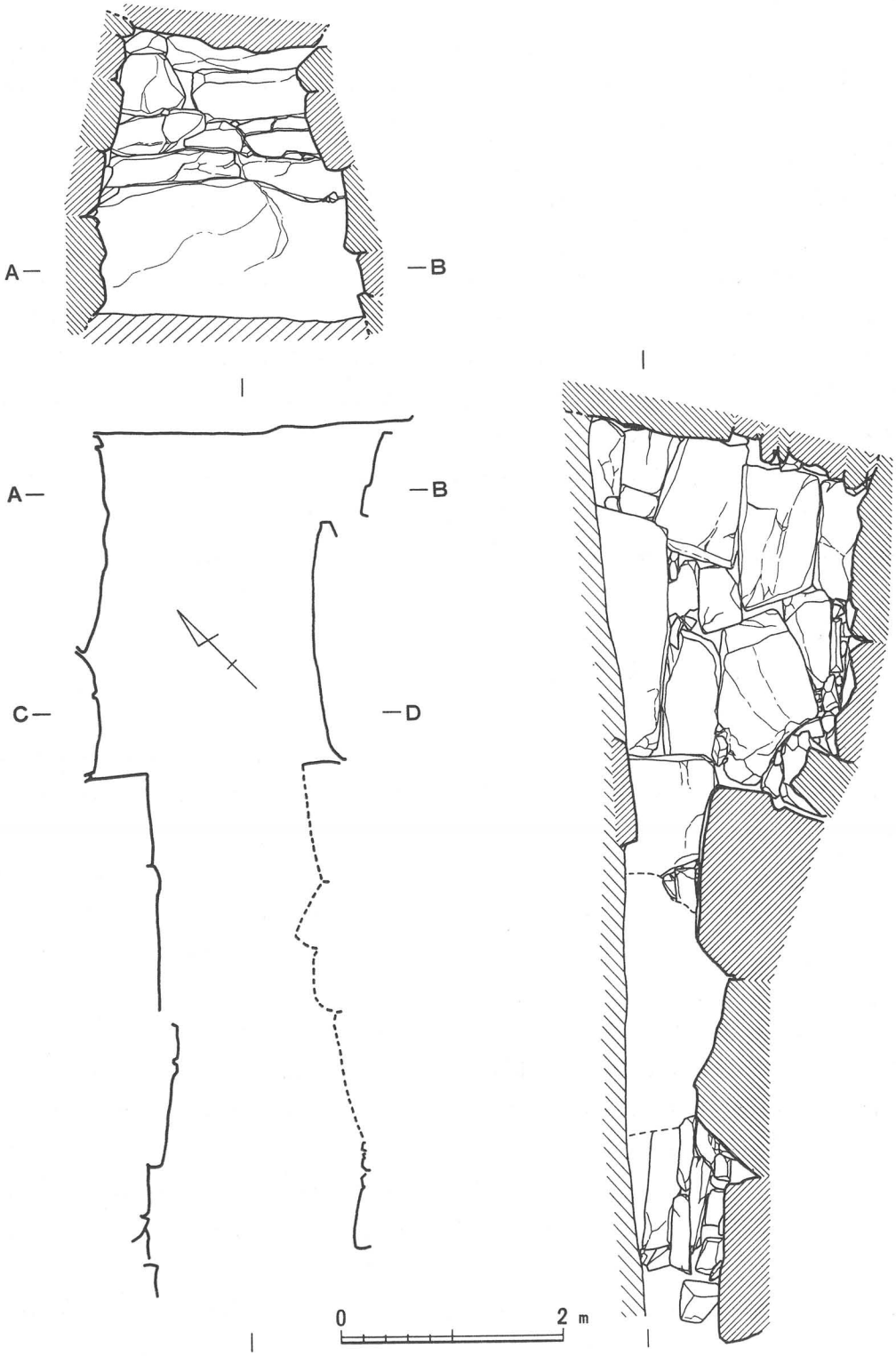
墳　丘（第50図）

本古墳は，山口地区の古墳のなかで最も平野部に近い山麓の傾斜地にある。墳丘は保存状態が良い方で，墳形を留めている。しかし，すぐ東をめぐっている道路や畑によって裾はかなり削られている。墳丘測量の結果，直径23mの円墳と判断した。

石　室（第51図）

本石室は，S47°Wと南西に開口し，両袖型の単室構造の横穴式石室である。現状は玄室の右側壁の積み石が内側に傾き，土砂がはいり込んでいる。また，羨道は，土砂の二次堆積が激しく，羨道側壁の状況など不明な点が多い。

石室の形態は，両袖型素形の玄室と，長い羨道で構成され，平面形は玄室がややタテ長の長方形を呈し，羨道は玄室の長さの約1.5倍近くの長さで，入口に向かってやや広



第51図　山口1号墳石室実測図

がりを見せている。

石材は花崗岩で，付近に産出するものである。使用されている石は，大型のものが多く，特に玄室内の腰石・袖石・天井石は大きい。また，大部分の石が自然面を利用して積まれており，一面のみ加工されている石もあり，自然石及び割石の乱石積みの石室と言える。しかし，袖石のみは表面の二面が直角に削り出され，意図して加工されたものであることがわかる。

石室の規模は，全長7.80m，玄室の長さ3.05m，幅2.80m，高さ2.50m，羨道の長さ4.75m，幅は両壁部で1.35m，入口で1.75mを測る。

玄室は，奥壁・側壁ともに大型の石を腰石とし，上部に3～4段に横積みをしている。特に，奥壁の腰石は幅3m以上の最も大型のものである。上部に行くにしたがって奥壁で0.5m，側壁で0.4m程内側にはいるが，意識した持ち送りは見られない。壁体は横方向の目地が比較的明瞭で，奥壁の腰石と袖石の高さがほぼ等しく，側壁もこの高さで，横方向の目地が通る。天井石は玄室に3石が架構され，袖部に向かってやや下がっている。

羨道は，入口近くの割石の4段程の横積みを除くと，これも大型の石が用いられ，2～3石を並べている。天井石は3石架構され，玄室より約1.5m低く，段差がある。

奥壁近くの床面に，掌大の割石が散乱していることから，敷石の存在も窺える。

山口2号墳　所在地　筑波町山口新寺373

所有者　杉山勝雄

墳　丘

本古墳は南側に民家が建てられ，そのために墳丘のかなりの部分が削られ，主体部の石室入口付近も破壊されているようである。墳形は，一部残存状態の良いところから判断して，円墳であったと推定される。

石　室（第52図）

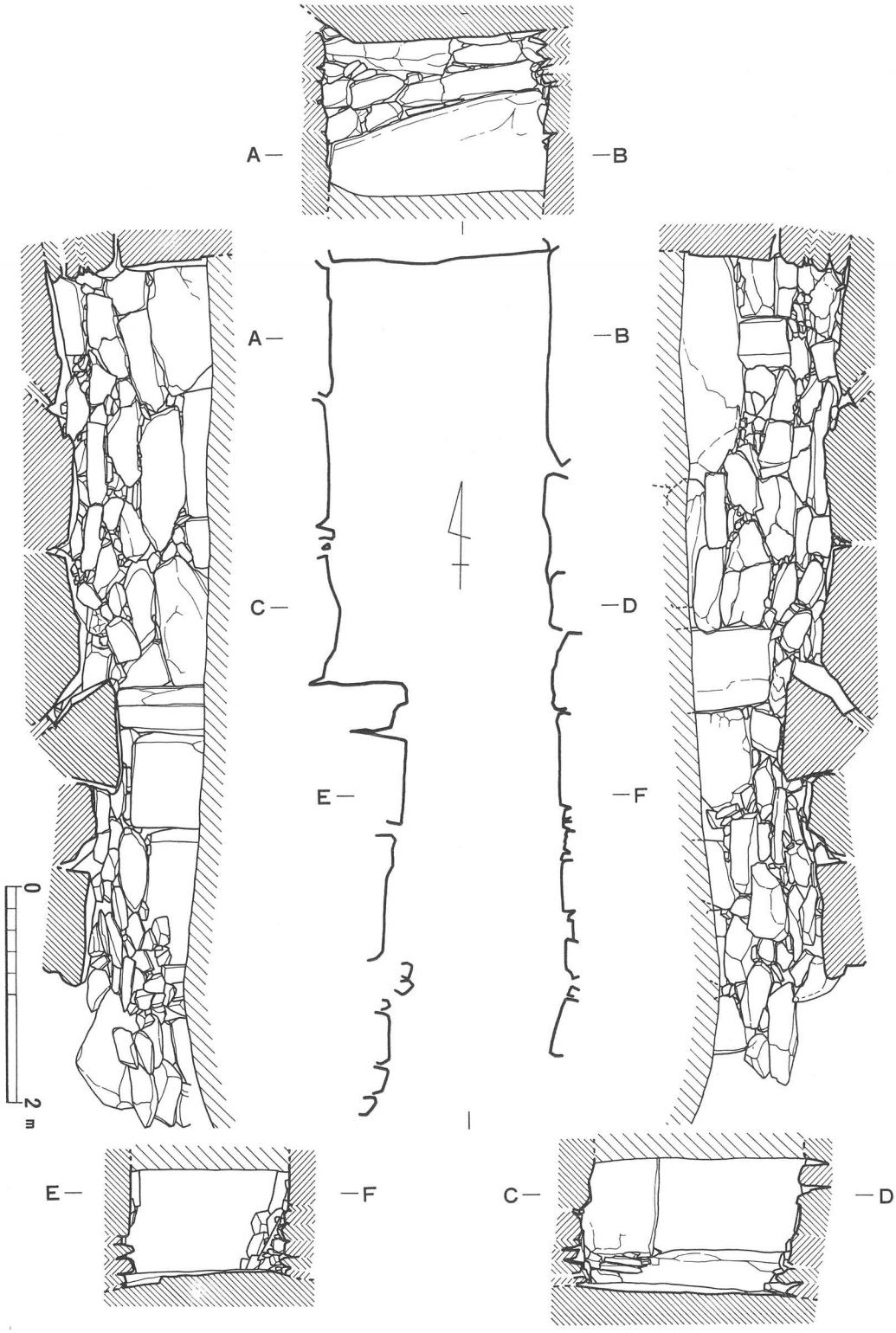
本石室は，S2°Eとほぼ南に開口し，左片袖型の単室構造の横穴式石室である。入口付近の積み石が多少崩され，落石の見られる他は，土砂もそれほど堆積しておらず，ほぼ築造時の原状を保っている。

石室の平面形は，左側に袖を持つ片袖型のプランで，玄室はタテ長の長方形を呈し，それに玄室の長さとほぼ同じ長さの羨道が続く。羨道の幅は，片袖部と入口付近とでほとんど変化ない。

石材は，山口1号墳同様，花崗岩で，使用されている石は，1号墳よりやや小ぶりなものが多い。自然石及び割石の乱石積みで壁を構築している。

石室の規模は，全長7.90m，玄室の長さ3.90m，幅2.00m，羨道の長さ3.95m，幅1.40m，高さ1.50mを測る。袖部の所で天井は1段低くなるが，玄室・羨道ともその他の部分では水平で，高さもほぼ一定している。

玄室は，奥壁・側壁とも，大型の石を腰石として，上に4～6段に横積みをしている。奥壁は，



第52図　山口２号墳石室実測図

幅2.00mを測る台形上の大石を腰石とし，3～4段に横積みし，すき間には小石が充填されている。奥壁は上部にも大型の割石が積まれている。左右両側壁は，奥壁に近い位置に最も大型の腰石を置き，5～6段に自然石，割石の平坦な部分を内側にして，横積みされている。石材は上部に行くほど小型化し，すき間をうめるのに多くの小さい割石が使われている。右側壁では，多くの石が横積みなのに対して，2石ほどタテに置かれているものがある。特に左側壁の片袖部に対称の位置に，立てられている四角形の石は，側壁の中にうめられてはいるものの袖石を意識したものと考えられる。壁体は，横方向に積み方の規則性が見られ，袖石（右側壁では袖石に対応する立石）の高さで玄室の石積み全体に目地が通る。

羨道も玄室に近い位置では大型の石を腰石として，玄室の石に比して小型の石を積んでいる。入口に向かって石はさらに小型化している。壁体は，玄室を羨道もほぼ垂直で意識的な持ち送りは見られない。

山口3号墳

所在地　筑波町山口小山尻1888

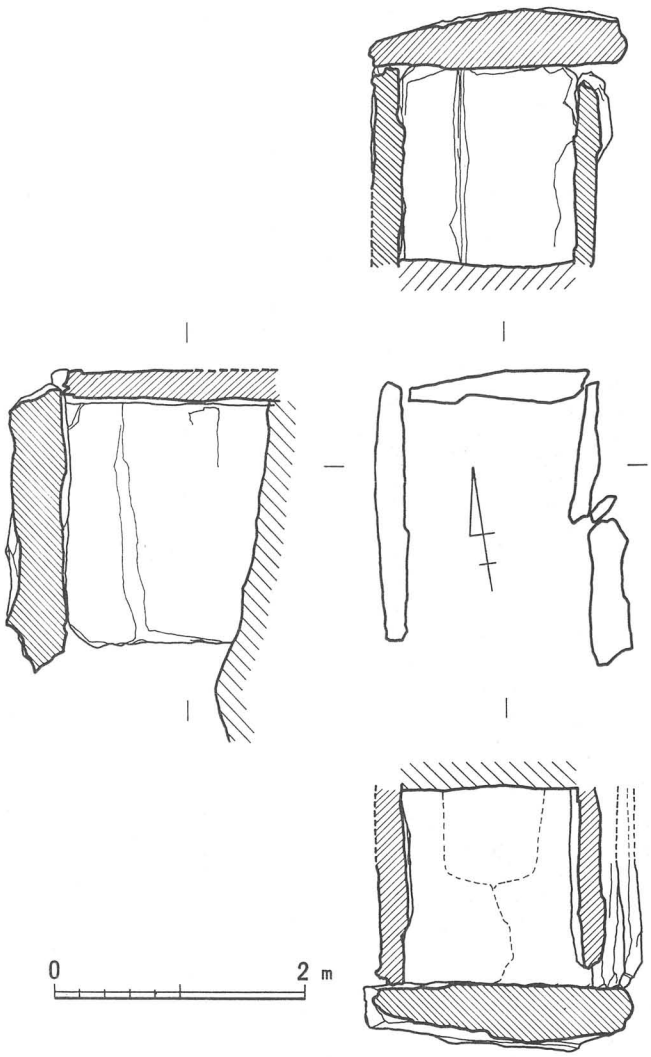
所有者　鴻巣源太郎

墳　丘

本古墳は，ミカン畑の中にあり，墳丘はまったくなく，石室のみがその石膚を露出した状態で放置されている。したがって墳丘の状態はまったくわからない。

石　室（第53図）

本石室は，S9°Wとほぼ南に開口する横穴式石室である。玄室のみが残っている。平面形は，タテ長の長方形プランを呈し，規模は，長さ2.10m，幅1.35m，高さ1.60mを測る。石材は雲母片岩の板石を用い，壁体の構築状態は，平沢古墳群の石室と同様である。



第53図　山口3号墳石室実測図

奥壁に１枚，側壁に２枚ずつを立て，その上に大型の一枚石を天井石として架構している。

石室入口付近に，「Ｌ」字形の板石が１枚倒れていた。大きさもこの石室の入口に合い，平沢古墳群の石室に見られるような門構造になっていたと推定される。

山口４号墳　所在地　筑波町山口小山尻1897―３

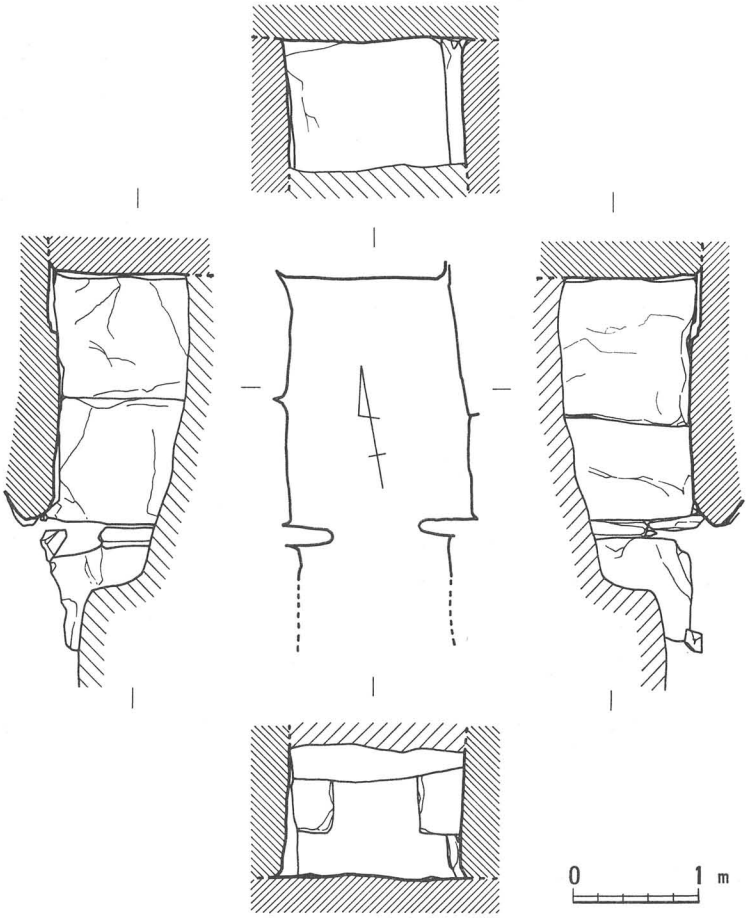
所有者　常陽興産

墳　丘

本古墳の墳丘は，大部分が崩れ，墳形確認は困難であるが，小型の円墳であったと推定される。

石　室（第54図）

本石室は，Ｓ9°Ｗとほぼ南に開口する横穴式石室である。玄室と入口の門構造，それに続く羨道の側壁の一部が残っている。土砂の流入が激しく不明な点が多い。平面形はタテ長の長方形プランを呈し，規模は玄室で，長さ2.00ｍ，幅1.40ｍ，高さ1.10ｍを測り，残っている部分で全長3.00ｍ



第54図　山口４号墳石室実測図

を測る。石材や壁の構築状態は，山口３号墳同様，平沢古墳群の石室と共通する。玄室は，奥壁に１枚，側壁に２枚ずつの板石を用い，大型の一枚石を天井石として架構している。

玄門は，袖石のみが残り，両側壁から0.40ｍほど張り出している。おそらくこの袖石の上に板石の楣石が横に渡してあったと考えられ，平沢３号墳の前門と同じつくりであったろう。

羨道は，現状で長さ0.90ｍ，幅1.20ｍを測る。側壁に１枚ずつの板石を残している。板石の高さは，玄室の側壁と同じ高さである。

d. ま と め

今回の調査は，石室実測であったため，石室構造の現状を述べるに留まるが，提起される２，３の問題点に触れてみたい。

調査を行った平沢・山口両古墳群の８基の古墳の横穴式石室は，石室形態・規模等多くの違いはあるが，雲母片岩の大型の板石使用の石室と，花崗岩の割石・乱石積みの石室と，石材によって二つに大別することができる。

花崗岩の割石・乱石積みによる石室は，山口１号墳・同２号墳である。両石室で注目すべきことは，両袖型・片袖型素形という関東地方においては古い要素とされる平面形を持つことである。また，天井石の架構において羨道部の天井石が玄室よりも低く段差があり，特に山口１号墳では，1.50ｍもの差となっている。これは，畿内地方では，この種の石室に一般に見られるものだが，関東地方では，天井石が羨道部で変化をせずに，玄室より一直線状[4]になっているものが多く，注目すべき要素の一つと言える。県内の類例では下記のものがあげられる[5]。

常陸太田市　幡山26号墳[6]（両袖型素形）

新治郡八郷町　丸山４号墳[7]（片袖型素形）

丸山４号墳石室は，６世紀中葉に比定され，初期横穴式石室とされている。袖部に不明な点が多いが，側壁は割石・乱石積み・通目積みで，石材は山口の２石室のものより小ぶりである。また，墳形は前方後円墳（全長35ｍ）である。関東地方の初期横穴式石室古墳は，墳形は主に前方後円墳で，石室形態は両袖型（片袖型）素形のものが多い[8]。この点から山口１・２号墳も石室は古い要素を持ちながらも，墳形が円墳であり，時期は丸山４号墳よりさかのぼらないと考えられる。

雲母片岩の板石による石室は，平沢古墳群の４石室と山口３・４号墳である。片岩系の板石は，筑波山を産出源として茨城県南部の古墳の内部主体に多く利用され，箱式石棺や横穴式石室の石材となっている。この６石室で，注目される点は，箱形を呈する石室形態，複室構造，玄門・前門の構造などがあげられる。茨城県内でも筑波山や霞ケ浦周辺に，この種の石室のまとまった分布が見られ，下記のような類例がある。

鹿島郡玉造村　大日塚古墳[9]（前方後円墳40ｍ）

新治郡玉里村　岩屋古墳[10]

同　下玉里　岡岩屋古墳[11]

新治郡八郷町　兜塚古墳[12]
新治郡出島村　稲荷山古墳[13]
筑波郡筑波町　小田古墳[14]
同　　中台古墳
真壁郡関城町　船玉古墳[15]

これらの古墳の石室は，平面形・規模等に違いはあるが，平沢・山口古墳群の石室と同じ構築状況をしめす。

また，上記の兜塚古墳・稲荷山古墳・小田古墳・船玉古墳の4古墳の石室は複室石室である。県内の複室石室は，もう1例，猿島郡五霞村穴薬師古墳[16]が確認されているが，これに平沢1・3・4号墳を加えると，県内の複室石室は8例となり，そのうち7例が同質の石材を用いた同じ構造の石室ということになる。この地域の複室石室研究の上でこの種の石室が大きな位置を占めることがわかり，この種の石室の変遷が，複室石室出現の鍵を握るものと考えられる。

複室石室を構成する上で重要な門構造については，板石使用の石室の場合，なんらかの門構造がないと閉塞が困難になると考えられ，単室で門の存在が不明なものも門が付いていたと考えてさしつかえないと思う。平沢・山口の石室の玄門・前門の構造で特徴的なことは，逆「L」字状の2枚の板石を合わせたものだったが，これは，県内の類例が確認できず，この地域独特のものと考えられる。

また，平沢1号墳・4号墳の玄室内の仕切り石は，船玉古墳や兜塚古墳にもあり，これもこの種の石室に付随する施設の一つと見ることができる。

板石使用の石室を持つ古墳の中で，大日塚古墳は6世紀中葉のものとされ，初期横穴式石室古墳の部類に入れられており，稲荷山古墳・船玉古墳は7世紀代のものとされている。石室構築技術に目立った差異はなく，石室から明確な時期差はとらえられないが，古墳の年代比定では，かなりの幅がある。平沢・山口地域の古墳は，方墳・円墳という墳形や，石室形態に地域的な特異性が多く見られるので，これらを新しい要素ととらえていいだろう。

以上のように石室を二つに大別し注目すべき点を述べてきたが，ここで平沢・山口両地域において考えてみよう。今回調査した古墳の近くの台地で，昭和56年3月に甲山古墳の発掘調査がなされ[17]，内部主体に二つ箱式石棺を持つ6世紀前半の古墳であることが判期した。当地域の横穴式石室は，これに続くものと考えられ，山口1・2号墳と平沢古墳群，山口3・4号墳の石室構造の違いは時期的な差としてとらえてさしつかえないだろう。

甲山古墳に続く時期に，割石・乱石積み石室の山口1・2号墳が出現し，その後，板石使用の石室を持つ平沢・山口の他の古墳が続くという時期的変遷が考えられる。

なお，当地域の複室石室の問題や，くわしい時期的検討は今後の課題としたい。（寺内のり子）

註

(1) 茨城県教育委員会（1977）『茨城県遺跡地名表』
(2) 註1に同じ。
(3) 茨城県歴史館（1977）『特別展　茨城の古瓦』
(4) 原田道雄（1972）「関東地方の初期横穴式石室古墳」駿与史学 30
(5) 片袖型玄門付では，他に下記の2例がある。
　・茨城郡友部町　高寺2号墳　瓦吹堅　（1976）『高寺2号墳』
　・郡珂郡東海村　舟塚1号墳　大森信英他　（1955）『常陸国村松村の古代遺跡』
(6) 高根信和他　（1977）『幡山遺跡発掘調査報告書』
(7) 大塚初重　（1957）「丸山4号墳の調査」『常陸丸山古墳』
(8) 註1に同じ。
(9) 大塚初重・小林三郎　（1964）「茨城県勅使塚古墳の研究」考古学集刊2―2
(10) （1975）『玉里村史』
(11) 註7に同じ。
(12) 野中完一・坪井正五郎　（1898）「常陸国瓦会村の古墳」東京人類学雑誌14―153
(13) （1971）『出島村史』
(14) 和田千吉　（1906）「常陸国小田村古墳調査」考古界6―1
(15) 鳥居龍蔵　（1928）「図画の存する常陸の二古墳上・下」武蔵野11―2，3
(16) 高根信和他　（1970）『茨城県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ
(17) 昭和56年3月，筑波大学によって発掘調査

補注

○　複室構造を説明する場合に，前室・後室という呼称を用いた。
○　羨道と前室との境を前門と呼び，前室と後室との境を玄門と称することにした。
○　石室の高さは，現在の床面よりの高さを言う。（平沢2号墳石室を除く）
○　石室説明の際の左右は，すべて奥壁に向かっての左右である。

10. 日 向 廃 寺

a. はじめに

日向廃寺は筑波町北条字日向に位置する。すなわち，城山（標高129.4m）の麓，標高32.0mに立地し，南は東西に広がる北条の町並をへだてて，条里地割を有する水田地帯を遠望しうる。ところが，筑波町では当地に町営住宅建設を計画した。そして昭和54年には巴文軒瓦と円形柱座を有する花崗岩製の礎石が工事区内にて掘り出されるに至った。これを楔機として，同年8月1日～9月2日および翌年7月2日～8月5日の2度にわたり，筑波町当局と筑波大学歴史・人類学系が発掘調査を実施したものである。

b. 遺　構

土層観察から本遺構は廃絶後，雨水溜りもしくは園池のような状態を続けた後，城山上方からの土砂流により短期間に埋没したと推定される。

遺構は3間×4間の方形の柱列を有し，高さ約30cmの基壇を持つ中央堂と，高さ約15cmの基壇を持つ東西の単廊部と複廊部とから成る。各部の礎石間距離は以下の通りである。

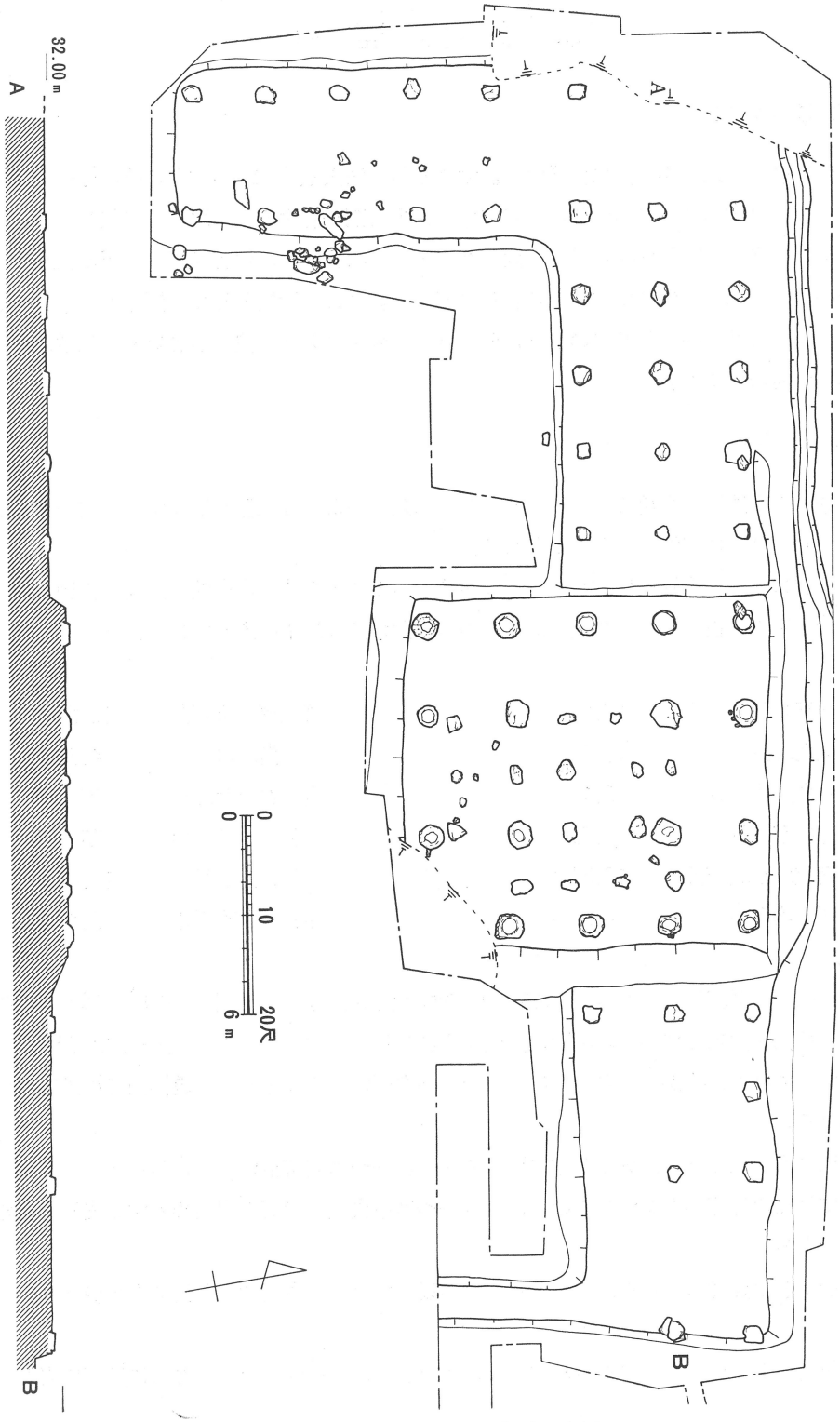
全東西長	37.57m	西複廊部東西長	12.54m
全南北長	16.67m	同 南北巾	4.89m
中央堂東西長	9.18m	東単廊部南北長	不　明
同 南北長	9.79m	同　東西巾	不　明
東複廊部東西長	12.54m	西単廊南北長	16.67m
同 南北巾	4.89m	同　東西巾	3.67m

南北の柱列はN8°50′Eを示す。複廊部は中央堂北側の2間と柱列を同じくし，単廊部は複廊部端の礎石と柱列を共にしている。柱間の尺度はそれぞれの部内においては統一性を示すが，接続部分で異なっている。しかし，現行尺に若干の伸びを想定するならば，全遺構面での適応尺度が割り出されよう。

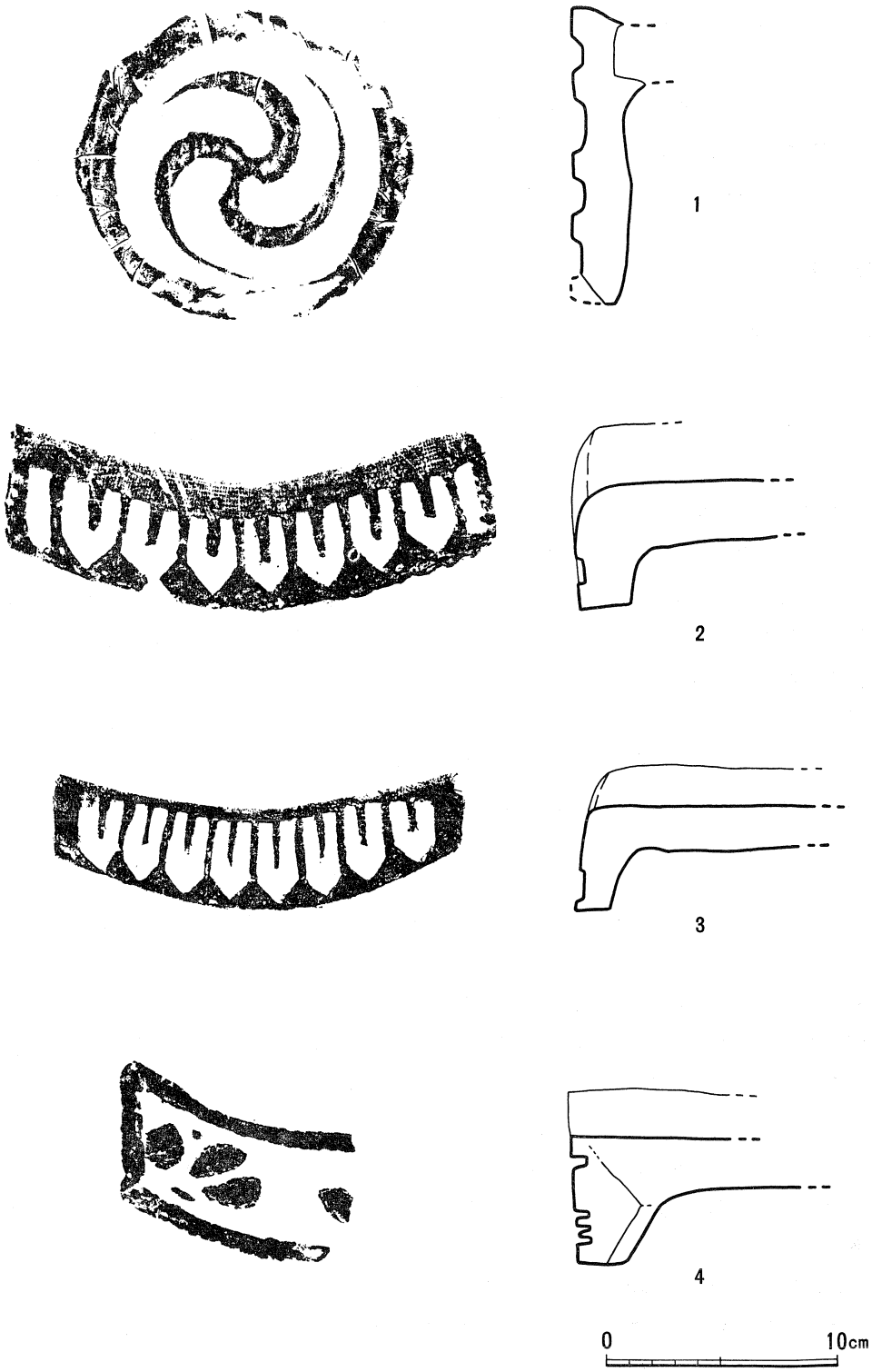
本遺構には2時期以上の建物の存在が明瞭である。一つは基壇全体を占める建物で，各部に建て増し，建て替えの可能性を有するものと，もう一つは中央堂上で瓦を根固めとする礎石を含む小規模な建物である。

基壇上面は前出建物の焼亡を示すごとく赤色に変じている。中央堂上と西側廊部がとりわけ顕著である。

礎石は部所により使い分けがなされている。すなわち，中央堂上の大型礎石には花崗岩が，廊部



第55図　日向廃寺遺構実測図



第56図　日向廃寺軒先瓦実測図

および小規模な建物には雲母片岩が使用されている。両者共に筑波山系で容易に入手できるものである。

中央堂と西複廊部北側にはいわゆる「雨落ちの溝」が走る。溝内は青白色の砂で満ち，瓦類の他，炭化物が多く検出された。

瓦片の散在状況は特異で，西廊部を中心に低基壇上のほぼ全域に破砕された状態で堆積している。その様は自然的所作でなく，前出の建物の焼亡後，当所の再利用の時に人為的になされたものと考えられる。

c. 遺　物

主要出土遺物は瓦，土師・須恵器と磁器，鉄釘等で，瓦は基壇全域より，磁器，釘等は基壇北辺と溝中より出土した。

瓦

瓦は軒平瓦・軒丸瓦と平瓦・丸瓦で後者が大部分を占める。他の用具瓦は稀少である。叩文様は格子目文と縄目文の二種に大別される。

軒丸瓦（第56図１）は巴文軒丸瓦で一型式のみである。瓦当面径は約13.5㎝，頭を接して尾の長い三巴を配している。胎土は均一で若干の砂粒を含み，色調は黒灰色を呈する。瓦当はすべて同一笵で作られたものである。

軒平瓦は剣頭文と花文様の瓦当文様との二型式がある。前者はさらに大型（第56図２）と小型（第56図３）の二種に分けられる。２の瓦当面巾21.5㎝，下向きの剣頭文７つを配する。瓦当面には上面に布目痕があり，製作技法は折り曲げ造りである。平瓦部は厚さ2.5㎝程で，瓦全長は約24.5㎝を測る。

３の瓦は調査以前，このたびの発掘区域外で発見された土師器が集積していた溝から採集され，井坂敦実氏が保管されていたものである。瓦当面巾は17.5㎝，剣頭文を８つ配する。製作・調整技法は２と同様である。

花文様の瓦（第56図４）は，総数で10片にも満たない。半截花文を意図したと考えられる文様が瓦当面中央と左右に計３単位配される。瓦当面巾25.8㎝，胎土は密で焼成は堅緻である。製作技法は前２者と異なり，平瓦部広端の凸面側に粘土を加え瓦当部を造っている。

その他の遺物

土師器はほとんどが坏である。口縁部が直線的に開くものと外反しつつ開くものの二種がある。口径８㎝前後，底部は丸底で，口縁部内面に油煙が付着し，燈明皿としての使用を思わせるものが数例ある。

須恵器は甕・壺・坏・坏蓋等であるが，すべて細片のみで全体が把握できるものは皆無である。なお，中央堂上から龍泉窯産と思われる舶載の青磁・白磁片が若干出土している。鉄釘は５点である。全て角釘で，一部に頭がつぶれたものが見られる。

d. ま と め

当遺構が基壇を持ち，瓦が葺かれ，加工された礎石を有することから，これを寺院址とすることに疑問の余地はない。また，軒瓦の型式から平安末〜鎌倉初頭という時代推定も妥当であると考える。遺構の形状から，平等院鳳凰堂のような臨池式伽藍を想定することも，無理なことではない。だが，翼廊部の接合位置が異なることや，中央堂前面から堂上と同様の礎石が2個出土している事実など，考慮すべき問題点が多々ある。

遺物に関しても，瓦の自然的でない出土状況や，数種の瓦当の存在など，数時期もしくは別棟の建造を思わせるものである。また，小片ながら舶載磁器が出土したことや，発掘区外の土師器坏溜りの溝の性格も追求しなければならない。

このように諸々の問題の検討が山積してはいるが，関東における当時代の具体的な地域史像を探る上で，日向廃寺は貴重な資料を提示しているのである。（高崎光司）

参 照 文 献

文化財保護委員会（1954）『無量光院跡』
藤島亥治郎編（1961）『平泉―毛越寺と観自在王院の研究』
矢崎靖子（1964）「岩手県平泉中尊寺伝大池址周辺遺跡出土瓦について」物質文化3
森蘊・荒木伸介・小野真一（1971）『伊豆韮山願成就院発掘調査概報』
小林　敬（1973）「秋川市二宮神社境内出土の瓦」貝塚10
平安博物館編（1977）『平安京古瓦図録』
上原真人（1978）「古代末期における瓦生産体制の変革」古代研究13・14
日向遺跡調査団（1980）『日向遺跡』　筑波町教育委員会

11. 二基の五輪塔

a. はじめに

昭和54年8月に行なわれた日向遺跡発掘調査に際して，同遺跡より300m南西に造立され従来より古式のものとみなされていた北条所在五輪塔を実測した。また翌55年3月の観音下遺跡にともなって小田山麓所在五輪塔の実測を実施した。

b. 北条所在五輪塔　（第57図，第58図，図版38—1）

土浦市と岩瀬町をむすぶ関東鉄道筑波線の中間あたりに「常陸北条」の駅があるが，本塔は当駅から町並み沿いに徒歩15分ほど西方にいったところに建つ。周囲を畑地に囲まれ，眼前には桜川の水利を得た水田地帯が展開する。地元では本塔を多気義幹の供養塔として祀っている。

全高191cmの本塔には刻銘はいっさい見当らない。花崗岩を材質とした本塔は風化が著しく補修が随所にみられる。以下各輪を検討する。

空・風輪　一石彫成である。空輪高33cm，風輪高25cmを測り，両輪の間には頸部が造り出され5cmの長さをもつ。

火輪　高さ40cm，軒先幅約84cm。風輪との間には補修が施され，また正面右部および左面後部が欠損する。とくに左面後部からは水輪部との合接面が窺見でき，火輪の刳抜きと水輪のホゾ造り出しが確かめられる。屋根の勾配は四面とも外反せずむしろ膨らみをもつ。軒部は風化と破損が激しいため確認できない。

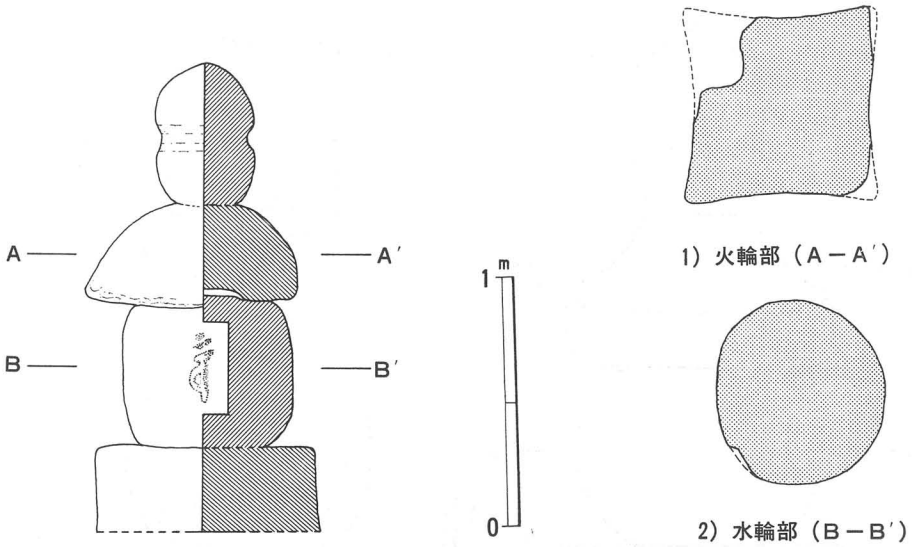
水輪　高さ57cm，胴部中央部径73cm。胴部中央のふくらみは少なく，球形というよりも臼形ともいえる形状を示す。また本輪四面には金剛界大日如来の種子「バン」が刻まれているが表面が著しく風化しているため彫字法の様子は判断しかねる。

地輪　高さ34cm，幅84cmを測るきわめて低い地輪である。地輪は方形のものがほとんどであるが本輪では左右面および後面の裾が若干広がる方形を示す。

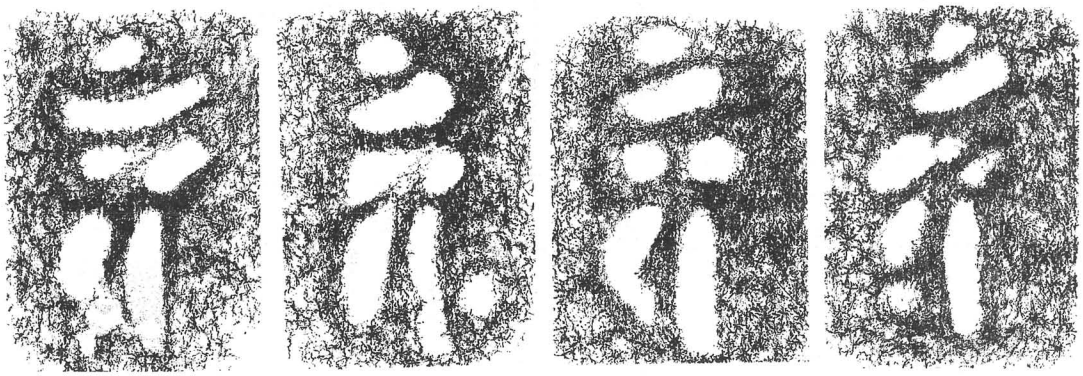
c. 小田山麓所在五輪塔　（第59図，第60図，図版38—2・3）。

「常陸北条」の次駅が「常陸小田」であり，背後に標高461mの小田山をひかえる。この小田山の南麓に八田知家建立の三村山極楽寺清涼院跡があるとされている。本寺院跡は小田家累代の菩提寺として知られ，また近くの瓦窯址から「三村山清涼院」の型押銘軒平瓦が出土しているが，その全容は明らかとなっていない遺構である。本塔はこの寺院跡内の一角に造立されているが，現在では樹林に囲まれているため，落葉の時期を除いてそこに到達するのは容易でない。

本塔は，全高317cmという，花崗岩製の大型五輪塔である。塔の保存状態は良好だが，地盤が非



第57図　北条五輪塔実測図



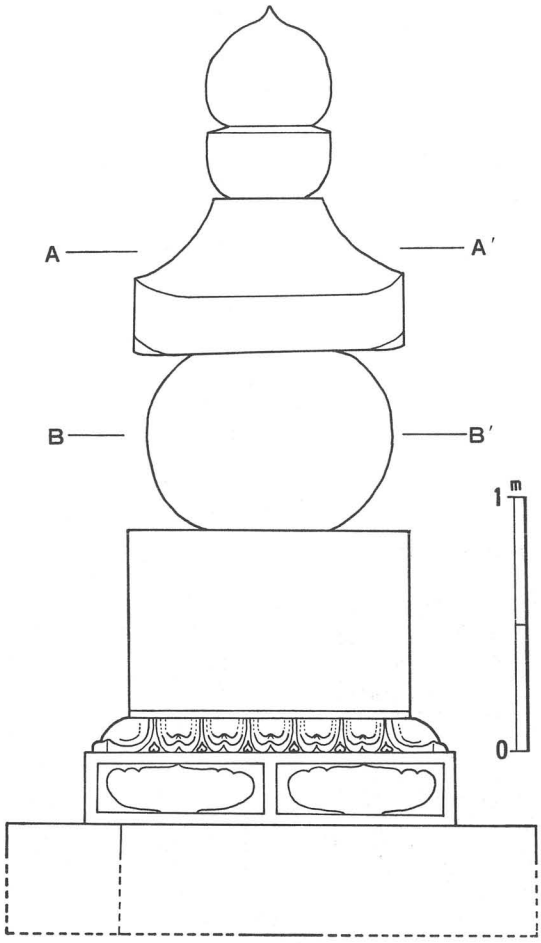
第58図　北条五輪塔種子拓影

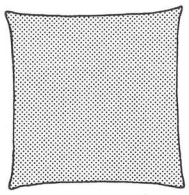
常に軟弱であるうえに背後の桜木が，生長するにつれて基壇が歪み，その結果反花座より上部が全体的に右前方に傾斜しつつある。現在の傾斜角度はおよそ1.2度である。本塔には種子，および刻銘は見出せない。

空・風輪　一石彫成かどうかは不明であるが両輪の境目が鋭く括れていることから判断して各輪別々に彫成されているかもしれない。径48㎝の風輪の上に，同径の空輪をいただき空輪はいくらか下端に肩を張っている。

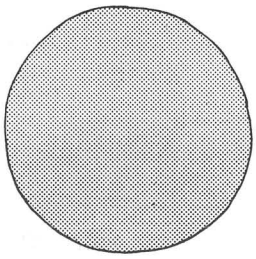
火輪　高さ61㎝，軒幅105㎝，軒厚21㎝。屋根勾配は大きく，軒先の反り具合は上，上端とも同じように強い。

水輪　高さ67㎝，中央胴部径96㎝。中央部での横断面をみる限り，ほぼ円形といって良いであろう。全体的にみれば本輪は球を上下から少し押しつぶし気味の形状を示す。





1．火輪部（A－A′）



2．水輪部（B－B′）

第59図　小田山麓五輪塔実測図

第60図　小田山麓五輪塔　格狭間拓影

地輪　高さ72㎝，幅109㎝を測り背の高い部類に入る。

また五輪の他に反花座，その下に基壇が付設されているため本塔は背が高く荘厳な印象を与える。

反花座　高さ38㎝，幅146㎝であり，上部は蓮弁を配しその構成は単弁反花を５弁，両端に各１弁を配して１面７弁より形成されている。また下部にはたて28㎝，横14.4㎝を測る側面を有し一面二区の格狭間が彫込まれている。

基壇　高さ43㎝幅190㎝を測り，外観する限りでは縦43㎝，横44㎝，長さ162㎝の石材を組んだ切石積みである。

d.　ま　と　め

北条五輪塔，小田山麓五輪塔の両塔はともに無銘塔であるため造立時期は不明であった。しかし各輪における形状の差異は造立時期の違いをも反映するため，各輪の時代にともなう変遷をたどる

ことにより両塔の性格も多少ながら明らかになると思われる。

嘉応2年（1170）と承安2年（1172）の紀年銘をもつ大分県臼杵市の中尾五輪塔2基に代表されるように，風輪底部が火輪に沈み込んだ形は古式のものに入る。また空輪の先端は尖りが鋭くはなく丸味をもつものが多い。とくに空輪は時代を経るにしたがって上部曲率が大きくなり，肩を張った様を呈する。また先端部の尖り方は一層顕著になっていく。北条五輪塔の場合，風化磨滅したのかどうか判らないが空輪の尖りはほとんどなくむしろ団形といった方がふさわしい。

火輪は，恐らく五輪の中でもっとも時代を反映する部位であろう。端的に表われるのは高さと軒との比率，そして屋根勾配（軒反り）の大きさであろう。とくに高さと軒幅の関係は古いものほど背が低く鎌倉中期以降は背が高い傾向がある。たとえば川勝政太郎氏が計測した紀年銘のある五輪塔の比率は以下のとおりである。

中導寺釈尊院塔（岩手県）	（伝安　—1169）	0.50
五輪坊塔（福島県）	（治承5—1181）	0.57
興融寺塔（奈良県）	（文永10—1273）	0.68
安楽壽院塔（京都市）	（弘安10—1287）	0.64
木津惣墓塔（京都府）	（正応5—1297）	0.61
浄光明寺塔（神奈川県）	（嘉元4—1306）	0.63
蓮台寺塔（奈良県）	（徳治2—1307）	0.67
極楽寺塔（神奈川県）	（延慶3—1310）	0.62
忍辱山塔（奈良県）	（元享元—1321）	0.62
一乗寺塔（兵庫県）	（元享元—1321）	0.67
日光寺塔（兵庫県）	（元享2—1322）	0.61
寶台寺塔（岡山県）	（元徳2—1330）	0.62
禅定寺塔（京都府）	（康永元—1342）	0.65
孝思寺塔（大阪府）	（貞治4—1365）	0.64
粟殿墓地塔（奈良県）	（正平3—1348）	0.65
助澤塔（鳥取県）	（正平15—1360）	0.73

北条五輪塔を算出すると，40／84≒0.48，また小田山麓五輪塔では，61／105≒0.58を計測する。ただ前者の場合，風合，風化および破損を考慮しないでの実測値の計算であり，かならずしも正確とは言えないがいずれにせよずい分低い数値である。逆に後者は上に列記した数値の中では低数値であるが，「清涼院」の時期とかなり離れるため参考程度でしかなり得ず，むしろ屋根勾配の反りと軒口が垂直に切られていること，そして軒厚が充分にある，といった形態的な特徴を重要視すべきであろう。

形態差もさることながら五輪塔には多くの属性がみられる。例をあげるならば北条五輪塔に刻ま

れた梵字であり，小田山麓五輪塔の反花座にみられる蓮弁や格狭間などである。

梵字を石造物に刻む例は五輪塔に限ったことではなく，宝塔，層塔，宝篋印塔などにもあるが，その場合，前二者は軸部，後者は塔身に限定される。しかし五輪塔では奈良県当麻西墓地塔のように五輪塔各輪の四面に梵字を刻むのが通常である。なかには小田山麓五輪塔や福島県岩法寺五輪塔のようにまったく配字しない例も見出されるが，ふつうは各輪に四門の梵字が刻まれている。

北条五輪塔では水輪の四面にのみ梵字が刻まれており，すべて金剛界大如来の種子である「𑖪（バン）」を刻む（第58図）。このように水輪を塔身として金剛界大日如来種字を刻字したものに大阪府南河内郡に所在する千早山楠正儀塔があるが，この塔では正面にのみ表わされている。また彫り方には平安後期から鎌倉中期以後盛んに使われていった薬研彫がある。北条五輪塔では風化のため判読し難いが，薬研彫りというよりもむしろ平底式に近いと思われる。

格狭間は香様とも書くが元来は「格子のある狭間」に由来するため香様，香小窓，香玉などはすべて当て字である。名称については同一語の変化形も含め多様な語があるが，ここでは格狭間に統一しておく。格狭間は仏像の台座をはじめ厨子，小櫃等の脚部によく使用されるため時代識別の指標となりうる。石田茂作博士は，格狭間の形式変遷を提示した。すなわち形式には5種あり，第1類を合掌式，第2類を連孤式，第3類を肘木式，第4類を葉状式，第5類を交混式と大別し，形式と年代との図式を明らかにした。この図式によれば小田山麓五輪塔の格狭間は第一類にあたり，奈良時代にはじまり藤原，鎌倉そして室町時代に盛行したものである。とくに本例のように爪先を，垂直に切りそして多少下膨らみの形状をしたものは鎌倉時代に多い。

何種類もの属性をもつ構造物を検討する際，すべての属性が同一の時期を示すことは稀有といって良いが，少なくとも北条五輪塔に関しては火輪さ高のと輪幅との比率，あるいは水輪の形状から推して，本塔が従来より言われてきたように古式のものと考えられる。また小田山麓五輪塔では多様にわたる属性を詳細に分析する必要があろう。同時に極楽寺清涼院の遺構との位置関係が不明であり，将来寺跡の全容が判明することによっても本塔の性格がより明確になるものと思われる。

（小瀬康行）

参考文献

天沼俊一（1916）「深田の石塔」考古学雑誌　6—10

石田茂作（1941）「香様の起源と発展」（上）考古学雑誌　31—7

石田茂作（1941）「香様の起源と発展」（下）考古学雑誌　31—8

池上　年（1966）「旭村古石塔の根元」岡崎石造美術研究所

川勝政太郎（1979）『石造美術入門』社会思想社

川勝政太郎（1973）『日本石材工芸史』綜芸社

野村　隆（1976）「常陸三村寺跡五輪塔」史迹と美術　464

福山敏男（1950）「周，漢，六朝，飛鳥の格狭間」建築史研究　2

福山敏男（1951）「格狭間再論」建築史研究　5

藪田嘉一郎（1958）『五輪塔の起源—五輪塔の早期形式に関する研究論文集』　綜芸社

日向遺跡調査団（1981）『日向遺跡』筑波町教育委員会

Ⅵ 総　　括

数年の間実施してきた筑波地区遺跡調査のあいだ縄文時代にかかわる例は上坂田北部遺跡の縄文前期関山式土器を伴う貝塚を発掘したにすぎないが，桜川流域には縄文時代の遺跡は多い。その立地は自然環境と関連していた，今回調査した貝塚にしてもその構成は主としてシシミが占め，付近にそうした貝類の棲息していた湖沼，霞ケ浦汀線が近くまで延びていたことが推される。縄文時代を通じ，気候の変化に伴い，利根川にそうて海進・海退をみ，それに応じて貝塚分布も異ったと考えられる。そして，縄文時代は狩猟採集によって食糧を確保していたと考えられてきたが，最近ではこの時代にも果実，イモ，アワなどを栽培する一定の農耕があったと説かれている。こうした縄文時代の後をうけ，稲作に生活の基盤をおく弥生時代に変っていったのであるが，後者の社会は如何に構成されていたであろう。野生種の稲のないわが国に稲作のおこったのは，当然のことながら大陸―中国江南から山東半島，朝鮮半島をへて，あるいは江南から直接渡来人と共にもたらされ，急速にわが国に普及していったのであるが，弥生時代というと水稲耕作人だけという考え方が一般に行われている。縄文人は何処に消えたのであろう。弥生時代の生業は稲作だけであったろうか。

筑波町水守大字荒神下の丘で古式土師器を伴う住居址を調査した。この地の前面は低地が続き，桜川との間に田中の部落のある自然堤防があって，現在荒神下の水田と桜川との間は一線が画され，桜川氾乱時にも，荒神下の水田は洪水の難をまぬかれるという。しかも，桜川の水にたよらなくても，荒神下に湧水があって，水は確保される。恐らく荒神下の低地は当初葦の生えた豊葦原の水穂の地であったに相違なく，水稲耕作に格好の地であった。この低地をかこむ筑波町福王地には弥生時代の遺跡があり，荒神下に古式土師の住居址が見出されたのも，この一帯の低湿地の開拓の上に築かれたといってよい。その年代の上限は明らかにされていないが，近時の耕地整理前まで条里制が認められたのである。丘麓の湧水を利用したいわゆる谷地水田開発のさまを，『常陸国風土記』行方郡の条に「箭括の氏の麻多智，郡より西の谷の葦原を截ひ，墾闢きて新に田に治りき」云云と，夜刀の神との争いの後，完成した物語を伝えている。しかし，当時の常陸国はこうした水田耕作民だけでなかった。同書行方郡板来の駅の条に，

「東の垂の荒ぶる賊を平けむとして，建借間命を遣しき。軍士を引率て，行く凶猾を略け，安婆の島に頓宿りて，海の東の浦を遙望す時に，畑見けければ，交，人やあると疑ひき」云云とある。

かかる記事は『常陸国風土記』だけでない。『肥前国風土記』松浦郡値嘉の郷，彼杵郡浮穴の郷の条にも「治を被らざる異しき徒」として誌るしている。それは，『常陸国風土記』香島郡の記述割註に「昼は狭蠅なす音声ひ，夜は火の光明く国なり。此を事向け平定さむ大御神と，天降り供へまつりき」とあるのに対応するのであろう。夜も火のかがやき，煙のみえるのを焼畑耕作民とみる可能性も十分にある。弥生時代以降は水稲耕作民，豊葦原を開拓した民だけの社会ではなかったの

である。異質の生業を背景として種々の住民の対立，共存のなかに歴史は展開していったのである。

上坂田貝塚調査に際して，古式土師器を伴う方形周湟墓を一部を見出した。付近は小塚原とよばれ，嘗つて小円墳が若干散在していたといい，現在も一基残っている。周湟墓出土の土師器は荒神下出土例より若干年代的には古く4世紀後半という。水守の低湿地を開き水稲を栽培していた頃，ここにも集落が営なまれたとみてよい。

貝塚，周湟墓を見出した上坂田の台地は桜川よりおよそ7～800mはなれ，比高約10mの高さをもつ台地先端に位置している。台地と桜川の間の氾乱原は現在田，畠が展開しているが，発掘地の地主栗原市郎氏の語るところによると，桜川の堤防が出来るまでは，台地下の低地は洪水に見舞われ，部落の主要道路は低地に作れず，台地上の遺跡脇を通る小さな小道が北条，土浦に赴く街路だったという。

現在，台地下の低地は，遺跡近くの貯水池（それは霞浦の水を引いている）の水を灌漑として利用しているとのことで，こうした治水の進まない古代，屢々おこる桜川の氾乱で，到底水田耕作は不可能であったろう。そして台地は，『常陸国風土記』行方郡香澄の里の条に誌るされた山のさまのごとく，「榎・槻・椿・椎・竹・箭・麦門冬，往々多に生へ」ていたか，あるいは，「櫟・柞・栗・柴」「松」林であったろう。所詮，台地上は水稲耕作は不可能で，樹木を伐って陸田を営むか，香澄の里に生えている麦門冬（やますげ）は『延喜式』典薬寮に常陸国貢進の25種の薬草のうちに含まれ，あるいは，こうした植物の採取に従っていたかもしれない。それはともかく，荒神下と上坂田とでは自然条件が異っているだけでなく，前者近くは前方後方墳，桜塚古墳が認められるに対して，後者は墳丘を伴わない方形周湟墓という差にあらわれている。

上坂田遺跡の所在する台地一帯の4世紀代の自然景観は明らかでないにしてもこれを田中部落の自然堤防によって桜川の氾乱からは一応遮断された水守の低湿地帯，水田に早くより開拓された葦原の地とは明らかに相違していた。後者が豊葦原の水穂の地であり，稲作耕作民の居住地であったとするならば，前者は如何なる生業を基盤として生活する集団であったろう。既に記るしたように，常陸国風土記には，行方郡板来村の条に焼畑耕作民ともみえる記載がある。上坂田の台地の生活がそうした耕作民であったかどうか証拠はない。しかし，彼らが住居の立地の違いから水守の集団とは生活の基盤を異にしていただろうことは言えよう。すなわち4世紀後半，この筑波地区には異質の生業をもつ集団が共存していたのである。常陸風土記には屢々高天の原より降りこれ神々と昼はさばえなす荒ぶる神等の対立のさまが誌るされているが，対立ではなく，共存していたのである。上坂田遺跡出土の土器も，水守地区観音下出土の土器も同じ五領期の土師質の土器なのである。生業こそ異質であるが，共に同質の土器を用い対立してはいないのである。両集団の距離はおよそ4～5km，相互の間での生業の違いは双方共熟知し上坂田台地の集団の人々も稲を入手，食していたに相違ないのである。それは陸稲を栽培したか，あるいは，彼らの生産する山の幸との交換でえたか何れかであろう。筆者はむしろ後者を考えたい。すなわち，異質生業をもつ集団の間にはそ

れぞれ生産物の交易が生れる可能性が十分考えられる。また，その生産も単に自己の集団の生活を維持するための食料を確保するだけでなく，余剰をもって他集団の生産物を入手，より生活の向上を計るに相違ないのである。上坂田，観音下両遺跡の立地の相違から4～5世紀代のこの地域の状況を推測したが，おそらく，上坂田の台地での生業は在来の型であり，低湿地の水稲耕作は弥生時代以来の，いわば，新しい西日本から伝来してきたに相違ない。更に，これをわが国での水稲栽培先進地帯の北九州なり，畿内でも同じ条件にあったと考える。すなわち，弥生時代は縄文時代の狩猟採集生活から農耕生活に変っただけではない。あるいは，近時縄文時代にも植物栽培が行わとし，縄文農耕論が盛んに提唱されておるが，縄文農耕が水稲栽培に変ったのでもない。狩猟採集生活を主とした縄文時代人，あるいは一定の植物栽培を行っていた集団のおる地に，水稲栽培を生業とする集団が海を渡って移り住むようになって，異質の生業をもつ集団が，低湿地には主として後者の移住者が住み，双方共存する状況になってきたのが弥生時代なのである。その場合それぞれの生産物は既に述べたごとく商品になりうるのであり，栽培は農業経済の段階に入る。いわば cultivation から agriculture えと進むと考えたいのである。縄文時代の農耕について研究が進んでいるが，「半栽培という段階について」と題して中尾佐助氏が「どるめん」誌上(13号)に，「農耕の存在と，農耕社会の存在とは，同義語では無いだろう。生活経済上，部分的には明らかな農耕があっても，それは農耕社会という段階に到らないのが普通ではないか，と私には考えられる。」と指摘されているのは示唆に富む。そして

「自然生態系を人間が攪乱，破壊すると，それに植物の側が反応して，突然変異などの遺伝的変異も含めて，新しい環境への適応がおこる。そうした植物の中から，人間が利用をはじめると，植物の側から適応力を更に進めていくこともおこり得る。そうしたことが何千年も積みかさなると，狩猟採集の段階でも，人為的環境の中で経済がいとなまれることになる。その段階では人間は意識的に栽培をすることはなくても，農耕の予備段階に入ったと言えよう。それは広義の半栽培の段階とも言えよう。」

と，農耕の歴史での半栽培という段階を設定し，この段階に続いて，すなわち，「狩猟採集のウェイトの方が大きいという段階」から，農耕のウェイトの高くなった兼業農家えという変遷を考える。

確かに技術的側面からみて食糧の総てを農耕にもとめた専業農耕の存在を無視するわけでないが，文明発展の基礎としてのたとえば，オリエント古代の農耕社会は単に食糧自給の社会ではなかった。農耕出現の事情は地域によってかなり相違していたと考える。歴史時代に入ってわが国の農耕は稲作を基本としているが，それはこの国で自生したものでないことは明らかである。稲作耕作民のなかには，半栽培の段階から稲作専業農家えと発達した民族がいたかもしれないが，わが国では発達した段階の農家集団が，半栽培の農耕段階にあった縄文時代人の間に移住してきたのであってそこにわが国の黎明期の農耕の歴史の特色がある。

上坂田，観音下など土師器伴出遺跡を中心に，わが国初期農耕の歴史について記したが上坂田遺

跡に認めたのは方形周湟墓という戦後新らたに注目された弥生時代から古墳時代に至る時期の遺構である。上坂田遺跡で見出された側は全貌を明らかにしたわけではないが，伴出土器よりおよそ4世紀後半と推測している。そして，この時期には筑波町水守で見出したごとき桜塚古墳が既に営なまれていた。

桜塚古墳と同時期の上坂田方形周湟墓を比較すると，前方後方墳桜塚古墳は一部丘陵部を利用しているとはいえ，その造営に際しては封土を積みあげに際して多大の労働力を必要とする。周湟墓はそうした労働量は遙かに少い。粘土槨の主体部をもつ桜塚は変形四獣鏡，碧玉石釧，瑪瑙製勾玉，碧玉管玉，琥珀玉，ガラス小玉，鉄剣などいずれも当地方では入手しえない遺物を副葬している。上坂田方形周湟墓の全貌を明らかにしていない現段階で副葬品を云々しえないが，副葬品は遙かに貧弱と考える。こうした比較から考えても，それぞれに埋葬された主体者の生前の勢力の大小は明白である。上坂田方形周湟墓の主体者は台地上の集落に生活の基盤をおいたものであり，それは唯一基だけでなく，数基群をなしていただろうことは既知の資料からも推測出来る。他方，付近に五世紀代の山木古墳が認められるものの桜塚古墳は単独孤立している。また周湟墓が弥生時代から四，五世紀にかけ行なわれたのに対し，高塚古墳は，この地域では四，五世紀より六，七世紀に流行し，時期的に両者は違いがある。この時期的差異を考慮に入れるならば，桜塚高塚古墳は方形周湟墓から発展したのであろうか，同一系列を考えるには両者の間は余りにも性格の差が認められる。この地での高塚古墳出現の事情を考えるに先きだって再び常陸国風土記の記述に注目したい。

筑波の郡の条に，周知の如く，「昔，神祖の尊，諸神たちのみ処々巡り行でまして，駿河の国福慈の岳々到りまし，卒に日暮に遇ひて，遇宿を請欲ひたまひき」，また，拒否された神祖の尊は，「筑波の岳に登りまして，亦客止を請ひたまひき」と，客神を厚くもてなしたが故に幸福をえ，冷遇したが故に不幸を招いた説話が，筑波山，冨士山とを比較して語られている。この種の説話を追求する意図も，また，その力も筆者は有しないが，注目したいのはそうした説話の背景である。

水稲耕作の定着した弥生時代には，生活に必要な食料を100%自給しうる専業農家で占められた集団もすでに確立していたであろうが，一方では，そうした専業農家を含めて，異質の兼業農家の集団を内包する地域集団を内包する地域集団も形成されていたことを述べた。前者はいわば身内のものだけでかため，客神をもてなす術も知らない集団であり，後者は既にそうしたことに習熟していた社会といってもよかろう。近々4～5㎞しかへだたっていない上坂田，水守を含む社会は後者に属していただろうと累々述べきだったのである。そして，水守地区を超越し，地域外産出の種々の副葬品をおさめた桜塚古墳の主体者は，この説話に出る外来の神祖の尊，客神の力を背景としたものと推測したいのである。たとえ，この地域の出自であるとしても，そうした政治的，経済的力をもつ者の被葬者と考えたい。そうであればこそ，地域民の力を結集した高塚を営みえたのである。前方後円という特殊な墓形の成立を大和政権によって認められた身分制の確立過程の産物と説く考え方があるが地域を超越した権力を大和政権との関連の政治的関連に重点をおく説である。そ

の当否は別として，水稲耕作の一系列の発展のみを追求しただけでは，文明化の過程，古墳文化えの傾斜の動きを理解するのは不可能である。

その意味で，弥生時代初期，東国では若干時期的傾斜があろうが，当時の農耕は，水稲一辺倒ではなく，縄文時代の伝統を汲む栽培を含む異質の耕作に生活の基盤をおく人々の共存になる地域集団の成立を説いた。それは自給自足集団より遙かに活力に富む社会と考える。そのなかに近隣に威を振う豪族的勢力をもつものも生れえたであろう。しかし，高塚古墳発を国家成立の基盤となった勢力はそうした在地的勢力だけでなかった。そこに，江上波夫教授による騎馬民族日本征服説提出の余地が残されている。今，江上説を論ずる余裕をもたないが，江上説による騎馬民族征服の時期に難点が存するように考える。縄文末期ないし弥生前期に水稲をもたらした大陸からの移住者を伴う影響とは別に，弥生時代中期以後朝鮮半島からの新らたな青銅器，一定の馬匹文化を伴う影響が顕著になってくる。それはいわば騎馬民族的性格の強いのであって，その系列の力を無視しては古墳文化出現の過程は説明しえないであろう。

この地域での高塚古墳出現の事情については今後解決しなければならない幾多の課題を残しており，ここに記述するのは難しい。ともかく，この調査期間中，この地の高塚古墳としては比較的早い時期の桜塚古墳を発掘調査し，北条町漆所所在の丘陵頂部に営なまれた土塔山前方後円墳墳の実測を実施した。墳丘を6：3：3の比率で構成している点などからして畿内の五世紀代の古墳と並行すると考える。また，筑波町洞下所在大塚山前方後円墳の実測，同町北条所在甲山古墳の発掘を行った。甲山古墳は元来前方後円墳で国道建設に伴い前方部が削手され，現在後円部を残すのみであるが，その際人物埴輪などが出土したと伝えられている。後円部発掘によって組合式石棺の主体部二基を見出し，鉄製武器，ガラス勾玉等をえて，時期はおよそ六世紀前半と考えている。大塚山も墳形から推して概ね同時期と推測している。五〜六世紀のこの地の比較的大型古墳が営なまれた時期をすぎると，多数の小型墳が群集する傾向があらわれる。筑波町山口，平沢地区にみる古墳群がそれである。埋葬方法も，この地に多い組合式石棺のほか，横穴式石室が流行する。そのいくつかは，本学学生考古学研究会の手で実測したので，本調査概報に収録した。上坂田の円墳群土浦市宍塚一帯の群集墓も後期古墳に属し，その一基，ほとんど破壊され主体部も明らかでなかったが，周湟にそうて埴輪を樹立した円墳を調査した。

四〜五世紀代より六〜七世紀代に至るこの地の高塚古墳を若干調査し，その概略を誌したのであるが，一定の傾向が認められる。地域によっては古墳時代末期にも，巨大の高塚が営なまれ，豊富な副葬品を伴う例もあるが，一般的傾向として小型化し，群集墳を形成してきた。新治，筑波地区の高塚古墳消長も同じ軌をたどり，平沢，山口にみる群集墳をみている。群集墳に象徴される豪族の勢力を，四〜五世紀のそれと比較すると，勢力が均一化し，弱小化したと言ってよかろう。それはそのまま大和政権の伸長を意味し，やがてこの地も大和政権の直接支配，律令体制下での官僚の支配下に包まれてゆく。高井梯二郎氏の早くに調査された新治郡治址，筑波町平沢で見出された筑波郡衙址がその遺構である。

律令体制による大和政権は飛島，奈良時代を通じ，日本全国の統一を完成しただけでなく，大陸の文化を吸収，咲く花の匂うが如さ，当時のアジア全体の諸文化を吸収する天平古代文化を開花させている。長い停滞をつづけた縄文時代に比較すると稲作を中心とする食糧生産が開始されてから，この国際文化が開花するまでの期間は余りにも短かくテンポが早かった。そして，大和政権による東国のこの筑波地区の支配はかならずしも完全なものでなかった。935年伯父図香を殺した平将門は四年後，939年中央政権と反して乱をおこし，翌940年誅されている。これは一つには大和政権の直接支配の坐折とも考えられ，関東は次第に新らたな体制に組込まれてゆく。

昭和54年春筑波町北在住の井坂敦実氏より北条町日向に町営住宅を造成中に円形柱座を造出した花崗岩の礎石ならびに剣頭文軒平瓦の出土の通報をうけた。ただちに現地に赴いたところ，北条町多気山城南麓の台地，遙かに桜川を望む景勝の地にであって，瓦の文様からみて平安末，鎌倉時代の建築址に相違ないのである。円形柱座を造り出した礎石が茨城県下で果して何例見出されておるのであろうか思うたのであるが，ともかく，緊急に処置しなければならないと判断した。筑波町々長堀田乾次郎氏の調査方依頼もあったので，筑波町調査費と研究室特別研究費を併せ，当該遺構の調査を実施した。結果は本文記述の如くで，遺跡の重要性を認めた文化庁，茨城県当局は翌昭和55年再度調査すべく配慮された。両年度の調査によって建築遺構のほぼ全貌を明らかにしえたのは幸いであった。

調査結果，本遺跡の東部は後世の攪乱によって，基壇も削平され規模も明らかでないものの，全体として良く保存されてきたといえる。今回発見の端緒となったのも，町営住宅の共同汚水槽建設に伴うもので，現地表面よりかなり深く掘って遺跡面に到達したのである。およそ2ｍの厚い堆積層下に建築面が見出されるが，その厚い堆積層は山砂，礫を含み，山崩れの土砂を推される。嘗って，多気山の一部が激しい流れと共に崩れ，遺跡をおおったと考えられる。ために遺構も良く保存されたのであろう。

遺構はおよそ前後3回改築されている。最も新しい時期のそれは，中央基壇に7ｍ平方の間に，雲母片岩（オンジャク石）の礎石を中心に2間4面の規模で配置した遺構である。極めて規模は貧弱で，伴う瓦もなかった。第2回目の遺構は中央基壇の花崗岩製礎石の建築で，左右に翼廊を配置し，剣頭文軒平瓦，巴文丸瓦など平安末，鎌倉時代の典型的瓦を伴うている。（この第2回遺構が途中で改装されたか否か若干問題がある。出土瓦，伴出建築材などは著しく炭化，火災をうけた痕跡がある。また，西側翼廊壇に植えられた松（？）の根元を認め，それも火に遭った痕跡をとどめている。もし，その松当然ながら，その時は翼廊はなかった，と中央基壇の建築が共存した可能性がある。中央基壇西側に瓦列が翼廊基壇をこえて見出されたのはそのためかもしれない。若し松の根が二次的存在であるならば改装は認められない。）

花崗岩礎石を配置した中央基壇，西側翼廊及び西側翼廊の南方に突出した部分の三ケ所で，写真図版37に示すごとく試掘を試みたところ，最下層，創建時の礎石根固め石敷を中央基壇，西側翼廊南方突出部で認めた。両者を結ぶ翼廊で認めなかった。第一次の建築では，中央基壇の建築と，そ

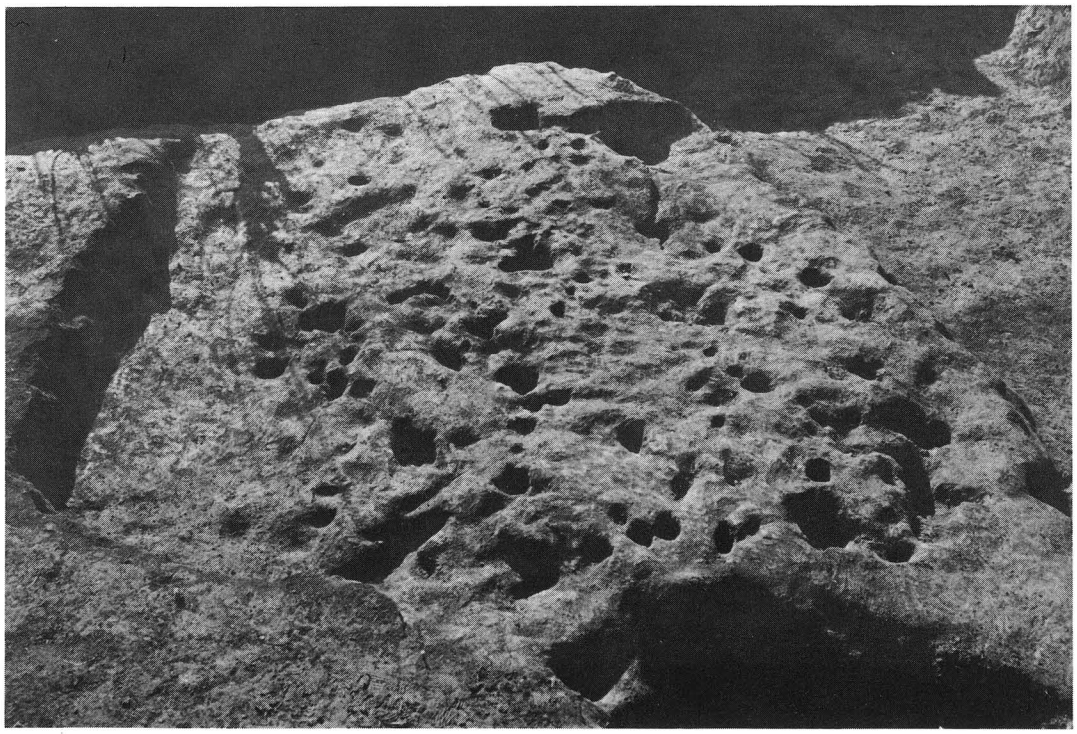
の左右斜め前方に別棟の建築があったことになる。第2回目の改装では，両者を結ぶ形で翼廊が成立した可能性がある。第2次調査期間中，東京文化財研究所々長伊藤延男博士より教示いただく点が多かった。第一次建築に伴う瓦が明らかでなく，創建に何時にさかのぼるか明らかでないが，第2次遺構は明らかに平安末，鎌倉時代に相違なく，見事な円形柱座造り出しの礎石の上に立った翼廊をもつ3間4面の建築―おそらく寺院を建立したのは何人であったのであろう。それは常陸大掾氏をおいて他に考え難い。

平将門の乱に関係した平国香はこの地域によっていたのであって，国香の後を継いだ平維幹は大掾氏を名乗り，水漏大夫と号していた。現在筑波町水守桜塚古墳所在地で，近くに館址が残っている。彼は水守のこの館に居住していたのであろう。維幹から数えて四代目に平致幹がいる。自ら称して六郡の領主といったというが，筑波，鹿島，行方など当地方一帯に勢力をもち，富を集めたと推されるが，盛んに法華経等を書写し，経塚造営に努めた。新治村東城寺境内より，保安三年銘，元治元年銘の致幹寄進の経筒が出土しているのはそのあらわれである。（一括の経塚出土品は現在東京国立博物館に保管されている。）当時のわが国は末法思想が流行，末法を克服すべく，法華経その他の写経，経塚造営が盛んであったと共に，現世に極楽浄土を求め阿弥陀堂が建設された。宇治平等院はその代表的例であり，奥州藤原氏による毛越寺，無量光院などもそうである。現世の浄土とすべく池園を配した伽藍配置一定の特色を示している。彼が北条町日向所在の廃寺を建設したかどうか確証はないが，彼の名を刻した経筒の出土からこの地に在所していたことは確かである。また，彼の孫が平義幹で，義幹は小田に拠った八田氏と争い，源頼朝に滅ぼされ，維幹より六代つづいた常陸大掾氏は滅亡した。日向廃寺址は瓦類を除いて出土品に乏しかったが，中国龍泉窯作と推される青磁片，白磁片が2～3片出土したのは貴重である。北関東の僻地とはいえ当代一流の文化を享受していたことが，寺院の規模と共にうかがわれる。

なお，甲山古墳の発掘に際して，周湟より平安時代の土器と共に，フイゴ破片，鉄滓を見出した。製鉄タタラ址と推されるのである。最近こうしたタタラ址は，漆文書を出土した石岡市鹿の子遺跡で，また，鹿島神宮周辺でもいくつかの報告がある。常陸風土記にすでに製鉄の記載があり，この地区は関東における古来製鉄の盛んな地であったことがうかがわれえる。日向廃寺址より若干の鉄釘をえている。その製作地は何処か今後の課題である。　（増田精一）

図版1　上坂田北部貝塚

1. 貝塚遠景

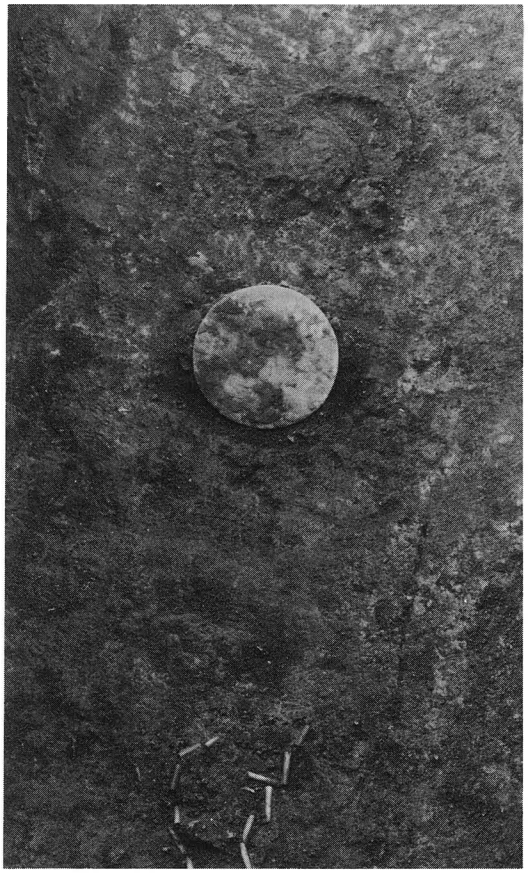


2. 住居址

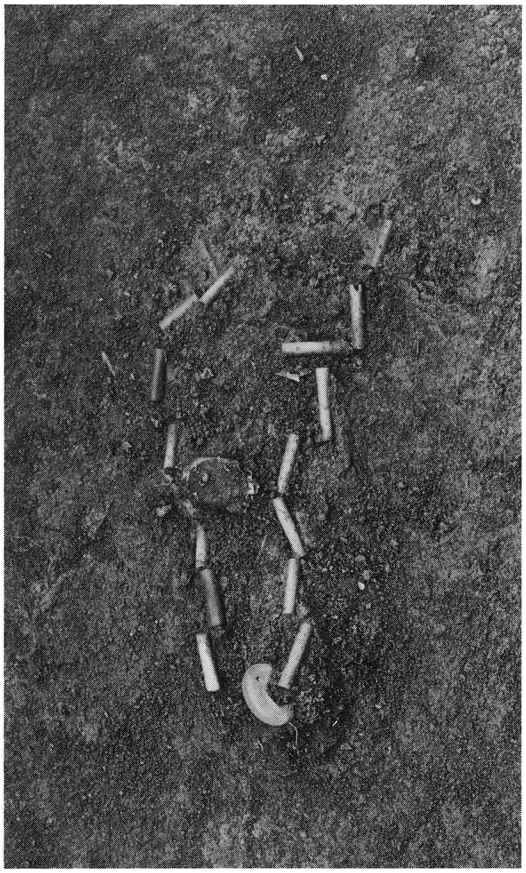
粘土槨全景（南より）

1.　桜塚古墳全景（東より）

2.　粘土槨断面



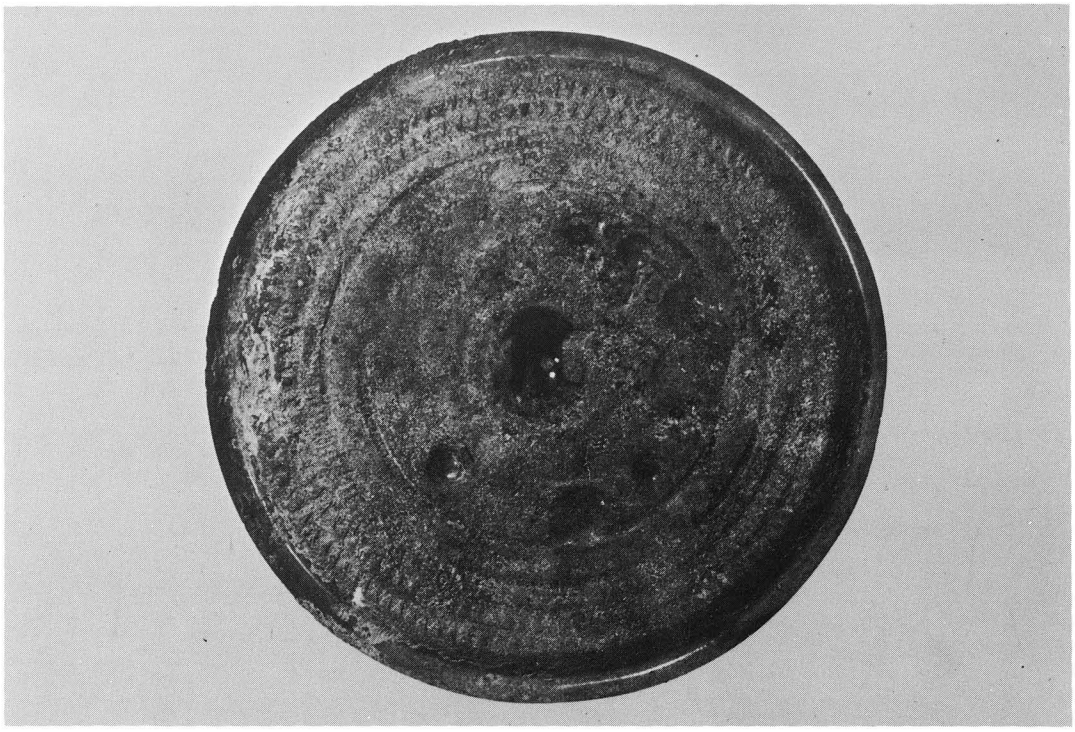
1.　編物・鏡 出土状況



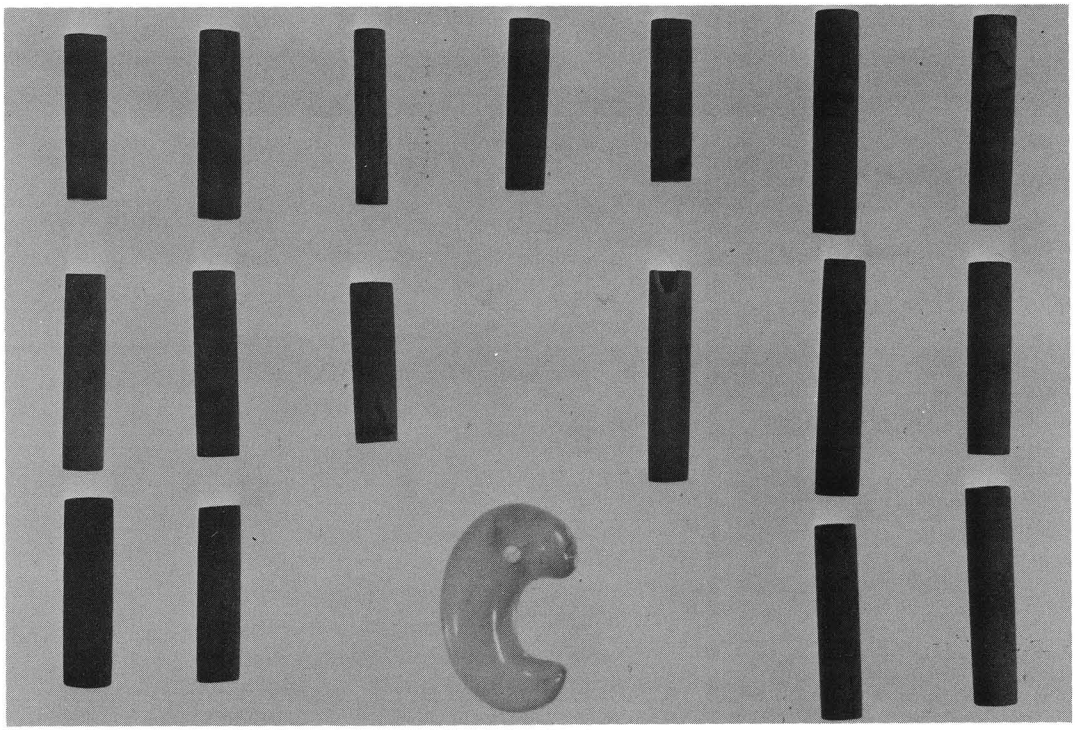
2.　玉類出土状況

3.　玉・石釧出土状況

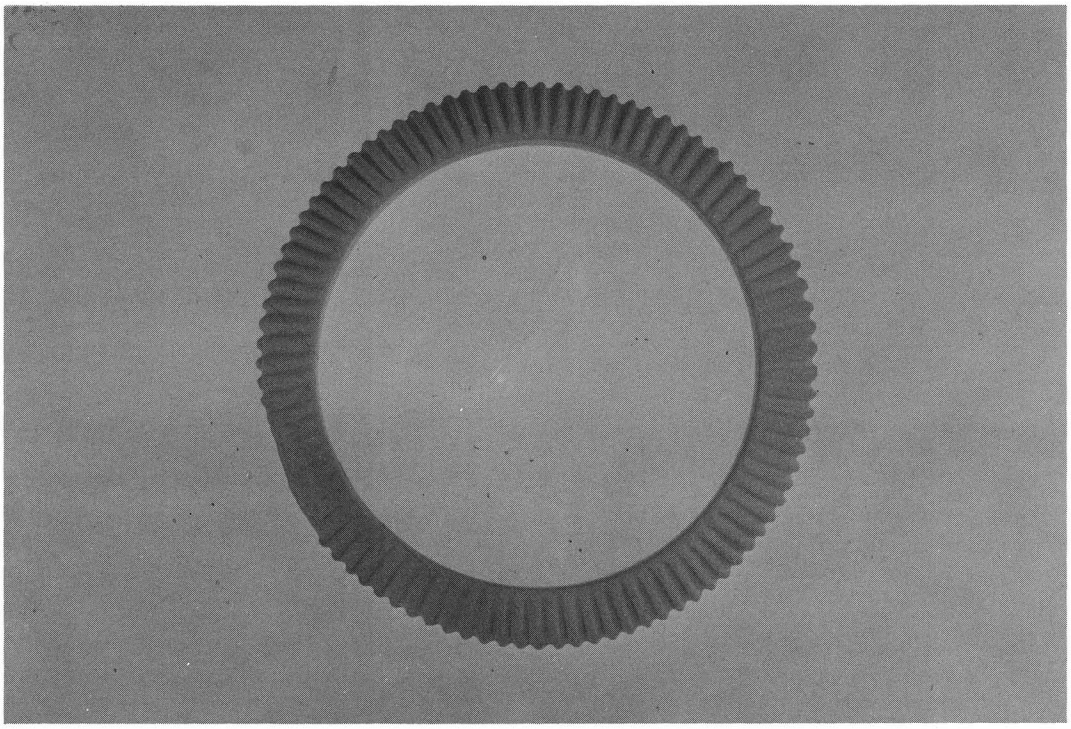
4.　玉・短剣出土状況



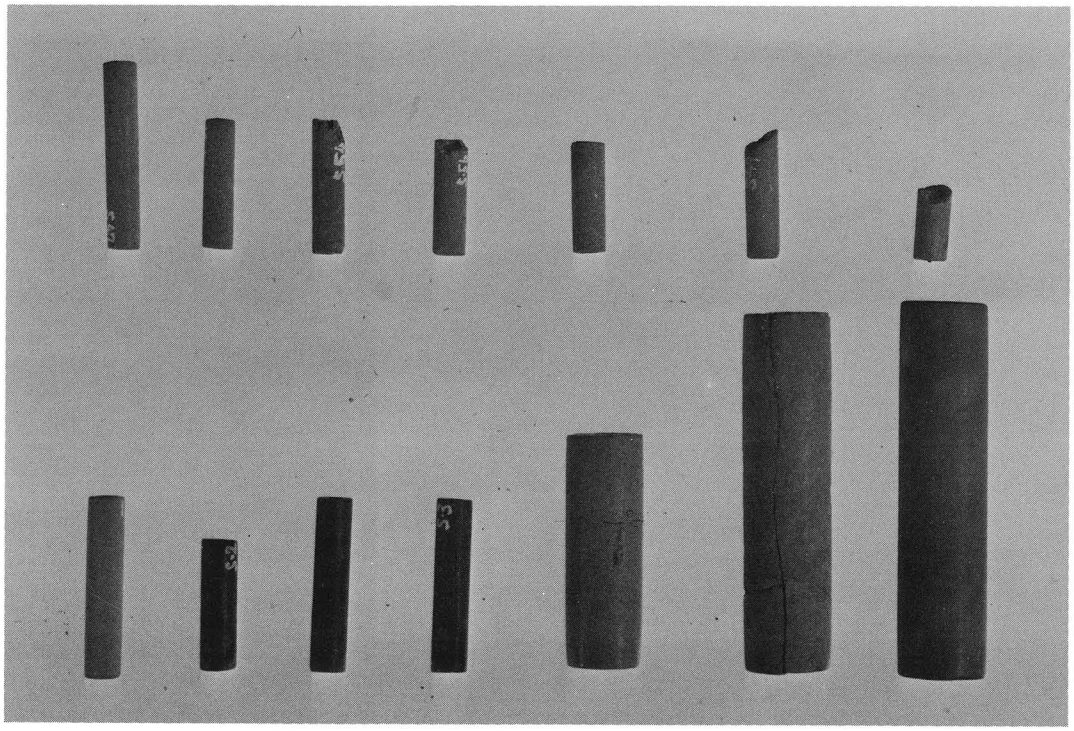
1.　変形四獣鏡（2/3）



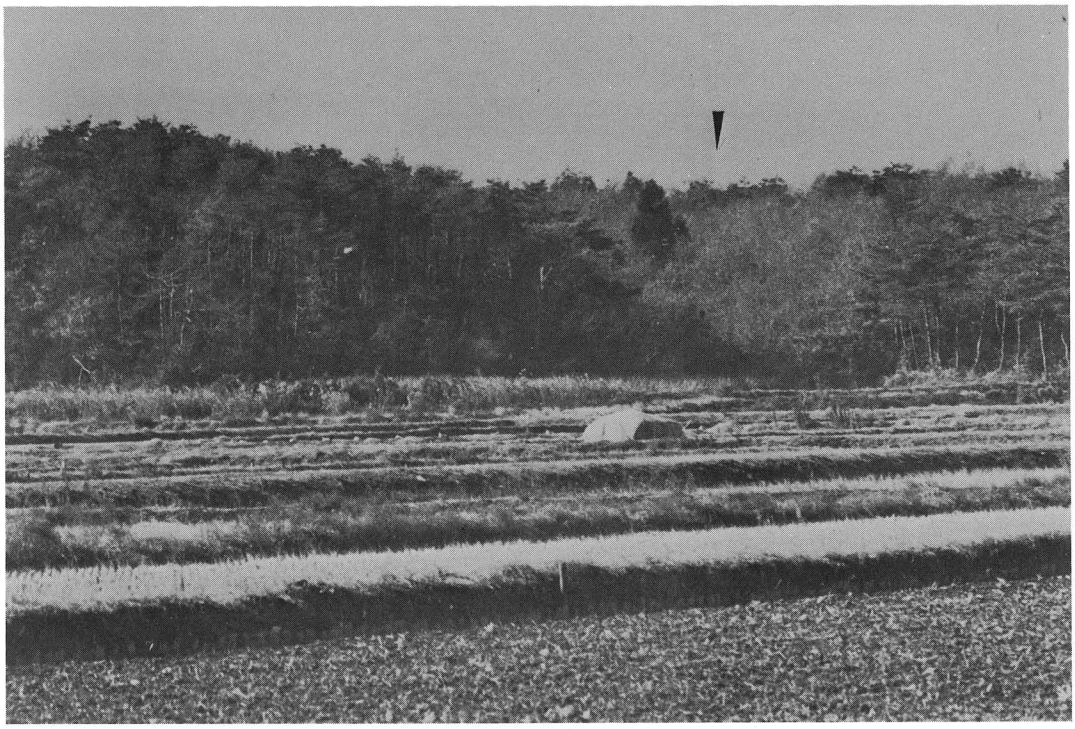
2.　管玉(Ⅰ)・勾玉（1/1）



1. 石釧 (1/1)



2. 管玉(II) (1/1)

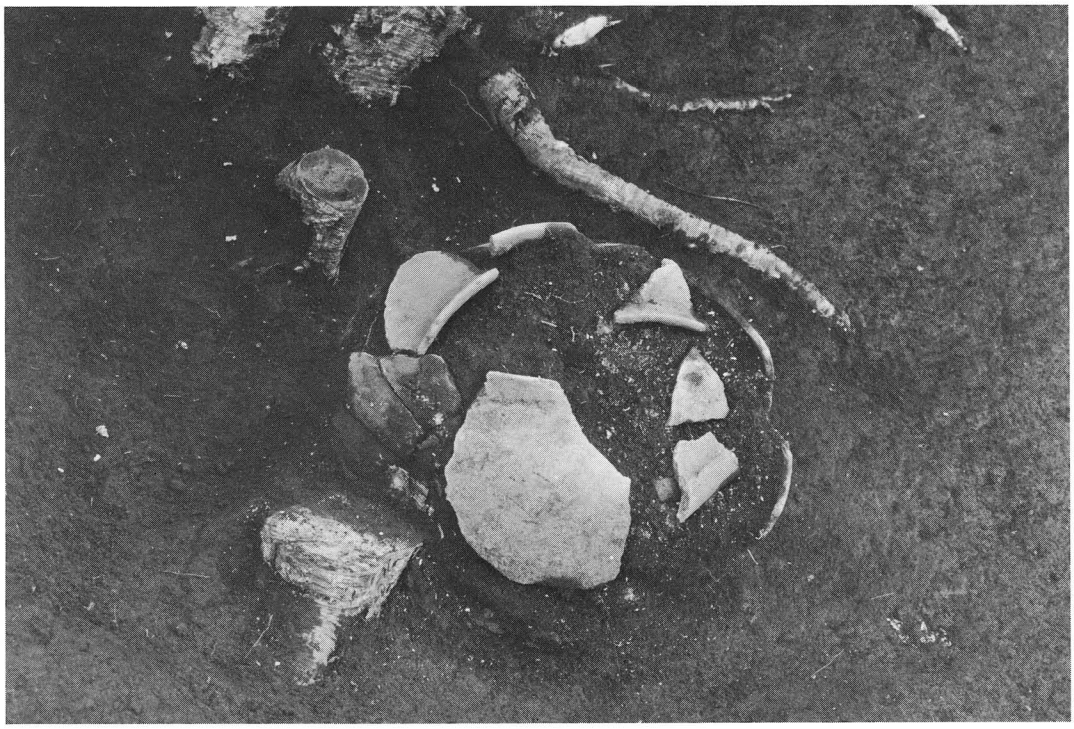


1.　観音下遺跡遠景（東より）

2.　2号住居址土層断面

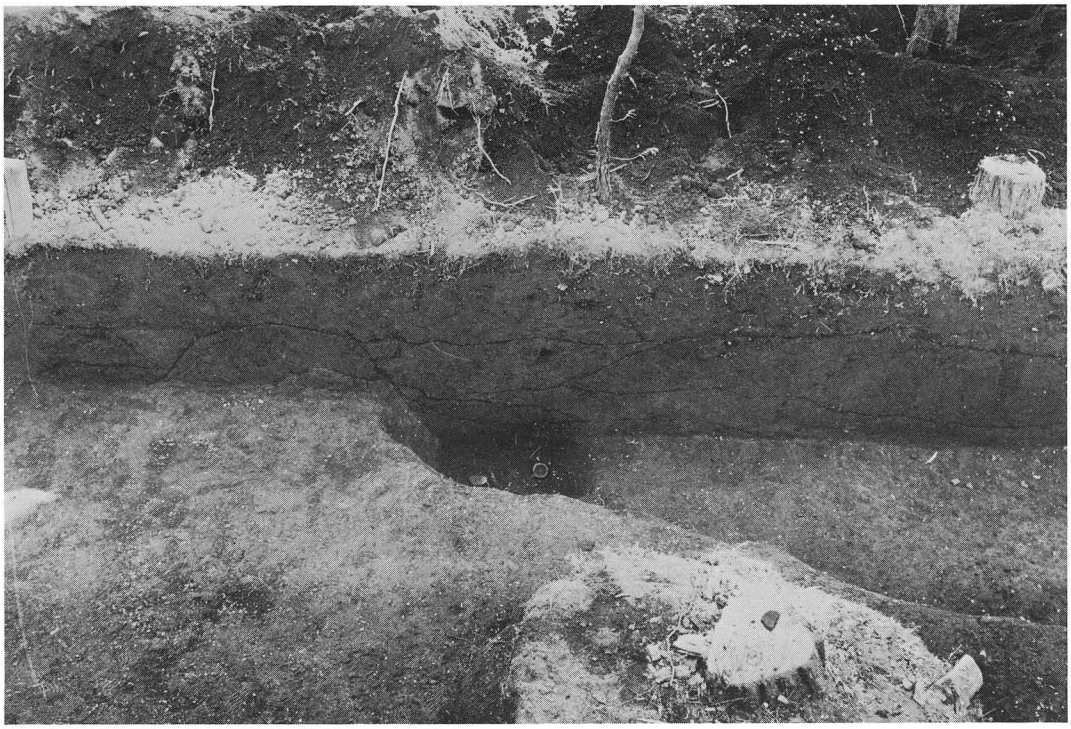
1.　2号住居址北辺の遺物

2.　2号住居址西辺の炭化材



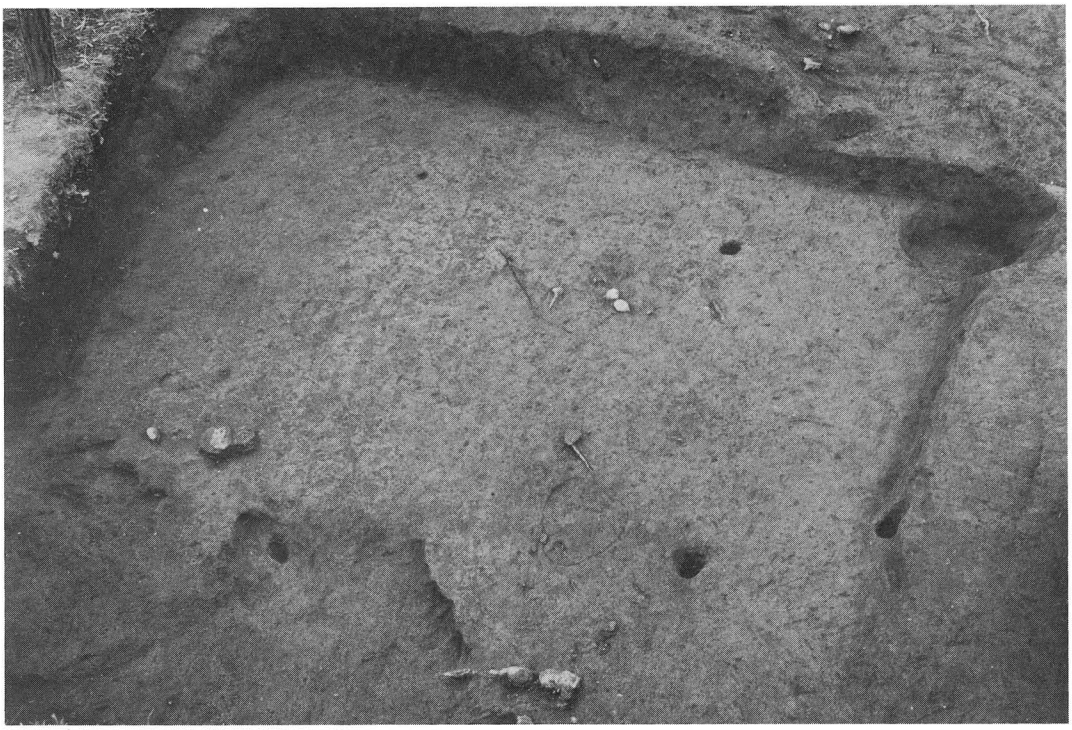
1.　2号住居址遺物出土状況（I）

2.　2号住居址遺物出土状況（II）



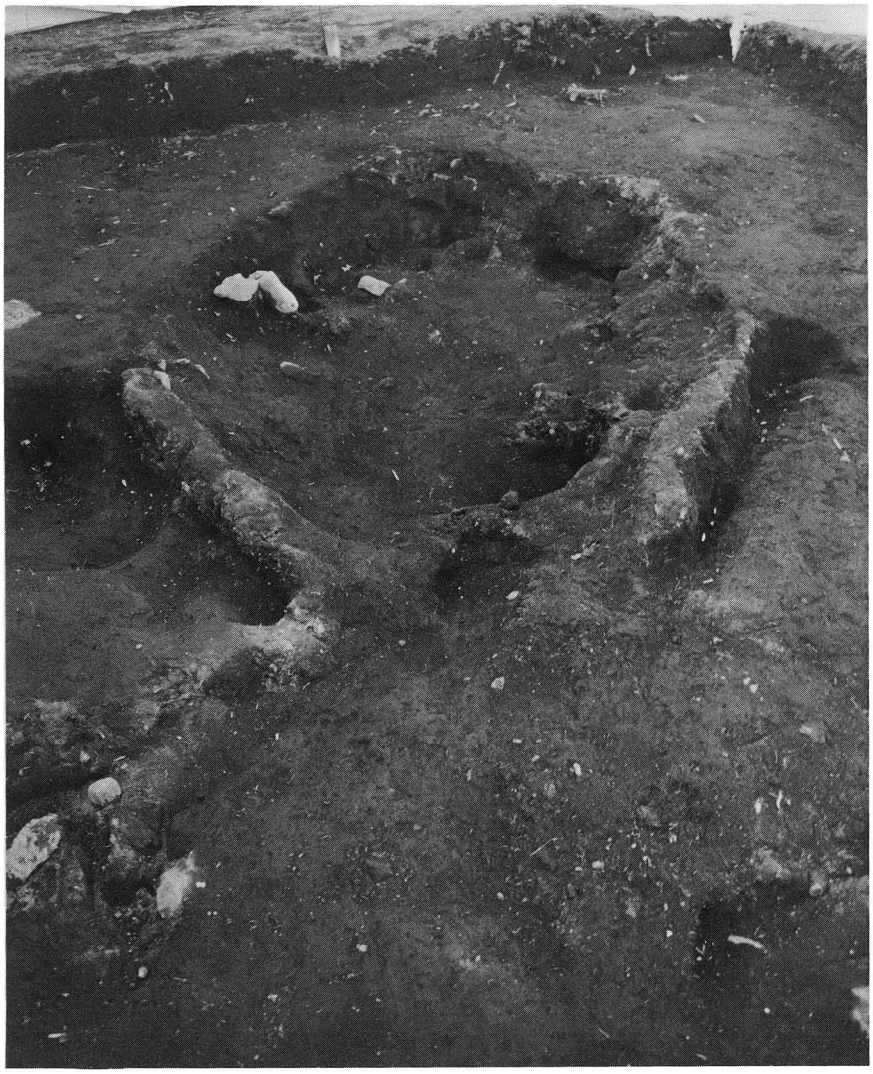
1.　1・2号住居址の切り合い関係

2.　1・2号住居址全景（北より）



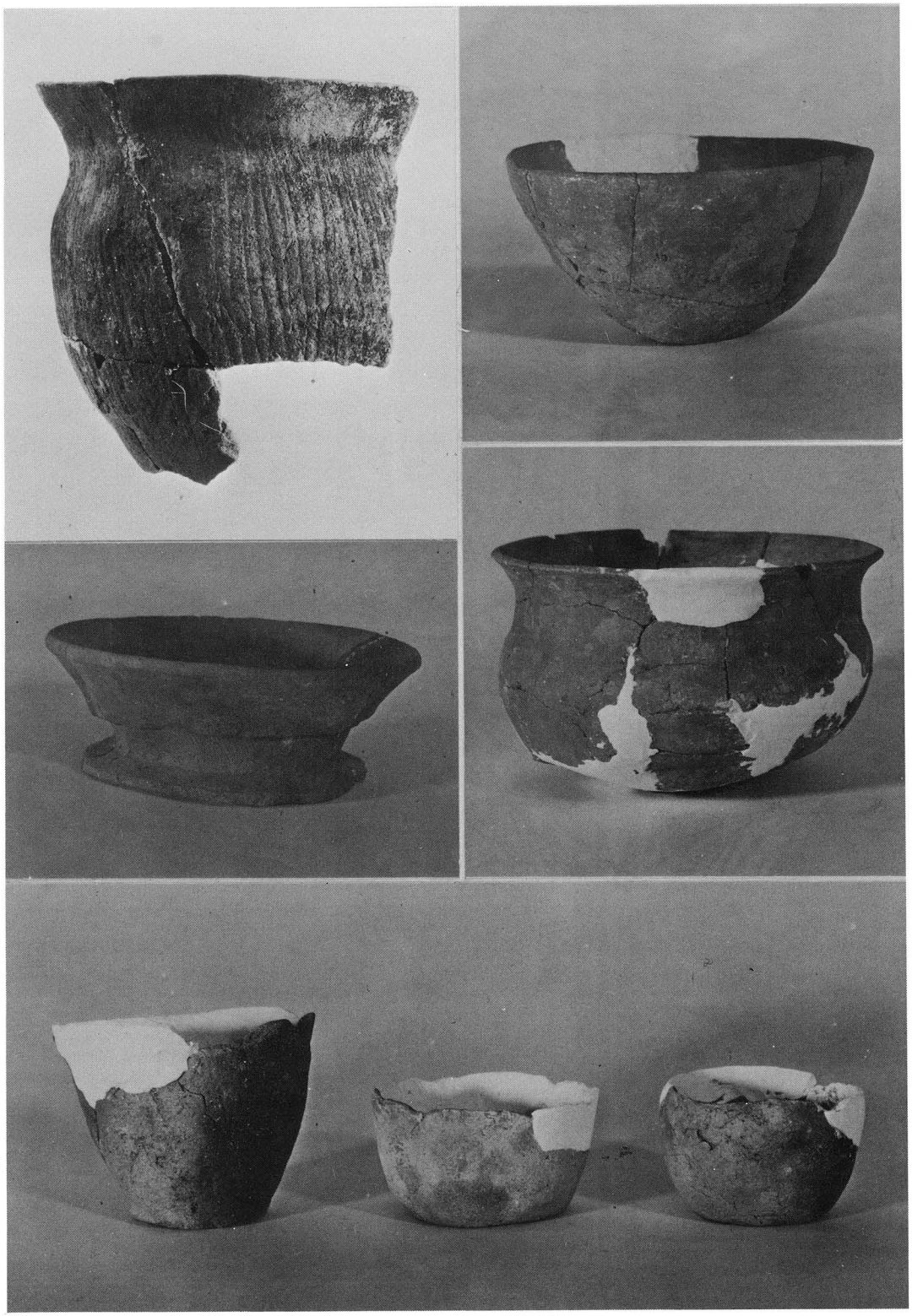
1.　1号住居址全景（東より）

2.　2号住居址全景（東より）

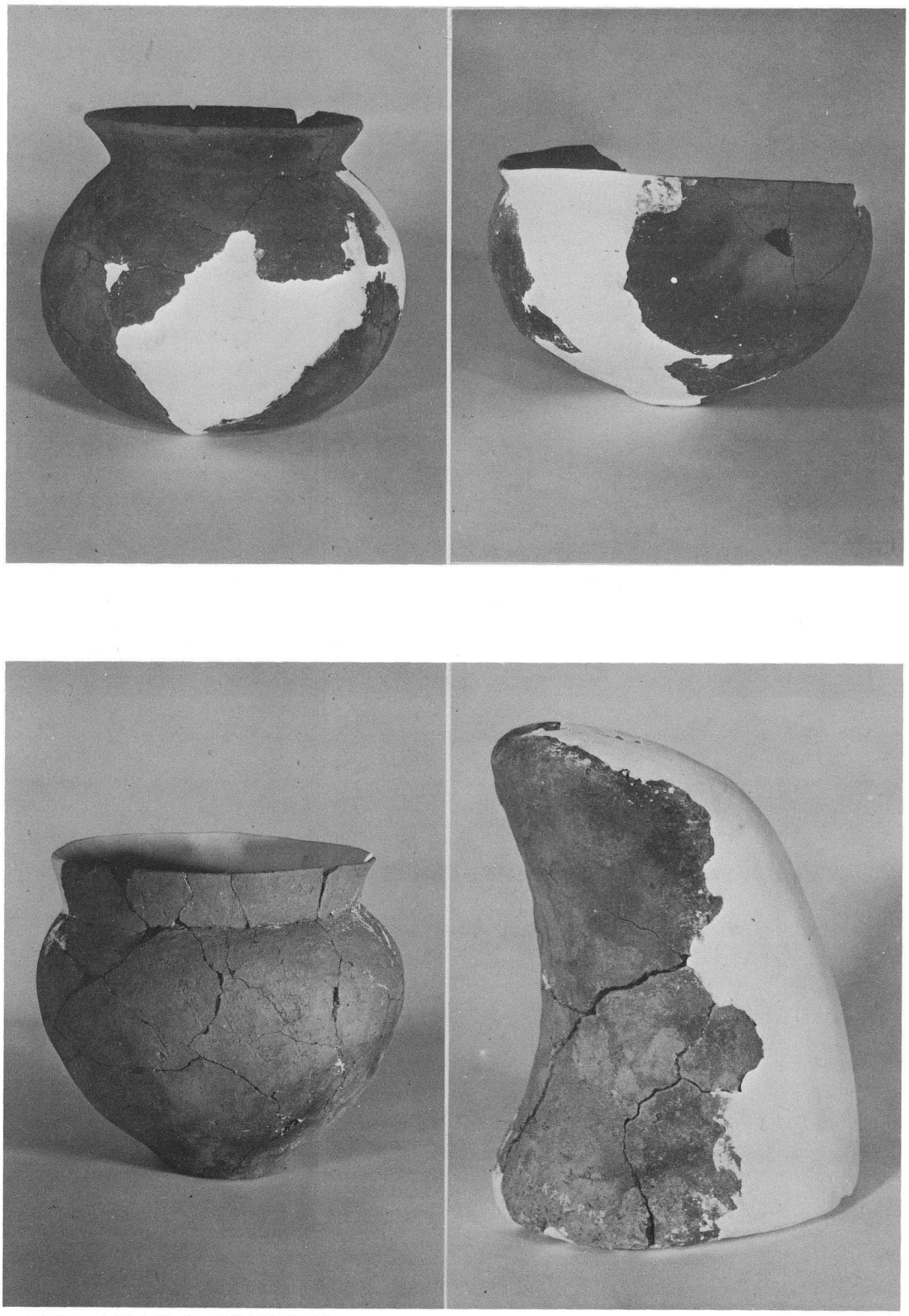


1.　窯 址 全 景（東より）

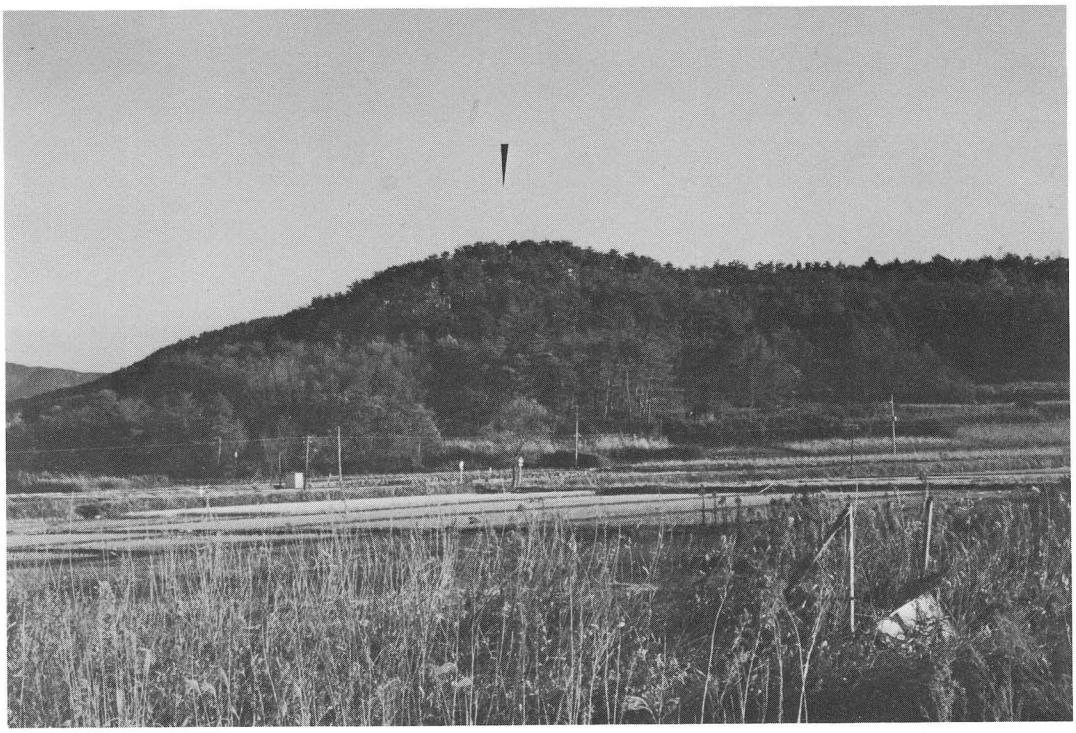
2.　窯址の土層断面



土師器　（左上は１号、他は２号住居址出土）

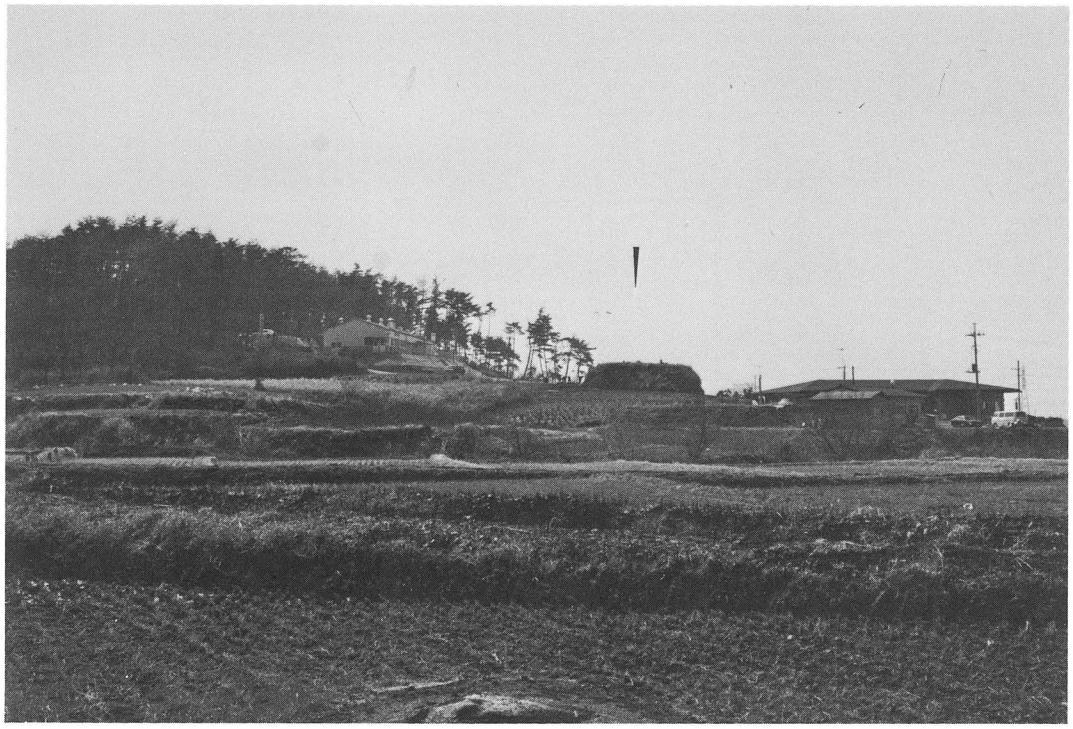


土師器・土製支脚（2号住居址出土）



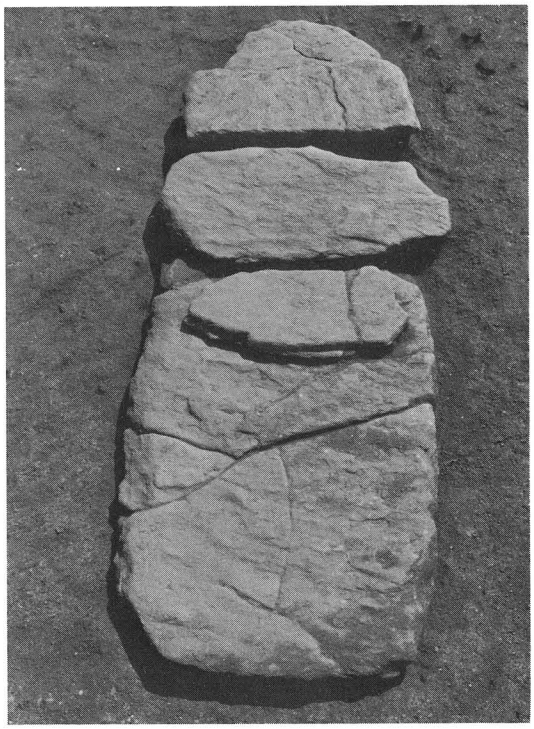
1.　土塔山古墳遠望

2.　横町2号墳全景

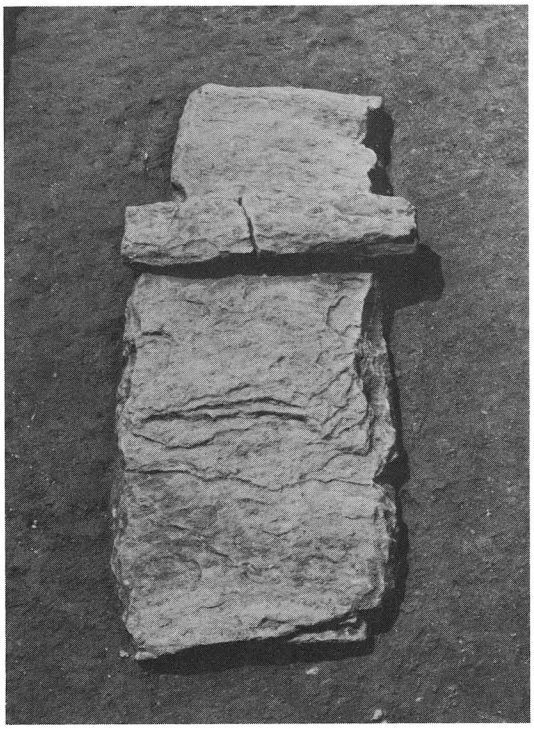


1.　甲山古墳遠望

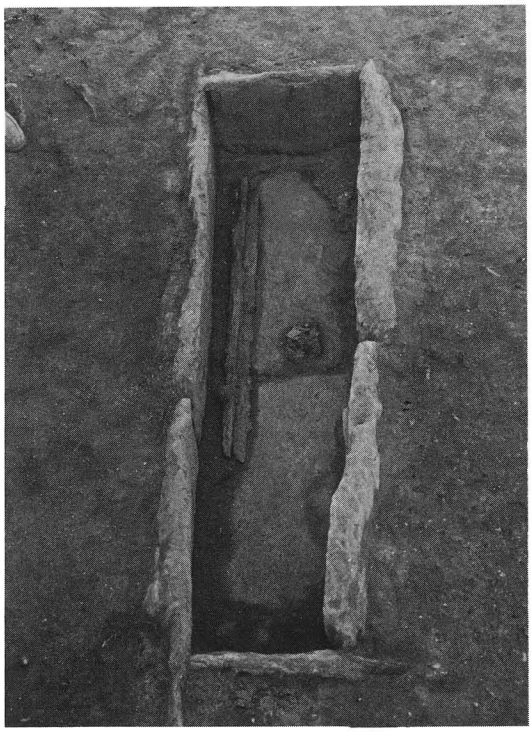
2.　1号棺（向う）と2号棺（手前）



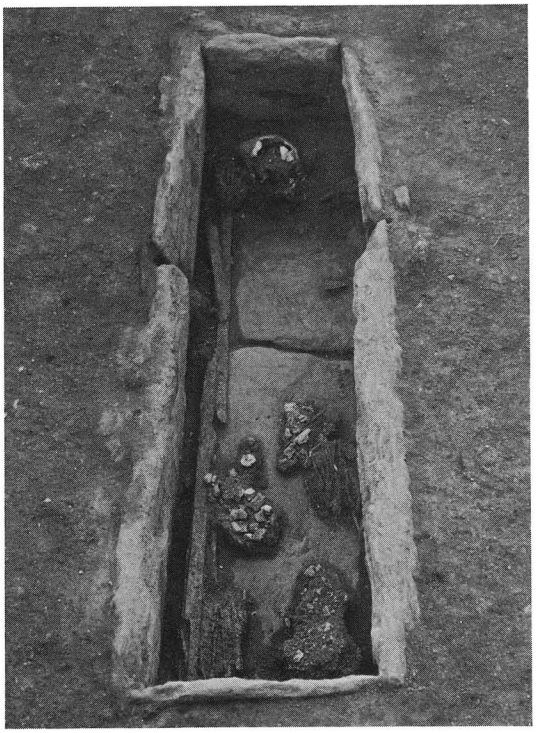
1.　1号棺（北より）



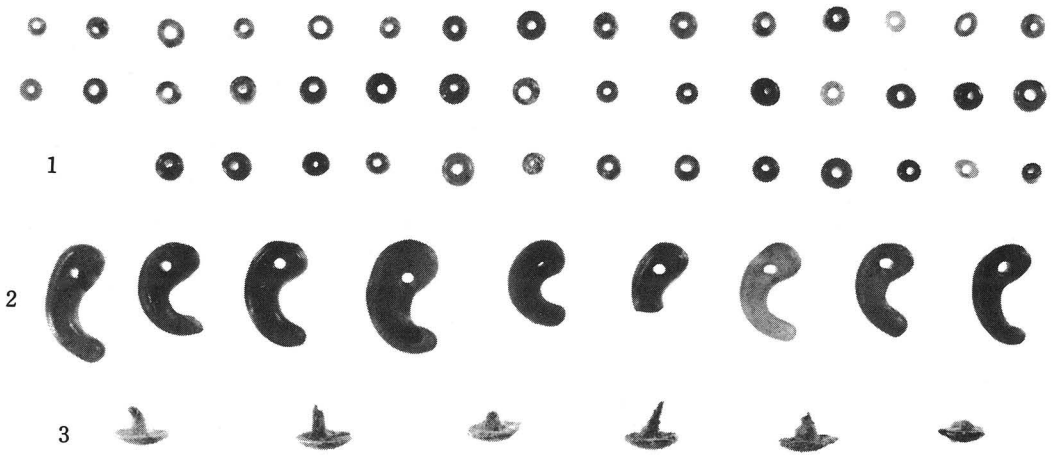
2.　2号棺（東より）

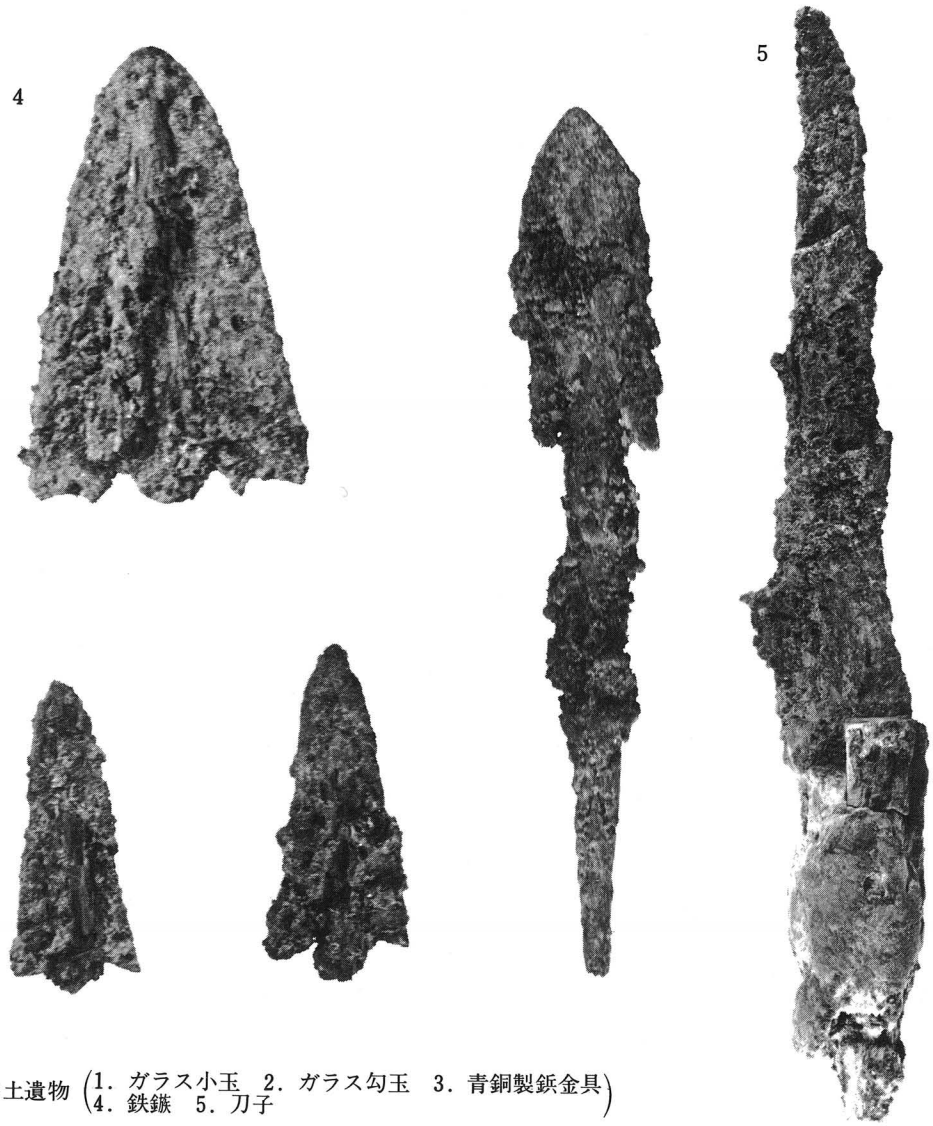


3.　1号棺遺物出土状況（南より）

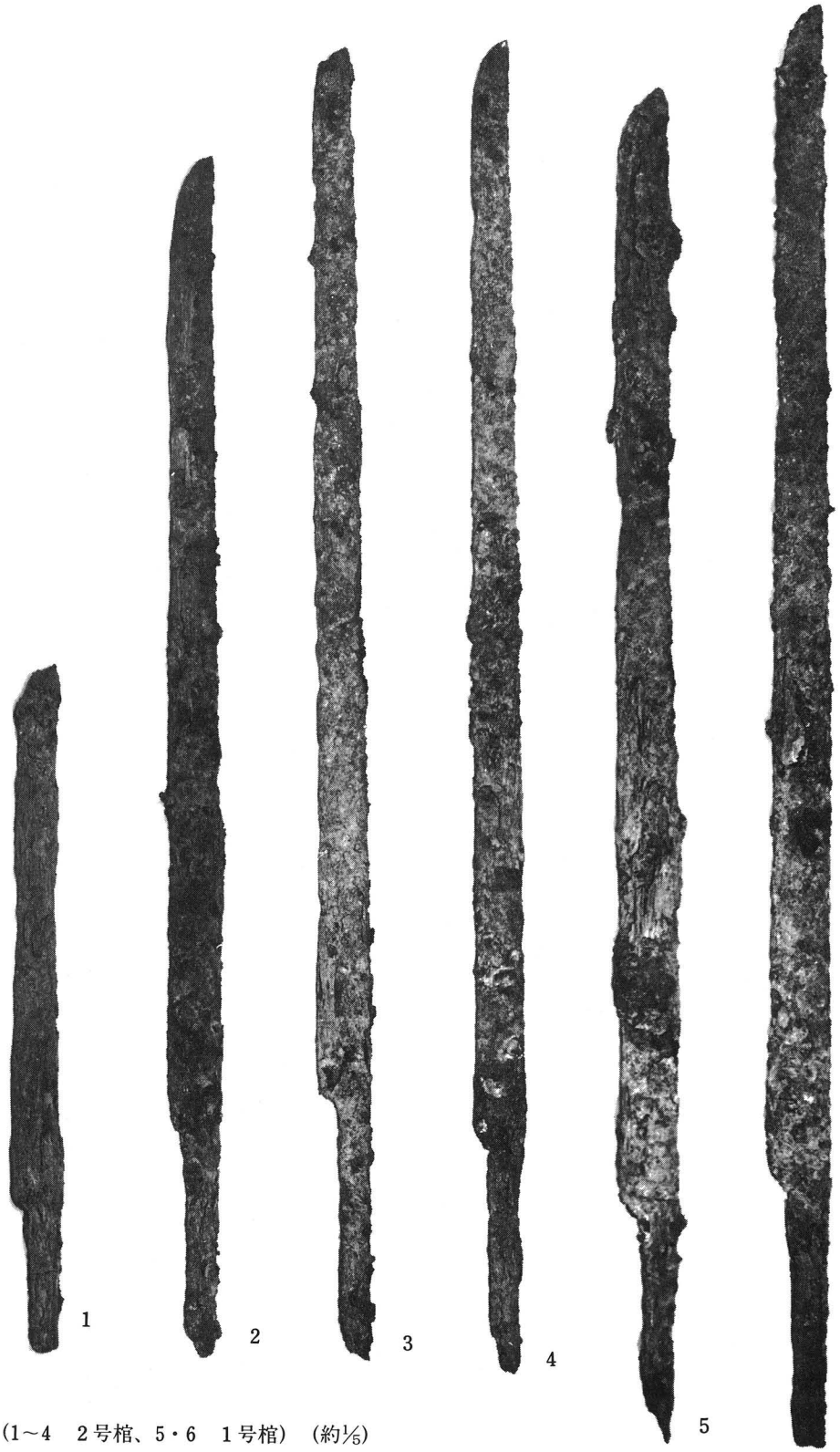


4.　2号棺遺物出土状況（東より）





2号棺出土遺物（1．ガラス小玉　2．ガラス勾玉　3．青銅製鋲金具　4．鉄鏃　5．刀子）

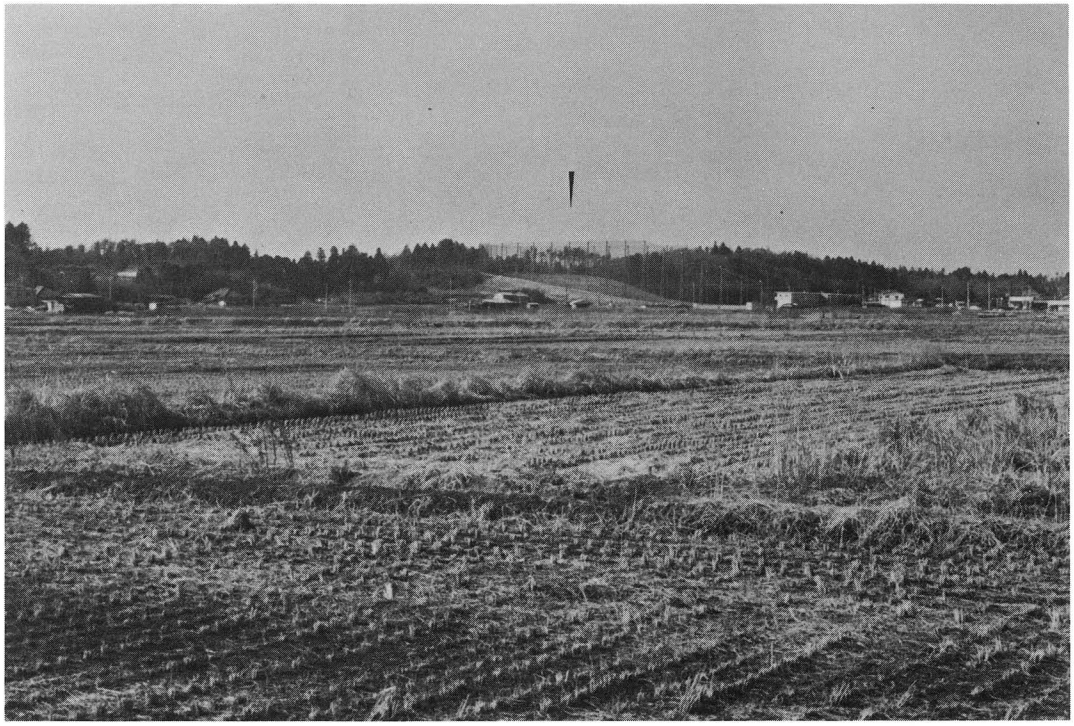


直刀（1～4　2号棺、5・6　1号棺）（約1/5）

図版20　菅間大塚山古墳

1.　古墳全景（南より）

2.　後円部の現況（西より）



1.　根本古墳遠景

2.　調査前の状況

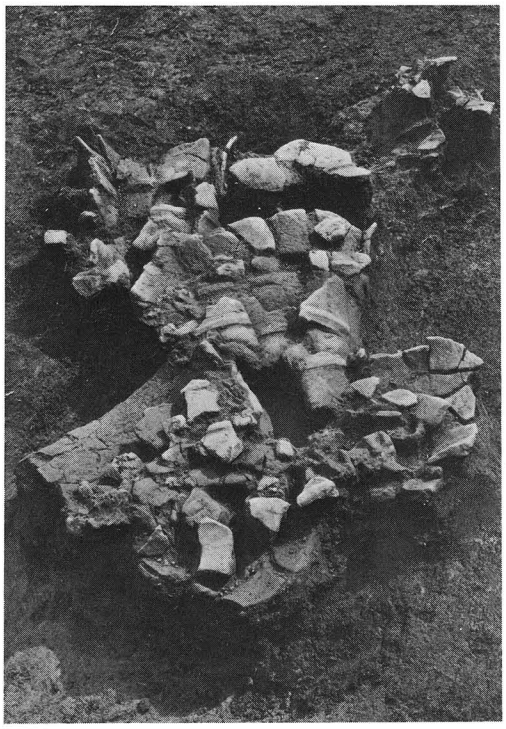
1.　墳丘土層断面

2.　溝状遺構（M1－1）と古墳周湟（M2－1）

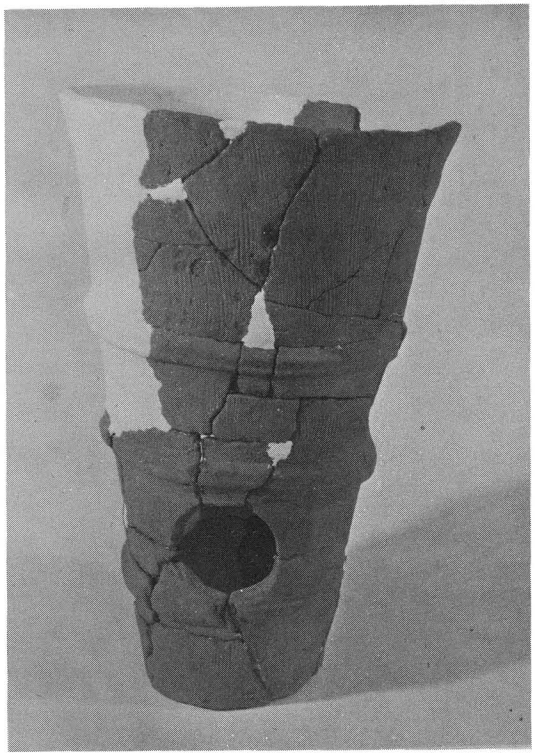
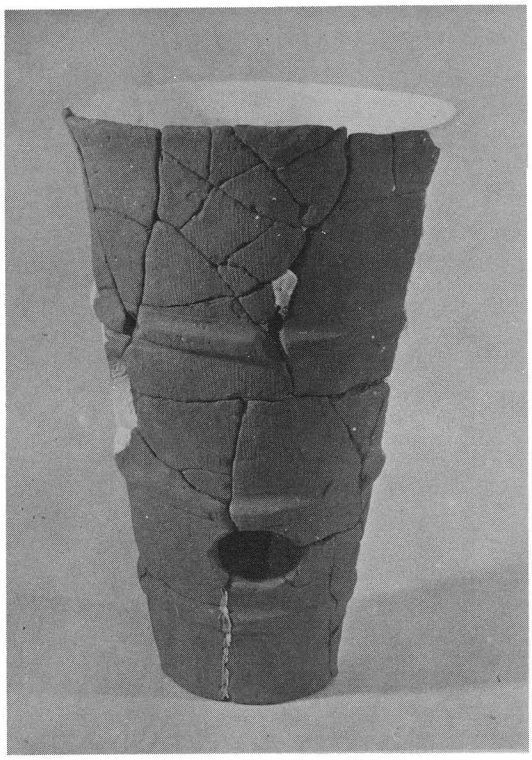
1.　溝状遺構（M1－2）と遺物出土状況

2.　古墳周湟（M2－3）

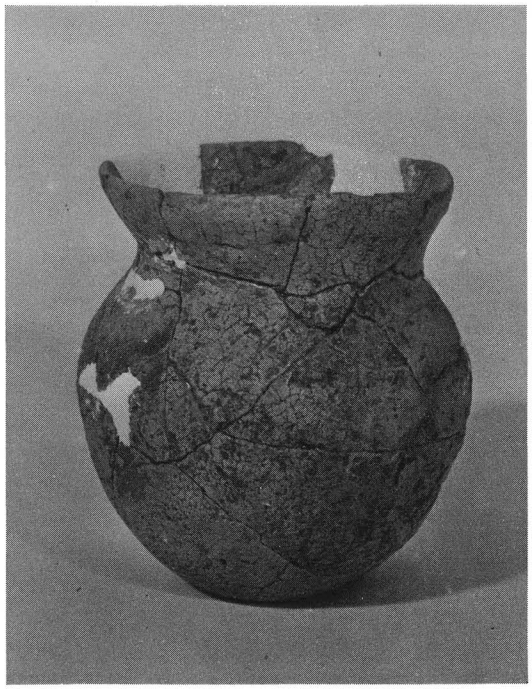
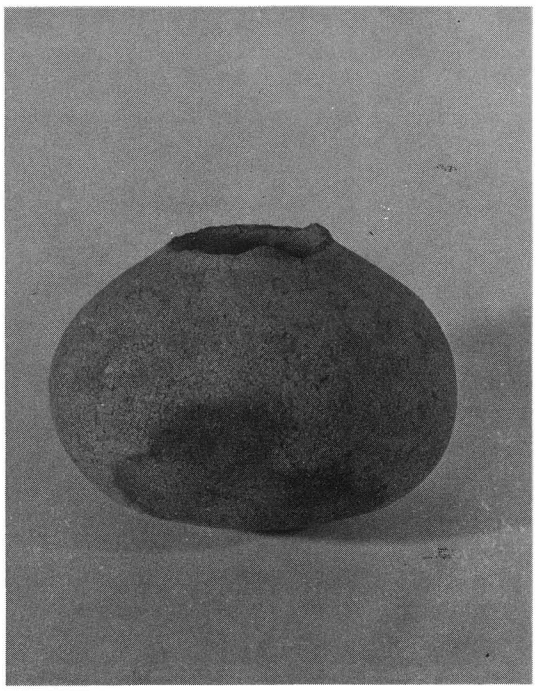
1.　遺物出土状況



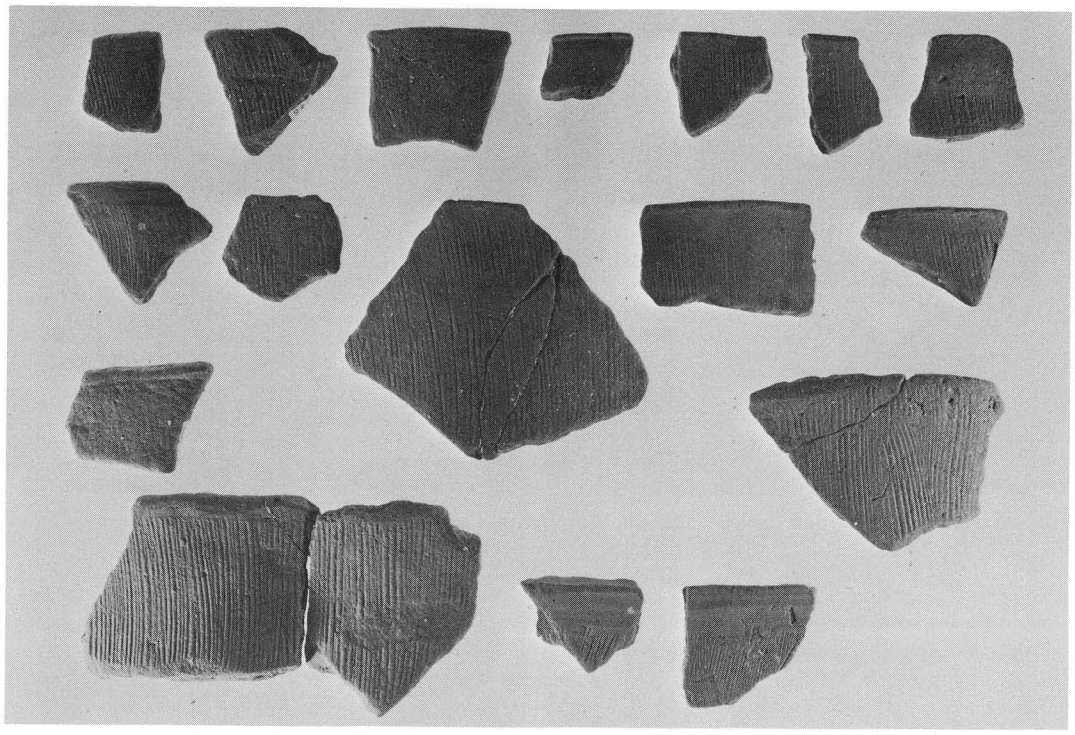
2.　円筒埴輪出土状況

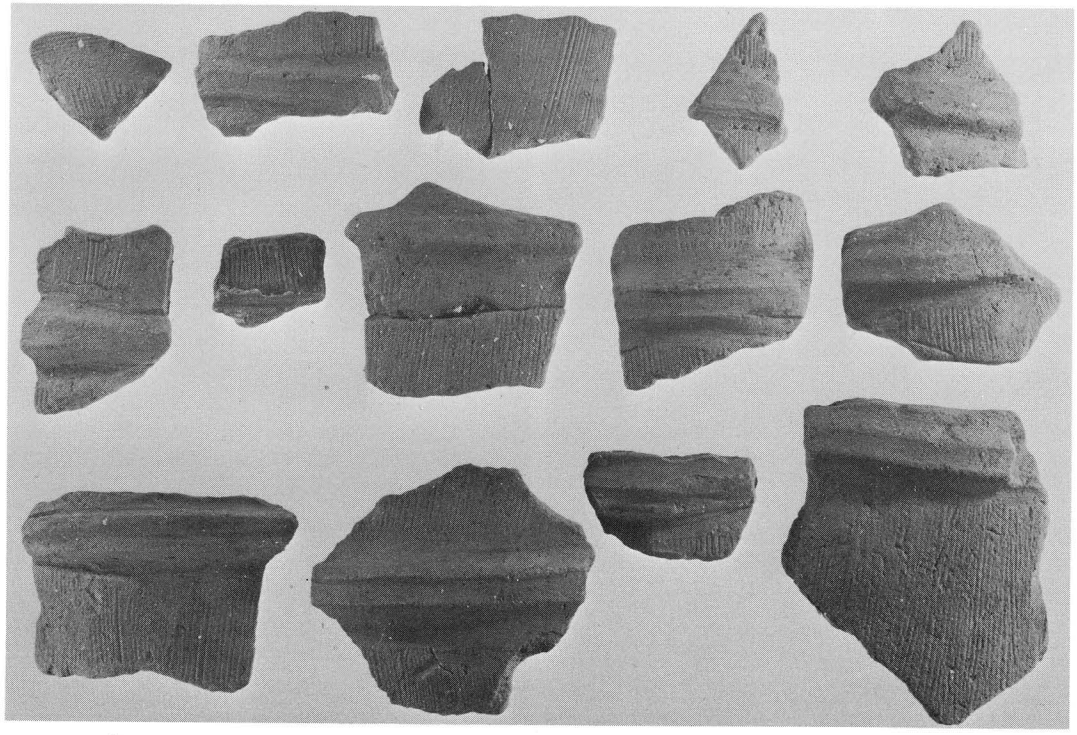
1.　円筒埴輪

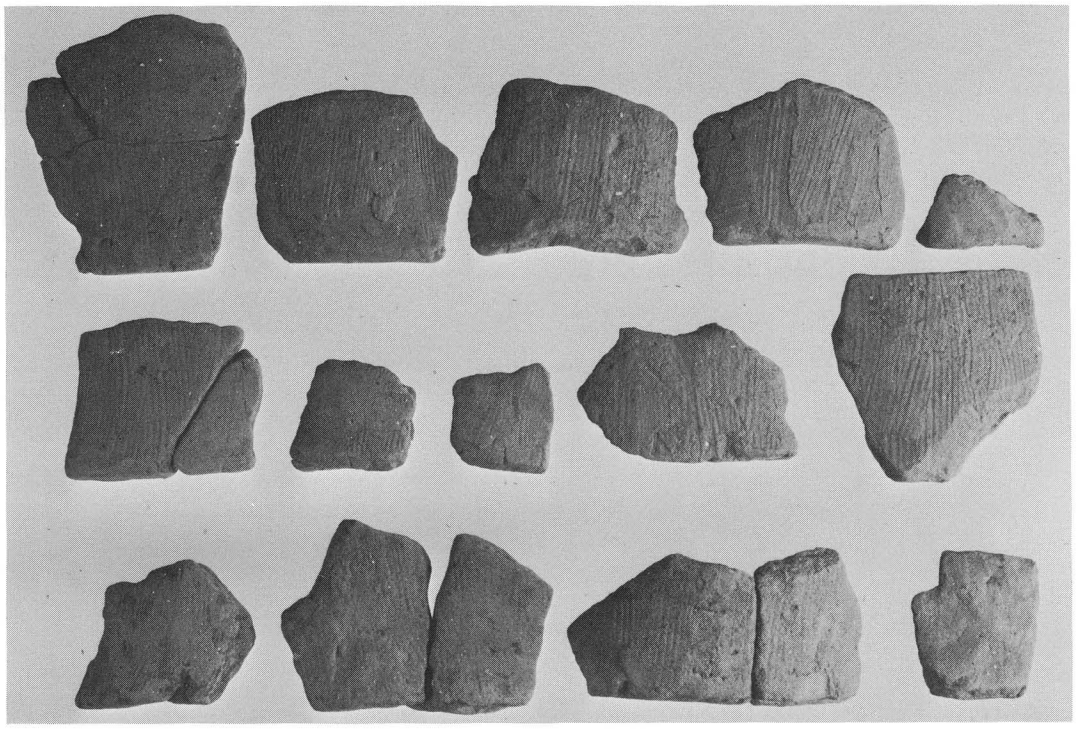
2.　土師器



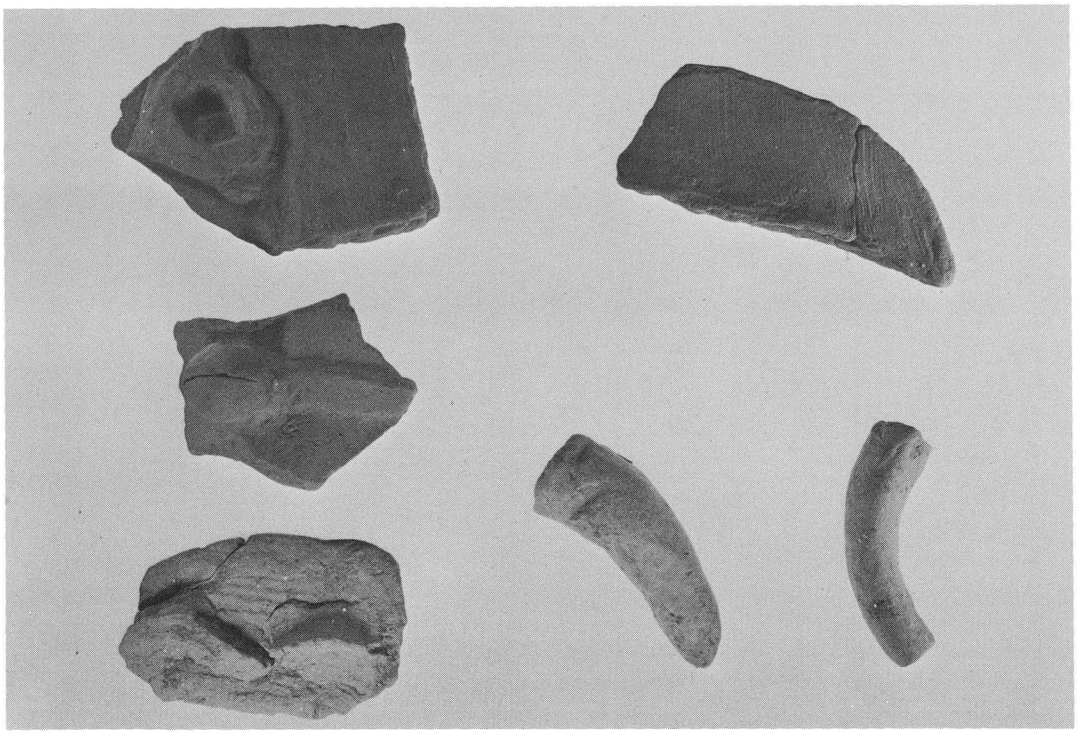
1.　円筒埴輪片　口辺部（⅓）



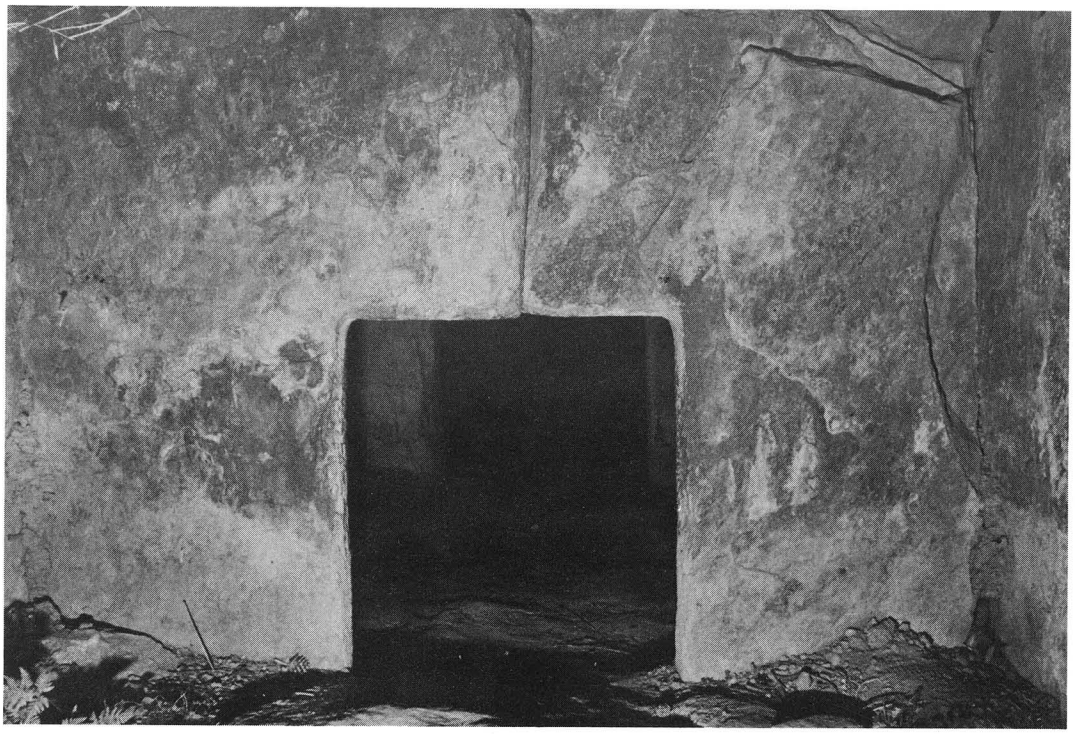
2.　円筒埴輪片　胴部（⅓）



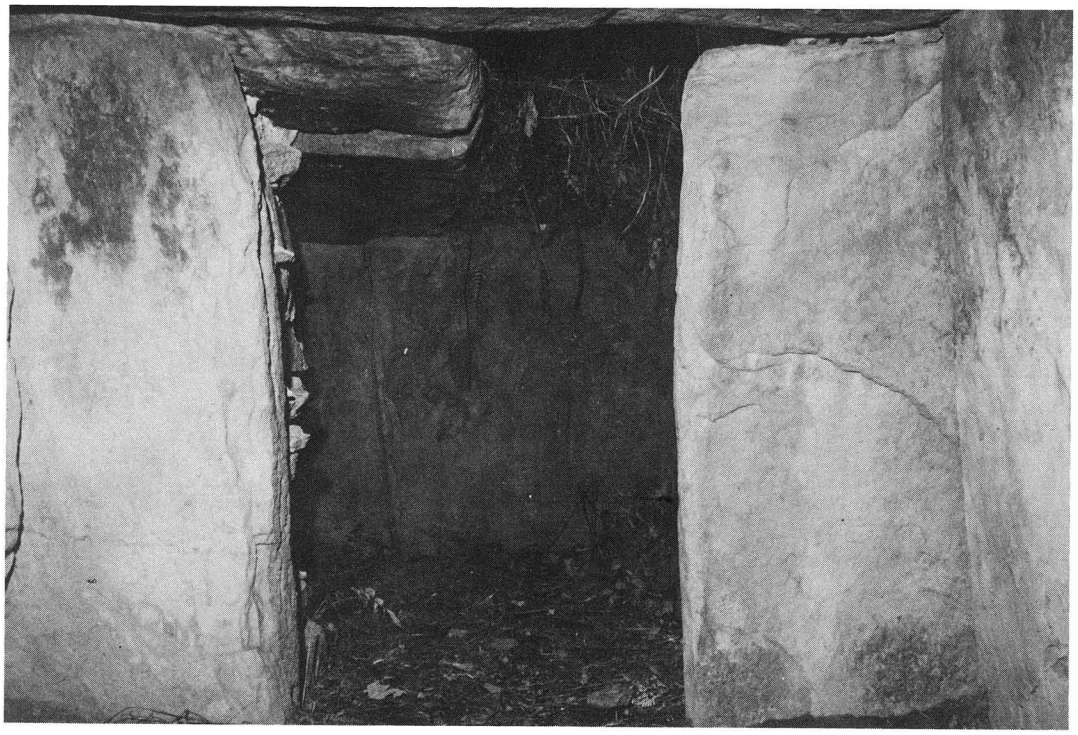
1.　円筒埴輪片　底部（1/3）



2.　形象埴輪片（1/3）

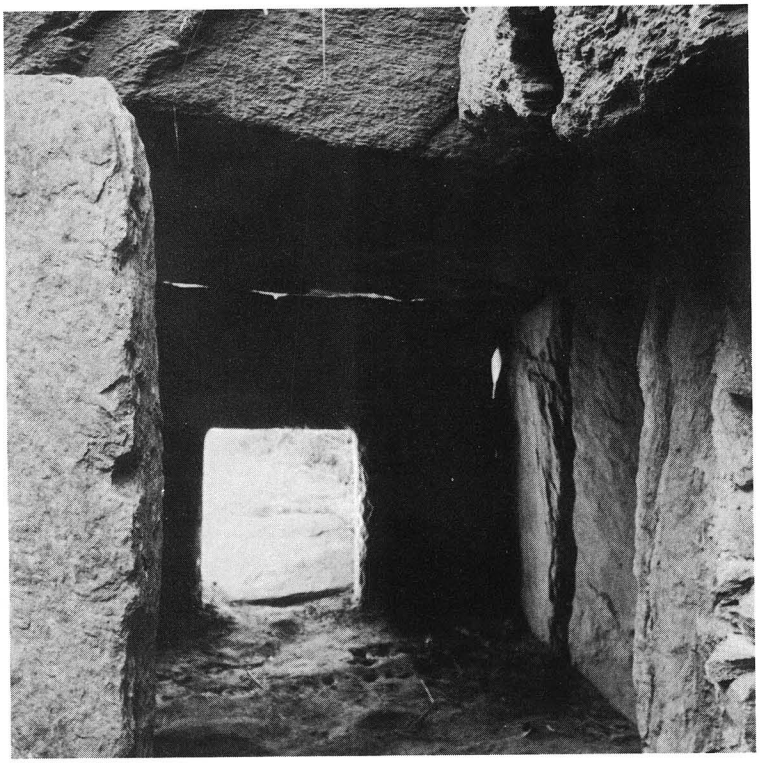


1.　平沢１号墳前門

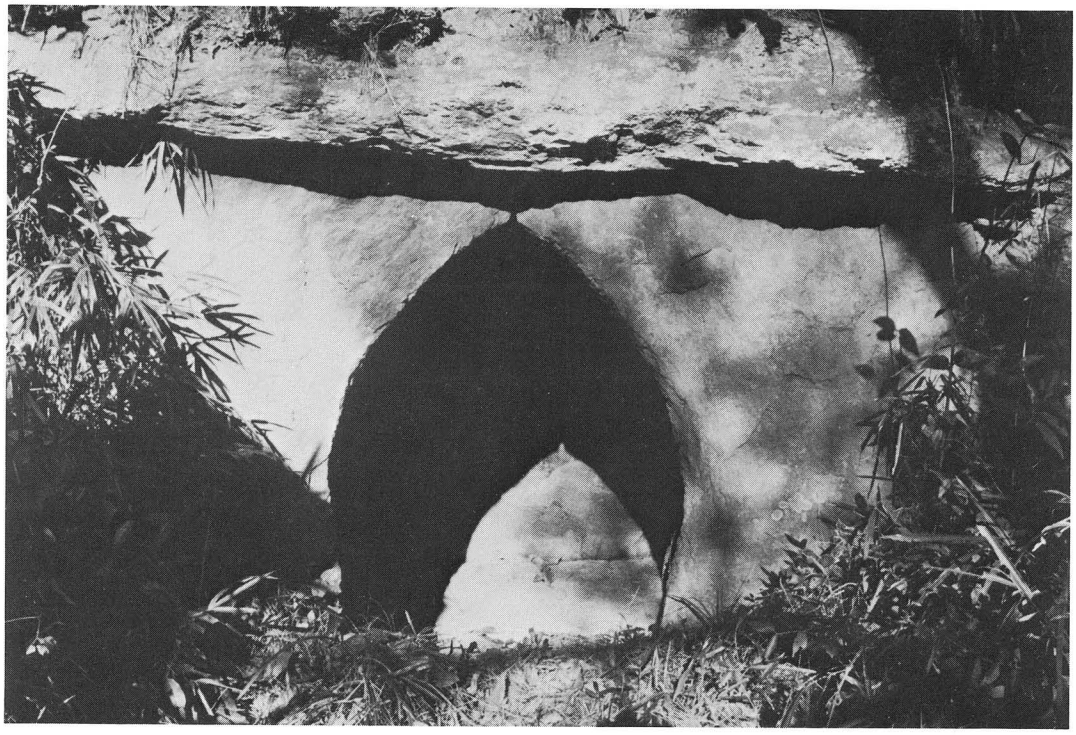


2.　平沢１号墳玄門

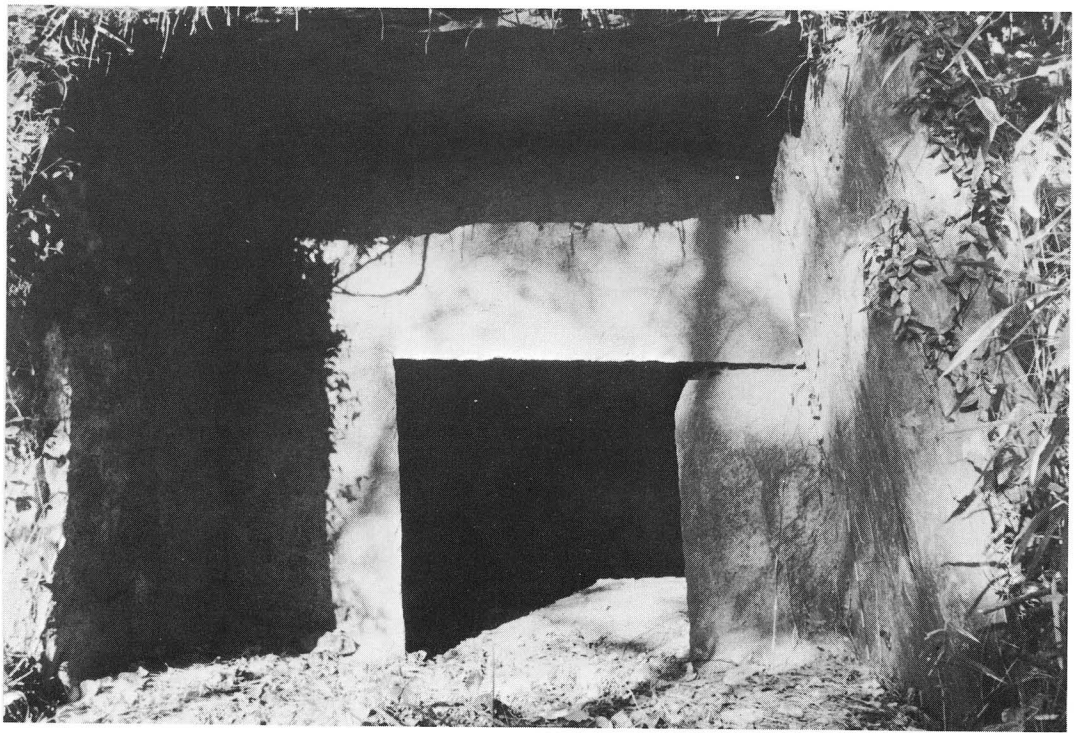
1.　平沢１号墳前室側壁



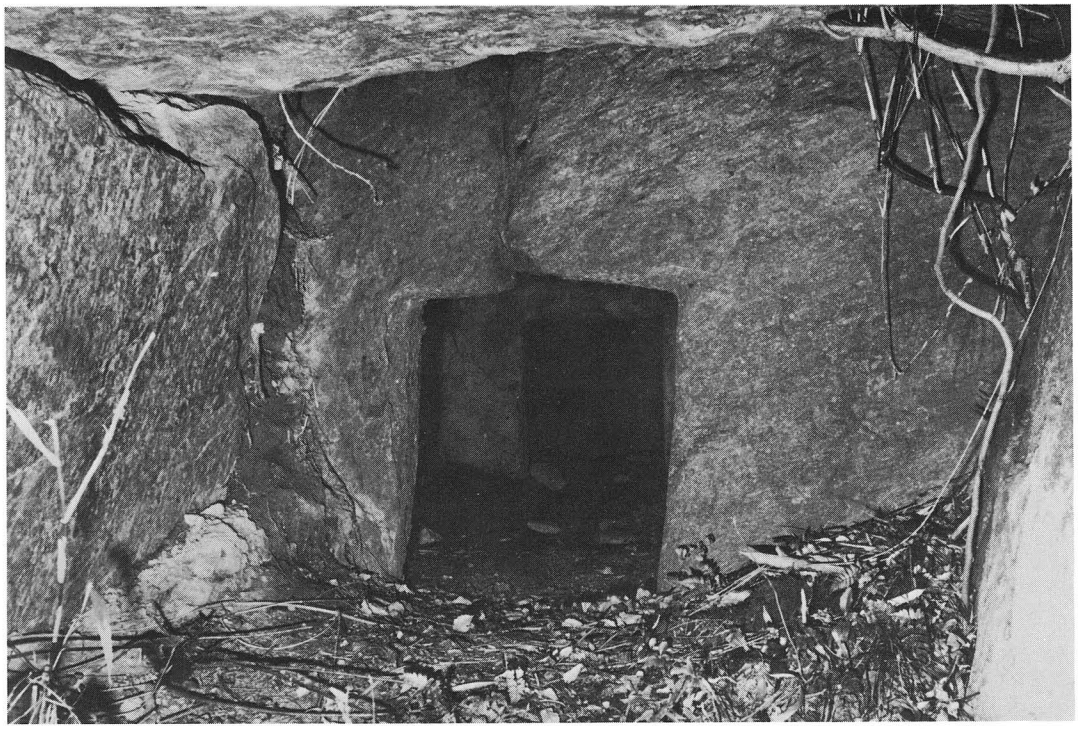
2.　平沢１号墳（玄室より前門を見る）



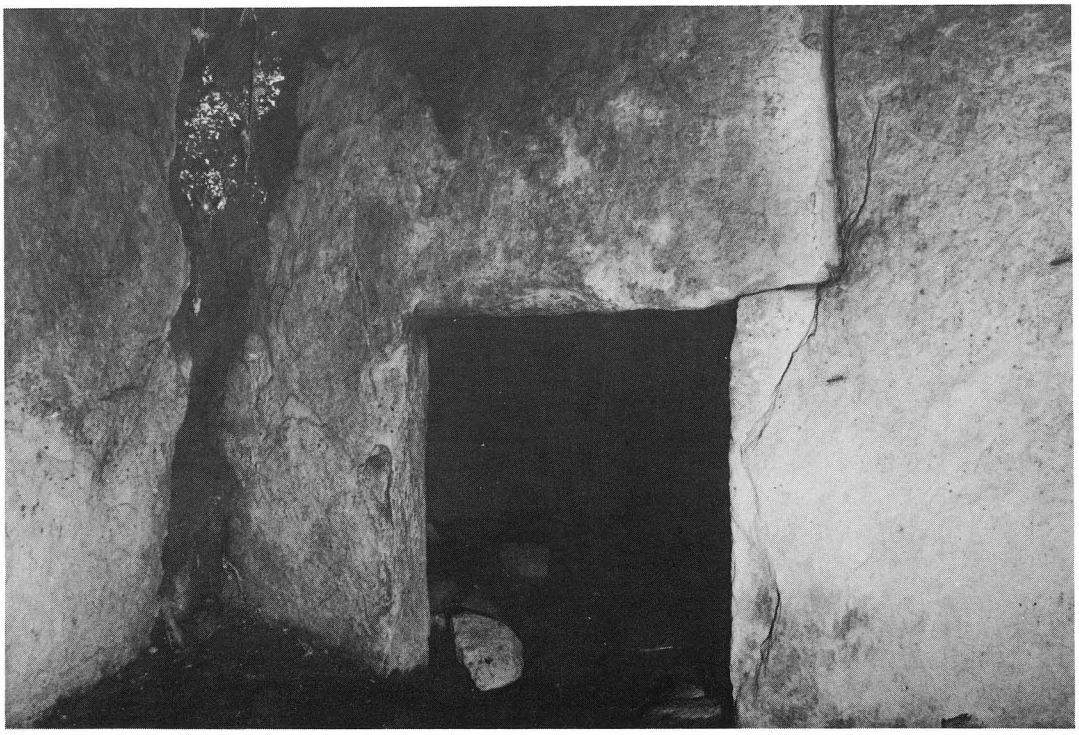
1.　平沢２号墳玄門



2.　平沢３号墳前門



1.　平沢４号墳前門



2.　平沢４号墳玄門

1.　山口１号墳（玄室より羨道を見る）

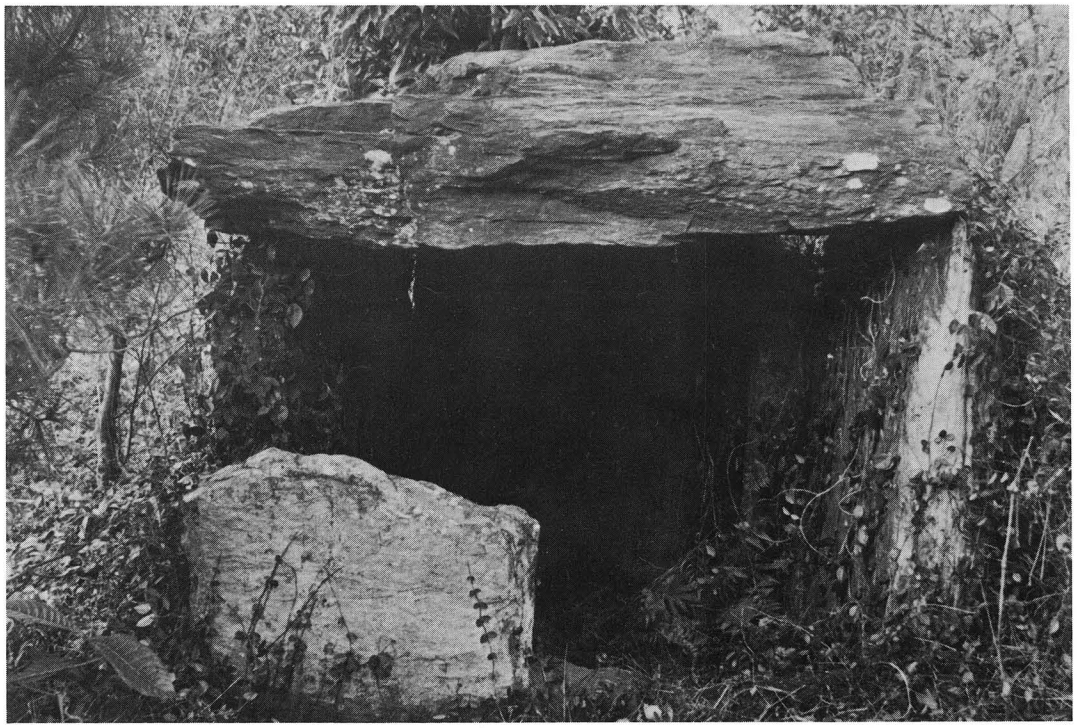
2.　山口１号墳奥壁

1.　山口１号墳左側壁

2.　山口２号墳羨道入口

1.　山口２号墳（玄室より羨道を見る）

2.　山口２号墳奥壁

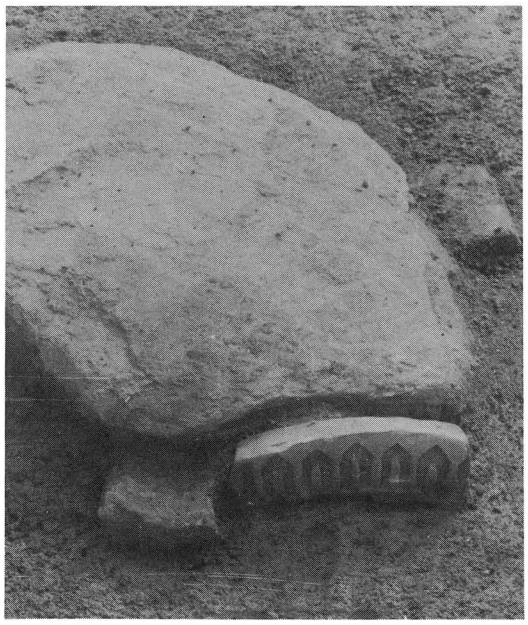


1.　山口３号墳現状

2.　山口４号墳現状

遺構中央部

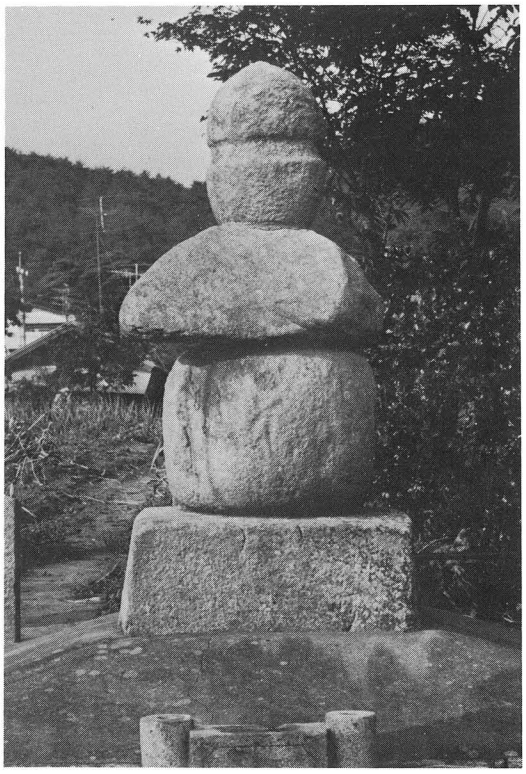
1. 中央堂トレンチ設定状況（東から）



2. 瓦を根固めとする礎石

3. 瓦出土状況

図版38　二基の五輪塔



1.　北条所在五輪塔

2.　小田山麓所在五輪塔

3.　小田山麓所在五輪塔　格狭間

筑波古代地域史の研究

昭和54～56年度文部省特定研究経費による調査研究概要

昭和57年3月31日　発行

発行者　筑波大学
〒305　茨城県新治郡桜村天王台1—1—1
歴史・人類学系　TEL 0298—53—4403

編著者　筑波古地域史研究グループ
代表　増田精一

印刷者　鮮明堂印刷株式会社
東京都品川区西品川1丁目16番7号